

ラブライブ！スーパースター！！ 赤と青の双星

松浦果南の自称兄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家が近所で小さい頃からの幼馴染みの俺（日宮渚）、米女メイ、若菜四季。

一昨年開校した新設校、結ヶ丘高校。開校2年目の年に2年生、1年生でラブライブ！全国優勝を果たしたスクールアイドル部、”L i e l l a !”

そして3年目の春、主人公の渚や四季、メイたちも2年生になり新たな新入生が!!

この物語では四季ちゃんとメイちゃん（とオリ主）は家が隣の幼馴染みです。

いよいよ第2部突入です。本格的に書き始めるのはアニメ3期が始まってからになりますが、宜しく願います!!

目次

序章：始まりの星空

↳ プロローグ ↳ | 1

第1部 1章：1学期 出会いの季節、結ヶ丘高校入学

結ヶ丘高校入学式 | 5

L i e l l aとの出会い | 10

幕間① | 15

若菜四季 心の内 | 19

米女メイ 封印された心 | 22

スカウト計画 | 27

ある休日のお出掛け | 31

お泊り会① | 35

お泊り会② | 40

第1部 2章：集まる新星 新たなるL i e l l a！

L i e l l a！の敗北 | 44

赤と青 二つ星へと伸ばされた手 | 47

輝きの双星と太陽 | 51

L i e l l a！での日常 | 56

ラツキー？ or アンラツキー？ | 60

L T u b e r 鬼塚夏美現る | 64

ホントにw i n w i n？ | 68

発覚 | 72

D E K K A I D O W！ | 78

”夢” 鬼塚夏美の心の内 | 84

9人のL i e l l a！ | 90

第1部 3章：2学期 新星Lielia!の日常

林間学校

UR 葉月 恋

生徒会長の意外な一面

皆でゲーム!!

二人との遊園地デート

若菜四季・米女メイ 振り切れた恋心 (ラブハート)

Tip off (ゲーム開始)!!

メイの手作りお弁当

手作り弁当 四季編

第1部 4章：Lielia! ラブライブ!への挑戦!!

結ヶ丘 新生徒会発足

オープンキャンパス

皆の想いを背負って

Chance Way!

大波乱!!

すみれの決断

激昂

勝利のために!

冬の北海道合宿

東京大会出場者リモート会見

しばしの休息

渋谷の街に響く歌

勝者と告白

年明け

冬休み明け

201

留学

205

第1部 終章：L i e l l a ! 1つの終わり

進むべき道

210

葛藤

214

かのんの決意 留学へ・・・

218

第1部 最終話 私を叶える物語

222

幕間：新年度へく 春休み

転校生!? 天才空手姉妹

230

転校生!? 天下無双の剣士

235

真田姉妹の弱さ

239

宮本ライカの心

245

真田姉妹・宮本ライカ 四季とメイ・渚との邂逅

249

新たな友と ガールズトーク (前編)

254

新たな友と ガールズトーク (後編)

258

四季とのお泊り

263

新たな出会い 結ヶ丘の新1年生

267

四季・紗夜の交流

273

メイ・陽菜のお出かけ

278

四季・メイ・ライカ 3人のお出かけ

282

日宮渚と月城奏

285

集決する新たなL i e l l a ! (星)

289

月と紅星

293

きな子・夏美 転校生組との交流 (前編)

296

きな子・夏美 転校生組との交流 (後編)

299

第2部 序章：ネクストステージ

2年生へ……新年度始業式

306

3期目の春 結ヶ丘高校新入生入学

311

鬼塚冬毬

315

2年生with奏 お台場へ

318

Lie ll aメンバー誕生日特別編

〈平安名すみれ〉誕生日特別編・平安名（へあんな）家のお手伝い

324

〈米女メイ〉誕生日特別編：赤の少女と

329

〈葉月 恋〉誕生日特別編：作曲相談

333

〈嵐 千砂都〉誕生日特別編：ちいちゃんの勝負

338

〈桜小路きな子〉誕生日特別編：渚ときな子で……

343

〈澁谷かのん〉誕生日特別編：〜ifかのんルート〜

347

〈若菜四季〉誕生日特別編：〜Mainルート〜

351

〈唐 可可〉誕生日特別編：酔いどれクウクウ

356

〈鬼塚夏美〉誕生日特別編：オニナツツチャンネル出演

360

番外編・後日談

番外編：夏休みの休日

366

番外編：幼馴染の辿った道

371

番外編：四季への告白 先輩からの言葉（フオロー）

375

番外編：ラブライブ！全国大会前夜

379

後日談・番外編：奏と真田姉妹

384

後日談・番外編：奏とライカ

388

番外編：中学時代 科学部設立

393

バレンタインデー特別編：渚のモチ期？

397

後日談：勘違い	402
番外編：マジでBADなサイエンス	408
番外編：中学時代 修学旅行①	412
番外編：中学時代 修学旅行②	417
番外編：中学時代 修学旅行③	423
番外編：中学時代 修学旅行④	428
番外編：中学時代 修学旅行⑤	433
番外編：中学時代 修学旅行⑥	438
番外編：中学時代 修学旅行・終	441
番外編：冬休み明け初日の朝	445
番外編：風邪を引いた渚	448
番外編：学校の新設備	451
番外編：紗夜との誕生日プレゼント選び	455
番外編：四季ちゃんと陽菜の共同開発品	459
番外編：真田陽菜	463
番外編：メイの気持ち	468
番外編：渚の原点	473
番外編：対面①	476
番外編：対面②	481
バレンタインデー特別編2年目	484

序章：始まりの星空

く プロローグ く

く 8年前 く

俺たちがまだ小学生だった頃……

男子「やーい不良女と根暗女く!!」

女子1「」 ”さんって目つき怖いよね……”

女子2「」 ”さんも何考えてるか分からないし”

? (……) ”なんでだよつ?” グスツ

? (……)

「お前らアつ!!」 ”と” ”のこと見かけで判断するんじやねえよ!! コイツらのこと何も知らねえくせに!!」

? : ? (……) ”っ!” ” ……// // //

思えばあの時から俺は……

ピピピツ ピピピツ ピツ・ バチン!!

目覚まし時計を止めて起き上がり、眠気覚ましに身体を伸ばす。んく……!!

「夢か……懐かしい夢だったな……。ふあゝ、今日から高校生か……」
大あくびを一つして、今日から通う高校の制服に着替えて下のリビングに降りる。すると母さんが朝食を作っており、父さんが新聞を読んでいた。前から変わらない、我が家の朝の風景だ……。

「おはよ……」

渚母「おはよう渚^{なみぞ}。ご飯できてるわよ」

「おお、ありがと……」

自己紹介が遅れたな。俺の名前は日宮渚^{ひのみやなぎさ}。よく女みたいな名前だと言われるがれっきとした男である。

渚父「渚、高校生活……しっかりな?」

「ああ。……ちそうさま」

そうこう言ってる間に朝食を食べ終わり、身支度をして俺は家を出る。でも、学校に向かう前に・・・

「行つてきまゝす」

家を出て隣の家のチャイムを押す。すると昔から知ってるおばさんが出てきた。

メイ母「渚くんおはよう。いつも悪いわね・・・あの子今洗面所にいるからもう少しだと思・・・」今終わったよ・・・」あらメイ、今日は早かったのね？」

メイ「うるさいなあ・・・アタシだって高校生になったんだから少しは成長するって・・・あつ、ナギ・・・おはよう・・・／／ あつ、四季しきもか」

「えっ?」

俺が振り返ると・・・

四季「・・・」

「どうわあああつ?!?! い、いつの間に?!」

四季「・・・」メイが出てきた辺りから。ナギサは相変わらず「う、うるせえな・・・ほら、せつかくまた3人一緒の学校になれたんだから、さっさと行こうぜ?」

メイ「あれあれ? アタシたちと一緒にそんなに嬉しかったのかよ? (まあアタシも嬉しかったけどさ・・・)」

「ま、まあな・・・じゃあおばさん、行つてきます」

メイ母「いつてらっしやくい!!」

そして俺たちいつもの3人組は、晴れて合格した高校までの道のりを歩いて登校する。

俺こと日宮渚ひのみやなぎさ、米女メイよねめ、そして若菜四季わかなしき、俺たち3人は家が3つ隣り合ってる関係で小さい頃から家族ぐるみの付き合いがある、いわゆる幼馴染おきななじみだ。

後、メイはある事情から目つきが悪いと人から思われており、昔から不良とか怖い人って言うイメージを持たれている。

本当はそんなことは無いんだけどなあ・・・。メイ、優しいし、かわいい物も好きだし、フリフリした服とかも好きだし、まあ「自分に

は似合わない」って言って頑なに着ようとしなないけど……。
メイ「ハア／＼／＼ 結ヶ丘高校楽しみだなあ・L i e l l a !
の人たちがいるし……／＼／＼」

メイの好きな物の話をするときはこの恍惚とした表情になるのは昔からだ。

「メイが映像見せてくれてちよつと興味湧いてき、俺もいろいろ情報は漁ってたんだよ……今凄い勢いがあるスクールアイドルなんだろう？」

メイ「そうなんだよ!! はあく／＼、ライブ見たいなあ／＼」
……言ってることに嘘は無いだろうけど、たぶんメイは本音では

「メイもL i e l l a ! に入つてスクールアイドルやれば良いじゃん。スクールアイドル自体は昔から好きだったんだし……」

メイ「バツ?! アタシなんかができるわけ無いだろ!」

「そうか? メイ、運動神経も良いし歌も上手いじゃん……それに笑顔かわいしいし……／＼／＼」

メイ「なっ!! かわいい!? そんなわけ……無いだろ……。ずっと勘違いされ続けてきたくらいなんだし」

「だつてき、どう思う四季?」

四季「……メイは自分を卑下しすぎ。メイは充分かわいい」

メイ「それを言うんなら四季だつてかわいいじゃねえかよ……」

「それも同意」

四季「……かわいく……ないよ／＼」

あつ、頬がひくひくしてる。四季は感情をあまり表に出さないがこの癖が出てるのは照れてる証拠だ。俺がニヤニヤしてると……

四季「……発明品の実験台になりたい?」

「すみませんでしたマジで勘弁してください!!」

すぐさま土下座を敢行。四季の発明、たまに良い物作るけど、残りの高確率でやられた方はひどい目に遭うからな……。

メイ「こんな道の往来で土下座なんかすんなよ恥ずかしい……もう学校着いてるぞ?」

あつ、本当だ……。目の前にそびえる学校の名が書かれたプレートには、「ゆいがおかこうとうがっこう結ヶ丘高等学校」と書かれていた。

メイ「高校生活、楽しみだな!!」

「ああ!!」

四季「メイとナギサといられれば良い……」

ガクツ、お前ドライやなあ……

メイ（ナギサ……／＼／＼アタシのことかわいいなんて言ってくれ
る男はお前だけだよ……それにアタシは小さい時から……くっつ
／＼／ 恥ずかしい!! 考えんのやめよ!!）

四季（ナギサ……私のことでも可愛いって言ってくれるんだ……。
でも、2人の邪魔はしたくない。どうすれば良いの？）

― 続く ―

第1部 1章：1学期 出会いの季節、結ヶ丘高校入
学

結ヶ丘高校入学式

ここが結ヶ丘高校・・・3年間俺たちが通う高校・・・!!

渚たちが少し感動しながら中に入ると、校門から校舎までの道に自撮り棒にセツトしたスマホで動画を撮っている少女と、それを見ている長い茶髪のを

2つに纏めた女の子がいた。

？「アナタの心のオニサプリっつ！ オニナツツこと鬼塚夏美おにつかなつみですのっつっ!!」

？「まさか、エルチューバーっすか!？」

・・・なんか変なのいるな。

メイ「な、何だあれ・・・?」

「あんまし見るな・・・絡まれると面倒な事になりそうだ」

四季「同感・・・」

渚たちはそそくさと通り抜けて教室に向かう途中、5か所くらいに人だかりがあつたが、無事俺たち一年生の教室に到着した。

そして黒板に貼つてあつた席順表の通りに着席する・・・ん？

メイ「ナギ、四季、何でお前ら隣にいるんだよ?」

四季「平等なランダム配置によつて導き出されたもの・・・つまり偶然」

メイ「にしたつてアタシの両隣がナギと四季つて・・・これじゃいつもと変わらねえ・・・」

「まあ肩肘張るかたひじは必要なさそうじゃん」

メイ「まあな・・・／／／（アタシにとってはそれ以外に問題あるんだよ!! 好きなやつが隣つてっつ!!）」

「・・・（マジか!? 偶然とはいえ好きな子の隣にこんな最初から!? めちゃくちゃラッキーだなおい!!）」

この2人、考えることは同じである。オマケにここまであからさま

なのにも関わらずお互いの気持ちに全く気づいていない、とんでもない唐変木共であつた。

四季からしたらバレバレな分見えて胸焼けしそうなくらいである。
四季（なんでナギサもメイも気づかないんだろ……）

そして場面は変わり入学式。俺たち新入生が講堂で理事長さんたちの話を聞いていると、次に出てきた先輩の女生徒を見てメイが興奮し始めた。俺も映像をけっこう見たから知っている。

あの人は……!!

恋「新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。当校の生徒会長を務めております、葉月恋です。結ヶ丘は、去年開校したばかりです。これから、みんなで創り上げていきたいと思っています。素敵な学校にしていきましょう!!」

メイ「恋……さん……!! ハワアアアア~~~~ツ!!!」

本当にスクールアイドル好きなんだな……。やっぱり、メイには人の目なんか気にせず自分の好きなことを全力でやって欲しいんだけど……。

そんなこんなで入学式も終わり、生徒はいったん教室に戻りHRでの自己紹介。

クラスメイトが順番に自己紹介していき、3人の中でまずは渚の番になった。

「日宮渚です。趣味は音楽鑑賞とゲーム、後バスケ。因みにLie l la!のファンです。宜しく」

渚の自己紹介が終わりその数人後、

メイ「よ、米女メイだ。宜しく……」

メイがやや緊張した面持ちで自己紹介すると少数人が「不良?」とというような呟きをする。その瞬間、

ゾアツ!!

クラスメイト『ゾクウツ!?!』

クラスメイトたちの背に悪寒が走る。その原因は、俺が物凄い威圧感を放ったからだ。

メイ「ナギ、皆が恐がつてるからやめろ・・・ごめんな？」
クラスメイト『い、いいえ・・・』

この一件でおそらく米女さんを悪く言ったらタダじゃ済まないと分かってもらえただろう。

そしてその次、

四季「若菜四季。宜しく・・・」

クラスメイトたちは「それだけ？」と怪訝な顔をしているが、俺が四季とも仲が良いのを見ていたため不用意なツツコミは止めていた。そしてHRが終わり、休憩時間の廊下で・・・。

メイ「ハア~~~~~~~~」

メイが顔をキラキラさせてスクールアイドル部のメンバー募集チラシを見ていた。

それを渚は隣で見えており、思ったことを口にする。

「メイ、そんなにスクールアイドル部の勧誘チラシ見てるならやればいいじゃんかよ・・・」

メイ「いや、だから・・・」

その時、一人の女生徒が近付いてきた。あ、この子・・・今朝校門の所で・・・

？「これって、かのん先輩たちがやってる部活つすよね？」

メイ「つ!! お前、澁谷さんと知り合いなのか!?!」

？「はい!! 昨日家まで送ってくれて、スクールアイドル部に誘ってくれたつす!!」

メイ「スクールアイドル部に・・・誘われたあつ!?!」

へえ、凄いなこの子・・・。

「確か、桜小路さんだっけ?」

？「はい!! 桜小路きな子つす!! えっと・・・」

「日宮渚。好きに呼んでくれ」

きな子「分かったつす!! 日宮くん!!」

「で、この人集り気づいてるか?」

きな子・メイ「へ?」

ヒソヒソ

「桜小路さんスクールアイドル部に誘われたって・・・」

「スゴイ・・・!!」ヒソヒソ

きな子・メイ「あ、あはは・・・」

メイ「・・・何見てんだゴラアーーっ!!」

他生徒『ご、ごめんなさ〜い!!』

はあコイツは・・・

「ていつ!!」ポコッ

俺はメイの頭にチョップをかます。

メイ「痛てっ!! ナギ、何すんだよ!! DVか? DVなのか!?!」

「違うわ!! そういうこと大声で言うな!! そういう言い方するから勘違いされるところだってあるんだぞ!! 普通の言い方してたらメイなんかただカワイイだけなのに!! まあそのちよつと突っぱねたような口調も好きだけど……」

俺はオシオキにメイの頬を弄り回して弄んだ。もてあそ

メイ「か、カワイイって……／＼／＼ い、いひやいいひやいやめてえ／＼／＼っ!!／＼／＼ (皆の前でッ! 恥ずかしい／＼／＼)」

それを見ていた四季は、

四季 (まくた始まった。・・・痴話喧嘩ちわけんか・・・)

そんなことを思っていた。そして今の一部始終を見ていた1年生たちは、

(あれ?もしかして米女さんって目つきが怖いだけで普通の子? っていうか面白い子? というか日宮くん、みんなが見てる前で堂々と女の子にそれは羞恥の生殺しでしょ……)

という認識が、渚への突っ込みと共に広がりつつあったそうなの。

そして、今日は学校は終わりになり、部活動の勧誘が至るところで行われていた。

「四季はいつもどおり科学部か?」

四季「・・・少し迷ってる」

? コイツが科学部を迷うとか珍しいな……。

メイ (スクール・・・アイドル・・・)

その頃、

かのん「えっ、ええっ!? 何で?! 誰も来ないんだけど!!」

昨年度東京大会2位の結ヶ丘スクールアイドル部L i e i l a !
のブースには、入部希望の新生が誰もきていなかったとき……

ー 続く ー

Lieiliaとの出会い

結ヶ丘に入学してから数日後……

「くっそお、担任め……数少ない男子だからって荷物運び押し付けやがって……」

俺は現在、担任に荷物運びを押し付けられたために資材をスクールアイドル部の部室の中の小部屋に運んでいた。

（つたく……スクールアイドル部の部室に入らなくちやならないからなあ……メイにバレたら嫉妬しつとの炎で焼かれるじゃねえか……）
渚が運びながら文句を考えていたらここであることを思う。

「そう言えば、この学校で俺以外に男子を見たことないんだよな……。ここって共学校だよな……?」

渚が若干不安になっていると、もう着いてしまった。俺が扉をノックすると、中から女性の声が聞こえてきた。

かのん「もしかして入部希望者!? って……、男の子?」

「すみません……先生に荷物をこの部屋の資材置き場に運ぶ様に言われて……」

かのん「あつ、そうなんだね。入って入って?」

「失礼します……」

俺を見つめる10個の瞳。……気まずい。すると、

すみれ「ねえ、アンタ新入生よね?」

金髪ロングの美人な人が話しかけてきた。確か名前は……、

「あつ、ハイそうです。えつと……、平安名先輩……?」

すみれ「っ!! 先輩っ……、いい響きね!!」

先輩という言葉が心にクリティカルしたのかウツトリした顔になる平安名先輩。

可可「調子乗るなデス。グソクムシが!!」

わお、仲間に辛辣……。

すみれ「なんでアンタはそんな辛辣しんらつなのよ!!!」

グレー髪の前輩にキレル平安名先輩。すると白髪の……（嵐先輩だっけ?）が、

千砂都「すみれちゃん本題からズレてるよ？ キミ、きな子ちゃんって知ってる？」

きな子？ あっ、確か桜小路さんの名前がきな子だったような……、

「桜小路さんのことつすか？ 一応同じクラスですけど……」

可可「なんと！ スゴイ偶然デスね!!」

な、なんだいったい……？

恋「皆さん、新入生がビツクリしてますよ？ いきなりすみません。実は、新入生がLieila!に誰も来ないもので……」

そのことか……

「ああ……女子たちが噂してましたね。」今のLieila!には凄いメンバーが揃ってるから、入ったとしても練習についていけるかなだ”って」

先輩たちは「やっぱりそうなんだ……」と暗い顔をしている。

かのん「私たちだって初めからできたわけじゃ無いんだけどなあ……」

「まあ、俺たちは今に至るまでの過程を知らないつすからね……」

恋「そういえば自己紹介してませんでしたね。葉月 恋と言います」

千砂都「ういつす〜♪ 嵐 千砂都だよ!!」

可可「唐 可可デス!! よろしくお願ひします!!」
すみれ「平安名すみれよ。よろしく」

かのん「澁谷かのんです。宜しく!! えっと……」

ここで自己紹介する先輩たち。俺も自己紹介する。

「あっ、俺は日宮渚って言います。」

かのん「そっか!! ねえ日宮くん、私たちきな子ちゃんにライブを見て知ってほしいんだ!! スクールアイドルは、やりたいって気持ちがあれば誰でもできるって!! 私達明日ライブのリハーサルするんだけど、きな子ちゃんを連れてきてくれないかなあ?」

(ええ? そこまで桜小路さんと仲良い訳じゃ……ん? 待てよ……?)

これを見せればもしかしてアイツも・・・？　そうと決まれば・・・！！
「・・・分かりました。ただ、桜小路さんの他にもう一人、ライブを見せてやって欲しい奴がいるんすけど・・・そいつも一緒に連れてつても良いですか？」

すると先輩たちはビックリした顔を見合わせ、

Lielia! 『もちろんだよ（よ）（ですよ）（デス）!!』

ー その日の夜 ー

俺はメイに内緒で四季に電話を掛けていた。

「なあ、頼めないか？」

四季「メイのためなら協力する。私はとりあえず桜小路さんを連れていけば良いんだね・・・？」

「頼む!!」

四季「分かった。連れて行くのに拘束こうそくする程度の発明品なら私に掛ければ2時間もあればできる。ナギサはメイのこと頼んだからね？」

「悪いな。今度何か埋め合わせするからよ・・・」

四季「分かった。考えておく・・・」

そして電話を切り、夜が明けて次の日・・・

く 昼休み く

いよいよ作戦決行だ!!

「なあメイ、ちよつと耳貸せ・・・」ヒソヒソ

メイ「ああ？　なんだよ？」

「これから屋上でLielia!の先輩たちがゲリラライブするらしいぞ？　見に行かねえ？」ヒソヒソ

するとメイはガタツと音を立てて席から立ち上がると、

メイ「行く!!」

「よし行くぞ!!」

俺とメイが教室を出たタイミングで、

きな子「若菜さんいつたい何なんすか・・・っ!?!」

四季「……………」ダダダダダダッ!!

片足同士を二人三脚式ににんさんきやくに機械でロックして階段を駆け上がる四季と、連行される桜小路さんがいた。

忘れてたけど四季は理系りけいとはいえ、趣味は完全なアウトドア派で運動神経も悪くないし足速いんだよな……。

メイ「な、何だあれ?」

「さあな?…行こうぜ?」

そして俺たちは四季と桜小路さんの後を追って屋上へと向かった。

俺とメイが屋上に着くと、今まさにライブが始まったところで、四季と合流し俺たち3人でライブをこっそりと見ていた。

映像で見るとは全然違う!! 生で見ると…こんなに凄えのか!!
メイは恍惚こうこうとした表情で、キラキラと踊る先輩たちのライブを凝視ぎょうししていた。

よく見ると、四季も夢中で先輩たちを見つめていた。

(もしかして、四季も興味があるのか?)

俺の中に、1つ疑問がうまれた。

そしてライブが終わると、

きな子「なんじゃこりやあぁ~~~~~っ!!」

桜小路さん……よくわからないポーズを取りながら絶叫して
る……。

可可「捕まえたデスっ!!」

メイ「はわわ~~~~っ／＼ しゅごい~~~~っ!! 生で、しかもこんな近くで見ちゃったあ!!」

四季「必然……」

俺と四季は、メイに気づかれないようにお互いにサムズアップする。

?「うるさいですよ~~~~っ!! 音が入りすぎると取り直しですよ、リテイクですよ~~~~っ!!」

……なんか下の階から聞こえるけど無視でオツケーだろ!!

かのん「きな子ちゃん!!」

L i e l l a 『ようこそ!!』

L i e l l a ! ^ !!』

ー 続く ー

幕間①

四季と結託してL i e l l a ! の勧誘ライブにメイと桜小路さん
を連れて行き、メイと四季と一緒に3人でライブを見ていた俺たち。
それから午後の授業を受けて今日は学校が終わり、俺たちはやはり
いつもの3人で帰宅していた。

が、今日は帰る前に少し寄り道していた。

～ 表参道 ～

やってきたのは表参道にあるとあるカフェ。それぞれ飲み物を注
文した俺たちは、先程のL i e l l a ! のライブについて話してい
た。

メイ「まさかこんなに早くL i e l l a ! のライブが見られるなん
て～～～～っ!! ナギ、ありがとな!!」

「おう・・・」

先程のライブを思い出し、足をバタつかせて身悶えするメイ。もう
心酔してるレベルなんだよなあ・・・。

四季「・・・メイはやらないの？ スクールアイドル。自分に正
直になってもいいと思う・・・」

メイ「だからあ!! アタシがそんなことできる容姿してるか!？」

俺と四季は顔を見合わせて・・・

「充分そんな容姿してる・・・」

するとメイの顔はみるみる赤くなり、

メイ「からかうなよ・・・／／／／／」

四季「からかってない。事実を言ったまで・・・」

「同感・・・」

四季「ほら、ナギサも同意見・・・」

メイは「うう～～っ／／」と朱に染まった頬に手を当てて恥ずか
しがっている。俺たちにだけはこういう素顔を見せてくれるからな
!!

幼馴染みの特権ってやつかな？

でも俺たちは思わないけど、他人の言う自分の目つきのせいで、気

持ちに蓋ふたをしてるんだよな……。

「そう言えば、四季はやらないのか？ スクールアイドル。さつきメイと同じくらい食い入る様に見てたけど？」

四季「やつぱりバレた……？」

「他の奴ならともかく、俺たち相手じゃそりやバレるだろ。幼馴染を舐めるなよ？」

四季「……正直に言うと、入学前にメイがしつこかったからライブの動画は見てた。そしたらちよつと興味出て……、さつき生で見たら……凄かった」

「おお、そうか……」

珍しくけつこうな長文喋しゃべったな……。四季にここまで言わせるってスゲエな、かのん先輩たち……。

メイ「じゃあ四季やれば良いじゃんか。アタシよりもずっと向いてると思うけどな……」

四季「興味湧いたとは言ったけど、ガラじゃない。なにより二人の前以外じゃ、ろくに笑顔すら作れない子がスクールアイドルなんて無理……」

「そっか……」

そしてカフェを出て家に帰宅し、俺はスポーツウェアに着替える。別にこのスポーツをやってる訳じゃないんだけど、俺の学校終わった後の日頃の精神集中のルーティーンみたいなものだからな。

母さん「あら渚、いつもの？」

「ああ」

俺は庭に出て設置されているバスケットゴールの前に立つ。

……よしっ!!

俺は少しウオームアップをすると、軽くボールをドリブルしてバスケットボールをゴール目掛けてシュートする。

ここ最近の俺のシュート成功率は

レイアップが約96%

2Pシュートが約84%

3Pシユートが約52%位だ。

まあ小さい頃からやつてるからな……。すると、メイの家の二階の部屋の窓が開き、メイが顔を出す。

メイ「お〜いナギ!! いつもものか?」

「おう!! そうだ!!」

メイ「アタシもそっち行つて良いか?」

「良いぞ〜?」

そして部屋の窓が閉まり、しばらくしてメイの家の玄関の扉が開いて閉まる音がする。そして、

メイ「よっ!! ナギ、相変わらずバスケット好きだな……」

「まあな。もう日常になっちまったよ……。ん? (メイの服装……)」
メイは新しく買った部屋着なのか、かわいらしい服を着ていた。あゝ……。かわいい服を着ようとしなくて前に言ったけど、それは俺と四季以外の第三者の目にさらされる時だけなんだよ……。俺と四季は気心知れてるからかこうして普通に見せてくれる。

はあ……。カワイイ／／

メイ「なんだよ? ジロジロ見て……。やっぱり似合っていないか?」

「バカ、似合すぎてて見惚れてたんだよ……／／／／」

メイ「なっ?!／／／／ そ、そうなのか……。?／／／／」

四季「……。2人とも終わった?」
ん?

「おおわあああああつ!!? し、四季!? いつの間!?」

四季「その流れ好きなの……?」

いやそりゃいきなりいたら驚くだろ!! いつも思うけどいつ来るんだ!?

「そ、そうじゃなくt……あら、メイちゃん四季ちゃん、いらっしやい」
「母さん」

メイ・四季「お邪魔してます……」

母さん「2人とも、麦茶でも飲む?」

メイ「あつ、貰いますっ」

四季「遠慮なく……」

「あ〜、俺も貰っていい？」

母さん「はいはい……」

そして今日は速めに切り上げ、久々に二階の俺の部屋で3人で談笑していた。部屋に上げるときに母さんが、「襲っちゃだめよ〜？」とニヤニヤしながらからからかってきた。

はっ倒すぞ……。

見る、今の母さんの言葉でメイは顔真つ赤だし、表情には出てないけど、四季も少し恥ずかしがってるじゃねえか……。

まあ軽く喋った後、二人が帰るときにはすぐ隣とはいえ、ちゃんと二人を送り届けてから家に戻ったけどな。

↓ 続く ↓

若菜四季 心の内

ナギサに送ってもらって家に戻ってきた私。自室に戻った私はふと、目にとまった中学校の卒業アルバムに目を通した。するとあるページに目が止まり、無表情な私の顔からかすかな笑みがこぼれる。

四季（これ、3年の球技大会の時だね……。ふふっ、このときの種目はバスケットだったからバスケットにも負けない勢いでナギサが無双してた……）

そして次のページへめくる。

四季（修学旅行か……。北海道に行ったんだよね。夕飯のビール園で食べたジンギスカンはちよつと美味しかった……。あつ、そう言えば……）

私は、修学旅行の2週間ほどあと、ナギサが女の子から手紙を貰っているのを目撃したんだ。すぐにメイに話して告白の現場を見てたけど……。でも、

「ゴメン。君とは付き合えない」

（メイのあのホツとした表情、今でも覚えてる。でも、私までちよつと胸の内が軽くなったんだよね。）

あのとき何故私の胸まで軽くなったのか、答えを知ったのは、文化祭のときだ……

私はナギサとメイと3人で科学部を作って、その出し物で、私は自作の色々な発明品を発表展示してたんだよね。

でも……、

「何で中学生がこんなもの作れるんだよ……」

「マッドサイエンティストかよ、引くわ〜」

周りからの好奇の目や、異質なものを見るような目。だいぶ慣れたつもりだったけど、あのときはショックで泣いてしまった。

でも……

「ふざけんなお前らあああああアツ!!」

ナギサが私を悪く言った人達にブチ切れて、暴動になったん

だ．．．．．。

四季（私を悪く言った人たちは、全員もれなく身体のどこかに最低1箇所以上は青痣作られてたし．．．。そのせいでナギサは先生たちにやりすぎだとメチャクチャ怒られて反省文＋放課後の居残り課題3週間．．．．）

今思えばよくその程度で済んだなと思う．．．。

く その日の帰り道 く

ナギサが私を心配して一緒に帰ってくれて、帰り道をナギサと2人で歩きながら、ナギサをこんなことにしてしまった罪悪感を感じて、私は口を開いた。

四季「ナギサはバカだよね．．．」

違う．．．。

「なんだよ．．．」

四季「あんなこととして、あとで面倒な事になるとは考えなかったの．．．？」

違う。こんな事言いたいんじゃない．．．っ!!

「考えねえな。群れで囲んで陰険なんざ男だろうと女だろうとただのクズだ。気に入らねえ．．．気にすんなよ四季？ 俺は平気だし、お前の科学の知識はスゲエ才能なんだから、大切にしろよ。」

四季「っ．．．／／／（何で．．．そんなに優しいの．．．）」

あの時の胸の高鳴り、ハッキリと覚えてる。あのとき理解したんだ。私は、ナギサのことが好きなんだって。

この優しい幼馴染みに、恋をしているんだって．．．。

本当に．．．私まで落としてどうするんだか。あのときのナギサのキズだらけの横顔を思い出すだけで、今でも心臓がドキドキと脈を打つ。

四季：「．．．．ばか。でも．．．ナギサ、”ありがとう”っ

！」

このときばかりは、普段無表情な私の瞳からも涙がこぼれ、庇ってくれた嬉しさから微笑ほほえみを浮かべた。

「・・・四季はやっぱり、笑ってた方がかわいいぜ？　だから、笑ってこうぜ？」

全く、ズルい人だよね・・・でも、私の気持ちは知られちゃいけない。ナギサはメイが好きで、メイはナギサが好き。私が入る余地なんか無いし、あつてはならないんだから、今まで通りでいい。

私は2人のことが大好き。その大好きな2人を引き裂くようなことをしたくはない・・・。

でも、もしも：本当にもしもだけど、ナギサが少しでも私を見て、気付いてくれていたら・・・私は・・・それだけで満足だから。

それに、ナギサはさつきカフェで私に「スクールアイドルやらないのか？」と聞いたけど、もしも私がスクールアイドルになるんだったら、メイと一緒にやりたい。

そして、ナギサにマネージャーとして私とメイを支えて欲しいな・・・。

↓ T o b e c o n t i n u e ↓

米女メイ 封印された心

あれから1週間が経ち、俺が早朝ランニングをしていると……
(ハッハッハッ……)

俺が信号で止まっていると、

(ん？ 桜小路さん……？ ああ……スクールアイドル部の自主練か……)

桜小路さんが息も絶え絶えといった感じで走っていた。

(大変そうだな……)

そつと桜小路さんを見送り、家に戻ったあとシャワーを浴びてからいつもの3人で学校に向かった。

そしてその日の学校が終わり放課後、突然四季が……

四季「私少し用事があるから2人で帰って……」

メイ「別に待ってるぞ……？」

四季「いや、いい……」チラツ

ん？ 今一瞬桜小路さんを見た……？ ああ、なるほど……
スクールアイドル部の様子を聞きに行くんだな。

「じゃあ先帰るな？ 気をつけろよ！」「ちよつ、おい!!」「良いから!!」
俺はメイの手を無理やり引つ張って一緒に下校した。

四季「ナギサは気付くか……さてと、じゃあ」

四季 side

きな子「はあ、……なんとか速く先輩たちに追いつかないと……
「ねえ？」っ！ は、はいっ!!? あつ、若菜さん……」

四季「とりあえず座って……」

私は近くのベンチに腰をおろし、桜小路さんにも座るように促す。
桜小路さんも座ったので、本題に入る。

四季「で？ どう？ スクールアイドル部。怖い先輩とかいない？」

きな子「そんなことはねえツス!! 先輩は皆さん優しいツスよ!!」

きな子が運動できないだけで……若菜さんひよつとして興味あるん

スか？」

四季「ある・・・メイが」

きな子「米女さんが!？」

四季「だからお願いがある・・・」

四季 side out

ー 翌日・教室 ー

俺は自席でスマホを弄っていた。メイは仏頂面で机に肘をついてため息をついていたが・・・

メイ「・・・」

きな子(でも、米女さんちよつと怖いんスよね・・・日宮くんと若菜さんと話してる時の顔は怖くないんすけど)

きな子が昨日四季と話していたのは……、

四季『私が合図したら・・・メイをスクールアイドル部に誘ってほしい・・・』

四季「・・・」チラツ

きな子(ホントにやるんすか・・・?)

四季「メイ、あの子が話があるって・・・」

メイ「ああ・・・?」

きな子「ひっ!? (こ、これもスクールアイドル部のため!!)」

俺も気付いてスマホを弄る手を止めて桜小路さんの方を見る。桜小路さんは、緊張から壊れたおもちゃみたいにぎこちない動き歩いてきてメイの前に立つ。そして、メイに右手を差し出し・・・

きな子「あ、アナタも・・・スクールアイドルやってみませんか!!」それを聞いたクラスメイトが騒然となる。

「米女さんが!？」とか、「スクールアイドル好きだったんだ!!」とか皆ビックリしている・・・

メイ「っ!?!」

「へえ?・・・どうすんだ?」

メイはこめかみをピクピクさせて桜小路さんの差し出された手を取り、

メイ「ちよ．．．ちよつと来い!!」

桜小路「ええ!? 助けて〜っ!」

桜小路さんはメイに腕を掴まれて引き摺られていった。

ーメイ side ー

きな子「い、命だけはお許しを〜っ!! お金は無いんす!! 仕送りで暮らしてて!!」

メイ「奪らねーよ何も．．．」

きな子「へ？」

メイは「ハア、アタシを何だと思ってるんだ．．．」と、ぼやいて後頭をかき．．．

メイ「四季に言われたのか？ あたしを誘えって．．．」

きな子「あつ、その．．．ハイ」

メイ「はあ、今後は無視しろ．．．。後、皆といるときにスクールアイドルの話は私にしてくるな．．．アタシはスクールアイドルなんか興味ねーんだ」

きな子「はい．．．」

「良いのか？ せっかくのチャンスなのに．．．」

メイ「っ!! ナギ．．．、聞いてたの」

きな子「日宮くん？」

「何が」スクールアイドル興味無い」だ？ お前スクールアイドル大好きじゃねえか．．．」

きな子「え？」

アタシはナギを睨つけた。初めてかもしれない．．．ナギをこんな睨んだの．．．

メイ「余計な事を言うな．．．」ゴゴゴゴゴ

「お前が後悔しないなら言わないさ．．．」

メイ「分かったような事をつ!!」

「．．．憧れが憧れのまま終わっちゃっても良いのか？」

アタシは唇を噛みしめ、

メイ「次体育だぞ．．．」

私は、逃げるようにその場を去った。

メイ（分かっているんだよそんなことはっ!!　けど、アタシができるハズ無いだろ・・・っ）

― Meiside outer

体育の授業中：：今日は学校の外周を3周の持久走だったため、俺はトップでゴール。まあそりゃそうだよな。1年に男子俺しかいなくて残り全員女子なんだから……。

っーか・・・、この間理事長に呼び出されて「気づいてるとは思いますが：」って言われて何かと思ったら、ホントに結ヶ丘に男子は2学年合わせても俺一人しかいなかった。

つまり俺はこの学校で唯一の男子生徒。理事長から「変なことではないように」と注意を貰った。

そんなことする気無いんだけど!!　それをこの間メイに話したら、「アタシたちは渚がそんなことするわけないって知ってるけど、よく知らない上にその学校環境考えたら懸念してもしようがないだろ」と言われた。

正論すぎてぐうの音も出ねえ……チクシヨウ。

そんなことを考えていると続いてメイがゴール。そして皆がゴールしてきて、最後は桜小路さんだった。

きな子「ハアハア・・・」

メイ「大丈夫か？　バテてんじゃねえか・・・いきなり朝練とか無理するから・・・」

きな子「す、すみません・・・」

桜小路を気遣うメイ。何気に面倒見が良いんだよな。そしたら皆がスクールアイドル部の練習が厳しいのかという話になる。桜小路さんは必死に否定していたが……。

メイ「放課後・・・、屋上行ってみるか」

帰りのHRが終わり放課後、メイは一人で屋上へ。向かった。

― 屋上 ―

きな子（ツ!!　ハア　ハア……）

メイ（桜小路……しようがねえな……）

アタシは、扉のところから桜小路を手招きする。

きな子「!？」

メイ（こつち来い……）

半ば強引に桜小路を連れ出し 中庭のベンチに座った……

メイ「座れ……へ？」座れって言ってんだよ……

きな子「は、ハイっす!!（や、やっぱり怖い……）」

すると、

四季「気にしちやダメ。コレがメイの普通……」

きな子・メイ「うわっ!？」

四季……何でここに……

メイ「何でお前がここに……」

四季「構わず話して？ スクールアイドルの話でしょ？」

メイ「なっ!？ アタシは……違うの?」……まったく、桜小路は

き、スクールアイドル……やりたいから入ったんだろ？ 優勝目指し

てるとか、練習が厳しいとか、……知ってて入ったんだろ?」

きな子「……はい」

メイ「なら……他人の言葉なんか気にせずに突き進んでくれよ

!! ……アタシの分まで……え?」そ、それだけだ。じゃあな」

きな子「米女さん……」

（……全く、素直じゃねえんだから）

その会話を聞いていた唯一の男子生徒のつぶやきが夕暮れの喧騒
に消えていった……。

ー 続く ー

スカウト計画

メイとケンカした翌日、あの後思い返したらさすがに気不味くなつてメイの家に戻る前に四季を先に迎えに行つて2人で待っていた。

お陰で四季からは「ヘタレ・・・」と言われてしまった。うるせえな・・・。

そんなで待っているとメイが出てきた。気まずさからか俺とは視線を合わせなかったが、一緒に行つてくれる辺り本気で怒っている訳ではないようだ。

そして通学途中でメイは口を開き、

メイ「ナギ・・・昨日は悪かった。つい感情的になつちまった・・・お前がアタシのために言つてくれてるつて事は分かつてたのに・・・」
どうやらメイも思うところがあつたようだ。

メイ「・・・、」

「いや、謝るのは俺もだ。お前の悩みを軽く見た発言だったかもしれないえ・・・悪い」

メイ「うん・・・ゴメンな？」

「悪かった・・・」

お互いに謝罪し取り敢えずは一件落着かな・・・だが、

四季「メイ、最後にもう一度聞かせて？」 憧れを憧れのまま終わらせちゃってほんとうに後悔しない?」

するとメイは俯いて唇を噛み、

メイ「後悔・・・するに決まつてんだろ!! でも、アタシのこの目じゃあ、入つても先輩や桜小路に迷惑掛けるだけだ・・・アタシが足を引つ張つちまう!!」

はあ・・・それが本音か。本当の事をみんなに公表してしまえばとやかく言うやついないと思うんだけどな。

四季「メイ・・・」

そしてその日は何事もなく学校が終わつたのだが、俺はスクールアイドル部の部室に向かつていた。

コンコン

扉を2回ノックすると、中から女の子の声が出て扉が開く。
ガチャ

かのん「はい・・・あつ、この間の?」

「スママセン。ちよつと話があるんですけど・・・」

桜小路を含めたLielia! 6人の前に座り、覚悟を決めた俺は「見てほしいものがある」と言つてこの間の入学式の時に撮つたメイの写真を見せる。

「この子見てどう思います?」

かのん「え?・・・うわ、かわいい!!」

恋「美人な方ですね。もしかしてうちの1年生ですか?」

きな子「あつ、米女さん・・・」

可可「きなきな知つてる人デスか?」

きな子「はい! クラスメイトつす」

千砂都「この写真がどうかした?」

「この子の・・・米女の”目つき”、どう思います?」

先輩たちはもう一度写真を見る。すると、

かのん「シユツとしてクール系の印象受けるけど」

すみれ「確かに・・・Lielia! にはいないタイプね」

きな子「え? 先輩たち・・・怖くないですか?」

可可「ああ・・・確かに目付きが鋭い気はしますけど・・・でもとつ

てもかわいいと思ひマス!!」

ああ・・・何だ・・・

「今の先輩たちの反応を見て決めました。実は、相談したいことがあるんです」

恋「相談・・・?」

「米女を・・・メイをLielia! に入れてやって下さい!!」

それを聞いた先輩たちはビックリして顔を見合わせた後、俺に事情の説明を促す。

そして俺はバレて怒られるの覚悟で全部話した。

幼い頃から目が悪くて凝らしてるだけなのに睨んでると勘違いされてきたこと。

そのせいで自分に自身が無くなってしまっていること。
スクールアイドルに対して熱い物を持ちながらも、先輩たちに自分の事で迷惑を掛ける事を恐れて見学にすら来れないこと。
・・・全てを。

先輩も桜小路も、悲しそうな顔をして話を聞いていた。途中平安名先輩に何でそこまでするのかを聞かれたが、正直に”幼馴染みがこんな苦しんでるのを見たくないからだ”と言ったら信じてくれた。

なんか俺の目が嘘をついている目じゃないって言ってた・・・それでわかるってスゲエな・・・。

可也「そんなにスクールアイドルを愛してくれている人ならククたちは大歓迎デス!!」

千砂都「そんなに目つき怖いかな・・・?」

先輩たちがリアクションを取る中、桜小路は、

きな子「きな子・・・米女さんが一番気にしていること言っちゃったかもしれないっす・・・”怖い”って」

「そう思ってくれるなら、これから普通に話してやってくれれば嬉しい・・・」

きな子「っ!! ゴシゴシ ハイっす!!」

いい人ばっかだ・・・メイの心配は杞憂みただけど、本人の怯えは心にへばり付いてる。

何とかしてやりたい・・・。

かのん「日宮くん!! その依頼、受けるよ!! 私達も仲間が欲しかったし・・・むしろ心強い仲間になってくれそう!!」

可也「少なくともグソクムシよりも全然素質があそうデス」

すみれ「そんなの分からないでしょうが!!」

恋「皆さん、後輩の前ですよ? 日宮さんも協力してくださいね?」
「もちろんです!!」

かのん「じゃあ明日から土日だから月曜からね。でも、まずは実際の米女さんを見てみたいよね? 話だけじゃあ分からない事もあるだろうし・・・」

ある休日のお出掛け

渚がスクールアイドル部の先輩方と話した次の日の土曜日、今日は学校が休みなので久しぶりに3人で街に遊びに行く。

俺は用意を済ませて約束の時間にメイの家を迎えに行った。だが、やはりと言うべきか服選びに時間が掛かっておりもうしばらく掛かるとのこと。ならばと先に四季の家に行ったが、四季も同様だった。……ぶつちやけ何で女の子って服選びだけでこんなに時間掛かるんだろう。

(まあ、前に母さんに聞いたらデリカシーがないと呆れられたから言葉には出さんが……)

四季「ゴメン……お待たせ」

思考を巡らせている間に四季が到着。四季の服装はスキニーのデニムに黒のブラウスを合わせた大人っぽい感じだった。

「っ／／／ か、カワイイ……」

四季「フェツ?!?／／／」

やべっ、つい本音が……普段クールな四季の口からは聞いたことのない音が漏れ、なぜか顔が真っ赤になる四季。

「おい四季? 顔が真っ赤だぞ? 熱あるわけじゃないよな?」

四季「……ナギサはそう言うよね」ハア

なんか盛大に溜息を付かれて困惑しているところにメイが出てきた。メイの服装は白のワンピースにダークグリーンのジャケットを合わせた感じだった。二人揃ってクツソ可愛いんだけど／／／

メイ「ど、どうした……? 似合っていないか?」

「いや……、似合いすぎてて……可愛くて見惚れてた／／／」

メイ「フェえっ!?!／／／」

やはり先程の四季と似たような音がメイの口から鳴り、顔が真っ赤になる。

四季「……言っとくけど具合悪いわけじゃないからね? あと、軽々

しく女の娘に”カワイイ”とか言うのはダメ……」

「お、おう……」

心を読まれてしまった。四季はこういう心理分析も得意だから下手な発言は墓穴を掘る事になってしまう。

(とういかカワイイって言うのはダメなの？ 事実を言ってるだけなの？)

全くもってこの男、何故気付かないのかイライラしてくるレベルである。あんな発言をすれば女子の顔が赤くなるのは当然である……。しかもお互いに気づいてないが当人たちは両思いなのだから尚更である。

「じゃあ行くか……」

そして電車でやってきたのはオタクの聖地、秋葉原。四季は発明品を作る上での部品、メイはスクールアイドルショップに行きたいらしい。

四季「ほんとにわたしの用事からで良いの？」

メイ「ああ。構わねえよ」

「俺も……」

そして電気屋に入り、四季のお眼鏡に叶う部品を数点買い、次はスクールアイドルショップに向かう。なのだが、

メイ「なあ、さつきからアタシから見られてないか？」

ヒソヒソ

「あいつ!! あんな美人二人と!!」

「きつと裏では取っ替え引っ替えしてるのよ……」

「二股とかヤバいな……」

ヒソヒソ

「……」

聞こえている分だけでも俺はとんでもない風評被害を受けていた。もう心が死ぬ……

メイ「ナギ、元気だせよ……あつ、着いたぞ!!」

そしてスクールアイドルショップを見て回る俺たち。メイはLi

e11a!のグッズを買い漁り御満悦の様子だ。メイの笑顔で少し心が生き返った。

そして店を出た所で丁度良い時間なので昼飯にワックでハンバーガーを注文する。

「食ったらどうする?」

メイ「・・・昨日の夜、四季と電話で話してたんだけどさ? 明日休みだし・・・今日、昔みたいになじぶりに3人でお泊まり会しないか? 私の家今日は親が仕事でいないんだ・・・」

「っ／／／・・・マジで?」

おいおい、お前らもそうだけど俺が一応年頃の、しかも俺は男子だって分かってて言ってる?

四季「私は一応OK。ナギサは?」

「俺個人としては良いけど・・・親がなんて言うか・・・」

メイ「あつ、昨日ナギのお母さんに相談したら良いって言ってたぞ?」

あんのババア!! 何で一言も言わないんだよ!? 想像したら「その方が面白いからよ☆」と笑っている顔が浮かんだ。

メツチャ殴りたい顔……………。

「二人は、良いのかよ・・・?」

四季「私達は良いから誘ってるんだけど・・・」

メイ「おう・・・／／／」

つたく・・・、お泊り会か・・・何年ぶりだ?

メイ「確か5年くらいだな」

「心を読むな!!」

何で女ってこんな勘が鋭いんだ!? これじゃあ、おちおち考え事もできないぞ!!

四季「ナギサは分かりやすいから・・・」

メイ「すぐ顔に出るしな」

四季とメイに2連撃のコンビネーションアタックを撃ち込まれ俺の心のライフはゼロになり崩れ落ちる。ふつ、笑えよベジータ・・・

そんなで家に戻った俺たちは俺と四季は各家で着替えをバツクに詰めて、メイの家集合した。行く間に母さんが、「孫の顔を見る日も近いかしら？」などとほざきおった。

俺の理性の壁がもつだらうか……。こうして、己の理性を賭けた、欲望との闘いが幕を開けてしまった。

次回、四季・メイとのお泊り会!!

ー 続く ー

お泊り会①

久しぶりに幼馴染み3人で町に遊びに行ったら、突如として今日の夜、昔のようにお泊り会をすることになり、俺は着替えを持ってメイの家に行ってきていた。

俺がメイに迎えられて家に入った直後に四季も到着し、俺と四季はメイの部屋に通される。

(メイの部屋に入るの入学前の春休み以来だな・・・)

そんなことを思っていたらメイがジュースとお菓子を持ってきてくれたので、3人でつつきあいながら談笑する。するとそろそろいい時間になっており、

四季「あつ、もう7時だけど夕飯どうする?」

メイ「ああ・・・さつとなにか作るよ。何がいい?」

「無難にカレーで良いんじゃない?」メイにルーを作って貰って俺がご飯炊いて味噌汁作るから四季がサラダかなんか作ればよくね?」

メイ「んじゃそうすつか」

そして3人でキッチンに立って調理開始。俺はまず米をといで十分になったら炊飯器に入れて水を張り炊飯のボタンを押す。

四季もメイも何事もなく調理は進んでいる。

「メイも四季も、料理上手いな・・・?」

メイ「まあな・・・(隠れて花嫁修業してるなんて言えね〜っ／／／)」

四季「・・・私もこのくらいはできる(褒めてくれた・・・／／／)」

なんか2人の様子がおかしい気がするが多分大丈夫だろう。次に俺は味噌汁を作る。その前に、

「メイ、出汁ってどうやって摂れば良い?」

メイ「ああ、そこにあるスティック出汁使ってくれ」

メイはオーブン脇にあるスティック状の袋に入った出汁の素を指す。出汁の素を取ると鍋のお湯の中に投入。よく混ぜる。

その間に豆腐を食べやすい大きさの四角型に切り揃えて出し汁に投入。したらお玉で味噌をすくって菜箸で汁に溶かす。

「もう少しでできるな」

メイ「こつちももうできるぞ?」

四季「サラダもできた・・・」

そして料理が完成。皿に盛り付けてテーブルに運ぶ。各自スプーンを取り出して食べ始める。

「んっ、四季・・・このシーザーサラダ美味しい・・・」モグモグ

メイ「マジだ。美味しいな・・・」ハムツ

四季「そう?」

四季も口ではクールを装っているが、内心ガッツポーズである。

四季「カレーも美味しい・・・」モグモグ

「んん。同感・・・」ガツガツ

メイ「そ、そっか・・・／／／」

メイもまた、内心大喜びである。

(美味い・・・)

この男はそんな乙女的心情も素知らぬ顔でただ食べていた。見る人が見たら激怒する所業である。

四季「お味噌汁も美味しい・・・」ズズツ

メイ「ホントだ・・・」ズズツ

「サンキュ・・・」ズズツ

そして食べ終わったらまた3人で分担して洗い物と後片付けを済ませて場所は再びメイの部屋に移る。

メイ「ハア・・・」

メイはネットにアップされていたLieila!の写真を眺めている。まったく・・・

「メイ、例えばだけどき? お前が澁谷先輩たちから直接スカウト受けたらどうするんだ?」

そう聞くとメイは飲んでいたジュースを吹き出し咳き込む。そんなすごいこと聞いたか?

メイ「おまつ!! 何を言ってるんだ!! そんなことあるわけ・・・」

四季「メイ、ナギサは例えばって言った。どうなの?」

するとメイは複雑そうな顔をして、

メイ「そんなことになったら、私としてはスゲエ嬉しいさ。憧れの

人たちに認められたんだからな・・・けど、グループに入るってなると・・・ちよつと・・・な？」

「やっぱり自信ねえか？」

メイ「そう簡単に払拭できたら苦労はねえよ・・・」

四季「そう・・・」

「じゃあき、先輩たちがお前の印象として怖いとかまったく思わなくて、むしろ美人とかカワイイって思ったって言われたらどうする？」

メイ「そんな夢みたいなのがあつたら良いけどな・・・。本気でそう思ってくれたんなら、そのときは私も・・・L i e l l a ! に入れてくれって頼もうかな・・・？ まあ、ありえないと思うけどな？」

「・・・その”ありえない”が起きてるんだよなあ。先輩たち、メイの写真見せたとき可愛いとか美人って言ってたぞ？」

と、これはメイに言ったことがバレるので言わないが・・・。

四季「そろそろお風呂入れる？」

「だな。俺とお前らどつちが先入る？」

メイ「なんなら一緒に入るか？ お互いに隅々まで・・・」(・▽・)

ニヤニヤ

俺は「アホ！」と言ってメイの脳天にチョップする。「イテッ！」とは言ったがメイもイタズラが成功した子供みたいに笑っている。

男の純情弄びおって・・・。

四季「じゃあ先に私とメイが入る・・・覗かないでね？」

「覗かねえよ!!」

四季「覗いたら私が開発した”くすぐり君3号”の餌食になつてもらう」

「だから覗かねえって!!」

いや、でもその程度で済むなら覗いても・・・ってアカン!! 紳士になれ、欲望を封印しろ!!

メイ「四季、からかうのはそのへんにしとけて・・・」

四季はペろつと舌を出す。「エヘッ♪」じゃねえよ!!

そして風呂が湧いたので2人が入る。・・・ヤベエ、すげえムラ

ムラする。

しかし俺が鋼の理性で耐えて数十分。2人が風呂から上がってきた。

四季「お待たせ・・・」

メイ「ま、待たせたな・・・／＼」

「おう・・・っ!?!／＼」

2人から香ってくる、男の脳を破壊するような石鹼と女の娘の香り。ヤバい・・・!! 意識が吹っ飛ぶ!!

(二人を襲わないかマジで心配になってきた・・・)

メイ「襲ったら凄惨な罰を与えるからな?」

何イツ!? またしても心を読まれた!! コイツらまさかと思ったが・・・ニュータイプか!?

メイ「だから顔に出るんだって・・・」

四季「ナギサは素直だから嘘がつかない」

「う、うるさいな・・・。じゃあ風呂入ってくる」

そして脱衣所にて服を脱いで風呂場に入る。

(はあ・・・こんなんで大丈夫かよ・・・)

考えてみれば今浸かっているこのお湯もさつきまで2人が浸かってた訳であって・・・、

(っ!?!／＼／＼／)

考えただけでも身体が熱くなってくる。これじゃあただの変態じゃねえか・・・だが、こことある方のセリフを思い出す。

『変態は男の宿命。当然の事であり恥じることは無い』

某寡黙なる聖職者様の名言を心に刻み、何もおかしな事ではないと自分に言い聞かせ、身体を洗って俺も風呂から出て部屋に戻った。

三度場所をメイの部屋に戻し、俺が戻るともう既に布団が敷かれていた。ん?

「なんかクソでかい布団1枚しか敷かれてないんだけどどういこと?」

四季「え・・・? この布団1枚で3人で寝るんだけど?」

What, s...?」

「ハアアアアアアアアアアアツ?!?!」

今日の夜は長くなりそうだ……恐らく寝れないな。つていうかこの二人俺の理性をゴリツゴリに削りに来てねえか？

ー 続く ー

お泊り会②

俺は自分の耳を疑った。今四季はなんと行った……？

「この布団で3人一緒に寝る……？」

マジで言ってるのか……？

メイ「ほら、布団入れよ。電気消すぞ……「ちよ、ちよつと待て!!」何だよ？」

「いやおかしいだろ!? 何でそんな自然な流れで寝ようとしてるんだ! 俺たち高校生!! 男と女!! 分かる!？」

四季とメイは顔を見合わせ、

メイ「何当たり前の事言ってるんだ？」

四季「どうかした……？」

あれえ?! 何その「コイツ何言ってるんだ？」みたいな表情。俺がおかしいのか!?

「だったら俺はリビングのソファで寝……「四季!!」っ!？」

すると突如として首筋にビリツと痛みが走り俺の意識は遠退く。薄れゆく意識の中で最後に覚えているのは、笑顔を浮かべる2人の顔だった。

・ ・ ・

「うくん……」

意識がなんとか戻ってきて目を覚ます。部屋は暗く、もう夜中である事が伺えた。

(……何があったんだっけ?)

記憶が飛んでる……。俺が腕を動かそうとすると、

ムニユツ

? 「アンツ……」

!?! 俺が声のした方を見ると、四季が俺の右腕をガツチリとホールドした体勢で抱きついて眠っていた。今気づいたが左腕もメイが同

じくホールドして眠っている。

っ／＼／＼／　くくくっ!!

この体勢まず過ぎるだろ・・・俺がホールドを解こうと腕を抜こうとすると、

四季「んん・・・ギュツ」ムニユウ

四季が抱きつく力を強めてきた。その際に俺の腕が四季の女の娘の2つのお山に押し付けられる。

柔らかい・・・／＼／

(くっ、こっちはダメか・・・なら先にメイから・・・)

今度はメイの方の腕を気付かれぬようにゆっくりと動かし脱出を試みる。が

メイ「アツ・・・／＼」

メイさあああああん!!　そんな艶めかしい声で喘がないでくれますかねえ?!　こちらら理性が限界越えてるんですけどおっ!!

それでも脱出しようとする、

メイ「んん・・・ギュッ!!」

メチャクチャしがみついてくるんだけど・・・っっていうか・・・2人とも・・・けっこう胸あるんだな・・・」ボソツ

すると、ホールドする力が少し弱くなった。

(これ、起きてるのか・・・?)

なにはともあれコレはチャンス!!　俺は急いでホールドから脱出。布団から出ようとした。が、

四季「ナギサ・・・私のことも見てよ。大好き・・・だよっ・・・」ボソツ

(っ!!?)

寝言だよな?　でも・・・今なんて、

「俺のこと・・・好きって言ったよな・・・?」

いや、なんで!!　そんな素振り全く・・・俺は思い返して見る・・・ん?

ー　今朝　ー

『っ!!?／＼／　か、カワイイ・・・』

四季『フェツ!!?／＼』

(まさかあのときの赤面は嬉し恥ずかしくて照れていたから・・・?)
この男、ここまでされてようやくである。マジで女子からしたら地獄に落ちたほうがいいと思われても仕方ない。

(四季・・・)

メイ「んん・・・ナギい・・・っ」

!! メイ・・・、俺はどうしたら・・・はあ、今日くらいは一緒にいてやるか。

俺は脱出できたが、自らの意思で再び布団に戻ると四季とメイの頭を優しく撫でてやった。

メイ・四季「エへへへ・・・ムニャ」スウスウ・・・

俺・・・とんだ馬鹿野郎だったみたいだな。2人の気持ちに、ここまでされなきや気付かないなんて・・・。

2人の事、もうちよつと見てやれるように頑張るか。

そして朝になり、2人が起床。態度からしたら、どうやら昨日の夜は起きてはいなかった。完全に寝言だったらしい。

「・・・四季、メイ、写真撮らねえか? 久々に・・・」

メイ「おっ!! さんせー!!」

四季「私も賛成。でも急にどうしたの?」

「・・・別に／＼／」

四季「?」

そしてカメラをセットしてタイマーをかける。

メイ「ナギ真ん中な!!」

四季「メイもう少し寄って」

そして、ランプが点滅し、

「メイ! 四季!!」ガバッ

メイ・四季「わっ!」

パシヤッ!!

メイ「ナギ・・・?」

四季「なんかいつもと違う」

「なんでもねえよ!! ほら、朝飯食うぞ。今日もどうせ出かけるんだろ?」

メイ「なんだよ? 何があつたんだよ? (でも、悪い変化じゃない...)」

四季 (むしろ... 凄く心地良い。いい方向に変わった?)

そして笑い合う3人。カメラには、女の娘2人の肩を抱き、笑顔で顔を寄せ合う男子を含む3人の姿が映っていた。

― 続く ―

第1部 2章：集まる新星 新たなるLielia! Lielia!の敗北

休日明けの月曜日、俺たちが学校に行くとき昨日行われた代々木スクールアイドルフェスの影響か、学校の雰囲気はどこかおかしかった。

なにせなあ……

メイ「まさか……Lielia!が中学生1人に負けるなんて……」

四季「3人で会場で見てたけど、あの子のパフォーマンスが凄かったのは事実……」

メイ「分かってるよそんなことは!!」

うーむ……メイの気が立ってるな。周りに隠そうとはしているが、その実メイはLielia!の大ファンだ。そのLielia!が中学生、しかも1人相手に敗北したことに動揺している。だが……「でも、こんなことで澁谷先輩たちは諦めないと思うぞ?」

二人が俺の方を向いたので、俺は言葉が続ける。

「負けることくらい、スクールアイドルやってりゃいくらでもある。そんなことくらい先輩たちはわかってる。去年の東京大会だって、サニーパッションに負けたから決勝に出られなかったんだしな。先輩たちはちゃんと負けを知ってて、それでも這い上がるようにしてるんだ。だから大丈夫だろ?」

メイ「ナギ……! そうだよ!!あの人たちがこの程度で凹むはずねえ!! 次合うときには絶対にリベンジするハズだ!!」

四季「そっか……」

メイ、元気になったか。四季もちよつと暗い顔してたのが取れたかな?じゃあもうひと押しかな?

「ちよつと着いてこいよ。この間見つけた場所なだけどき……」

メイ「あ? 何だよ……」

「いいからいいから」

四季「……?」

俺が連れてきたのは、この学校の部活動、または個人が獲得したトロフィーが飾られている場所だった。

「見ろよ。まだ4つしかねえ……まあ、結ヶ丘は去年できたばかりだからそれは仕方ねえけど、取った部活を見てみるよ」

メイ「はあ? ……っ!! 全部スクールアイドル部じゃねえか!!」

「そう。去年の代々木スクールアイドルフェス、ラブライブ地区予選、東京大会、そして昨日の大会。全部スクールアイドル部が取ったんだよ。L i e l l a ! は結ヶ丘の期待と希望の象徴っていうメイの言葉は、間違ってる」

四季「凄い……」

メイ「……ナギ、サンキュー!!」ガバツ!

「わっ?」

しばらく無言になったメイは、笑顔に変わったかと思えば俺の後ろに回りいきなり背中に飛び乗ってきた。瞬間的にズシツと来たが、それが過ぎれば軽すぎる位だ。

四季「L i e l l a ! ……か……」

そしてその日の授業が終わり放課後、

先輩「L i e l l a ! が応援してくれた生徒に感謝を込めてライブをやりまーす!!」

先輩「良かったら見に来て下さーい!!」

体育館近くで先輩方がチラシを配っていた。こんなに行くに決まってるんだろ!!

メイ「行くぞナギ、四季!! こんなの見逃せるか!!」

「ハイハイ……」

四季「メイは本当に好きなものには全力だよね……」

「? 四季だつて知識を活かして物を作るの好きじゃねえか。ああやって発明してる時のお前生き生きとして、その姿は俺結構好きなんだけどな……」

四季「っ!!／／／」

四季の顔が赤くなった。やっぱり勘違いじゃ無いみたいだな。

四季「そういうこと・・・軽々しく言わない・・・／／／」

「? 本心だけど? 重々しく言ったら良いのか?」

四季「そうじゃなくて・・・好きとかそんな簡単に言ったらダメ・・

／／／」

「お前が楽しそうに物作ってる姿が好きなんて多分メイも少なからず思ってるぞ?」

四季「じゃあ意味合いが違うけど、・・・ナギサは私のこと・・女の子として好き?」

「……友達としてなら大好きだ。女の子としては・・まだ分からない」

四季「っ!?!」

四季（まだ分からないって・・もしかして私にもまだチャンスがあるってこと?）

四季がなんか俯いてブツブツ言い始めた。

「ほら、前でライブ見ようぜ?」

俺は四季の手を引いてメイの待つ前列へと向かう。

四季「あっ・・・／／／」

四季はそつと俺の手を握り返してきた。

メイ「2人共々!! こつちこつち!!」

そして、3人並んで先輩たちと、桜小路さんのライブを見届けた。

四季（諦めないと思ってたのに、こんなの・・諦められなくなっちゃうよ。ナギサ・・私は、メイと同じ土俵に立つても良いの?）

頬を赤らめながら、四季が心の内でそんなことを考えていたのを、四季の気持ちに気づいたとはいえ、俺とメイは気付かずにいたのだっ

― 続く ―

赤と青 二つ星へと伸ばされた手

Lieilia!の生徒へのありがとうライブの翌日の昼休み、俺と2人は教室で3人で昼飯を食べていた。

「四季、その弁当もしかして四季の手作りか?」

四季「うん・・・良かったら唐揚げひとつ食べてみる?」

「良いのか? じゃあ一個貰うな?」

四季が自分で作ったという唐揚げをパクツと一口。するとスパイシーな風味が口の中に広がる・・・

「美味い・・・カレー味か?」

四季「正解。唐揚げ粉に、粉末のカレー粉を少量混ぜてみた。美味しかった?」

「いや、マジで美味い。今度俺も作ってみよ・・・」

ほんのり頬を赤らめながら笑顔を見せる四季。前も言った通り四季は普段は無表情なため、笑顔を見せることはあまり無い。

俺やメイと話してる時は比較的笑顔を見せることは多いが・・・、それが赤の他人に変わるとたとえ気分が楽しかったとしても、ここまで明確な笑顔を見せることは恐らくない。

「なのでもしも、”四季も勘違いされやすいのか?”と聞かれたら、あの意味その通りなのだ。」

だからこそ、四季にとってもメイにとっても・・・俺を含めたお互いが、自分を偽らずにありのまままで話せる数少ない相手なので、もしも失いかけたら何が何でも守ろうとするだろう。

すると突如教室がざわめきだし、

同級生「ねえ? あれLieilia!の先輩たちだよね!」

同級生「本当だ!! なんで1年生の教室に・・・?」

メイ「なにっ!」ガタツ!!

周りの生徒の声に、メイが音を立てて立ち上がり廊下に出る。

メイ「澁谷さんと可可さんだ!! はわあゝゝっ!!／／／」

四季「メイ・・・表情おかしくなってるよ?」

メイの後を追って俺たちが話していると、お二人がこっちに気づい

て近寄ってくる。

メイは緊張から目を見開いて顔がどんどん赤くなっている。

かのん「やっぱりかわいい……「ふえっ!!／／」ねえ? あなた名前は?」

メイ「えっ、あ……よ、米女メイです……／／」

可可「アナタが……そっちの青髪の子は四季さんでシタよね?」

四季「えっ? なんて知って……?」

かのん「二人共、単刀直入に言います!! スクールアイドル、やってみませんか?」

メイ「へえ……っ!」

メイ『え”ええ”え”ええ”え”ええ”え”えっ!!!!?』

メイの耳をつんざくような絶叫。周りの皆は驚愕の表情を浮かべながらも耳を塞いでいる。

メイ「な、なんでアタシが!」

四季「私も……?」

可可「なんでって……スカウトです!! お二人共カワイイですし、美人と言って差し支えないデス!! ククたちと一緒に高みを目指しまシヨウ!!」

メイ「……」

あつ、メイが放心状態でぶっ壊れてる。ここは、「ていつ!!」

ポカッ!

俺がメイの頭に斜め30度の角度でチョップを噛ますと意識が戻る。昭和のテレビかよ……

メイ「ハッ!! そ、そう言われましても……何故私わたくしめなのでしようかあつ!」

もうキャラ崩壊起こしてんぞ……www

可可「ククたちも今のままでは力不足だと言う意見が上がったのデス。勿論ククたちも練習して力をつけマスが……」

かのん「今のLieila!にいないタイプの子を入れた方が良いんじゃないかって話になつてね。前にその男の子と話す機会が

あつて、二人の話は聞いてたんだけど・・・」

それを聞いたメイが俺を睨む。四季も呆れた顔をしているが、
可可「でも、今日初めてお会いしてその子の言ってたことが間違
いじゃないとククたちが実感しました!! 是非お二人に入つて欲し
いのデス!!」

メイ「それは・・・コイツに言われたからつてことですか?」

かのん「ううん、それはただのキツカケ。1番の理由は今こうして
会つて、2人が条件に合つててかつ可愛いって・・・私達自身が思つた
から!!」

それを聞いたメイは顔を真っ赤にして俯く

メイ「そ、そんな・・・アタシなんて・・・／／」ゴニョゴ
ニョ

かのん「四季さんもどうかな? おねがいます!!」

なんと澁谷先輩が頭を下げた。周りの皆もメイも驚いている。

メイ「し、澁谷さん!」

四季「・・・メイと一緒に考えます」

かのん「どうかな? 米女さん!!」

メイ「す、少し考えさせて下さい・・・あつ、最後に確認してい
いますか? 先輩たちは、アタシの目つき・・・どう思います?」

メイは悩みの性質上、コレだけは聞いておかなければ答えは出せな
い。だが、お二人は顔を見合わせクスツと笑い、

かのん「それも聞いたよ? 目が悪いから目を凝らしてる結果睨ん
でるって勘違いされてるだけなんですよ? そんな人を悪く思わな
いよ!!」

可可「ククたちは、自分たちの意思で今お二人をスカウトしてるの
デス!! お二人に可能性を感じたので。決して頼まれたからではあ
りません!!」

そう。コイツは不良どころか、実際はただのスクールアイドルオタ
クだ。まあ今それを言ったらマジで命が危ういので言わないが

メイ「(そんな・・・アタシが? 夢みたいだ・・・で、でも・・・)な、
なるべく早く答えを出すので、ちよつと待つて下さい・・・」

かのん「うん!! いつでも待ってるから!! 返事してくれるときは
部室に来て?」

可可「待ってマスから!!」

そして、お二人は教室に戻っていった。そして、俺はなぜか教室で
メイに正座させられていた。あれ?

メイ「はあく・・・ナギ、お前なあ・・・」

「・・・こないだのお泊り会の時、お前に聞いただろ? そしたらお前、
絶対ないけどって言って、”先輩たちが自分の意志でアタシのことを
美人とかカワイイって認めてくれたら” って言ってたよな? あの
時には既にその絶対無いが起こってたんだよ」

メイ「マジか・・・」

四季「良かったねメイ? コレで邪魔するのは無くなったよ・・・
?」

メイ「どうしょつかなあ・・・／＼／＼／＼」

メイの表情は手で顔を抑えても分かるほど真っ赤になってニヤけ
まくっていた。やれやれ・・・

「で? 俺はいつまでこうしてれば・・・」午後の授業が始まるまでそ
うしてる!!」ヒイツ!」

凄い剣幕で怒られてしまった。先輩たちの意思でスカウトしてく
れたからと言って、それとこれとは話が別らしい・・・

トホホ・・・

― 続く ―

輝きの双星と太陽

俺と四季は、俺の家で2人で話していた。議題はもちろん……
四季「ナギサのおかげでもうひと押しだと思っただけだなあ……」
「……じゃあ、体験入部してみたらどうだろう？ 体験ならメイもそこまで緊張はしないと思うし」

四季「どうだろうね……。それでも一歩踏み出せるか……」
じゃあ、

「2人で体験入部してみたらどうだ？」

四季「は？」

翌日……

授業が終わり放課後……

恋「では、今日体験入部に来てくれた1年生の紹介から入りますね？」

四季「若菜四季です……」

メイ「米女メイです……／＼／＼」

かのん「よろしく!! メイちゃん、四季ちゃん!!」

メイ「こんなの聞いてねえってえくっ!!」

四季（なんで私まで……）

私とメイを体験入部に申し込んで、てつきりナギサも来てくれると思っただけは申し込んでなかった。「スクールアイドルに不純物男が入るわけにはいかないだろ？」って……

千砂都「じゃあ、まずは柔軟ね」

そして各自がそれぞれ前屈の体勢を取る。四季とメイも行う。

可可「く、ククくらいは柔らかいみたいデスね……」
クウクウ先輩……身体固いんだ……

四季「割と……余裕」

メイ「わ、私も……」

可可「ガッン!!」

ショックを受けたクウクウ先輩は放置し柔軟は終了。ダンスとフォーメーションの練習に入る。

千砂都「ワン・ツー・スリー・フォー、ワン・ツー・スリー・フォー
!! はいストップ!!」

きな子「き、きな子よりもできてるツス・・・」

メイ「へへッ・・・」

四季「・・・!」

メイ「・・・楽しそう。」

そしてその日の練習は終わり、

かのん「2人とも凄いなあ・・・自信なくすかも」

メイ「そ、そんな・・・私なんて・・・んん?」

米女さんが顔を上げた瞬間、目つきがおかしくなった。

きな子「ヒッ!」

すみれ「あなた目が良くないんだっけ?」

メイ「あつ、知ってるんですね・・・そうです。でも、それで睨んでると勘違いされて・・・私は・・・」

四季「メイはカワイイのに、周りは気づいてくれないんです・・・」

メイ「何言ってるんだ!! 四季の方がカワイイだろ!!」

四季「・・・メイこそ何言ってるの、こんなメイとナギサ以外の前じゃあろくに笑顔すら作れないのに・・・」

可可「でも、練習中楽しそうに笑ってましたよ?」

四季「っ!!」

メイ「なんだよ? まさかお前もだったのかあ?」ニヤニヤ

四季「か、からかわないで・・・」

メイ「顔、真っ赤だぞ? 四季のそんな顔初めて見たけどな?」ニヤニヤ

メイにからかわれるなんて・・・屈辱。

メイ「クスッ・・・なあ四季、もしかしたらアタシとお前は似てるのかもな。自分を出せずに、ずっと苦労して・・・けど、わたしたちには・・・いつもアイツが居てくれた」

四季「・・・うん。ナギサは・・・私達が悪く言われてると、いつも悪く言った人たちに怒ってくれた、味方になってくれた」

もしもナギサが居なかったら、考えたくもない。

メイ「例え向いてないと周りから言われようと、アタシは：スクールアイドルやってみる!! 四季、お前もやってみないか？ アタシ、四季が隣に居てくれたら・・・やれそうな気がするんだ」

四季「私は・・・」

可可「ククたちは大歓迎デスよ!!」

メイはやることを決めてくれた・・・。もしかしたら、メイに進められて動画を見たときから、心のどこかで憧れていたのかもしれない。なら私も、素直になってみようかな？

四季「分かりました・・・メイと一緒に・・・入ります。でも一つだけ、ワガママを言っても良いですか？」

かのん「？」

四季「メイ、私達にだけやらせて自分は知らん顔なんて不公平だと思わない？」ニヤツ

メイ「だな!! ナギも巻き込んでやろうぜ!!」ニヤリ

ー 公園 ー

俺はスマホに送られてきたメッセを見て微笑ほほえみを浮かべていた。

「メイと四季、L i e i l a ! に入ったか・・・ったく、手間を掛けさせやがって「居た!!」？ メイ、四季・・・皆さんも」

メイ「ナギ・・・」

「やっと素直になったみたいだな？ これで、俺もお役御免かな？」
そして俺は公園から去ろうとする。

四季「待って!! ...ナギサ、お願い。私達の・・・L i e i l a ! のマネージャーをやってくれない？」

「っ！ 俺が？」

メイ「アタシと四季が今こうしてられるのは、小さい頃からナギと一緒に居てくれたからなんだよ!! だからこそ、ナギがいらないなんて・・・絶対に嫌なんだ!!」

四季「ナギサ・・・お願い」

・・・俺は、言葉が出なかった。

かのん「日宮くん、君の二人との関わりも全部聞いた。私達も、君

にマネージャーやってほしい!!」

澁谷先輩・・・

すみれ「大切な人なんですよ？ だったらこんなところでお役御免なんて言ってるんじゃないわよ」

平安名先輩・・・

メイ「頼む・・・一緒に、いてくれよっ!!」

メイ・・・

四季「お願い・・・ナギサっ!!」

四季・・・

「・・・良いのか？ 男の俺が、不純物が入っても」

四季「私もメイもナギサをそんなふうには思わない・・・」

メイ「居てほしいんだ、ナギに!!」

「先輩たちは・・・良いんですか？」

かのん「私達は歓迎だよ？」

可可「ハイ!! ククたちを支えてください!!」

すみれ「しょうが無いわね・・・まあ、せいぜい頑張りなさい？」

ソクムシは黙ってるデス!!」なんてよっ!!」

千砂都「君の幼馴染みに対する気持ちは本物だつて分かるから大丈夫だよっ!! 私もね・・・なんとなく分かるんだ」

恋「日宮さん、お願いします」

っ!! 全くコイツらは・・・

ここまで言われたら・・・やるしかないだろ!!

「分かりました。マネージャー、やらせてもらいます!!」

メイ・四季「やったー!!」

2人は、笑顔を浮かべて俺に飛びついてきた。俺が優しく受け止めると、二人共本当に幸せそうに笑っていた。

そして、Lielia!は1年生4人を含む9人へと一気に増え、

新体制での初練習・・・

恋「それでは、今日から入る3人は自己紹介をおねがいします」

恋「それでは、今日から入る3人は自己紹介をおねがいします」

恋「それでは、今日から入る3人は自己紹介をおねがいします」

恋「それでは、今日から入る3人は自己紹介をおねがいします」

四季「若菜四季です」

メイ「よ、米女メイです!!」

「日宮渚です!! マネージャーとして加わらせてもらいます!!」

千砂都「じゃあメンバーも増えたし、アレやっとか?」

四季・メイ・渚「「アレ?」」

かのん先輩たちは、指をVサインにして皆で星にしてつなげる。

かのん「私達のライブ前のおまじない!」

メイ「ひええええっ! 恐れ多い、恐れ多いいっ!!」

千砂都「大丈夫!! かのんちゃん!!」

かのん「うん! もっとたくさんの人に、歌を届けよう!! メイ

ちゃん!」

メイ「そ、song for me!!」

四季「song for you」

・・・ん?

全員、俺の方を見て笑顔を浮かべていた。はあ、

俺も指をVサインにして、星に加わり、

「song for all!!」

メイと四季と、皆との物語は、これから始まるんだ!!

― 続く ―

Liella!での日常

俺たち3人がLiella!に加入した翌日の早朝5時、スマホのアラームの音と共に起床し、ジャージに着替えて外に出る。

「「いってきまーすー」」

ん？ 門をでると、3人とも同じタイミングで外に出てきていた。どうやら考える事は同じらしい。

メイ「おはよっ!! タイミング被ったな。何も約束してないのに」
四季「なんとなくこの時間かな? って。それに入った以上は全力でやる。ちゃんとして行けるようにしないと」

「まあ、俺はいつもの日課だから変わらないし…それに、一応マネージャードしな」

そう言って俺は担いだリュックを開けて中に入れた人数分のスポーツドリンクを見せる

四季「さすがナギサ」

メイ「よし、行こうぜ!!」

そして俺たちは一緒に走り、先輩方やきな子との集合場所の公園に向かう。

ハツハツ「どうした? 大丈夫か?」

メイ「おう! 平気だ!!」

四季「大丈夫!」

やっぱり二人共それなりに体力はあるんだよな…。何度も言うけど、四季は見た目はインドア派って感じで体力無さそうなのが…。四季の趣味はキャンプや昆虫採集っていうくらいには実はアウトドア派だったりするし、人は見かけによらないというか。

きな子「あつ、日宮くん! 米女さん! 若菜さん! おはようッス!!」

かのん「おはようメイちゃん、四季ちゃん! 渚くんも!!」

「あつ、おはようございます!!」

メイ「お、おはようございます!!」

四季「おはようございます」

かのん「せっかく会ったし一緒に行くか？」
そしてきな子とかのん先輩と合流し5人で公園に走る。もうあと少しで着くぞ。

「きな子！ 着いたらドリンクあるから頑張れ!!」

きな子「は、ハイいーっ!!」ハアハア

メイ「きな子、最初よりもだいぶ体力付いたんじゃないか？」ハツハツ

きな子「は、はい!! 先輩たちの足を引つ張りたくなくて頑張ったっス!!」

きな子は自分の決めたことに真剣に向き合って達成しようと努力できるしつかりとした芯を持った子なんだな……。俺が感心していると、その間に公園に着いた。

きな子「つ、着いたっス……。 」

「ほら、ドリンク！ まずは息を整えてからゆっくり飲みよ？」

俺は担いでいたリュックを開けてペットボトルのドリンクを取り出し、きな子に渡す。

きな子「あ、ありがとうっス!! いただきます!!」

その間に他の千砂都先輩、すみれ先輩、クウクウ先輩、恋先輩も到着したので皆にドリンクを渡す。

可可「プハア……。生き返りマス」

恋「あの、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ、二元の粉を買ってそれを大量の水で薄めてペットボトルに詰めただけなんでそんなに掛かってないんで大丈夫です」

実際五袋入りの箱を一箱買ってそのうちの一袋しか使っていないから味はかなり薄いはずだな。そう説明したのだが、

恋「それでもお金くらいは出しますよ……。積み重なれば馬鹿にならないんですから……。 」

「……。分かりました」

なんか恋先輩の目が凄い真剣だったし、言っても聞かなそうだと思ったので取り敢えず受け取ることにした。

「じゃあ軽くステップの練習しましょうか？ 一応音源スマホに落と

したんで」

千砂都「よし、じゃあ始めようか!!」

そしてその日の学校も午前の授業が終わり昼休み、お昼ごはんを食べようとしていたら先輩たちからメッセが届き、部室で一緒に食べようということだったのでメイと四季とともに部室へ向かう。

今日学校に来てからというもの、どこから嗅ぎつけたのか、俺・メイ・四季の机の周りには人だかりができていた。

俺は問題なく対応していたが、口下手なメイと四季は中々上手く話せず、俺がフォローを入れてやった。

一応今回、「メイの睨みはただ単に目が悪くて目を凝らしてるだけだ」ということをクラスメイトたちに説明した。

皆ビツクリしていたが、「何だそうだったんだ!」とか、「言ってくれば良いのに」とか、「怖い子って訳じゃなかったんだね」とか特に悪く思った子はいなさそうだった。

むしろ誤解が解けていい方向に転がりそうだった。

四季も四季で結構な人気ぶりで本人が1番戸惑っていた。まあ、小・中とあれじゃあそうなるわな・・・。

そんなクラスメイトたちと一時別れ部室に向かった俺たち。既に皆さん集まっっていて、談笑しながら昼ご飯を食べていた。

かのん「あつ、来たね」

すみれ「遅いわよ?」

メイ「す、すみません!!」

千砂都「別に怒ってないよ?」

可可「食べマシヨウカ」

そして皆で食べてるうちに趣味の話になり、

かのん「渚くんは何か趣味ってあるの?」

「ゲームとか音楽鑑賞、後バスケットですかね」

葉月「バスケットですか?」

メイ「ナギはフェイダウェイスリーっていうプロでも難しい技を決

めるのが凄く上手いんです！」

メイが俺のことを我が事のように自慢気に話す。

かのん「フェイダウェイスリー・・・？」

すみれ「あっ、バスケのサイトに解説載ってたわよ？ フェイダウェイスリー・・・」ブロックを避けるために後方に飛びながらスリーポイントを放つプレー。通常のスリーと違い、後ろに飛ぶので力がボールに伝わらずに逃げやすい上にスリーポイントであるためにゴールまでの距離も長く、素人がやってもまずリングまで届きすらない高度なシュート”ってあるわよ？”

千砂都「あく、あのバスケの漫画で見たウィンターカップ編決勝の”天”のシュートか・・・」

「・・・よく知ってますね」

葉月「天のシュート？」

千砂都「実測○央 三種のシュート」でググってみなよ」

かのん「あはは・・・、でもちよつと見てみたいかな？」

「機会がありましたら」

そして昼休みが終了近くまで談笑し、その日の午後の授業の為に教室へと戻った。

ー 続く ー

ラツキー？・orアンラツキー？

今日は6月の最初の日曜日。もうすぐ四季の誕生日のため、渚とメイは四季には内緒で2人で四季への誕生日プレゼントを選びに出掛ける約束をしていた。

メイの要望で駅前で待っていたのだが、1時間経ってもメイが来ない。その上何の連絡も無い。

(まさか……何かあったのか?)

さすがに心配になり、渚は来た道に戻ってメイの家に向かった。

(これでもしももう家を出てるなんて言ったら大騒ぎだぞ?)

渚はメイの家に着きチャイムを鳴らす。するとメイのお母さんが出てきた。

メイ母「あら渚くん、どうしたの?」

「スミマセン……メイいますかね?」

メイ母「? ええ。まだ爆睡してると思うけど……」

そつかあ……なら一安心だ。けど……ちよつと苛ついたな。

「スミマセン。今日はメイと四季の誕生日プレゼントを一緒に買いに行く約束をしていたんですがいつまで経っても来ないので何かあったのかと心配になって」

そう言うとメイのお母さんは申し訳無さそうに、

メイ母「ええ、そうなの!! 全くあの子と来たら……部屋にいると思うから起こしてあげて? あつ、引つ叩いて起こしてもいいから」
「そうですね。人を待たせて心配させておいて今だに爆睡してるって少し頭に來たので拳骨くらいは勘弁してくださいね?」

メイ母「もちろんよ」

そして俺はお母さんに家の中に入れてもらい階段を上がつてメイの部屋に。

ガチャ!

「メイ!! いつまで寝てんださっさと起き……ろ……」

メイ「ふエっ?! / /」

部屋に入ると、メイは起きており……あろうことか着替え中だっ

た。メイの今の格好は下着姿のほぼ産まれたままの姿。

(ヤベエ……そう言えばノックするの忘れてた)

俺はここで目を逸らしてすぐに扉を閉めなければならなかっただろう。

しかしメイの艶のある柔肌に視線が釘付けになり脳が見ないことを拒否しているようだった。

メイ「っ／／ なっ……いあ……ああ……／／っ！速く出て行けば

カアーーーーーっ！っ！！！！」

ブンっ！

ガアアアアンツ！！

「ギヤアアあああぁっ?!?!」

咄嗟にメイが投げた目ざまし時計が俺の顔面にクリーンヒット。衝撃で俺の意識は薄れていき……そして手放した。



「う、う………ん?」

メイ「あつ、目え覚めたか?」

「ん、今………」

なんか頭の下に柔らかい感触が………っっていうか何でメイの顔が上から俺を覗き込んでるんだ?そして目の前にあるこのあまり大きなくない双丘は……

ギューーーツ!

「痛い痛い!!」

メイ「今失礼なこと思っただろ?」

「い、いや別に………ん?」

「ここで、俺はあることに気づく。」

メイ「どうした?」

「いや、俺ひよつとして………メイに膝枕されてる?」

メイ「今頃気づいたのかよ?嫌だったか?」

「いやあ……嫌ではない「そっか」で、何でこんなことになってるん

だっけ?」

メイ「覚えてないのか?」

「う〜む……速く起きろってメイの部屋の扉を開けたところまでは覚えてるんだがそこから先の記憶が……後、顔が痛い……」

メイ「母さんから話は聞いたよ。悪かったな……約束してたのに、心配して来てくれたんだろ? それなのに……、こんな怪我負わせちゃまって……。で、でも!! 部屋入るときにノックくらいしろよな!? アタシだって女なんだぞ!!」

「あ、あくそう言えばしなかった気がする。悪かったな……。で……、その後何かを見た気がするんだが……何だっけ?」

メイ「お、思い出さなくて良い!!／／／／」

「そ、そうか……」

メイが顔を真っ赤にして、あまりに必死に言つたので渚はここで追求をやめる。

メイ「大丈夫そうか?」

「ああ……何とか。じゃあ行くか? 四季のプレゼント選び……」

メイ「そうだな」

そしてメイの家を出るときにメイのお母さんから凄く謝られた。

メイは逆に怒られていたが……

「いや、俺もノックするのを忘れてたのでおあいこですよ……」

メイ母「ごめんなさいね? じゃあ行つてらっしゃい」

メイ「行つてきます……」

「行つてきます」

そして渚とメイはまずは秋葉原に来た。メイはこの電気屋で四季に新しい工具を買ってプレゼントしてやろうと考えている。

メイ「前に四季が新しく欲しいって言つてたんだよな!」

そして、電気店で専門的な用途で使う特殊工具を買う。少しばかり値が張ったがここは渚も少し出した。

続いては渚があげるプレゼントを買いに近くのキャンプ用品を売っている店に来た。四季の趣味はソロキャンプと昆虫採集。なのでキャンプで使える用具をプレゼントする。

(虫取り網とかもセットで買ったのか)

そして2人は買い物を終えて家に帰る。メイは家に入る前にまた俺に謝ってきたが「大丈夫だ」と返してやった。ん？なんかここまで出かかってるんだけどなあ……。

そして渚も自分の家に入り、自分の部屋に向かうため階段を上る……途中で、

「あつ、思い出した。……メイの身体、綺麗だったな。下着は水色だったっけ……／＼／＼」

ここで思いだし、部屋で顔を赤くしている男子がいた。

その頃メイはというと……

メイ(思い出さないよな？ 思い出したら恥ずかしすぎる……。くっ！／＼／＼)

顔を赤くして挙動不審になっていた。だが残念、たった今思い出していた。

「まあ、この事は触れずにおくのが吉だろ……。宿題やろ……」
ちやつかり危機回避していた。

ー 続く ー

L T u b e r 鬼塚夏美現る

時は過ぎ7月初旬、夏休みが近付いたある日の体育の授業が始まる前、体育館で俺とメイと四季が3人で話していた。しばらく経ったら先生が来たので生徒たちは集合する。

先生「よし、今日はバスケを行うが、ディフェンスとオフENSEに分かれて1vs1を行う。やり方の見本を見せるので・・・日宮!! 相手しろ!!」

え? オレ・・・?

「大丈夫なんすか?」

先生「心配するな。私はこれでも高校時代全国大会ベスト8まで行ったんだ!! 男子とはいえバスケ部でもない奴などすぐ勝てる」

「・・・あ?」

今の一言にカチンと来た。上等だよ! 生徒の前で恥かかせてやる!! (怒)

そして俺がオフENSE、クソババア(先生)がディフェンスに入る。球出しの生徒からボールが入った時点で開始。俺はドリブルしながら隙を伺う。

先生(? 何だ? 素人にしては違和感が・・・) ババアがスティールしようと手を伸ばしてくる。それをすぐさまレッグスルーで躲し、喰らいついてきた所をクロスオーバーで揺さぶる。

先生(っ!?! 早い!?)

しかし俺はクロスオーバーで横にスライドしただけ。抜きには掛かっておらず、ババアの体勢は大きく崩れる。

「貫った!!」バツ!!

俺が3Pシュートを放とうとすると、まずいと思ったのか、崩れた体勢でも素早く立て直してすぐさまブロックに跳躍するババア。腐っても上級者か・・・しかし、当然俺は、

先生(後ろに跳んだ!?)

俺の十八番、フェイダウェイスリーを放る。流星にこれは入らない

とコイツも高を括っていたが、シュートは無情にも・・・

ザシュツ!!

先生「!?」

シュートはゴールの真ん中をリングに触れすらせずに射抜き、シュートは決まった。俺の勝ちだ。

「はい、俺の勝ちです」

先生「（。D。）ポカーン・・・」

「おーい・・・？」

先生「はっ!? お前、何だ今の!! 素人じゃないのか!?!」

「先生? 部活やってない!! 上手くないって言うのは偏見ですよ?」

メイ「先生、ナギはストリーートの1vs1の大会で優勝するくらいには上手いんですけど・・・」

先生「何いつ!?!」

「これに懲りたらあんましバカにしないほうが良いですよ?」

先生「はい・・・そ、それじゃあ各自分かれて始めてくれ。日宮は審判を頼む。お前が相手になったら皆の心がへし折られかねん・・・」

「了解しました・・・」

そして皆が一組一組順番にバトルしていく。途中、メイvs四季の戦いもあり、

メイ「負けねえぞ四季!!」キュツダムツ!!

四季「私だつて!」キュツキュツ!!

メイのドリブルの揺さぶりに四季もついて行く。四季が想像していたよりも運動ができたことに、クラスの皆はビックリしている。

というかこの二人はたまに俺と一緒にやることがあったからそこそこ上手いんだよな・・・。

きな子「米女さんと若菜さん凄いつす!!」

? (あの4人、確かスクールアイドル部の。動画に出演してもらってLieilia!の動画を撮っても良いかもしれない!! チャチャンネル登録者急増の予感ですのー!!)

若干1名変なことを考えている者もいたが・・・

四季「貰う!!」バチッ!

メイ「あっ!!」

ステイルがキレイに決まり、四季とメイの対決は四季が勝った。
四季・・デイフェンス上手いな・・・。

メイ「くそっ!! やるな四季!!」

四季「こういう勝負でメイには負けたくないから・・」フンスツ
そしてそんなこんなで終了の時間になり、号令と共に俺は教室に戻
ろうとしたら、クラスメイトの女子たちが群がってきた。

「日宮くん先生に勝つなんて凄い!!」とか、「カツコよかった!!」とか、
飛び交う黄色い声。となればどうなるか、俺も男である。表情が緩む
に決まっている。

ゾクッ!?

背筋に悪寒を感じ辺りを見ると、もの凄い怖い顔をしてコチラを睨
む四季とメイがいた。ガクブル

? 「日宮くん!! ちよつと!!」

ん? 確か、鬼塚だっけ? が俺の右腕に抱きついて話しかけてき
た。腕が鬼塚の胸に挟まれてるんだけど・・狙ってるのか? メイ
と四季からの視線が一層鋭くなる。

「確か、鬼塚夏美・・だっけ?」

夏美「はい! アナタの心のオニサブリク、オニナツツこと鬼塚夏
美ですのく!! ちよつと日宮くんにお問い合わせがあるんですの!!」

「お、お願い?」

夏美「夏美のL TubeチャンネルでLieila!の特集組み
たいのでお願いしたいんですの!!」

「・・・は?」

夏美「マネージャーの日宮くんもビジュアル映えるし、Lieila!
も美少女揃い・・そうすればマニーの収益もうなぎのぼり・」
心の声ダダ漏れですけど。

メイ「おい!! そんなの許さねえぞ!!」ギロツ!

四季「ナギサは渡さない!!」ゴゴゴゴ!!

2人が物凄い威圧感を放ちながら鬼塚を睨む。他の生徒はあまり

の恐怖にそそくさと逃げていった。

夏美「あつ、お二人も良かったら出演してくださいですよ!!」

メイ「は、はあ!？」

四季「L Tubeの動画に出るってこと? 私達が?」

夏美「スクールアイドル部に入っている人たちにお願いたいんですの。宜しければ動画の最後に宣伝してもいいですよ」

メイ・四季「!?!」

それは・・・Lielia!にとっては魅力的な誘いかもしれない。だが、

四季「私達の一存じゃあ決められないから私達の部の先輩に相談してからでいい?」

夏美「もちろんですよ!! 何なら私が説明に行きますのーっ!!」

そして、鬼塚は颯爽と去って行った。嵐のような奴だったな……。

「とりあえず教室戻るか……」

メイ「だな・・・あつ、そうだ!!」

四季「女の子に囲まれて鼻の下を伸ばしていた件について、後でゆつくりと反省の言葉を聞かせてもらおうから」

なんか余計に疲れてきた……。

ー 続く ー

ホントにwin win?

放課後、本人から詳しい説明をしてもらったために鬼塚を連れて部室へと向かった。

部室に入ると、可可先輩と千砂都先輩が鬼塚を新入部員と勘違いしていて盛大に早とちりしたところをすみれ先輩にぶつた斬られていた。

かのん「プロデュース?」

夏美「ハイですよ! 私のチャンネルでLielia!の皆さんを宣伝させてほしいんです。ツイッターだけでなくそうした方面からも宣伝すれば、よりいろいろな人に知ってもらえると思うんです!!」

恋「でも、私達払える報酬はありませんよ?」

鬼塚「それは大丈夫ですよ。一応動画が再生されると少ないながらもチャンネル主にお金が入ってくるんです。それを貰えばあとは何もいらainんです。win winってやつですよ!!」

・・・なるほど。鬼塚はお金が入る。俺たちはLielia!をより多くの人に知ってもらえる。悪い話じゃ無さそうだな。

「すみれ先輩、どう思います?」

すみれ「ちよつと引っ掛かるところがあるけど、多分大丈夫だと思うわ」

かのん「じゃあ夏美ちゃん、お願いします!!」

夏美「おまかせですよー!!(チヨロいんですの、5万人以上もフォロワーのいるLielia!の動画の収益が少しで済むわけ無いんですのに・・・マニーの、一攫千金の予感ですよー!!)」

そして、その日の夜早速クウクウ先輩の家で動画の撮影が始まった。題名は「Lielia!の日常」だそう。っていうか・・・「皆でトランプやってるだけじゃねえか!!」

すみれ「ちよつとカード!!」

ロープを使ってカードを運ぶ箱を外におろす。そこにすみれ先輩とかのん先輩がカードを入れるとロープを引っ張って回収する。

すみれ「なんで私達がこんな!! カード寄越しなさい!!」

可可「受け取るがいいデス貧民共が!!」

クウクウ先輩が上から見下すような表情で窓から外にいる二人にカードを落とす。

すみれ「くっ、権力を振りかざす大富豪ね!! 今に見てなさいよ!!」

かのん（クウクウちゃんキャラが・・・）

すみれ「かのん!! 協力して這い上がるわよ!! カード何持ってる

? 交換しましょう!!」

かのん「それズル!!」

ー 可可の部屋 ー

きな子「このままだとまたクウクウ先輩が大富豪になりそうっす・・・」

恋「はあ・・・ん? コレはなんですか?」

恋先輩が手に取ったのは、

「ゲームがどうかしましたか?」

恋「ゲーム!! コレが!」

!! 恋先輩ゲームも知らないのか!? どんだけ世間知ら・・・ゲフン

ゲフン、箱入り娘なんだよ。

そして外にいるかのん先輩とすみれ先輩を放ったらかしてゲームにいそしむ先輩方と1年生。

怒られても知らねえぞ? あとちゃっかり楽しそうに遊んでるメ

イの写真を取ってる四季。

そんなことをしてたらすみれ先輩が部屋に怒鳴り込んできた。

すみれ「アンタたちーっ!! よくも放ったらかしにしてくれたわ

ねえ!!」

かのん「あはは・・・」

ー 次の日 ー

俺たちは今日も練習に出る。昨日の夜の撮影で”先輩たちも案外、あまり自分たちと変わらない”のでは? と思った俺たちだったが、

早速それは打ち砕かれる事になった。

メイ「や、やっぱり差……ある!!　つてかなんで四季は立ってられるんだよ!!」

四季「私も……結構ギリギリ……」

きな子「若菜さん凄すぎるつす……」ハアハア……

まあ俺は瞬発力ならともかく持久力ならメイよりも四季の方があ
るのは知ってたから1年生の中で四季が1番体力あっても驚かない
けどな……でもへばらなかつたのには驚いた。

そして鬼塚が到着し、今日は練習風景の撮影。

きな子「ホントに撮るんすか?」

夏美「もちろんですよー!!　昨日の動画であれだけ稼げたんです
のよ?　練習となれば……「稼げた?」なつくつ!!」

?　なんか怪しい……。

千砂都「皆!!　ちよつと話があるんだけど!!」

夏美「えっ!　今は……」これからの練習をどうしていくかって……

あつ、そつちの話……

可可「では、夏休みの練習予定表を配りマス!!」

そして練習予定表が配られる。

すみれ「ホントにこんなにやるの?」

可可「当たり前デス!!　サニパ様は今年も出場するのデスよ!」

千砂都「ただ、オーバーワークにならないように渚くんと一緒に考
えて組んだよ?」

「一応相談されて作成に協力しました」

かのん「サニパさんたちに勝てないと全国に行けないから、ちよつ
と厳し目には違いないけど……」

きな子「そうつすよね……相手はサニパさんつすもんね」

四季「そんなに凄いの?」

メイ「そりや去年のラブライブの優勝者だからな!」

恋「それに、夏休み明けには学園祭もあります!!」

つてことはもう一曲覚えなきゃならないのか……

四季「heavy……」

すみれ「でも、一年生にそこまで求めるのはさすがに可愛そうじゃないの？」

恋「そうですね・・・一年生は地区大会、二年生は文化祭も、という風にした方が・・・」それはだめだと思う「かのんさん？」

かのん「完璧じゃなくてもいいと思うの。大切なのは、この8人で歌いきる事だと思うから！」

きな子「っ！ きな子は良いっすよ？」

四季「me too」

メイ「分かったよ!!」

「俺も精一杯サポートしますよ」

かのん「お願いね!!」

四季「頼りにしてる」

メイ「ナギがいてくれるだけで頑張れるぜ!!」

「ったく・・・そこまで言われちゃ、やる気だったけど尚更やるしかないだろ!!」

「はっ!!」

夏美「なるほど・・・そういう立ち位置ですね」

― 続く ―

発覚

夏休みの練習予定表が配られ練習再開。校外へとランニングに出た俺たちを、撮影のために鬼塚が撮影モードのスマホ片手に追い掛けてくる。

俺もリュックにスポーツドリリンクを人数分詰めてそれを担いで走って追いかける。

途中で一年生組が信号に引つ掛かりしばしの休憩。

メイ「せ、先輩たち速えええ!!」

きな子「ぺ、ペースが速すぎるっす・・・!!」

四季「あ、あの人たち凄い・・・」

「だらしねえぞ3人とも」

メイ「お前はそんな重いもん担いでるのに何でそんな涼しい顔してんだよ!？」

まあ、高校入る前から日課で朝走ってるから慣れかな？ それに男子と女子の体力差もあると思うし。

そしてしばらく走り続け目的地の公園に到着。1年生組は全員ベロンチにへたり込んでしまった。

夏美「ハアハア・・・! 皆・・・どうかしてるんじゃないの!？」

「お疲れ様。ドリリンク、鬼塚もいるか？」

夏美「え、遠慮無く貰いますの・・・」

そう言うのと鬼塚はボトルをひったくる様に受け取ると、ゴクゴクと音を立てて勢い良く飲み始めた。

「ほら、四季、メイ、きな子も」

きな子「あ、ありがとうっす・・・!!」

メイ「かたじけない・・・」

お前は武士か・・・？

四季「同意・・・」

千砂都「っっていうか渚くん凄いね？ そんな重いのが背負ったまま走ったのに息一つ切れてないなんて・・・」

「まあ、中学生の頃から同じくらいの距離を毎朝走ってるんで慣れで

すかね・・・？」

夏美「そ、それにしたって2年生の人たちどうなってるんですの？ あんなに走ったのに・・・全然息上がってないんですの・・・」

きな子「そうなんすよ！ だから焦ってるんすよ!!」

メイ「どんだけ鍛えてるんだ・・・追いつける気がしねえ・・・」
それを見ていた鬼塚は、

夏美（この人たちは、ここまで頑張れるものがあるんですね……）

（？ 鬼塚……？）

何か鬼塚の顔に陰りが差したような気が……。

可可「今日は無理せずここまでにしまシヨウ!! 歩いて学校に戻る
デス!!」

夏美「！ は〜い!! それでは皆さんから一言ずつ貰いますの〜
!!」

かのん「え？ 今日は練習風景だけじゃあ・・・」固いこと言わずに
!! さあ!!」 えっ、えっと・・・」

カメラを向けられたかのん先輩が緊張から少し顔が引きつってる。

・・・これはさすがに止めさせた方がいいな

「おい、鬼塚・・・」ちよつといいかしら？」すみれ先輩？」

すると、すみれ先輩はスマホで先日撮影したオニナツツチャンネル
のL i e l l a ! の動画を表示した。

すみれ「これ、私も確認したんだけど、けっこう再生数伸びてるみ
たいね？」

夏美「そ、それは良かったんですの・・・（まさか気付かれたんです
の!?!）」

すみれ「アンタ、プロデューズとかなんとか言いながら、私達を利
用してお金儲けしようとしてるんじゃないの？」

は？ どういうことだ？

確かにこういう動画サイトの投稿した動画の再生数によってはお
金が入ることは知っている。この前鬼塚自身もちゃんと言っていた。
でもそんなの微々たるものハズじゃあ・・・、

可可「何を言い出すかと思ったら、すみれみたいな卑しい考えと一

緒にするなデス！」

「鬼塚も最初に言ってたじゃないですか。動画の収益で少ないけどお金が自分のところに入るって・・・申告してましたよ？」

千砂都「そうだよ、今日だって・・・」「ちよつといいですか？」四季ちゃん？」

四季「実は私も気になって少し調べてみたら、このまま行くと将来的な収益は・・・」

そして四季はみんなに画面を見せる。

恋「こんなにですか!?!」

「全然少しでも少なくも無え!!」

可可「知らなかったデス!!」

千砂都「私たちに内緒で!!」

全員鬼塚を睨む。コイツ・・・っ!! 先輩たちだけじゃ飽き足らず・・・、少しでも早く先輩たちに追いつこうと必死に頑張ってるきなりや、四季やメイを食い物にする気だったのか!?!

すみれ「ちゃんと説明してもらえる? ショウビジネス的にはあり得ない話なんだけど」

オレの心に怒りが湧いてくる。3人の努力を馬鹿にするような所業、断じて許すことはできない。

さっきの表情が気になるが……

すると鬼塚は身の危険を察知して逃げ出した。

「このヤロウっ!!」

俺が追いかけてようとしたら、ヤバい（鬼塚の身が）と思ったのかメイと四季に止められた。

くそ・・・!!

その後俺たちは学校に戻り、鬼塚のことを話していた。

可可「さすが・・・すみれはお金に関しては勘が鋭いデスね」

すみれ「言い方!!」

千砂都「かのんちゃんはどう思う?」

かのん「私は・・・少し、様子を見てみたい」

すみれ「ええ・・・?」

かのん「すみれちゃんの言ってることが間違ってるって言ってるわけじゃあ無いんだよ？ でも、夏美ちゃんには何かあるような気がするんだ。何か事情が」

ハア・・・ホントお人好しだな。この人・・・。

かのん「渚くんもごめんね？ でも、判断を下すのは少し待ってくれない？」

「分かりました・・・」

そして帰り道の2年生との分かれ道・・・

かのん「じゃあまた明日ね!! 夏美ちゃんに会ったら気にしてないからって言っておいて？」

きな子「ラジャーです!!」

メイ「メツセージも飛ばしておいた」

千砂都「それじゃ!!」

四季「お疲れ様です!」

きな子「夏美ちゃん・・・どこに行っちゃったんすかね？ 既読にはなるんすけど・・・」

メイ「どう思う？」

四季「多分、すみれ先輩の言ってたことが真実。けど、かのん先輩の言う通り、夏美ちゃんには何か事情があると思う。あそこまでお金に固執する何かがある」

きな子「きな子も、夏美ちゃんのことには嫌いじゃないっすし。きな子がスクールアイドルやろうって覚悟を決められたのも、夏美ちゃんが背中を押してくれたおかげなんすよね・・・」

えっ？ そうなのか・・・。でも、

「確かに、さつき鬼塚の自虐じみた微笑を浮かべてたんだよな……。それが気になるけど、それでもよほどの事情が無きや許さないけどな俺は・・・」

きな子「渚くん・・・」

夏美「そこのアナタたち・・・」

!! 鬼塚の声!

「どこだ!?!」

夏美「ここですよ」

メイ「だからどこだ……ってうわあっ!？」

鬼塚はすぐその階段の陰に隠れていた。

メイ「テメエッツ!!」

夏美「まあまあ……」

そして、場所をすぐ近くの公園に移し……

夏美「では、本当に怒ってるわけではないんですね……」

きな子「はいっす!!」

メイ「先輩たち、良ければ明日も来てくれって言ってたぞ?」

夏美「思ってたよりチョロかったんですね:「チョロ?」「いえいえ、では明日からも普段通りに!!」

コイツ……。まだ懲りねえのか

さっきの引っ掛かりが気の所為に思えてきた……。

メイ「まだ、撮影すんのか?」

夏美「もちろん! それが私の仕事ですので! ……ん? 何かあるんですの?」

メイ「いや、事実だから仕方無えんだけどさ:もし、日常だけじゃなくて、歌やダンスもファンが見たら、1年生と2年生に実力に差があるってはつきり分かっちゃうよなってさ……」

きな子「きつと……笑われるっす」

四季「間違いない」

まあ、たとえば見栄えが不格好だったとしても、真剣にやってる三人を笑うやつがいたら、俺がソイツをぶん殴るけどな。でも恐らくコイツらはそんなことは望まないだろうし……

「じゃあどうにかして実力を底上げしないとな……どうするか」

2年生と一緒に練習していても、伸び幅は恐らくそんなに変わらな
いと思う。一気に追いつくのは無理だけど、少しでも差を縮められる
様な練習か……。

夏美「!! 思いつきましたの……私達は全員1年生。皆さんに、

ちよつとご相談があるんですの」ニヤツ

ー 次の日 ー

部室で、1年生は2年生に夏休み中は別行動を取りたいと申し出ていた。

発案者がアイツであることが不安なんだが・・・、

恋「何か、気に触る事をしましたか？」

かのん「言つて！　すぐに直すから!!」

きな子「そ、そうじゃないんす!!　ただ、先輩と一緒にだと、どうしてもきな子たち迷惑掛けてるなって・・・」

メイ「だから、1年生だけで自分やお互いのことを見つめ直してみたいって思つたんだ!!」

千砂都「分かりました。部長として許可します」

かのん「ちーちゃん!？」

きな子「千砂都先輩!!」

千砂都「私もね、似たようなことがあつたから分かるんだ・・・」
かのん「・・・分かつた!　ちーちゃんの判断を信じる!」

千砂都「ありがとうかのんちゃん。：私達も精一杯頑張るから、夏休み明けに4人とも成長した姿を見せてね?」

きな子・四季・メイ・渚「「はい!!」「」」

夏美「上手く行きましたの。分断成功・・・これで夏美の思うがまま。マニーですの・・・マニーですのーっ!!」

ー 続く ー

DEKKAI DOW!

夏休みの初日、俺たち1年生は科学室に集まっていた。

きな子「グループ名つすか？」

夏美「そうですね。せつかくLielia!の妹分として始動するんですの！ 新たなグループ名が必要なんですの。例えば……」

鬼塚がホワイトボードにマーカーを走らせる。

”全力#”

メイ「全力シャープ……？」

夏美「あつ、後は……例えば」

”KIRARA!!”

きな子「なんか雑誌みたいつす……」

四季「そもそも私達はLielia!の妹分じゃない」

鬼塚「そ、それは分かってますの……どちらかといえば、ユニット名ですの!!」

うわく取ってつけたような言い訳。コイツ本気でシバいたらかな……？ でもかのん先輩に待ってくれて言われてるしな……。

でも、俺も鬼塚は何かを隠してるような気もするんだよな。

あの時偶然見た、眩しいものを見たような……、自分は諦めたような笑い。何なのだろう……。

きな子「夏美ちゃん!!」

きな子が机を叩いて勢いよく立ち上がる。

きな子「きな子たちが先輩と別行動しようと思ったのは、先輩たちに早く追いつきたかったからつす!! 優勝を目指す、Lielia!の力になりたかったからつす!!」

夏美「はいはい。分かってますの」

メイ「Lielia!の力になれないなら、スクールアイドルやるつもりは無い。少なくともアタシはな」

四季「mee too」

「力になれないなら、俺もマネージャーを辞める」

夏美「わ、分かってますの……あくまで一案。一案ですの……」

そう言って鬼塚はいったん部屋の外へ出ていった。目に見えて焦ってんじやねえかよ……。やっぱなんか企んでたな……。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

夏美「思ったより強情ですの……引き離せば想いのままだと思いましたがの……、ですが夏美は諦めませんの!!」

そして、また鬼塚は部屋に戻ってきた。

夏美「では、気を取り直して今日は皆さんの日常を……? あの、その旅行バッグなんですか?」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そしてやってきたのは日本最北の地、北海道!! 俺たちは今富良野にいる。ここからきな子の実家に向かい1年生合宿を行う。何でもきな子の実家はペンションを経営しているらしく泊まるには最適らしい……。

ー ラベンダー畑 ー

きな子「ようこそ!! きな子の故郷へ!!」

メイ「しっかしスゲエとこだな……」

「ん〜っ!! のどかで……空気も美味い!!」

きな子「気に入ってもらえて嬉しいっす!! ではまず、きな子の家までランニングっ!!」

夏美「待つですよ!! 何故こんなことに……」

「なんだ、覚えてないのか? きな子の家で集中合宿するって決めただろ?」

今更何を言ってるんだか……あれ、さっきから四季が大人しいな。

四季「クビが……戻らない。あのバスのせい……」

「ああ、お前意外と寝相悪いしな」

俺がケラケラ笑うと、四季が不貞腐れて「うるさい……」って、全くカワイイんだから」

四季「ふえっ!?!/!/」

「ん？ どうした？」

メイ「ナギ、お前……」

きな子「思いつきり口に出てたっすよ？」

は？ ヤベエ……やっちゃったか

「因みにどこから？」

メイ「全くカワイイんだから」ってところから

きな子「見るっす!! 四季ちゃん壊れたロボットみたいになって

るっすよ!!」

「四季、悪かったって……次から気をつけるから」

四季「気をつけてよ……／＼／＼」

夏美「……そう言いつつ満更でもなさそうですの」

メイ「おい、止め刺すなよ……」

そして四季は何と、寝違えた自分の頭を掴み、力づくで元に戻す。

今”ゴキツ”って音したけど痛くないの？ あ、表情を見るに痛く

はなさそうだ。……アナタはサイボーグかなにかですか？

夏美「そんなことより、なんで私まで……」

きな子「撮影するって言ったからっすよ？」

メイ「プロデュースのためならっす行って密着して記録するって

言ってたぞ？」

「確かに言ってたぞ」

すると四季はスマホを取り出しボイスレコーダーを再生。ハツキ

リと鬼塚が着いていくと言っていた。

鬼塚「アレは言葉のあやというか、そこまでというか……」立て替

えてた交通費」づっ!!」

そして四季は鬼塚から交通費を徴収。鬼塚は泣いていた。

夏美「マニーが……命の次に大切なマニーがあ……っ!!」

四季「ここからきな子ちゃんの実家までランニング」

そして俺たちは協力して鬼塚の膝と肘、腰の関節に四季開発の装置

を装着させた。

夏美「な、なんですのコレは!？」

四季「ランニング：マシーン……ポチツとな」

四季がスイッチを押すと、関節部に装着された装置が無理やり鬼塚の関節を動かし、鬼塚は走り出した。

夏美「ですのーっ?!?!」

「きな子、家ってどっち?」

きな子「あっちつす」

思いつきり逆方向じゃねえか・・・

四季「リバアアス。ポチツと」

そしたら鬼塚は戻ってきてそのまま走っていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そして、きな子の実家に到着した俺たち。きな子の家族にお世話になる挨拶を済ませ、少しばかり休憩。きな子は家で飼っているヤギに久しぶりに会いに行き、メイ四季はへばっている鬼塚を介抱していた。

鬼塚「ぎ、ギブですの・・・」パタリ

メイ「大丈夫か?」

夏美「大丈夫なわけ無いですの・・・いったいどれだけ練習すれば気が済むんですの・・・?」

メイ「仕方ないだろ? L i e l l a ! の力になるって決めたんだから」

夏美「だからって・・・ベロっ ひいつ!」

メツチャヤギになめられとるやん・・・。

「ほら、元気だせって言われてるんじゃないか?」

きな子「渚くん何でわかつたつすか!」

「え? ホントにそう言ったの?」

メイ「分かるのかよ・・・」もちろんつす!」

きな子「さあ、着替えたら練習つすよ!!」

そして3人プラス鬼塚は練習及び撮影の為にランニングに出掛ける。俺は飲み物をリュックに入れて担いで皆の後を追いかけて走る。

メイ「いい景色だな・・・」

「なあ? 走ってて楽しいよな」

きな子「気に入ってもらえて嬉しいっす!!」

そして近くの神社で体幹トレーニング。3人にはばかりやらせてもアレなので俺も少しやって見る。あつ、ダンス練習はやってないぞ？

そしてきな子の家に戻り、

◆◆◆◆◆

きな子母「お帰りなさーい!!」

食卓には、北海道の牛乳や海の幸などをふんだんに使った料理が並べられていた。

きな子母「わざわざ遠くからありがとう」

メイ「美味そー!!」

「すみませんこんなご馳走を・・・」

きな子母「良いのよ!! きな子ちゃんの友達ですもの。遠慮なく食べてね?」

「それにしても、ペンション経営してるって・・・本当に合宿にピッタリだったな・・・」

四季「あれ? 夏美ちゃんは?」

「部屋で動画編集してるってよ」

きな子「あつ、じゃあきな子呼んで来るっす!!」

.....

夏美「.....やっぱりスムーズにネタでは全然稼げませんの。

じゃあ、今日の練習動画を上手く加工して、」カタカタカタ

夏美はパソコンを操作して動画のサムネを変更する。タイトルは.....

きな子「L i e l l a ! 解散・・・なっーっ!」どうしたんすか?

もうご飯つすよ?」

夏美「すっかり編集に夢中になってしまいましたの.....。今行きます(あ、危なかったですの.....天然な所があるきな子さんで助かったですの)」

きな子「なに見てたんすか?」

夏美「えっと、コレですの・・・」

そう言っただけで見たのは、去年のラブライブ東京大会の先輩たち5人のステージだった。

きな子「あつ、これ!! 先輩たちやっぱり凄いつすよね!!」

夏美「えっ、ま、まあそうですの」

きな子「きな子たち、コレを越えるのが夢なんす!!」

夏美「夢? それが?」

きな子「夏美ちゃんの夢は何なんすか? CEOなんすよね? 何を目標にしてるんすか?」

夏美「・・・何も無いですの。「えっ?」お金を稼いでるのも、歳を取ってから苦労しないためですの」

きな子「そうなんすか・・・?」

夏美「今行きますの。先戻っててください。」

きな子「うん・・・」

そしてきな子は戻っていった。それを、俺は隠れて聞いていたのだった。

「・・・アイツ、「夢」ってワードで言い淀んだな」

あの時の鬼塚の何かを諦めた様な笑い、それは…自分の夢を諦めたということなのか?

― 続く ―

”夢” 鬼塚夏美の心の内

俺たちが合宿のために北海道の地に降り立った翌日、結ヶ丘のスクールアイドル部室では、昨日鬼塚によって投稿されたL i e l l a！1年生の合宿の動画を見ているかのんたち2年生の姿があった。

ーかのん side ー

かのん「うわ、凄い!! こんなに再生されてる!!」

再生回数には、30, 127回再生と書かれていた。たった一晩でだよ!?

可可「やっぱり私達の後輩は凄いんデス!! こんなに人気があるんデスから!!」

恋「コメントも好意的なものばかり・・・やっぱり頑張ってる人は応援されるんですよ!!」

可可「かのん、だから言ったのデス! 恥ずかしがってないで、積極的に動画を投稿した方ガ「うわゝ3人とも凄い」..つて聞いてないデス」

そんな中、ちーちゃんはフムと、何やら考えていた。

千砂都「1年生、これなら自信がつくかもね」

すみれ「でも、いい事ばかりとは限らないわよ? 逆に自信が付きすぎて・・・」

◆◆◆◆◆

メイ「アンタたちさあ? そこ立たないでくれる?」

四季「今日からあなた達はサポートメンバー」

きな子「っす!!」

ーーーーー

すみれ「なんてことに!!」

可可「そんなひん曲がった考えを持つてるのはすみれダケデス... 「突っ込みが雑!!」

クウクウちゃん、すみれちゃんには今だに辛辣なんだよね...。

すみれ「そんなことより、もつと気になるのはあの夏美つて子が一緒に行った事よ! アイツが協力するなんて、何か企んでるとしか思

えないわ!!」

恋「疑いたくは無いですが、私も少し気になりますね「大丈夫だよ」かのんさん?」

かのん「あの子達には渚くんが付いてるんだから。何があっても守ってくれるはずだよ」

すみれ「・・・信頼してるのね。渚のこと」

可可「確かに、ナギサはマネジメント力が高いと思います。メンバーにも注意深く気を配ってマスし、ランニングの際のドリンクも、誰が言った訳でもないのに自分で考えてやってくれまシタ」

かのん「うーんと、それもただけど・・・何ていうか、こう・・・感じるものがあるんだ」

恋「かのんさん・・・」

さつき言つてたマネジメントだつて：きつと、色々とネットを漁つて調べてくれたんだろうな・・・。メイちゃんと四季ちゃんは幼馴染みだから別としても、出会う間もないはずのきな子ちゃんも信頼してるし・・・。

そもその話、校内では渚くんはバスケの天才っていう評価を受けてるし、その他のスポーツでも勉強でもそつなくこなしてて優秀って評判だけど・・・それが本当の姿なのかな?

なんか私、違うような気がするんだよね・・・。根拠は無いけど・・・今度四季ちゃんとメイちゃんに聞いてみようかな?

千砂都「・・・」

かのん「ちーちゃんどうしたの?」

千砂都「いや、1年生だけでここまでできるんだつたら、自信を付けるためにちよつとハードル上げちゃおうかな? ってね」

ー かのん side out ー

◆◆◆◆◆

夏美(小学生)「私の夢は、オリンピックで金メダルを取ることです!」

だが、運動会では・・・

生徒「夏美ちゃんまたビリだね・・・」

次の夢を探しても・・・

夏美（小学生）「私の夢は、ノーベル賞を取れるような科学者になること！」

だが、テストではいつも・・・

夏美（小学生）（算数・・・15点・・・）

また次の夢を探しても・・・

夏美（中学生）「私の夢は、モデルさんになって世界を駆け回ること！」

だが、身体測定では・・・

夏美（中学生）（全然身長が伸びないんですの・・・）

◆◆◆

夏美「ハッ!?・・・あの頃の、嫌な夢見ましたの・・・ん?」
なんか外から声が聞こえるんですの。

俺たちは、先輩たちからビデオ通話が掛かってきたため、1年生で集まって皆で先輩たちと話していた。

メイ「ええ!! 先輩たちと同じステップ!？」

千砂都『うん。後で動画送るよ』

きな子「でも・・・」

千砂都『本当はプレッシャーになるから、帰ってきてから相談しようと思ってただけど、昨日の動画見たら大丈夫だと思ったから』

メイ「でも!!」

千砂都『勿論、今のままじゃあ難しいと思うよ? けど、夏休みの練習次第で3人ならできると思ったから』

恋『そうですね、全員が同じレベルに達すれば、全員の自信になりますし、ラブライブ!への弾みになると思います!』

四季「確かに、目標があつたほうが計画はたてやすい」
メイ「まあ、ラブライブ！で優勝を目指してるんだもんな・・・」
きな子「分かつたつす！ やれるだけやってみるつす！」

そして通話を終了すると、かのんちゃんのスマホに着信が。

かのん「ん？ はい、なに？ お父さん？ ・・・えっ!? 忘れ物した!？」

可可・千砂都・すみれ・恋「「「・・・?」」」



きな子「動画が好評だったのは凄く嬉しいつすけど・・・ハードル上がっちゃつたつすね・・・」

メイ「千砂都先輩・・・いきなりすぎるんだよ」

「じゃあ諦めるのか？」

四季「ナギサ・・・」

「先輩たちはお前ならならできると信じて任せてくれたんだぞ？ なのに諦めんのか？」

四季「でも、まだ練習始めたばかりなのに・・・」

夏美「オニナツツ〜！ あなたのココロのオニサブリ〜！ 鬼塚夏美ですの〜っ!! 今日も引き続き、Lie!lia!の練習に密着しちゃいますのー!!」

きな子「ええっ!? 練習はまだつすよ!!」

メイ「サボってるみたいに見えんだろ!!」

夏美「実際、サボってますの」

? 挑発にははわざとらし過ぎる。もしかして・・・

きな子「いや、コレは!!」

メイ「色々あつたんだよ!! ナギもなんか言ってくれよ!!」

「今回は俺が言うことは無いよ。そのまま続けてくれ」

鬼塚と3人はビックリした顔をしたが、鬼塚はそのまま言葉を続

け・・・

夏美「・・・先輩方との会話を聞いてましたの」

四季「だったら・・・」

夏美「越えるのが、夢なんでしょ!？」

きな子・四季・メイ「「っ!!」」

夏美「先輩たちのステージを越える、それが皆さんの夢だったはず・・・だったら、責任は持つべきですよ!!」

メイ「それはっ!!」

3人の顔に狼狽の色が。痛いところを突かれちゃったからな。

夏美「諦めるくらいなら・・・夢なんて語って欲しくない!! 動画撮影していて思いましたの。皆さんの夢は、決して達成不可能じゃない。頑張り次第で十分手が届きますの」

きな子「ほ、本当に?」

夏美「ええ。それはとても素晴らしいことですの・・・頑張れば手が届くかもしれない、そういう夢があると言うのは・・・!!」

鬼塚「・・・この口調・・・コイツ、恐らく過去に夢を抱きながらも、叶わずに思い知らされた口なんだな。「諦めるくらいなら夢なんて語って欲しくない。」それは、自分のようになって欲しくないという意味なのでは無いだろうか?」

だが、夏美自身も心の奥底では諦めきれず、その思いの差が跳ね返りとして金への執着という形になったのだろう。

だが、今回は鬼塚の言ってることが正しい。

「で?・・・ここまで言われてやらないのか? 俺も、皆ならできると思うぞ?」

3人は顔を見合わせ、覚悟を決めた顔をして並び立つ。いい顔になったじゃんか。

― 練習前 ―

メイ「なあナギ? さっきなんで鬼塚に言ってくれなかったんだ?」

「知ってるだろ? 俺が諦めるって嫌いだって・・・、鬼塚と一緒にだよ。ま、アイツは挫折して諦めちゃった側みただけだな」

きな子「？」

四季（ナギサ・・・私達が諦めかけてた事見抜いてたんだ）

そして今日の練習を始める。

まずは昨日と同様にロードワーク。しかし今日は距離を伸ばして展望台まで行く。そして展望台に着き、体幹トレーニングを行う。

が、鬼塚が撮影を俺に任せて自分もやり始めた。へえ、あんないい笑顔するんだ。

そして練習メニューを消化し、きな子の家まで戻るときも、走りながら水の入ったボトルを4人で回し飲みしていた。鬼塚もまるでメソバーであるかのような一体感が産まれている。

これは決まりだな。鬼塚を・・・Liella!に誘う!!

ー 続く ー

9人のLiella!

1年生の北海道合宿の2日目の夜、夕飯を食べた俺たちは各自部屋にいた。のだが……

「! 鬼塚……」

鬼塚がペンションを出ていったので俺も外に向かう。きな子の方の方に聞いたら、少し夜風にあたってくると言っていたらしい。なにはともあれチャンスだ。

◆◆◆◆◆

夏美「……スクールアイドル……か」

「鬼塚!」

俺が背後から声をかけると、いるとは思わなかったのかビクツとする鬼塚。しかし俺だと分かるとホツとした表情になり、

夏美「ビククリさせないでほしいですの……悪い悪い」どうしたんですの?」

「単刀直入に言う。鬼塚、Liella!に入れ」

一瞬の静寂が支配する。しかし何を言われたか理解した鬼塚は「ハア?」と訳が分からなそうな顔を見ると、言葉を発した。

夏美「なんの脈絡もなく何なんですの? 私にそんな気は……昨日の夜のきな子との会話を聞いてたんだ。お前には夢が無いって……!」

「それに今日の朝の皆への言葉で確信した。お前にはかつて夢があったけど、どれも叶わず思い知らされたんだろ? その結果、夢なんて持っても叶うはずない、そんなものだと思うようになった。そしてその心の跳ね返りが金への執着として現れた。違うか?」

鬼塚は愕然とした顔をしていた。口からは「な、何で……」と漏れている。その時点で俺の推理は当たっているような物だった。しかし、鬼塚は口を開き……

鬼塚「そのとおりですの……でもそれとLiella!に入るのと何の関係があるんですの? 慰めなら余計なお世話ですの!!」

「慰めなんかじゃない。お前を見てると、見てらんねえんだよ」

鬼塚「アナタに何が分かるんですの!?! 才能にも恵まれて、勉強もスポーツもそれ以外のこともこなせるクセに、私のことなんか分かるはず無いですの!!!」

「フツ・・・才能、か。本当にそんなものが俺にあるならな」

鬼塚は意味が分からないといった顔をしていた。言葉の意味が分からず困惑しているというべきだろう。

「俺の過去、知らないだろ? 話してやるよ」

そして鬼塚に座るように促す。鬼塚が座つたので俺も隣に腰を下ろす。

「これから話すのは全て実話だ。嘘だと思うなら四季とメイに聞くといい。あの2人は知ってるから」

そして、俺は過去を語り始める。



10年前、俺が幼稚園の時から、俺は頭も悪ければ運動だって全然できなかった。運動会の徒競走はいつもビリ。チームの足を引っ張ることだって珍しくなかった。

でも・・・バスケットだけは好きで、毎日家のリングを使って練習してた。けど、そのバスケットに至っても俺に才能なんてものは欠片も無かった。ドリブルもマトモにできない、パスミスばかり。シュートは外す。いい加減友達も入れてくれなくなって、一人でやってたんだ。

周りの奴らも、きつとバカにしたんだろうな。でも、四季とメイは普通に接してくれてたからどれだけ助けられていたか分からない。

小学校に上がってある日、俺は四季とメイにクラスメイトの前で頭を下げてまでメイが得意な運動を、四季が得意な算数とか理系の勉強を教えてくれて頼み込んだ。

当然クラスメイトからはバカにされた。「お前がいくらやつても無駄だ」ってな。

でも、必死に努力して、小学6年生になってようやく周りの奴らに言われない程度には成長できた。幸い国語とか文系の科目は得意だったからそこは自力でなんとかできたけど。

だからこそ、俺は2人に感謝してるし他の誰よりも尊敬してる。2人に言ったらそんな特別なことはしてないって謙遜するだろうけど、俺にとっては2人が幼馴染みだったことは物凄い幸運だったんだ。

そしてバスケの方も、バスケ部の補欠程度にはできるようになっていた。ここまで来るのに、俺は6年の歳月を要した。

そして中学生になり、バスケ部に入ろうかと思っただけど、俺は入らなかった。練習に時間を取られると、俺は勉強についていけなくなると思っただけからだ。

それから勉強は四季に、運動はメイにたっぷり指導してもらい、中学を卒業する少し前に俺は今の自分を試すため、バスケのストリーとの1vs1の勝負をする大会に出たんだ。結果は……

なんと初出場で優勝という成績を修めた。あのときは応援に来てくれた2人も喜んでくれたし、俺も凄く嬉しかった。高校も、2人と同じ結ケ丘に受かってたし、俺の小1から続けてきた努力がようやく実を結んだのは、中学の卒業間近になってからだった。

「で、後はお前の知る通りだ」

「そ、そんな……」

「俺は9年間、血の滲む様な努力をし続けて今の評価を手にしたんだ。お前は夢があったとき、どれだけそれに向かって努力した？」

夏美「練習……してなかったですの」

鬼塚は俯いて答える。

「努力なんて、1日やそこらで実を結ぶものじゃないし、そもそも頑張らなければ結果なんてついてこない。さっき、四季とメイは俺の師匠だみたいな話しただろ？ あの2人、バスケは俺の練習相手ついでにちよつと遊ぶ程度にしかやってなかったのに、2人で連携すれば今の俺でも攻めあぐねるんだぞ？ それ考えたら、どっちのほうが才能があるのか分かるだろ？」

夏美「それは、どう考えても2人の方が才能がありますの……」
「だからこそ、お前を放ってはおけなかったんだ。確かに、夢を追いか

けたら途中で壁にぶつかることなんか当たり前にあるだろうさ。でも、Lielia!はグループだ。1人でやってるわけじゃない。仲間がいる。壁にぶち当たったら、仲間と一緒に越えればいい。何なら壁をブチ壊せばいい!! これだけ何もできなかった俺が言うんだ。お前ならできる!!」

夏美「っ!!」

「お前ならできる」その言葉を小さくつぶやき何度も繰り返す鬼塚。そして、

鬼塚「本当に・・・そう思うんですの?」

「ああ!!」

鬼塚「足手まといになりませんか?」

「必死に頑張ってる奴をそんな風に言うやつは、Lielia!には1人もいないよ。だから、皆と一緒に奇跡を起こしてみろよ! 夢を叶えて見ろよ!! この間の、皆を金儲けに利用しようとしたときのお前と、皆と触れて、純粋な願いを前にした今のお前の気持ちが変わり始めている事と、お前がまだ、夢を見たいと思いはじめている事くらい、見てりや分かるんだよ!!」

鬼塚は涙をボロボロこぼしていた。もう後ひと押しだろう。だが、「で?」そこでいつまで隠れてるつもりですか?」

鬼塚がぎよつとした表情で振り返ると、そこにはかのん先輩が立っていた。

かのん「き、気づいてたの?」

「まあ、なんか気配はしたんで。盗み聞きですか?」

かのん「ご、ゴメン・・・」

まあいつか。

「で? 何でここに?」

かのん「お父さんが今北海道にいてね。忘れ物届けに来たついでに差し入れ。・・・ねえ渚くん、さっきの話・・・本当なの?」

「本当です・・・」

かのん「やっぱりか?」やっぱり?」うん。なんていうか、本当に何となくだけど・・・そうじゃないかって気がしてたんだよね」

なんだ、かのん先輩は気付いてたのか。するとかのん先輩は、かのん「夏美ちゃん！ 私達は大歓迎だよ？」

「どうすんだ？」

鬼塚は、ギョツと拳を握りしめ……今の自分の正直な想いを口にする。

夏美「私は：：入りたい！ L i e l l a ! で、皆と一緒に頑張ってみたいですよ!!」

変わった。鬼塚はやつと、長く閉ざされていた自身の“夢”という扉を開け、一步を踏み出すことができた。

俺とかのんの先輩の答えは、勿論!!

かのん・渚「夏美ちゃん（鬼塚）！ ようこそ!! L i e l l a ! へ!!」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そして日が経ち、夏休みが終わり今日は結ヶ丘の学園祭当日。

そこには、今回の曲の衣装に身を包んだ夏美たち9人の姿があった。

かのん「1！」

可可「2！」

すみれ「3！」

千砂都「4！」

恋「5！」

きな子「6！」

メイ「7！」

四季「8！」

夏美「9！」

だが、皆俺の方を見る。え？ 何？

かのん「ステージには立たなくても、渚くんもL i e l l a ! のメンバーだよ？」

「まったく、そうですか……」

俺は、輪に加わり……

「10!!」

かのん「もつともつと沢山の人に、歌を届けよう!!」

そして、学園祭ライブは大成功で終わった。

ー ライブ後 ー

夏美「ナギくん!!」ギユツ!

なんと急に夏美が俺の腕に抱き着いてきた。

「へっ!?!」

L i e l l a ! 『!?!』

すると、夏美は四季をチラツと一瞥した後メイに視線を向け……

四季(?)

夏美「メイちゃん? 負けないのですので!!」

メイ「えっ、えええええっ!!!」

四季(っ!?! 気付かれた……?)

メイ「ヤロウ上等だ!! アタシだって負けねえからな!!」

四季(ナギサ……: 我慢しないと、ダメなのに……: ツ)

ハア……。また、いちだんと賑やかになりそうだな。

「とうか何の話?」

やはり何も分かっていない渚だった。

ー 続く ー

第1部 3章：2学期 新星Lielia!の日常
林間学校

Lielia!が9人となり学園祭ライブを行った1週間後、今日は1年生の林間学校で山間のキャンプ場に行く。

そこで飯盒炊爨で協力してカレーを作って食べ、少し経ったら帰るとのことだ。

事前に班を決める際に一班四・五人と言われており、俺たちの班のメンバーは……

◆◆◆◆◆

ー キャンプ場 ー

生徒全員、先生やキャンプ場管理者の諸注意を聞き、それぞれの班に分かれて作業開始。

俺たちの班のメンバーはというと……

「では、これよりカレー作りを始めます。班長の日宮です。宜しくお願いたします……」

メイ・四季・きな子・夏美 「「は〜い!!」」

いつものLielia!1年生組の班だった。俺は皆から班長やってくれと半ば無理やり押し付けられていた。

大丈夫かな……?

きな子「日宮さんに任せておけば安心できるっす!! 大丈夫っすよ!!」

う〜む……きな子にまで心を読まれた。俺の平穩が脅かされてる気がする……。

「では、まず道具を持ってくるので夏美手伝ってくれ。他のメンバーは食材の準備を」

4人『ラジャー!!』

そして管理小屋で飯盒や鍋、包丁等の調理器具を貰いみんなのもとに戻る俺と夏美。他の班の皆も動き出している。

夏美「ナギくんっ!」ピタッ

夏美が俺の肩に自分の肩を寄せてくる。嬉しいような困ったよ
うな……。

そして皆のもとに行くとき既に用意は済んでおり、持ってきた調理器具を使って調理を始める。俺は飯盒を使って米を炊いていた。他のメンバーはカレーに入れる野菜などの仕込みをしている。

飯盒を火に掛けたので俺は皆の様子を見に行く。

「メイ、やっぱり料理上手いよな」

メイ「サンキュ」

四季の方へ目をやると、

四季「……」

何故か不貞腐れて切り方が雑になっていた。

「四季？　なんか雑だな」

すると四季の手が止まり、

四季「私を舐めないでよ!!」

「な、なんだそのテンション!?!」

メイ「四季?!」

四季「メイもちよつとナギサに褒められたからって、勝ち誇らない
でよ!!」

メイ「な、なんでそうなるんだ!?!」

四季「にんじんの早切りで勝負!!」

すると四季はトントントンにんじんを切つていった。

メイ「あ、アタシもやらないとダメか?」

「お、俺に言われても……」

四季「っ!……」

そして1時間後、カレーが完成し皆で食べ始める。

「旨めーっ!!」

きな子「美味しいっす!!」

夏美「飯盒炊爨でこんな美味しいカレー食べたの初めてですのっ
っ」

四季（……）

ん？ 今四季が俺の方をチラツと見たような……。そして四季の様子がおかしいことは当然メイも気付いていた。

◆◆◆◆◆

カレーを食べ終わり、皆で皿洗いをしてる時、

「おい四季!! 指から血が出てるぞ!!」

四季「えっ!? ああ……。気づかなかった……。」

「気付かなかつたじゃねえよ!! バイ菌入ったらどうすんだ!!」 「自分でできるよ!!」

俺が無理やり傷口を水で流させると、四季は振り払い自分で流し始める。

きな子「誰か絆創膏持つてるっすか?」 「大丈夫。私も持つてきてるから」

メイ「(? やっぱりおかしい……。) ちよつと見てくる」

ー メイ side ー

四季「全く……。」

すると傷口を見つめた四季は、自身の指の傷口にキスした。すると視線を感じたのか四季は振り返ると、

メイ「……。」

四季「っ!! ど、どうしたのメイ?」

メイ「四季、まさか……。まさか、ナギのこと。っ!!」 っ! 待つてくれ四季!!」

四季（バレた……。っ! バレた……。っ!! バレた……。っ!!!）

そしてしばらく走った四季は雑木林の中の少し開けた場所に出る。追い掛けてきたメイもやっと追いついて四季の手を握って捕まえる。

四季「……。」

メイ「どういうことだ四季っ!! 四季も……。ナギのこと、好きなのか? なら、なんであんなにアタシに協力してくれたんだ!! アタシに譲るつもりだったのか? 四季……。っ!!」 “どういうことだっ

つってんだよ!! 若菜四季!!」

四季「っ!! メ、メイ・・・?」

四季は分かりやすく動揺していた。私が四季に対してこんなに感情剥き出しで怒鳴ることなんかなかなか無いからな。

メイ「どういうことだいったい!! さっさと言わねえと友達辞めるぞ!!」

すると四季は狼狽え、涙をこぼしながら口を開く。

四季「だって、だってそうしないと・・・3人でいられなくなる! 「なんで3人でいられなくなるんだ!!」だって、男の子を取り合ったりしたら、揉めるでしょ? 友情とか、木っ端微塵になってもおかしくないし・・・メイはナギサが好きで、ナギサもメイが好きで、二人が付き合えば、凄く凄く丸く収まるでしょ? そうすれば、ずっと3人でいられる・・・」

メイ「バカじゃないのか? 丸く収まるからってそんな・・・若菜四季がこんなにバカだとは思わなかった!!」

四季は一瞬怯むが、堰を切ったように言葉は溢れ出てくる。それに、アタシは一つ一つ返していく。

四季「私は、ナギサや、メイがいなかったら多分ずっとひとりだった: だから今のこの場所を絶対に失いたく無かった・・・他にどうすれば良いか分からなかったの!」

メイ「知るかそんなもん!! そんなに不安だったんなら言えよ!! 言わなきゃそんなもん分かるわけ無いだろ!!」

四季「それは・・・っ!!」

メイ「四季はさ、必死にアタシたち3人での関係を守ろうとしてたんだろ? でも、それでもどうしようもないくらいに、ナギサのことが好きになったんだろ!」

四季「っ!!」

メイ「大丈夫だ四季!! アタシは、いつまでも若菜四季の友達でいてやる・・・いや、”いてやる”なんておかしい。アタシは、ずっと若菜四季の友達でいたいよ! お願いだからいさせてくれよ!!」

四季「っ!! ... 私は、ずっと・・・そんなふうに言っただけじゃあ

たんだ。でも、もう今さらだよね。もう私は二人の邪魔者。だから私はもう……」

メイ「なんでそういう話になるんだよ……」

四季「だって、もう気不味くなるのは避けられないし……」

メイ「さつき四季言つたよな？ アタシとナギが付き合えば丸く収まるって、けど、四季とナギが付き合ってたって、それも丸く収まったんじゃないのか？」

四季「でも……私は最初は、自分がナギサのこと好きだって気づいてなかったし……あ、いや今も別に「どうしてここまで来て自分に嘘つこうとするんだ！」嘘なんて別に……」

メイ「四季、自分の気持ちに素直になつてくれよ。アタシがスクールアイドルに憧れてたのになれなかったときも、四季はアタシを見捨てないで、それどころかアタシのためにつて動いてくれた。そんなアタシが、四季のことを見捨てるわけないだろ？」

四季の顔がハツとした表情に変わる。畳み掛けるなら今だな。

メイ「第一、米女メイと若菜四季の関係は……男を取り合つたくらいで壊れねえよ。それにさ、仮にアタシがナギと付き合えたとしても、大事な友達の悲しみの上に成り立つ幸せなんて、アタシが喜べる訳ないだろ……。だから、自分が悲しさを被って関係守ろうとか、馬鹿なこと考えんなよ……」

四季「……良いの？ 本当に……ナギサに好きって言つて……メイと同じ土俵に上がっても、良いの？」

アタシは笑顔を浮かべ、

メイ「良いに決まってるだろっ!!」

四季「……分かった。でも、どっちが勝っても恨みっこなしだからね？ メイにも、夏美ちゃんにも絶対に負けない!!」

メイ「アタシだって負けてたまるかよ!!」

そして、アタシたちは二人揃って皆のもとに戻る。

↓メイ side out ↓

洗い物を終えた俺たちは結局戻ってこなかった二人を探していた。

「つたく、どこ行ったんだ？」

すると、近くの雑木林から2人が出てきた。いたよ・・・つたく、
「どこ行ってたんだよ・・・」

四季「っ／＼／＼／＼」

四季は顔を真っ赤にしてメイの背に隠れる。な、なに？

メイ「ほら、四季」

すると覚悟を決めた顔をした四季は隠れるのをやめて前にでると、

四季「ナギサ・・・好き／＼」

メイ「アタシもだ。ナギ、大好きだ／＼」

っ?!／＼／ 瞬間、俺の顔が真っ赤になる。言葉に詰まるが、きちんと
言わなければならぬ。

「え、えっと・・・俺は・・・俺は二人から好きだと言われたことが本当に嬉しい。本当に、心の底から誇りに思う！ でも、今は答えは出せない。ゴメン」

すると二人は顔を見合わせ、

四季・メイ「プツ、アハハハツ!!」

急に笑いだした。

メイ「分かってたよ。でも答えは出せないってことは、アタシと四季、両方にチャンスがあるってことだろ？」

四季「ナギサも安心して？ 正々堂々勝負しようってことになってるから」

「おい、ちょっと待て。いったい・・・」チュツ

四季とメイにそれぞれ左右の頬にキスされた。

「っ／＼／＼」

四季「じゃあそういうことだから、よろしくね!!」

そして二人は行ってしまった。

四季「っっ!!／＼／ 恥ずかしい／＼キスしちゃったあ／＼」

メイ「アタシだって恥ずかしくての／＼」

だが、二人は曇り1つない笑顔で笑い合っていた。

ー 続く ー

UR 葉月 恋

いよいよラブライブ予選が近くなり、俺がマネージャーを務めるL
ieila!は、かのん先輩の家が経営する喫茶店を貸し切りにして
もらい集まっていた。

可可「ついに・・・ついに!! ラブライブの詳細が発表になります
タあっ!!」

Lieila! 『おおー』パチパチ

なんで夜なのにわざわざ電気消してやってんだよ・・・まあいいや、付
けよ。

俺が電気を強制的に付けると、みんながはっ、と我に振り返りこちらを
見る。

「それにしても、喫茶店を貸し切りにするなんて・・・」

かのん「私の家だからね」

千砂都「因みに、この子がコノハズクのまんまるだよ!!」

四季「丸い・・・」

まんまる「ぴいーっ!」

まんまるは身体を大きく見せようと身体を伸ばす。カワイイ・・・
すみれ「わざわざ貸しきらなくても・・・」そうですの!! マニーが
勿体無いですの!!」

それを聞いたかのん先輩は「相変わらずだね」と苦笑する。夏美は
皆にまくしたてるように、

夏美「当然ですの!! スクールアイドルを夢と定めた以上、私のマ
ニーとインフルエンサーとしての知識を総動員してLieila!
と一緒に盛り上げますの!!」

千砂都「あはは・・・なんか、ありがたい様な・・・恐ろしい様な・・・」

可可「ソナナことより!! ラブライブですよ!! ラブライブ!!!」

すみれ「発表でしょ? 去年もやったんだから、今年もやるわよ・・・

「そういうところがすみれは駄目なのデス!!」

かのん「それで、今年の大会の内容は?」「そうでシタ!!」

再び電気を消して発表に移ろうとするクウクウ先輩。いい加減う

ざくになって再び電気をつけて自分のスマホで詳細を読み上げた。

「今年の予選はリモートで開催。歌はすべて自由、か」

可可「ああ〜!! 先に言っただメデス!!」

千砂都「へえ? つまり去年みたいな独唱とかラップみたいな課題は無いってこと?」

「みたいですね・・・」

メイ「予選をリモートで開いて、東京大会に進出するチームを一気に絞り込むみたいだな」

四季「それだけ、予選突破のハードルは上がった」

かのん「ただ、自分たちのやりたい曲で勝負ができる!!」

俺たちが作戦会議をしている間、クウクウ先輩は言葉を取られて不貞腐れていた。

可可「ククが発表しようと思ったのに・・・言いたかったこと、全部話されてしまったデス・・・」

すみれ「で? 曲はどうするの?」

◆◆◆◆◆

そして時間が飛んで翌日放課後の部活時間、メンバーのみんなは準備運動のストレッチ中、

千砂都「やつぱり、かのんちゃんが作詞、恋ちゃんが作曲が良いと思う」

かのん「せっかく1年生が入ったのに?」

きな子「でも、きな子たちは初めてっす。ラブライブ出るの」

四季「me too・・・」

夏美「むしろ私達はいるだけで新鮮とも言えますの!!」

「それはそうかも知れないけど・・・」

俺も先輩たちも苦笑していると、あることに気づいた。

「あれ? 恋先輩どうしました?」

俺の声で気づいた皆が恋先輩に声を掛けるが返事がない。なんか手を、まるでコントローラーを動かすみたいな感じで動かしながらうたた寝してる。

(・・・?)

千砂都「おーい、恋ちゃん？」

恋「ビクッ！」・・・カ・・・一撃・・・」ブツブツ

夏美「寝てるんですの？」

夢の中でゲームやってる？ 一撃って言ってたし・・・

可可「寝不足なんデスカね？」

その日の練習は結局恋先輩は使い物にならず、次の日、

ー 昼休み ー

理事長「オーバーワーク？」

かのん「はい。恋ちゃん寝不足みたいで・・・」

理事長「だからそろそろ書紀とか会計とかの人を集めて作業分担しろって言ったのに・・・あの子ね？ まだ生徒が少ないからって、ずっと一人で・・・」

かのん「・・・」

かのん「失礼しました!!」

恋「かのんさん!! すみません、気づいたらこんな時間で!!」

かのん「大丈夫。それより、恋ちゃん忙しそうだね？」

恋「平気です！ それより、ラブライブの詳細、発表されたんですよ？」

かのん「うん!! だからそろそろ曲作りを始めたいなって」

◆◆◆◆◆

「今頃恋先輩曲作ってたのかな・・・」

メイ「結局引き受けたんだっけ？」

四季「大丈夫かな・・・？」

きな子「心配っすね・・・」

全く・・・ん？

「やべっ!! 教室に練習ノート忘れた! 取ってくるから先行っててくれ」

メイ「分かった」

「あつた。良かった、さてと屋上へ・・・ん？」

ピアノの音が聞こえてきた。恋先輩が作曲してんのかな？

俺が恋先輩の様子を見に音楽室へと向かう途中、突然ピアノの音が聞こえなくなつた。

(・・・?)

俺が音楽室の扉の外から中の様子を伺うと、連先輩がピアノに向かって座っていた。

「何やってんだ？」

俺が部屋に入ったことも気付かずにぶつぶつとつぶやいている恋先輩。俺が手元を覗き込むと、

恋「あ!! またゲームオーバー・・・」

「何やってんだこの人・・・」

恋「はい、”深淵の王 フニーロード”です。ここから先が全く進めなくて・・・っ!? な、渚さん?!」

「・・・」

恋先輩、ガチガチに固まってんぞ・・・

恋「お願いします!! 誰にも言わないで下さい!!」

「い、いやちよつと待っ・・・」分かりました。カルボナーラパンですね。買ってきます」パシリなんかしないでいいですから!! いったい何があつたんですか？」

恋「実は・・・」

それから部活終了後に恋先輩の家に案内され事情の説明を受けた。

どうやらこの前のクウクウ先輩の家での撮影の時以来ゲームにハマッてしまい、夢中になって気がついたら夜遅くまでやってしまつていたと言う日が続いたせいで寝不足になっていたらしい。

・・・俺も少しではあるがゲーマーだから気持ちは分からんでもない。

そして、恋先輩から家のゲーム部屋の鍵を渡され、無理矢理ゲームから離れるから協力してくれと言われた。

まあこのままじゃあラブライブがヤバいから協力するけどさ・・・

にしても恋先輩の意外な一面を見たな。

ー 続く ー

生徒会長の意外な一面

翌日、俺は皆よりも先に学校に来ていた。ハア・恋先輩どうすんだろ？

と思っていたら4人が入ってきた。ヤベツ!!

メイ「ナギおはよ・先行ってどうしたんだよ」

「お、おう。おはよう・・・」

四季「？ ナギサ・・何か隠してる？」

「何も隠して無えって!!」

四季「本当？」

ジト目で見つめてくる四季。ヤバイ・・・こうなった四季は納得するまで追求する上に、何をしだすか分からないんだ。

「ほら、先生きたぞ!!」

二人は納得いかないような顔をしているが、渋々自身の席に腰を下ろした。

◆◆◆◆◆

時間が飛んで放課後、俺は恋先輩との約束で音楽室へと向かっていった。

くくくくくくくくくく

可可「あつ!!来ました!!」

きな子「音楽室つすかね？」

すみれ「ちよつと、気づかれるでしょ？」

可可「引つ張るなデス!!」

メイ「・・・? 恋先輩?」

夏美「二人で密会!」

可可「なんデスか!? なんの相談デスか!」

なんで恋先輩とナギサが?

メイ「四季スマホが!! 画面が酷いことになってるぞ!!」

すみれ「凄まじい嫉妬ね・・」

先輩でもナギサを奪うなんて許さない・・あの泥棒猫

きな子「四季ちゃん!? キャラ崩壊してるっすよ!!」

地の文読まれた・・・だって・・・
メイ「あつ、行っちゃまったぞ。追いかけてよう」



「できない!?!」

恋「はい。曲を作らねばと考えれば考えるほどゲームが頭をよぎり・・・」

これは・・・相当重症だな。

恋「私はどうすれば・・・」

「重く考えすぎじゃないですか？俺もたまにゲームしますけど、テスト勉強中にやりたくなることなんかしょっちゅうありますよ?」

恋「そういうときどうすれば良いですか!?! どうか、ご教授下さい!!」

「ちよつと!?! 恋先輩近いです!?!」

夏美「見た感じ、あの目は・・・」

四季「恋」

メイ・夏美・きな子・可可・すみれ「「「!?!」」」

四季「恋・・・」

ナギサにはオシオキが必要だね・・・。

┌ 部室 ─┐

アタシたちは絶叫しながら部室に駆け込んだ。まさか、ナギと恋先輩が!?!

可可「どうするんデスカ!! どうするんデスカあつ!?!」

すみれ「決まってるでしょ!?! ショウビジネスの世界で、恋愛は恰好のスキャンダル!! 止めなさいったら止めなさい!!」

夏美「いや、ここはわざと炎上させて注目を狙いに行ったほうが・・・」

メイ「バカやめろ!!」

すると四季は自作のマジックアームで夏美からスマホを回収する。

四季「没収」

夏美「返すですのーっ!!」

夏美が四季に飛び掛かるが、四季はヒョイツと躲す。

「お待たせ……ん?」

きな子「な、渚くん……」

「どうした? 練習しないのか?」

きな子「も、勿論始めるっすよ!! でもその前に……」

すみれ「ちよつと!! 何いきなり聞いてんのよ!! デリケートな問題よ、まずは順序があるでしょ!」

? なんだ? するとメイがうつむきながら俺の制服の袖口を引っ張り、

メイ「ナギ、好きなら好きだってはつきり言ってくれ……」

「は?」

あれ、メイ泣いてね……?

千砂都「ういーすっ!! ? なに? この空気?」



「付き合ってる!? 俺と恋先輩が? なんてそんな話になってんだよ!!」

千砂都「マネージャーとアイドルの恋!」

四季「正直に言っつて」

メイ「言え!!」

「いや、全く話が見えないんだが……」

きな子「だって、裏庭で熱く語り合ってたっす!!」

すみれ「手を取り合っつて!!」

可可「見つめ合っつて!!」

夏美「抱きしめあっつて!!」

「夏美は勝手に捏造するな! んなことしてねえ!!」

千砂都「やはり恋!!」

「信じるな!!」

この人たち何考えてんだ!!

メイ「じゃあ何を話してたんだよ……」

「恋先輩の相談に乗ってただけだよ……」

四季「なんの相談？」

「そ、それは……いろいろ」

四季「いろいろって？」

「それは……」

メイ「言えない事なのか？」

「そ、それは……」

可可「怒涛の追い込みデス!!」

すみれ「緊張感あるわね……」

すると四季は試験管に入った紫色の液体を取り出し、

四季「今、話したくなる飲み物あげる」

「やめろバカ!!」

メイ・四季「……」

二人共、そんな悲しそうな顔しないでくれよ……絶対に付き合つて無いから!!

ー 音楽室 ー

恋「ハア……あのボスだけでも、いや駄目です!! ゲームはいけ

ません! ハア……」

かのん「恋ちゃん!!」

恋「かのんさん!? なにかあったのですか? あっ、そろそろ練習

ですか?」

かのん「ううん。ちよつと話があつて……急な話でびっくりする

かもだけど、私に副会長やらせてもらえない?」

恋「副会長?」

かのん「力になりたいの。恋ちゃんがお母さんから受け継いだこの学校を、一緒に盛り上げていきたい。頼りない私だけど、恋ちゃんを

助けることができないかなって」

恋「かのんさん……」

かのん「どうかな？ 理事長の任命書はもう貰ってるの。後は恋ちゃんが承認してくればOK」

恋「かのんさん……」

任命書を恋ちゃんはギュッと抱きしめる。感じるものがあるんだろう。

かのん「じゃあ私、生徒会室で準備してるから後で仕事教えて」
そしてかのんさんは部屋を出ていった。

恋「……「良いんですか？」渚さん」

「今の話、全部聞いてました。正直に全部話した方が良いです」

恋「ですが……」

俺は預かっていたゲーム部屋の鍵を渡す

「かのん先輩、恋先輩のことを本当に大事に思ってくれてるんですよ？ 恋先輩の力になりたいって」

恋「……怒らないでしょうか、かのんさん」

「そりゃ怒るかもしれませんね。けど、絶対に嫌いにはならないと思いますよ？ 友達って、そうやって想いをぶつけ合って仲良くなるものでしょ？」

そして、恋先輩は生徒会室に向かう。すると、

恋「!! 皆さん……」

すみれ「かのんが整理手伝って言うからね」

夏美「動画で記録もバッチリですよ!!」

恋「あの!!」

そうして、恋先輩は全てを打ち明けた。

……to be continue

皆でゲーム!!

あの後俺たちは部室に移動し、恋先輩からの説明が皆にされていた。

かのん「ゲーム・・・?」

恋「はい・・・」

千砂都「それで夢中になって・・・」

すみれ「寝不足・・・?」

恋「黙っていてすみませんでした!!」

恋先輩が深々と頭を下げて謝罪する。そこまですることでもない気がするんだが黙つとこ・・・。

場に沈黙が訪れるが、かのん先輩を皮切りに皆は大爆笑。笑いに包まれた。

かのん「なんだ!! そうだったんだ・・・良かった」

可可「それにしても、レンレンがそんなにゲームにハマってくれていたなんて・・・」

千砂都「なんか嬉しいね?」

きな子「恋先輩、ずっと雲の上の人みたいなイメージあったんですけど一気に親近感湧いたつす!!」

メイ「ナギはそれを知って、恋先輩に頼まれて黙ってた訳か・・・そのとおりだよ」良かった・・・」

四季「良かった・・・」

「つたく、いくら恋先輩でも俺がメイと四季以外をそういう目で見る訳無いだろうが・・・」

メイ「っ／／／／で、でも・・・」

四季「そんなの分らない・・・／／／／」

あつ、赤くなった。そんなヤキモチやいて・・・全く可愛い奴め」
メイ・四季「／／／／／／」

ん? 二人の顔がさらに赤くなった。どうした?

きな子「渚くん・・・声に出てるつすよ?」

「あつ、またやっちゃった感じ?」

皆がコクリと頷く。そうか……

メイ「ナギはズルい」

四季「同感。ズルい……なんで私達だけこんなに恥ずかしい思いしてるのにナギサはなにもないの?」

「じゃあ俺を恥ずかしがらせてみるよ」

メイ「ムカツ!! やってやろうぜ四季!!」

四季「うん!」

二人の間に生まれた謎の連帯感。仲が良くて良い事だ。

かのん「3人とも、話を戻そう?」

かのん先輩に言われて再び視線を恋先輩へ。

恋「あの、皆さん怒ってますよね?」

かのん「怒ってる……?」

かのん先輩は千砂都先輩と顔を見合わせ、

かのん「そうだねえ……じゃあ、黙ってた罰として」

悪い顔をしたかのん先輩。果たして罰とは……?

◆◆◆◆◆

場所を恋先輩の家に移してゲーム部屋。

四季「確か、ナギサが進めない場所があるって」

恋「はい。このゲームなんですけど……」

かのん「うわコレか……」

「よく一人でやろうって気になりましたね……」

可可「これ、ソロプレイはプロでも難しいって言われてるやつデス

よ?」

恋「はい!」

知らなかったんか……

「じゃあ協力プレイでさつきと片付けましょうか。この敵に四人だったら5分もありや終わるでしょ」

恋「そんなに弱いボスじゃないですよ?!」

メイ「あく、ナギこれソロプレイで全クリしたから」

四季「あくしてた」

かのん・恋「「えっ!」」

皆の視線が俺に集まる。そんなに驚くか？

「まあ好きこそものの上手なれですよ武器は俺双剣で行きますね」

かのん「私は両手剣で行くよ」

可可「ククはハンマーで行きマス!!」

恋「私は盾持ちの片手剣で」

そしてゲーム開始。ボスが出現し取り巻きのザコが湧いてくる。

「かのん先輩!! スキルゲージ溜まったら雑魚を薙ぎ払って下さい!!」

かのん「分かった!!」

「クウクウ先輩はその間にボスに攻撃を叩き込んでください。恋先輩防御を重視しつつボスを狙ってください」

可可「分かりませタ」

恋「は、はいっ!!」

そして俺は雑魚を連続剣で次々と切り倒しスキルゲージが溜まったところで、

「恋先輩、ボスにスタンお願いします!!」

恋愛「分かりました!!」

恋先輩のキャラのスタンが成功しボスの動きが硬直する。その隙に俺はボスに双剣のソードスキルを叩き込む。

「くらえ! ヘスターバースト・ストリーム!!」

かのん「いや、何処ドのキリトくん!? SAOじゃないからね!」

可可「でもたった一技ひとわざでボスの一段階目倒しまシタ!! どんな熟練度してるんデスか!」

ハッハッ、双剣の熟練度も、ソードスキルの技習熟度も、武器の強化レベルも攻撃特化でMAXだ!!

恋「二段階目来ますよ!!」

「恋先輩そこどいてください!!」

恋先輩とスイッチし、その場にボスの腕が叩きつけられる。が、
「ホイ、パリング」

双剣で相手の攻撃を弾いて硬直させる。その隙に、
かのん「今だっ!!」

「可可「ククの力を思い知りなサイ!!」

恋「食らええええっ!!」

3人同時の必殺攻撃がボスに叩き込まれる。するとあつという間に二段階目を撃破。最終段階に移る。

「かのん先輩、ボスの動きが再開したらスタンお願いします。クウクウ先輩は通常攻撃、恋先輩はゲージチャージしてください。俺はソードスキル叩き込んでギリギリまで減らします」

かのん「分かった!!」

そしてボスの動きが再開し即座にかのん先輩のスタンが入る。そしてクウクウ先輩と俺のダブル攻撃でみるみるボスのHPが減っていき、後僅かのレッドゾーンまで減ったところで恋先輩のチャージが完了した。

「恋先輩今です!!」

恋「皆さんがここまでお膳立てしてくれました、無駄にはしません!!」

そして恋先輩の止めのソードスキルがボスに叩き込まれ、ボスのHPは0になりポリゴンになってボスは消滅した。

恋「勝ったあ!!」

かのん「勝った勝った!!」

「ふう．．．」

皆が喜ぶ中俺は一息つき、

四季「お疲れ様．．．」

「．．．今回のこと、四季もメイも俺を気にかけてくれてありがとう。後、黙っててゴメン」

四季・メイ「っ!．．．貸しだからね(な)?」

「分かった」

そして俺たちは恋先輩の家を後にし帰路につく。その帰り道、
「今度の土曜日、3人で出かけないか?」

メイ「っ! 行く!!」

四季「私も行く」

「じゃあ朝10時に家に迎えに行くから」

四季「分かった」
メイ「りよーかい。楽しみだな」

「今度の土曜日、どうなるかな？」
「続く」

二人との遊園地デート

恋先輩のゲーム騒動から土曜日になった。今日は休日で部活も休みのため3人で久しぶりに遊園地に行くことになっている。

最後に行ったのは中2の夏休みだったから凄く久しぶりだ。

「行ってきます」

家を出た俺はメイの家のチャイムを押す。するとメイのお母さんが出てきた。話を聞くとメイはどうやらもう準備が終わり四季の家に行っているらしい。

メイのお母さんにお礼を言い今度は四季の家に向かう。チャイムを押すと四季のお母さんが出てきて二人を呼んでくれる。しばらく待っていると、ラフながらもかわいらしいデザインの服に身を包んだ四季と、同じくメイが出てきた。

四季「お待たせ・・・／＼」

メイ「お待たせ！」

「おう。じゃあ行くか」

そして3人で駅に向かって歩き出す。

「メイも四季も服似合ってるぞ。四季のそんな格好見ないから凄く新鮮だ。かわいいよ」

四季「くっ／＼ あ、ありがとう・・・／＼（褒めてくれた：勇気を出してこの服にして良かった／＼）」

メイ「良かったな四季!!」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そして電車で遊園地の最寄り駅まで行き、そこから歩いて向かう。今日は休日だけあって人が混みあっていた。四季もメイも人混み苦手だから俺がリードしないと・・・。

「ほら、チケット買ってきたから行こうぜ？」

メイ「お、おう」

四季「うん・・・」

やれやれ・・・

俺は二人に手を差し出す。

「手、握ってれば少しはマシだろ？ はぐれても嫌だし」

メイ「じゃ、じゃあ．．．遠慮無く．．．／／／」

四季「ありがとう．．．／／／」

俺の手を取り、顔を赤らめてうつむく二人。握った手にキュツと力が籠もる。

メイ（ナギはなんで平気．．．ん？！！ 四季！）

四季（何？）

メイ（ナギの顔色見てみる!!）

見ると、ナギサの顔は赤く染まっていた。

四季（なんだ、ナギサも恥ずかしいんだ．．．なら）

すると、四季は突然俺の腕に抱き着いてきた。四季の2つのお胸様が俺の腕をサンドする。

「っ?! ちよつ、四季?!／／／」

慌てるナギ。なら、

メイ「アタシもっ!!」ギユツ!!

メイも俺の腕に抱き着く。両サイドから柔らかい2つのものが当たる。

煩惱退散、南無阿弥陀仏．．．。

しかし当然顔の赤さは引かず二人に主導権を奪われてしまった。

メイ「ほら、アトラクション行こうぜ？ まずどれ行く？」ムニユツ

四季「ジェットコースター行きたい．．．」フニユツ

ちよつとおおおおおおっ?! さり気なく胸押し当てるのやめてくれる!?! 理性の壁が崩壊するんだけど!!

「じ、じゃあ行くかなあ．．．あっちだよな?／／／」

そしてジェットコースターのアトラクションに並ぶ俺たち。多めにお金を出してフリーパスを買ったため極力並ばずにアトラクションを堪能できる。あつという間に俺たちの番になり、

四季「メイ」

メイ「よし!」

あの? 何を始める気ですか?

四季・メイ「最初はグー、ジャンケンポン!! あいこでしょ!! あ

いこでしよ！ あいこでしよ！ あいこでしよ！ あいこでしよ！！
あいこでしよ！！ ショ！！」

そして何度目かで四季の出したのはパー。メイはグー。

四季「よし！！」

四季のもはや隠そうともしない渾身のガッツポーズ。メイは手と膝を地に突き、拳で地面を叩いて悔しがっている。

四季「じゃあナギサ、隣失礼します」

ああ・・・俺の隣争いだったのね・・・。

そして乗客が乗り込みジェットコースターは出発。ベルトで上に上がり、そこから一気に急降下する。

ゴオオオオオツ！！

メイ「キヤアアアアツ！！」

「うおおおおおおつ！！」

四季「・・・・・・・・・・・・・・・・」

四季は無言だったが顔を見たら笑っていた。どうやら楽しかったらしい。

メイ「いやー楽しかったあ・・・」

四季「me too」

「俺も!!」

そして次のアトラクションに向かう途中、女子高生と思われる女の子に声を掛けられた。

女子「あの!! Lieila! の米女メイさんと若菜四季さんです

よね!?!」

メイ「そ、そうだけど・・・」

メイも四季もビツクリしている。ああ、これあれだな。

女子「ファンなんです!! サインください!!」

メイ「ええっ?! アタシたちの!?!」

四季「ビツクリ・・・」

話を聞くとこの娘は1年生組のひたむきに頑張る姿に心を動かされファンになったらしい。その中でも特に、不器用ながらも手を取り合って必死に活動する四季とメイのファンになったらしい。

メイはポーカーフェイスを決め込んでいたが、顔が赤く喜んでいることは一目でわかった。四季もこめかみがヒクヒクと動いていたので照れているのを表に出さないようにしているのが俺には丸分かりだ。

二人がサインを女の子に渡すと、女の子は応援してまずと声を掛けたが、俺のことも聞いてきた。俺が二人の幼馴染みでLiella!のマネージャーであることを伝えると、「頑張ってLiella!とお二人を支えてあげてくださいね?」と言い、頭を下げて去っていった。

ええ子やな……。

メイ「まさかあたしたちにファンがいるなんてな……」

四季「正直ビックリ……」

「そうか? 二人共可愛いから間違いなくファンはいると思ってたぞ俺は」

すると二人の顔は茹でダコのように真っ赤に染まり、少し落ち着くまで待つてから、次のアトラクションに向かった。

◆◆◆◆◆

次のアトラクションはゴーカート。先程のジェットコースターでは四季が隣を獲得したので今度は強制的にメイの番だ。これは二人で予め決めていたらしい。

メイ「オラアツ!! コーナー攻めるぜえっ!!」ブオオオンツ!

四季「私も負けない!!」ブオオオンツ!!

二人共、ハンドル握ると人格変わるタイプなのか?

メイ「ふく楽しかったあ……」

四季「私も……」

二人共凄く良い笑顔だ。そろそろ良い時間だな。

「そろそろ昼ご飯にしようぜ？ フードコート行こう」

四季 「賛成」

メイ 「行こう!!」

そしてフードコートでお昼を食べた俺たち。午後はなにで遊ぶかをパンフレットを見て決める。

四季 「バイキング行きたい」

メイ 「だな。激流下りは行きたくないし」

「なんで？」

メイ・四季 「水しぶきで服が濡れて下着が透けると嫌だから。ナギ（ナギサ）にしか見せたくない・・・」

はいカワイイ・・・／／ そういうこと言わないでくれないかなあ。いや、俺としては嬉しいけど、会話が聞こえてたのか、俺周りの人から凄い睨まれてるから。

「じゃあ行かないでおこうな？／／ 俺も他のやつに二人のそんな姿を見られるの嫌だし・・・」

メイ・四季 「サンキュッ（ありがとっ）!!」ムニユウッ！

二人の胸が再び俺の腕に。嬉しいんだけど人前では止めて欲しいなあ・・・。

ー 午後続く ー

若菜四季・米女メイ 振り切れた恋心（ラブハート）

土曜日に四季とメイと共に遊園地に遊びに来ていた俺。昼食を食べ終え、再びアトラクションを巡る。今度はフリーフォールに乗ることになり、係員さんに従い席に、座る。

「大丈夫かメイ？ 四季？」

メイ「へ、平気だ・・・」

四季「楽しみ・・・」

四季もメイも平気そうだ。そしてアナウンスが鳴り、3、2、1：とカウントダウンが開始。0で一気に急上昇した。

「おわあああああつ!!」

メイ「キヤアアアアアアツ!!」

四季「キヤーー!!」

四季は棒読みに近い叫び声を上げる。が、俺とメイにはわかる。四季はかなりの衝撃を感じている。

そして最高点に達すると、そこから今度は一気に急降下。凄まじいGに襲われる。

そして地上に戻った俺たち。風圧で四季とメイの髪がボサボサになり、アトラクションから出ると2人は髪を直したいと近くのトイレを探して入っていった。

「俺も用を足すか・・・」



先にトイレから出て待っていると四季が先に出てきて二人でメイを待つ。メイの髪型はかなり特殊だから時間がかかるんだろうな・・・。

四季「・・・」ギョツ!

「っ! 四季?」

近くのベンチで座っていたら四季が急に俺の腕に抱き着く。四季は頬を朱に染め、照れながら口を開く。

四季「ナギサ・・・っ／＼」ギョツ!!

四季……

「いつから俺のこと好きだったんだ？」

四季「きつと、本当は小さい時から。けど気づいたのは中学最後の文化祭……ナギサ、私が悪く言われて怒り狂ったでしょ？」

「あー、あれかぁ……」

四季「あの後一緒に帰って、ナギサは自分が大変なのに私を気にかけてくれて……その時自分の気持ちに気づいた……」

そんなに前から我慢させてたのか……。

「俺最低じゃねえか……そんなに長く我慢させて放って置くとか……」

？「そうだな」

俺と四季が声の方を向くと、

メイ「お待たせ」

四季「メイ終わったの？」

メイ「ああ……。つてか四季、そんな前からせつかく気付いた自分の気持ちを押し殺してたのかよ……」

四季「だって……」

四季は何かを言いたげだが、それを遮ってメイが俺に1つ質問をする。

メイ「ナギ、四季に好かれてるって知ったら迷惑だと思ったか？」

「はぁ？ 思うわけないだろ。むしろちゃんと受け止めて考えて答え出すさ。他でもないお前ら二人なんだからさ……」

メイ「だってさ？」

すると四季は涙を流し、俺に抱き着いてきた。俺は四季の頭を撫でてやる。

ヤレヤレ……

四季「ナギサ……っ、私……っ！」

「四季のことを、そんなことで悪く思わないよ？」

その様子を、メイは優しい表情で見守っていた。

メイ（今は特別に譲ってやる。でも、それが済んだら絶対に負けな
いからな……四季！）

そして、その後も色々乗り最後に観覧車に乗ることにした。
3人でゴンドラに乗ると、突然2人が・・・

メイ・四季 「ナギ（ナギサ） ツ!!」

「へ?」

二人は突然のことに呆けた俺の唇を二人で順番に奪い、満面の笑みを浮かべ・・・

メイ・四季 「大好きっ!!」

そして、俺は何が起こったのかをやっと理解し顔が見る見る真っ赤に染まる。

「な?! な、ななな何やって?!」

メイ 「ナギは鈍感だから分かりやすくアプローチしないとダメ」

四季 「メイには負けてられないから・・・」

「だ、だからって・・・／／／／」

四季 「ナギサ、恋する乙女は止められないって知ってる?」

メイ 「これからも、付き合ってもらおうぜ?」

メイ・四季 「ナギ（ナギサ）の答えが出るまでは!!」

コレは・・・

「分かったよ。かなりの難問だな・・・」

そして、久しぶりの遊園地は3人の仲に確かに変化を残し終了した。

ー 続く ー

Tip off (ゲーム開始) !!

四季・メイと遊園地に行った翌日の日曜日、俺は原宿のとある広場で開催される1vs1のストバスの大会に出るためにウェアを着て会場に来ていた。

「よし、受付は済ませたし、俺のゲームは3試合目か」

この大会はルールにサドンデスルールを採用しており、オフエンス・デイフェンスをお互い最低1回ずつ行い、ポイント差がついた時点で決着となり、勝者が次に進む。

メイ「頑張れよナギ!!」

四季「応援してるから!!」

「おう!!」

そして俺の番になりフィールドに立つ。まずは俺がデイフェンスからだ。

相手のボールから始まり相手は速攻で仕掛けてきた。俺がデイフェンスに入るとロールターンで躲そうとしてきたが、読んでおりすぐにバックステップで後ろに下がりシユートの時に正面からボールを叩き落とした。

よし、まずは一本止めた。これで次に俺が決めればその時点で俺の勝ち。絶対に決めてやる!!

四季「頑張れー!!」

ゲーム開始と共に俺はその場でドリブルして様子を見る。

動きでフェイクを入れると相手が釣られたためにすぐに最高速フルドライブで一気に抜き去る。

そこまでスピードのある相手では無かったために相手は俺に追いつくことができず、ワンハンドでダンクを叩き込んで1ゲーム終了。

ポイント1-0で俺の2回戦進出が決まった。

俺が2回戦に向けて給水しながら他の試合を見ていると、

かのん「あつ! 渚くんいた!!」

「かのん先輩? なんでもここに・・・」

可可「四季サンとメイサンから連絡貰ったのデス」

きな子「水臭いじゃないっすか!! 応援くらいさせてほしいっす!!」

嬉しいと思いつつも、恥ずかしいとも思っているとすみれ先輩が、すみれ「それで試合は?」

「1回戦は突破しました」

夏美「さすがナギくんですの〜!!」

「はいはい……」

係員「次の試合、受付番号32の方準備お願いします!」

「あつ、呼ばれたんで行ってきますね」

千砂都「頑張つてね!!」

恋「勝つことを信じてますから!!」

めつちやプレッシャーかけてくるなあ……でも、これで奮い立たなければ嘘というもの。

「はい!!」

その後も俺は順当に勝ち上がり準決勝、俺が後攻で第1ゲームは0-0のドロー引き分けで終わり第2ゲーム。先行の相手の攻撃を止めている。

コレを決めれば俺の勝ちだ。

相手「くっそ!! 来い!!」

俺は一気にドライブで抜こうとするが相手は手を伸ばしてカットしようとする。

しかし寸前でクロスオーバーで躲し、ゴール下まで侵入する。

相手「くっそ!!」

しかしステイルを躲された相手はすぐに立て直してゴール下へ。俺のシュートを阻むため跳躍する。

「甘いな」

空中でボールを持つ手を変えてダブルクラッチでゴールに、ダンクを叩き込んだ。

実況「日宮渚選手、決勝進出!!」

かのん「やったあ〜!!」

可可「さすがククたちのマネージャーデス!!」

すみれ「やるじゃないアイツ!!」

四季「まだ決勝戦が残ってますよ」

メイ「恐らく相手は春の大会の決勝戦でナギと戦ったあの人だ……」
実況「剛石輝選手、決勝進出!!」

そして10分間の休憩を挟んだ後、両者コートに立つ。

剛石「またお前とやれる時を楽しみにしてたんだぜ？ 絶対にリベンジしてやる!!」

「俺だって負けませんよ!!」

両者正々堂々と闘うことを誓うように握手してゲーム開始。だが、勝負は第5ゲームまでもつれ込む接戦となり、お互いの実力はほぼ互角。だが、渚にとつて苦しい展開となった。

可也「相手も強いデス。サスガ決勝戦……!!」

すみれ「でも、体格差がすごいわよ？」

千砂都「さつきからパワーでゴール下に押し込まれて、上から決められてる……」

かのん「渚くん頑張れー!!」

俺もフェイダウエイスリーなどテクニクを駆使してポイントを取ったが、相手の方が高さもパワーもある。千砂都先輩の言う通りゴール下での力勝負にゴリ押しで持ち込まれたらまたもつれ込む。

「クソっ!!」

これを止めれば勝ちなのにつ!!

剛石「だいぶ消耗してるな。コレを決めて第6ゲームで俺の勝ちだ!!」

相手はパワーでゴール下まで侵入してくる。

クソっ……!!

四季・メイ「ナギサ（ナギ）ー……ッ!!」

!! 二人の声が聞こえた気がした。それに続いて、かのん「渚くん!!」

可也「ナギサさん!!」

すみれ「渚!!」

千砂都「渚くん!!」

恋「渚さん!!」

きな子「渚くん!!」

夏美「ナギくん諦めたらダメですよ!!」

・・・そうだ！ 諦めて・・・ッ！

「たまるかあああああッ!!!!」

その瞬間、俺の内側から今まで感じたことのない力が湧き上がる。相手は跳躍し、ボールをリングに叩きつけようとする。

「させるかあッ!!」

俺も跳躍し、シュートをブロック。先程まではあっけなくふっ飛ばされていたが、今度は俺は力の限り粘る。

剛石「なっ!? (この状況でどこにそんなパワーが!?)」

すると俺のブロックが徐々に相手のダンクを押し返し始め、

剛石(っ!?)

L i e l l a ! 『行けええええええええええッ!!』

「うおおおおおおおおおッ!!」

ドガアアアアッ!!

俺のブロックは相手を空中で弾き、そのままボールはコートの外に出た。

「ハア、ハア・・・か、勝った?」

実況「き、決まったあああああああああッ!! 優勝は、日宮渚選手だあああああああッ!!」

すると会場は歓声に包まれる。

剛石「ハア、負けたか・・・。やっぱり強いな、お前」

俺たちは手をガシツと握り互いの健闘を称え合う。

「あなたも。正直負けたと思いました。でも・・・」

そして、俺がL i e l l a ! の皆を見ると

剛石「そうか、あの子達か・・・」

「ええ・・・」

すると、俺のもとにL i e l l a ! の皆が飛び出して来る。かのん「渚くん凄い!!」

可也「ハイ！ ククたちのマネージャーはスゴイんです」
すみれ「やるじゃないアンタ!!」

千砂都「凄かったよ!!」

恋「はい!! 手に汗握る熱戦でした!!」

すると、観客の誰かがL i e l l a !を知っていたらしく少しばかり騒ぎになる。

するとかのん先輩が、

かのん「この人は、日宮渚くんは・・・私達L i e l l a !のマネージャーです!!」

会場の皆は驚いた顔になるが、運営委員の人が騒ぎを納めて表彰式。

俺はトロフィーと小さい金メダルを貰い今年の春休みに続き、再び優勝したのだった。

あのとき、皆の応援が俺に確かに力をくれた。けど、あの力が開放された様な感覚・・・アレは何だったんだ？

その日の夜は俺も含めたL i e l l a !のグループLINEは俺の話題でそれはそれは盛り上がった。

明日からまたL i e l l a !のために頑張るか!!

┆ 続く ┆

メイの手作りお弁当

俺がストバスのイベントで優勝した翌日の月曜日、学校でいつもどおり午前中の授業を受け終わった俺は購買部へ向かおうとしていた。「ったく。母さんが、寝坊するなんて珍しいな・・・」

母さんが珍しく寝坊してしまい、弁当を作ってもらえなかったために昼飯を買いに行くところだ。

メイ「あつ、ナギ!!」

「ん? メイどうした?」

四季(?)

メイは顔を赤らめモジモジと落ち着かない態度だったが、意を決して口を開いた。

メイ「ナギ、今日は昼飯あるか?」

「ん、ああ・・・母さんが寝坊してさ、無いから買ってこようかと」

メイ「じゃ、じゃあコレ!! 弁当作りすぎちまったから良かったら食ってくれないか?」

四季「なっ!?!」

は・・・?」

うおおあああああッ!!! マジか!? 女の子の手作り弁当!! しかもスクールアイドルやるような美少女のと来た!!

・・・いくら幼馴染みとはいえ他の男子がいたら殺されてるな俺。

前に理事長から聞いた話だとこの学校俺以外に男子いないらしいから本当セーフ!!

まあ、それで肩身の狭い想いをすることもあるけど。

メイ「で、どうだ? 駄目か?」

メイが瞳を潤ませて上目遣いで聞いてくる。オツケーに決まってるんだろ!!

「喜んで頂きます!!」

メイ「良かった・・・。ほら、出すから座れよ」

「はーい!!」

俺がとてでもいい返事をするよとメイはお弁当箱を取り出す。

メイ「こつちがナギのな？」

するとここで四季が、

四季「ねえメイ？　いくらなんでもタイミングが良すぎる気がするんだけど？」

言われてみれば・・・母さんが寝坊することを予め知らないは無理なタイミングではある気がする。

四季「メイ？」

メイ「あ、アハハ・・・やっぱりバレたか」
は？

「え？　どういうこと？」

メイ「実は・・・」

◆◆◆◆◆

なんとメイは母さんに今日は自分が俺の弁当を作りたから作らないでくれと頭を下げて予め頼んでいたらしい。

母さんも母さんで「それなら自然な方が怪しまれないわね」とノリ

ノリで父さんに事情を説明したうえで今日はわざと寝坊したらしい。

そこまでするか・・・

メイ「やつぱ四季にはバレるかあ・・・」

四季「メイ、ズルい」

メイ「悪かったって」

「メイって意外と策士だったんだな」

まあ弁当があるから良いけど。

「とりあえず食わしてくれよ」

メイ「了解。開けてみな」

俺が弁当を開けると、中にはおむすびが2つと唐揚げ。ポテトサラダにタコさんウインナー、ミニサラダにプチトマトと見た目も鮮やかかつ栄養バランスも良さそうな光景が。

「美味そう!!」

メイ「へへっ、食ってみてくれ!!」

「おう!! いただきます!」

四季「むう・・・」

俺はまずは唐揚げに手を付ける。食べてみるとなにかが違う。

「これ、胸肉か?」

メイ「正解。高タンパク低カロリーを意識してみた」

「でも胸肉にしては柔らかいな・・・」

メイ「ああ。昨日の夜のうちに重曹水に漬け込んだんだ。そうすると胸肉も柔らかくなるんだ」

マジか・・・知らなかった。

「ポテトサラダも美味しい・・・」

メイ「それもーからアタシが作ったんだぜ? じゃがいも潰してさ」

何という手間の掛かった弁当だ・・・。

メイ「手間だけじゃなくて愛も籠もってるぞ?」

「・・・違うない」

そして俺はメイの愛の籠もった手作り弁当を完食。一品一品がけっこう量があったため満腹だ・・・。

「ふ〜毎日は無理でもまた食べたいな・・・」

メイ「っ!! お、おう。また今度な? /」

四季「っ! ナギサ!!」

ビクツ! 「な、なに? 四季・・・」

四季「明日は私が作ってくるから!!」

「へ?!」

メイ「おい真似すんなよ四季!!」

四季「メイこそ!! お義母さんを味方につけるなんてズルい!!」

あの、字が違った気がするのは俺だけ?

メイ「はん、知らないのか? オトすなら胃袋を掴むのは基本だぞ!!」

四季「なら明日のお弁当でメイのよりも美味しいの作ってくる!!」

メイ「面白れえ!! やってみやがれ!!」メラメラ

四季「絶対に負けない!!」メラメラ

なんか背後に燃え盛る炎と火花が見える……。

つていうかクラスの面々の前で大声でそんな言い争いしないでくれる？ ジロジロ見られて恥ずかしいんだけど……。／／／／

四季「ナギサ、楽しみにしてて」

「わ、分かった」

こうなったらこの2人はもう止まらない。大人しく食べよう。四季も料理決して下手ではないし、むしろ上手いほうだしな。

安心して食べられると言うのは幸せな事だな。

ー 続く ー

手作り弁当 四季編

メイの手作り弁当・・・騒動? の翌日。今日は四季が弁当を作ってきてくれるらしい。母さんにも確認したら、「四季ちゃんが作ってくれるらしいじゃない。で? どっちと付き合うの?」と、目を輝かせてうざ絡みしてきてはっ倒しそうになった。

マジで余計なお世話なんだけど・・・。

そして午前中の授業が終わり昼食の時間。俺とメイと四季がいつもどおり3人で机を合わせると、きな子と夏美が「一緒に食べていっすか?」と来たので了承し5人で食事にする。

俺が弁当を出していないことを不思議に思ったきな子が「あれ?」

渚くんお弁当はどうしたつすか?」と言われたが、ここで四季の出番である。

四季「それなら・・・はいナギサ／＼」

「ありがとう・・・／＼」

顔が赤い四季につられてこっちの顔まで赤くなってしまった。早速頂こう。

四季の作ったお弁当はメジャーなタイプの弁当箱ではなく、ランチジャーと呼ばれるタイプの物だった。ジャーから器を取り出すと、入っていたのは3つ。

おかずがサラダとプチトマト、そしてご飯物はなんと炒飯だった。そして一番下には玉ねぎとベーコンのスープが温かい状態で入っていた。その熱のおかげで炒飯もまだ温かい。

夏美「なっ!! 四季さんの手作り弁当ですよ!?!」

四季「昨日はメイだった」

きな子「渚くんモテモテっすね・・・」

四季「勿論。私のナギサへの愛が籠もってる」

きな子「へ、へえく・・・(四季ちゃんそんな恥ずかしい事なんでそんな真顔で言えるつすか!?)」

おい、若干きな子が引いてる気がするぞ?」

「まあ食べようぜ?」

L i e l l a ! 1 年 『いただきます!!』』

そして俺は四季の手作り弁当に手を付ける。ん!! 炒飯美味しい!!
塩加減もいい感じだし米もパラパラ・・・。

そして次にスープを一口飲んで見る。コンソメ風味のスープに
ベーコンと玉ねぎから染み出た出汁が合わさり更にマイルドに。美
味い!

サラダもサニーレタスにきゅうり、プチトマトに小袋のドレツシン
グをかけていただく。

四季「どう?」

「んっ・・・、メチャクチャ美味しい!! 昨日のメイといい勝負かも」

四季「本当!?!」

メイ「なっ!?!」

そして俺は一気に炒飯を掻き込みスープを飲み干す。サラダも完
食し、

「ごちそうさまでした」

四季「お粗末様でした」

きな子「こうして見ると、メイちゃんと四季ちゃん渚くんと夫
婦って言われてもあんまり違和感無いつすね・・・」

メイ・四季「!!」

「夫婦ね・・・」

俺はその場面を想像した。

ー パターン・メイ ー

「ただいま」

メイ「お帰りナギ、夕飯できてるぞ? ほら、上着貸せ」

「サンキュ」

そして夕飯中、

メイ「なあ、ナギ? 今日さ、一緒に風呂入らねえか? / / /」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ブーーーーっ!!」

メイ「わっ、どうしたナギ!?!」

「な、なんでもない・・・」

俺の妄想の中のメイ中々だな。さて、次は

ー パターン・四季 ー

俺は風呂で湯船に浸かり1日の疲れを取っていた。

「身体洗うか・・・」

そして俺が身体を洗おうとすると、

ガラツ!

「ん? !! 四季!?!」

四季 「ナギサ・／／ 背中流してあげる」

「い、いや／／ なんで・・・」夫婦なんだから問題なし」そうだけどおっ!?!」

なんと四季は自分の胸に石鹸をつけて胸を俺の背中にこすりつけて洗い始めた。やばい!! 理性があっ!!

四季 「ふふっ、メイのよりも大きいでしょ?」

◆◆◆◆◆

・・・お・・・い、おい・・・、おいナギ!

(。D。)ハッ!

メイ「どうしたよ? そんな顔真っ赤にして固まって・・・」

「い、いや、別に・・・」

四季 「ズバリ、ナギサはエッチな妄想をしていた。恐らくきな子ちゃんが私達が夫婦みたいって言ったからそのシチュエーションで」
なんで分かるの!?

夏美 「うわくナギくんそれは引きますの・・・」

「俺だつて男なんだからしょうがないだろ?!」

そう、しょうがないんだ。異論は認めない。

メイ「まあそれは良いとしてそろそろ午後の授業だぞ? 午後一で

体育つてきついな・・・」

四季 「食べたばかりで運動させるって・・・」

「じゃあ俺は更衣室行ってくるよまた後でな」

そして俺は体操着を持って席を立つ。

「あつ、そうだ:メイ、四季、昨日も今日も弁当ありがとな? 美味かつ

たよ」

メイ・四季「お、おう（う、うん）！！／＼／＼」

二人共満面の笑顔を浮かべ、見届けた俺は午後の準備をするのだった。

ー 続く ー

第1部 4章：L i e l l a！ ラブライブ！への挑
戦！！

結ヶ丘 生徒会発足

恋先輩のゲーム騒動の時の一件でかのん先輩が結ヶ丘の生徒会副会長に就任。そして今日は他のメンバーが決まったので生徒会の発足式が行われていた。

理事長「それではこれより、生徒会発足式を始めます。生徒会書記、桜小路きな子」

きな子「は、ハイっす!!」

名前を呼ばれたきな子が舞台袖から壇上へと上がっていく。唯一の1年生メンバーということでガチガチに緊張していた。

理事長「続いて会計、七草七未」

七未「はい!!」

続いてはかのん先輩のクラスメイトで友達の七草先輩。何かとスクールアイドル部を気にかけてくれる優しく頼れる先輩だ。

夏美「今までにない新しい人選ですの」

メイ「今後のために、音楽科以外の生徒も入れたほうが良いって：恋先輩が」

「さすがだな・・・」

四季「同感」

可可「クク、会計やりたかったデスウ・・・」

千砂都「まあまあ・・・その分部の方で頑張ってる?」

すみれ「はあ、遠退く生徒会長・・・まだ拘っていたのデスか?」

理事長「最後に副会長、澁谷かのん」

かのん「はい!!」

最後にかのん先輩が壇上に上がる。これに会長の恋先輩を加えた4人が生徒会だ。

恋「結ヶ丘高等学校生徒会は、新たなメンバーを加えて活動を続け

て参ります。来年はいよいよ3学年が揃う大事な年、それにむけて来週はオープンキャンパスがあります。そこでこの学校の魅力を広く伝え、ここにいる全員が誇れる様な学校を共に作って行きましよう!!」

体育館に集まった全校生徒から盛大な拍手が沸く。壇上ではかの人先輩と恋先輩がアイコンタクトで決意を固め、いよいよ新たな形でスタートする。

◆◆◆◆◆

そして放課後の部活中、クウクウ先輩が去年のラブライブ東京大会や地方大会で他のスクールアイドルが使ったステージがプロジェクトを使い映しだしていた。しかし、ここですみれ先輩が電気をつける。

すみれ「アンタはまた何をやってんのよ……」

可可「勝手につけるなデス!!」

きな子「朝っすかあ?」

いや寝てたんかい!? せめて話くらいは聞いてやろうぜ? ためになるかは別だけど。

メイ「寝てたのかよ!?!」

四季「me too…」

いや四季もかい……。クウクウ先輩唾然とした表情になってんだ。だんだんとクウクウ先輩の悪ノリに対する扱いが雑になってきてる気がする。

千砂都「つまり、それだけステージが重要ってこと?」

可可「そうデス! 今年は地区予選からいきなりのリモート大会! 去年よりもたくさんさんのグループが参加スル中で、目立つことが必要なデス!!」

そしてミーティングを切り上げ練習が始まり、スクールアイドル部は校外に走りに出掛けた。今日の行き先は神宮外苑球場方面だ。

かのん「去年以上か……」

すみれ「具体的にアイデアあるの?」

可可「スマイレがそういう身も蓋もないコト言うと思って、ククが用意してましたよ？　ズバリ、外苑球場貸し切り計画!!」

……ハア？

千砂都「……行くよ〜？」

あら、千砂都先輩にまで「何言ってるんだコイツ？」みたいな目で見られた上にスルーされてるよ。無理もないな。

可可「アア！　待つデス!!」

すると可可先輩は球場案内図を使つて説明する。

いや、無理だから。

可可「このグラウンドのど真ん中にステージを作つて、360度どこからでもライブを見れるようにするのデス!!」

メイ「スツテキ〜!!」

メイまで何言ってるんだ？　確かにできたら凄いが無理に決まってるんだろ？　机上の空論も良いところだ。

すみれ「アンタ、前に一度断られて無かった？」

いや、既に頼んだ事あったんですか……。

夏美「費用対効果も全く釣り合いませんの」

全くもつてその通りだ。

可可「大丈夫！　地元の学校デスよ？　しかも優勝候補!!」

メイ「そうだよな！　スクールアイドルなら、試してもいないのに諦めるなんてするな!!　な？　ナギもそう思うだろ!？」

メイは空気に流されすみれ先輩に説教する。いや、今回は俺もすみれ先輩側だぞ。

「いや全く、無理だと思う。「ハア!?　お前まで言うか!!」じゃあやつてみれば?」

可可「メイさん!!　分かってくれますかあ!!」

メイ「当たり前だ!!　頑張れば必ずできる!!」

そして2人は肩を組んで「諦めない気持ちこそスクールアイドルだあーっ!!」と叫びながら球場の中へと走つていつてしまった。

……数分後

可可「ダメ・・・でしたあ・・・」グスッ
メイ「スツゲエ怒られた・・・」グスッ
だから言ったろ？

すみれ「当たり前でしょうが・・・」

メイ「無念・・・」

千砂都「この2人、意外と似てるね・・・？」
かのん「う、うん・・・。でも、どこが良いのかな？」

夏美「フフフツ、ここは無駄にマニーを使うより、効果的な作戦を
考えるべきですよ」

千砂都「効果的？」

恋「何かあるんですか？」

夏美「よく考えるんですの。勝者は視聴者の人気投票で決まる。つ
まり、如何にして視聴者の興味を惹くかが重要ですよ」

きな子「それは分かってるっす」

四季「問題はその方法」

夏美「簡単ですよ。例えばLiella!に投票してくれた人には
メンバーの秘蔵写真をプレゼント・・・アホかあ!!」バシツ！ 痛い
!!」

四季「ナギサ、ナイス」

そういうのは賄賂って言うんだよ。思いっきりルール違反に決
まってるだろ！ それに・・・

「メイや四季のそんな姿を衆愚に晒してたまるか!!」

メイ・四季「ナギ（ナギサ）!!」

2人が感激の眼差しで俺を見つめる。あの、あなた達も何か言いな
さいよ？

かのん「いや2人が大切なのは分かるけど、応援してくれるファン
を衆愚なんて言ったら駄目だよ!？」

千砂都「とにかく、皆で考えて見つけるしか無いよ。Liella
!と結ヶ丘、そして私達の事がちゃんと伝わる”シンボル”になるよ
うな場所」

四季「シンボル・・・」
そして学校に戻り、その日は解散となった。
― 続く ―

オープンキャンパス

翌日、かのん先輩たち生徒会の面々は生徒会室で作業を行っていた。

かのん「とは言った物の・・・ハッキリしないよねえ」

きな子「結ヶ丘のシンボルの事っすか？」

かのん「うん。例えば、雪国なら雪のイメージだし、海が近い所なら海だろうし・・・」

きな子「結ヶ丘も近くに有名な所はいっぱいあるっすよ？ 表参道に、オシャレなカフェに・・・」

かのん「でもそれが結ヶ丘を表してるか？って言うത്・・・確かに、有名過ぎて結ヶ丘を表してるって感じじゃ無いよね」七未ちゃん

七未ちゃん「オープンキャンパスの各部活の企画案が入ったファイルを机の上に置く。」

かのん「こんなにあるの!？」

恋「それだけ、皆この学校の事を・・・!!」

七未ちゃんは笑顔で頷き、

七未「うん。皆どんどん好きになっていってるんだと思う!!」

かのん先輩も嬉しそうだ。

きな子「スクールアイドル部はオープンキャンパスどうするんすか？」

かのん「うっ、すっかり忘れてた・・・」

恋「やはり、ライブを行ったほうが・・・それなんだけど!？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

可可「やらないんデスカライブ?!」

かのん「うん、生徒会で話したの。私達は地区予選に集中しようって」

千砂都「良いの?」

可可「そうデスよ!! ククなら平気デス。1つくらいライブが増えたって!」

かのん「私もそう言ったんだけど・・・それだとスクールアイドル部ばかりが目立つことになるって、だからここは、他の部活の力で成功させて」結ヶ丘はスクールアイドル部だけじゃない!」ってところをアピールしたほうがって」

すみれ「となると・・・私達は?」

可可「ライブをしないととなると・・・」

そして結ヶ丘オープンキャンパス当日、学校には入学を考えている中学生がたくさん来てくれた。ほぼ女生徒だが、男子もチラホラ見える。

マジで男子1人くらい入学してくれないかな・・・。男1人って結構辛いから。

さて、スクールアイドル部の出し物はどういうと、

千砂都「いらっしやうい!! ちいちゃんの、ネオ・レインボーたこ焼きが焼けたよー!!」

千砂都先輩がキッチンカーのたこ焼き屋をしていた。っていうかどうやったたらたこ焼きの見た目が虹色になんの? 怖くて食べないんだけど。

すみれ「全然ね」

千砂都「おかしいなあ、こんなに丸いのに・・・いや、関係無いだろ」

四季「どう見ても原因はこの不気味な色」ピンチはチャンス!」
ここで夏美の登場。果たして状況を打開する一手を打つのか、はたまた更に悪化させるのか?

結果は・・・?

夏美「なんで売れないんですの!!」

うん、まあそうだよ。夏美は相変わらず悪い意味で期待を裏切ら

ない。たこ焼きとスムージーを合わせたせいで見た目が酷いことに。だって虹色のたこ焼きが、真っ赤なスムージーの中に浸かっているだぞ？ 逆にこれがイケると思った夏美の頭が恐ろしいわ。

夏美「ナギくん食べてみてですよ!!」

「やだよ!!」

四季「私もパス」

メイ「というかどうやって飲むんだよ？ たこ焼きがストローを通らないだろ？」

夏美は今言われて気付いたのかハッ！ とした表情を浮かべる。いや気付けよ。

夏美「なら私が直々に!」

すると夏美はスムージーをストローで飲む。すると熱々のたこ焼きで熱せられた部分が口の中に入り、

夏美「ブツ!? 熱っついですよー!!」

メイ「何やってんだよ」

四季「愚かさん」

四季も今日は毒舌が冴えわたる。



所は変わり生徒会サイド、

恋「こちらは問題無い様ですね。きな子さん、音楽科の演劇の手伝いお願いできますか？」

きな子「了解っす!!」

きな子が手伝いに向かい、かのん先輩と恋先輩が2人になる。

かのん「オーブンキャンパス、たくさん来てくれて良かったね？」

恋「生徒が少ない分、結束力があって良い学校だとこの前雑誌にも紹介されました」

かのん「フフツ 恋ちゃんのお母さんの願った通りの学校になってきてるんだね？」

? 「お姉ちゃん!」

かのん「ありあ?! 今日来てたの?」

ありあ「驚かせようと思って黙ってた。私も進路決めなきやだしね」

かのん「だったら私が学校を案内してあげたのに・・・」

可可「ありあさん! 来年ぜひ、スクールアイドル部ドウデスカあ?」

クウクウちゃんがありあに勧誘を仕掛ける。ありあちよつと押し返されてる。

かのん「クウクウちゃん!」

可可「姉妹でスクールアイドル! アツい展開デスよ!!」

ありあ「い、いやそもそもここを受験するかも決めてないし・・・」
ガクツと頭を垂れるクウクウちゃん。早とちりしすぎだよ。

ありあ「あつ、そうだ!! 行きたいところあるんだった」

恋・かのん「?」

そしてやってきたのは資料室。ここにはこの学校の前身となる神宮音楽学校時代の記録や地域の行事の参加記録、結ヶ丘になってからの記録が納められている。

ありあ「うわあ〜! 本がいっぱい!!」

可可「妹さんは本に興味があるのデスね」

かのん「お父さんに似たんだよ多分。休みの日は、いつも本ばかり読んでるし」

可可「姉妹というのはイロイロなのデスね」

ありあ「面白いよね・・・ここ、元々は音楽学校だったんでしょ? どうしてこの場所に学校を作ろうって思ったんだろう」

かのん「どうしてって・・・」

恋「この場所に作られた理由は、私も知らないです」

ありあ「ふ〜ん」

かのん（ありあ・・・）

その頃スクールアイドル部サイド

すみれ「どうすんのよ、こんなに余らせて!! やっぱりスムーズー
なんて!!」

夏美「何を言ってるんですの!! 問題はたこ焼きですの!!」

千砂都「違うよ!! 丸は最高だよ!? 「丸は関係無い!!」

メイ「もうどうでも良いよ」

四季「!! 意外と、イケる」

「マジか!?!」

スクールアイドル部の”ちいちゃんのたこ焼き屋台”は、もう見た
目がかオスな状態になっていた。

ー 続く ー

皆の想いを背負って

ありあさんと別れた後、かのん先輩は資料室で神宮音楽学校時代まで遡り、この学校と街の歴史を調べていた。

かのん「音楽学校の歴史・・・「いた！」 あっ、ちいちゃん・・・そうだ片付け!!」

千砂都「もう終わったよ？ はいコレ」

千砂都先輩はたこ焼きスムージーをかのん先輩に手渡す。受け取ったかのん先輩は見た瞬間顔を引き攣らせて「何これ・・・」やっぱりそうなるよなあ。

千砂都「えへへ・・・売れ残り」

かのん「そりゃ売れないよこんなの」

千砂都「アハハ。かのんちゃん、この街の歴史調べてるの？」

かのん「うん。この学校がなんでここにあるのか、それがステージを決めるヒントになればと思って」

千砂都「そっか、見つかった？」

かのん「残念ながらまだ・・・」

ブーツ ブーツ！

するとここでのかのん先輩のスマホに着信が。

かのん「サニパさん？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

場所を部室に移し、前年度ラブライブ！の覇者、”サニパッション”の2人とテレビ電話を繋ぐ。

かのん「ステージ？」

悠奈「せっかくなら、1番信頼してるスクールアイドルにお披露目したいなあって」

摩央「自信作なの」

可可「サニパッション様の・・・」

メイ「ステージ!!」

すると夏美がスマホの撮影モードを起動し画面を撮影しようとする。ライバルグループのネタバレを起こそうとする夏美だが、四季が間にたこ焼きスムージーを割り込ませて阻止する。

四季「信頼関係」

夏美「わ、分かってますの……」

「夏美、後でお置ききな？」

夏美は絶望の表情を浮かべるが、残念ながら止めようとする者はいなかった。

メイ「当たり前だろ……」

悠奈「では、本校初公開!! これが、私達のステージだよ!!」

そしてカメラの視点がステージに移る。

サニーパッションのステージは海の上に浮かび、ステージバックに太陽を模したアーチがあり、サイドを南国を意識したデザインで固めていた。

L i e l l a ! 『うわあ〜っ!!』

可可「ステキなステージ!!」

メイ「リモートじゃなくて生で見え!!」

摩央「島の皆が私達をイメージして作ってくれたの。最後だからって」

かのん「最後？」

悠奈「うん。この地区予選を仮に突破できたとしても、東京大会や本戦は本土になる。そうすると、この島でライブできるのは最後だから……」

摩央「この島で生きて、仲間がいたからこそまで来られた」

悠奈「この学校と、この島をもっと盛り上げたい!! 皆に来てほしいって! お互い、ステキなライブにしようね!!」

可可「ハイデス!!」

メイ「ありがたきお言葉……!!」

そして、映像は途切れた。

かのん「私達も、見つけなきゃ!!」

◆◆◆◆◆

翌日、今日は祝日のため学校は休み。俺とメイと四季、いつもの3人は街に遊びに出掛けている。今は3人でクレープを食べていた。

メイ「ハムツ 美味しいな」

四季「美味しい・・・」

「ここ前に見つけたんだよ。気に入ってもらえたなら良かった」

メイ「ナギよくこんなところ見つけたな・・・ん？ アレは・・・」
「どうした？」

メイの視線の方向を見ると、かのん先輩ときな子が2人で歩いていった。

メイ「きな子!! かのん先輩と2人なんて!!」

メイは二人の方へと駆け寄る。かのん先輩たちも気づいたのか俺と四季もメイの元へと駆け寄る。

かのん「3人で出掛けてたの？」

四季「はい。食べ歩きしようかって」

「きな子とかのん先輩は何してたんですか？」

きな子「2人で散歩つす。この街どこに行っても賑やかで、きな子は人の少ない所で育ったからワクワクしてくるつす!!」

するとかのん先輩が突然静かになった。

かのん「どこも賑やか・・・人が集まる街・・・かのん先輩？」っ!
ゴメン！」

四季「何かヒントが？」

かのん「うくん、喉の奥まで出かかっている様な・・・」

ああ、そういうときあるよな。でもかのん先輩がこういう時って本当に答えが出る寸前が多いから期待できる。

すると近くの店の扉が開き、

かのん「あっ、七未ちゃん」

七未「あっ、ナイスタイミング!!」

そしてスクールアイドル部は全員集合してかのん先輩の実家の喫茶店へ。

七未先輩たちからLielia!に話があるらしい。

七未「生徒会は私達に任せて!」

恋「どういう事ですか?」

七未「ラブライブ!が終わるまで、かのんちゃんたちは練習に集中!」

八重「その間、生徒会の仕事は私達がんばります!!」

九乃「去年もステージ作り手伝ったでしょ?」

かのん「嬉しいけど、もし全国大会まで行けたとしたら・・・」

恋「かなりの長期間頼る事になってしまいます・・・。そこまで甘えるのは」

九乃「私達も、かのんちゃんたちと一緒に喜びたいの」

八重「だからやれる事、手伝える事があれば全部やりたい!!」

七未「悔いが残らない様に!!」

っ!! 本当に・・・結ヶ丘は良い学校だな。

可可「ウアアアッ」

千砂都「クウクウちゃん泣くの速いよ?」グスツ

可可「そう言う千砂都も泣いてるデス」ズビツ

すみれ「泣き虫なんだから」ズズツ

夏美「そう言ってるすみれ先輩も泣いてますの」

恋「グスツ ありがたいです・・・」

皆が笑顔になる。Lielia!の面々は、ここは皆の好意に甘える事にし、練習に集中することにした。

翌日からLielia!の練習が再開。生徒会をみんなに任せ、Lielia!全員で練習する。

可可「ハイ! ワン・ツー・スリー・フォー・ファイブ・シックス・セブン・エイト!!」

クウクウ先輩の掛け声のリズムに合わせて皆が踊る。俺は横で皆の動きを見てフォームチェック。

「かのん先輩少し速いです!! メイと四季は逆に気持ち速めに!! きな子と夏美良い感じ!!」

かのん「わ、分かった!」

メイ・四季「了解!!」

きな子「分かったっす!」

夏美「了解ですよ!!」

七未先輩たちサイドは、

九乃「あれ? どうしても数字合わない」

八重「一から計算してみなよ」

九乃「なんで合わないのーっ!!」

八重「葉月さん、こんなに大変なことを一人でやってたんだ・・・」

七未「私も生徒会に入ってビックリしたんだよ」

また別の日、体育館に場所を変えてL i e l l a ! サイド。すみれ先輩と四季は平均台の上でY字バランスをしていた。

教師「しつかりと体幹を意識して」

すみれ「分かってるわよ!!」

四季「・・・」

夏美「凄い! できてますの!!」

四季「止まっているのは得意」

四季、凄げえ・・・。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

七未「L i e l l a !、ステージ会議を始めます!! アイディアが

ある方は挙手してください!!」

すると次々と手が上がっていく。

全校生徒の皆がこんなにサポートしてくれるなんて、本当に身の引

き締まる思いだな。俺もマネージャーとして頑張らないと!!

(メイ、四季・・・あの二人は随分と待たせちまってたんだよな。俺が気付かなかつたせいだ・・・あの二人がこんなに頑張ってるんだから、俺もそろそろ選ぶ覚悟と傷つけてしまう覚悟を決めるべきかな)

ー 続く ー

Chance Way!

練習終了後、俺たちは表参道のとある歩道橋の上に集まっていた。
かのん「うわあ〜！ またこんなにな〜！」

恋「ステージの候補です。七未さんたちが、学校の皆からアンケートを取ってくれました」

メイ「予想通り、表参道が多いんだな」

すみれ「100年以上前からこの道あるからねえ・・・」

夏美「やつぱり、目立つんですの」

可可「でも、去年の東京大会で歌った場所デス」

千砂都「敢えて同じ所っていう選択肢もあるけど・・・」

「インパクトとしては弱いですよね」

四季「難題」

きな子「っすね」

どうしたもんかなあ・・・

かのん「去年、この場所にステージ作ってくれたの学校の皆だったよね？」「うん」きつと、この場所が良いって皆が思ったんだよね」

かのん先輩の目には何が映っているのか・・・

かのん「(表参道…道…)っ!! さっきのリストに!!」

かのん先輩は突然ステージ候補のリストを見たかと思ったら突然駆け出していった。なんだ!?

可可「かのん!?!」

恋「どうしたんですしよう?」

「追い掛けましよう!!」

俺たちは急いでかのん先輩を追い掛ける。距離が離れてしまっているため見失わないように必死に走る。

かのん(そうだ!! 賑やかで、皆が集まって!!)

かのん先輩は走る。自分がここだ!と直感した場所へと。

かのん「ずっと昔から、ここにあって!! 思いが繋がる、私達の!!」

そして、かのん先輩は目的地に辿り着き、足を止める。

千砂都「かのんちゃん!!」

可可「速いデスう!!」

すみれ「何なのよったら、何なのよ!!」

かのん「皆? どうしたの?」

「どうしたのって……それはこっちの台詞ですよ!!」

恋「誰だつて、あんなに急に飛び出していったら気になります!!」

かのん「あつ、アハハ…ゴメ…」

メイ「つたく、それで? なにがあつたんだよ?」

かのん「分かった気がしたんだ。私達のステージ!!」

四季「私達の」

きな子「ステージ…」

夏美「どこなんですか?」

かのん「ここだよ?」

千砂都「ここって?」

目の前には、左右にケヤキ並木が広がる開けた道路があった。

かのん「道・道が集まる場所だったからなんじゃないかな? 私

達の学校ができたのは!!」

恋「道・ですか?」

かのん「うん! 道が集まり、人が集まる場所だったから、それぞ

れの夢や希望が集まり、繋がる場所だったから!!」

風が吹き、イチョウの葉が舞い散り、秋を感じさせる幻想的な空間

を作り出した。

そして、予選当日。L i e l l a ! の衣装は祭りを意識したはつぴ風の衣装。曲もそれに合わせて祭り風の和テイストの曲調になっている。

かのん「聴いてください!!」

L i e l l a ! 『 C h a n c e D a y , C h a n c e W a y

』!

そして、ライブは大成功で終わり、

かのん「L i e l l a ! の道が…結ヶ丘の道が、皆さんと交わりま

すように!!」

万来の拍手で、L i e l l a ! の地区予選は終わった。

「お疲れ様」

メイ「サンキュ！」

四季「緊張した」

「本当に頑張ったな。俺も頑張らないと」

メイ「ナギ？」

「俺も、そろそろ意中の人を決めないと」

メイ・四季「!!」

もうこれ以上待たせることはできない。いい加減答えを出さないと。

「東京大会が終わったら、結果に関わらず答えを出す。良いか？」

メイ「・・・分かった！」

四季「それがナギサが本気で悩んで決めてくれた答えなら」

メイ・四季「アタシ（私）たちは文句は無え（い）よ」

全く…本当に、俺には勿体ないくらいの良い幼馴染みを持ったよ。

そして、L i e l l a ! は地区予選を突破し、東京大会に駒を進めた。

― 続く ―

大波乱!!

地区予選の翌日、結ヶ丘では……緊急の校内放送が流れていた。アナウンス『お知らせします！我が結ヶ丘が誇るスクールアイドルLielia!の、東京大会進出が決定しました!!』

その瞬間、校内から歓声が湧き上がる。周りの生徒たちは次々と喜びを爆発させ、自身の周りの生徒たちと感情を共有する。

ー 1年生教室 ー

生徒「おめでとう!!」

きな子「ありがとうっす!!」

生徒「夏美ちゃんも入ったばかりなのに凄いよね!! これ、バズってたよ!!」

クラスメイトがTwitterに投稿されていたこの間のライブの写真を見せると、夏美の写真に2万件程の”いいね!”が。

夏美「!! コレはっ…来たっ! ついに来ましたのーっ!!」

喜びを爆発させる夏美。報われて良かったな……。

メイ「まだ地区予選だって言うのに……」

四季「でも、メイも人気」

メイ「え?」

「見てないのか? ほら」

見せると、メイの写真も2万件を越える”いいね!”が。

四季「”いいね!”2万。やっと世間がメイの可愛さに気が付いた」

「だな……」

メイ「そ、そんな訳っ無いだろ?! / /」カアアアアツ

メイの顔が茹でダコのように赤く染まる。が、

「でも、四季はもっと凄いじゃないか。見てないのか?」

四季「え?」

写真を見せると、四季には”いいね!”が2万5千件程。

四季「っく?! / /」カアアアアツ

四季の顔がメイ以上に赤く染まる。全く……、

「要するに、二人の可愛さにやっと皆が気付いたってこった。俺の幼

馴染みは二人揃って最っ高に可愛いってさ」

その言葉に二人の顔は限界を軽々超えて真っ赤に染まる。手で顔を覆ってのみ出ている部分から真っ赤なのが分かるほどに。

その頃…2年生の教室では、

七未「おめでとう!!」

かのん「うん、ありがとう！でも大切なのは次の東京大会だよ」
千砂都「そう。今度こそは決勝戦に進んで皆と喜ぶんだって、かのんちゃん気合入ってるんだ!!」

すみれ「まあ、既に感極まっちゃってる人もいるみたいなんだけど……」

恋「本当に…本当にありがとうございます!!生徒会長なのに、皆さんに助けてもらうことばかりで……」

九乃「そんなこと無いって!!」

八重「学校は皆の物でしょ?」

恋「っ! 皆さん…はい!!」

すみれ「で? 東京大会の新しい情報は?」

可可「うるさいデスね。ほぼグループが出揃ってマスが…っ!?ん? そんな…まさか…っ!」

千砂都「クウクウちゃん? どうしたの?」

可可「サニパ様が…予選通過者に、サニパ様の名前が無いのデス!!」

かのん「ええ?!」

すみれ「まさか!? 予選で敗退したってこと?!」

可可「何を失礼なことを言ってるのデスか? サニパ様に敗退はありえません!!」

すみれ「そのサニパの名前が無いんでしょうが!!」

かのん「どうして…っん?」

その時、かのん先輩のスマホにサニパから連絡が来た。
新たな波乱の暗雲が渦を巻く。



放課後、俺たちは部室でサニパの二人とパソコンでテレビ電話を繋いだ。

悠奈「おっ、皆揃ってるね!!」

摩央「東京大会進出おめでとう」

悠奈「コングラッチュレー…パアツ!」

かのん「あの!! 何があっただんですか?」

メイ「去年も一昨年も、地区予選はブツチギリで突破していたはずなのに!!」

悠奈「……だよな?」

摩央「慢心…と言われても仕方ないかもしれないわね。手を抜いた訳じゃないんだけど…少し、油断していたのかもしれない」

悠奈「たった一人に、負けちゃったんだよね」

かのん「一人……」

なんだろう、一人…この言葉に嫌な予感がした。

摩央「あなた達も、会ったことあるんじゃない?」

摩央さんがスマホを見せるとそこに映っていたのは、俺の嫌な予感を的中させる人物の写真だった。

可可「アアーーッ!! ウィーン・マルガレーテ!!」

「こいつは!!」

メイ「代々木スクールアイドルフェスで、かのん先輩たちに勝った!!」

四季「中学生の……!!」

悠奈「そう。私達の後に歌ったんだけどね…聞いた瞬間、しまつたって…分かっちゃった。圧倒された」

嘘だろ……? あのサニパッションを圧倒したのか? 前年度

優勝者のサニ―パッションを……？

可可「サニパ様が……」

かのん「圧倒されるなんて……」

夏美「そんな凄いんですの？」

すみれ「何なのよ!! 次から次へと強敵が湧いてきて!!」

悠奈「弱気になってる時間は無いよ!!」

摩央「昔と違って、今のラブライブ!は年に1回。高校3年間でチャレンジできるのは3回だけ」

悠奈「1回1回を、これが最後つてつもりで挑んだ方が良いよ? でないと…気付いたときには、終わってるから……」

悠奈さんが涙を見せる。あの天真爛漫な悠奈さんが……

かのん「悠奈さん……」

悠奈「というのが、お節介な先輩からのアドバイス!」

摩央「優勝目指してね?」

悠奈・摩央「じゃあね!!」

テレビ電話が終わったあと、二人は涙を浮かべていた。

子供「悠奈お姉ちゃん! 摩央姉ちゃん!!」

悠奈「皆…ゴメンね?」グスツ

子供たちは笑顔で慰めてくれたが、悠奈さんと摩央さんの心は晴れなかつた。

― 続く ―

すみれの決断

サニパとのテレビ電話の後、俺たちはかのん先輩の家の喫茶店で祝勝会を開いていた。

途中でかのん先輩のお母さんと妹のありあさんが作った喫茶店のマスコットのキノハズクのまんまるを模したケーキが登場。

かのん母「はいどうぞー!」

ありあ「東京大会進出おめでとう!!」

恋「ありがとうございます!」

かのん母「じゃあ今ハンバーグ焼いて来るからね!」

何故にハンバーグ? と思ったが、そう言えばかのん先輩の好物だったな。

かのん「うん…」

ありあ「あれ? 嬉しくないの?」

かのん「いや、喜びたいのはやまやまんだけどね?」

千砂都「次の山が大きくてね」

「複雑なんスよ……」

千砂都「まんまるはどうすれば良いと思う?」

千砂都先輩……、動物に聞いたつて分かりませんよ。まんまる自身も首を傾げてるじゃないですか。

ありあ「ふくん…あれ? その子……」

ありあさんが可可先輩がいじっていたパソコンを覗き込んで声を上げる。

可可「ウィーンがどうかしたんですか?」

ありあ「さつき店に来てたよ? そこでお茶してた」

可可「ゲツ!」

かのん「偵察?!」

メイ「もうそんな事までしてんのかよ!」

夏美「こうなったら、強行手段で行くしか無いんですの!!」

夏美の言葉に四季は、懐ふところから紫色の毒々しい色をした液体が入った小瓶を取り出す。

夏美「大会当日…この液体をあの子の飲み物に一滴垂らせば、その瞬間私達の決勝進出が決定ですよ!!」

四季「ブイ」

メイ「ブイじゃねえよダメに決まってるだろ?!」

すみれ「どうしてそういう手しか思いつかない訳?」

可可「すみれも似たようなもんデスけどね?」

四季「リアクション…薄い」

「冗談にしても卑怯すぎるからだよ」

やれやれ…まあ四季は本気でそんなことを考える子じゃないことは皆分かっているけど…。すると夏美はスマホを取り出して、

夏美「では、正攻法でウィーン・マルガレーテの根も葉もないゴシツプを流して、炎上を狙いますの!!」

「おいちよつと待て!! どこが正攻法だ!! 四季もウンウンって頷かない!!」

夏美「ネットの世界では十分正攻法ですが?」

すみれ「適当な事言わないの!!」

全くコイツらは…千砂都先輩? さつきからずっとこの前のライブ映像を見返してる。なんだ?

きな子「千砂都先輩? 何か気になる事でもあったんすか?」

千砂都「えっ?! う、ううん…なんでもない」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

かのん「じゃあまた明日!」

メイ「お疲れ様でした!」

きな子「失礼するっす!」

「お疲れ様でした!!」

そして1年生は帰っていく。

千砂都「2年生だけ残れるかな?」

かのん「え?」

恋「1年生が?」

千砂都「うん、動画見てハッキリ分かったんだ。まだ私達とかなり

実力差がある」

かのん「1年生頑張ってるよ？ このステージだって、私達と一緒にのステップできてたし……」

千砂都「それはもちろん分かってる！ けど……」

すみれ「できてるっていうのと、勝てるかっていうのは別の話ってことでしょ？」

可可「このままでは、決勝進出は難しいデスか？」

千砂都「……たぶん」

すみれ「で、千砂都としては1年生に猛特訓させた方が良くって考えてるわけね」

千砂都「どうするのが良いのか、皆の意見聞きたくて……」

恋「ですが…話したら気にしますよね？」

すみれ「そりゃあね。ただでさえ、私達と差を感じてるって言うって……」

可可「話さなくて良いと思います」

かのん「クウクウちゃん……」

可可「1年生は頑張ってるマス。今話したらきつと、頑張りすぎてしまうと思ひマス。歌うのが辛くなってしまふと思ひマス」

すみれ「でもさ…アン：「ククは皆で楽しく歌いたいデス!!」っ！」

かのん「うん。私も賛成」

千砂都「じゃあ、1年生には言わずに練習メニューの方を少し考え直してみようか？」

可可「っ!! はいデス！」

すみれ（……………）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

かのん「じゃあちいちゃん、クウクウちゃん、練習メニューの方よろしくね？」

千砂都「分かった！」

可可「はいデス！」

そして可可先輩とすみれ先輩の帰り道……

可可（……………すみれ、なんでついてくるデス）

可可「なんですすみれがこっちに来るデスか？ 家は向こうでしょ？」

すみれ「寄る所があるの」

可可「だったら一人で行くの良いデス。ククはこっちから帰りマスから」

そして可可先輩は再び歩き始める。

すみれ「良いの!？」

その瞬間、二人の雰囲気そのまま表すかのように雨が降り始める。

可可「何がデス？」

すみれ「ラブライブ！で結果を出さないと、上海に連れ戻されるって約束はまだ生きてるんでしょ？ 去年見逃して貰ったって事は、今年は何が何でも結果を出さなきゃ：「すみれには：関係ないデス：」関係なくない！ 少なくとも、L i e l l a！にとっては大きな事でしょう!？ それとも：そんなに皆のことが信用できないの：：：？
クウクウ!!」

可可「……嫌いデス」

すみれ「皆にちゃんと話した方が良い！「できません：ククは皆と楽しく歌っていたいのデス。それがククが夢見た、スクールアイドルなのデス」クウクウ!!」

そして、可可先輩は走って行ってしまった。

すみれ「待ってクウクウ!! ？」

すみれ先輩は、クウクウ先輩が落としたキャラクター人形を拾い上げた。

すみれ（クウクウ……）

その頃、かのん先輩は自室でスマホを使ってラブライブ！情報を見ていた。

かのん（……カッン？）

何かが窓に当たる音がして、かのん先輩は外に出た。

かのん「あれ？」

? 「澁谷かのん…」

かのん「!?!」

かのん先輩の視線の先には……

かのん「ウイーンちゃん……」

ウイーン「どうしてこんな所で歌っているの?」

かのん「えっ?」

ウイーン「私が本当の歌を教えてあげる。あなたが歌っているステージが、いかにちっぽけでくだらない場所か、思い知らせてあげる」かのん「っ!! くだらなくなんかない!!! 私達が歌っているステージは…ラブライブ!は、最高の場所!!」

ウイーン「そう? 私の言葉を覚えておいて。当日、その意味が分かるから」

そして、ウイーン・マルガレーテは去っていった。

かのん（絶対に負けない!!）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌日の放課後、俺たちは練習のために着替えて既に屋上に集まっていた。

きな子「先輩たち遅いつすね?」

メイ「何かあったのかな?」

「確かに…珍しいな」

すると扉が開き、

千砂都「ういーっす!!」

「あ、来た」

可可「今日から練習メニューが新しくなりマス!」

きな子「おお!!」

メイ「いよいよ東京大会に向けてか!!」

四季「気合いが入る」

夏美「今から筋肉痛が心配ですの…」

千砂都「じゃあ早速始め……」「1つ良い?」すみれちゃん?」

すみれ「その前に、私から話があるんだけど」

千砂都「なに?」

すみれ「次のステージは…2年生5人だけで立った方が良いと思うの!!」

・・・は？

一瞬だが、全員すみれ先輩が何を言ってるのか、理解できなかった。

ー 続く ー

激昂

次のステージは、2年生だけで立つ。すみれ先輩の発した言葉を理解するのに時間がかかったが、やっと理解した千砂都先輩が言葉を発する

千砂都「すみれちゃん…」

恋「本気なのですか？」

すみれ「ええ、昨日一晩考えたの。あの子に勝つには…決勝に進むにはそれしかないって」

確かに、2年生に比べて1年生はまだ未熟。かなりの実力差があることも分かっている。けど…っ！

「要するに…メイや四季、きな子と夏美…皆が足手まといつてことですか…？」

俺の頭の中は、驚くほどクリアだった。しかしそれは、冷静だったからではない。

そんな俺に対して、すみれ先輩は…

すみれ「そうよ」

ハッキリと、俺の言葉を肯定した。

「この野郎!!」

千砂都「渚くんダメっ!!」

メイ「止めろナギ!!」

四季「落ち着いて!!」

「離せ!!…信じた俺が馬鹿だった!!…こんなヤツ!!」

三人が必死に俺を抑えるがあまりの力に三人は振り回される。だが、

かのん「すみれちゃん…本気で言ってるの？」

すみれ「…勝たなきゃいけないの」

かのん「私だつてそう思ってる。けど、L i e l l a ! 全員で挑まなきゃ意味が無い!! だつて、ここにいる全員がL i e l l a ! なんだもん!!」

すみれ「っ！…そんなこと…分かっている。けど、勝たなきゃクウ

クウが!!) 私はね、ショウビジネスの世界に返り咲きたいの!! ここ
で結果を出して、目立って、目立って目立ちまくって!! あの世界に
舞い戻らないと行けないの!! だから…こんな所で負けてなんかい
られない」

「っ!! この女!!」

メイ「ナギやめろ!!」

四季「ナギサ!!」

かのん「すみれ…ちゃんっ…!」

俺は暴れるのを抑えられるが、かのん先輩も頭に血が登りすみれ先
輩に平手打ちをしようとしてしまう。だが手が振り下ろされる寸前
で、

可可「止めてください!!」

かのん「クウクウちゃん?」

可可「止めて…ください…」

可可先輩は涙を浮かべて訴えかける。その涙を見たすみれ先輩は
黙って屋上を去っていった。

◆◆◆◆◆

千砂都「こんなことになってゴメンね? 明日は、朝から練習する
から」

きな子「本当に…大丈夫ですか?」

恋「はい。私たちが話しておきますから。みなさんは今まで通り、
次のステージに立つ準備をしてください」

「あの…すみませんでした…」

かのん「渚くんが怒るのも無理ないよ。あれはすみれちゃんが悪い
…けど、男の子が女の子にあの態度は完全にアウトだよ?」

「はい…すみませんでした…」

そして、俺たち1年生は帰って行った。

千砂都「さてと…とりあえず私が一人ですみれちゃんの話聞いて
きた方が良くいよね?」

かのん「ちいちゃん……」

千砂都「かのんちゃんへの気持ちは分かるよ？」

恋「全員かのんさんに賛成だと思います」

千砂都「ただ……すみれちゃん、何かおかしかった気がするんだよね」
恋「はい。何かを隠してるような……」

かのん「うん。ごめんね？」

千砂都「ううん？ 私は嬉しかったよ？ かのんちゃんが本気なん
だって、本当に……全員のことを大切に思ってくれてるんだって！」

可可「あの……可かに、行かせてくれませんか？ すみれのところに
……」

その頃……1年生side

「くそっ……！」

きな子「ナギサくん……」

メイ「あんまり怒るなよ」

「俺も悪かったけど、お前らはあんなこと言われて悔しく無いのか……？」

夏美「それは……悔しいに決まっていますの。ただ、」

四季「実力差があるのは、事実だから」

っ!! それは……

「ああっ、もう!!」

きな子「先輩たちがすみれ先輩を説得してくれるっすよ……」

だが、メイは立ち止まり……

メイ「それで、良いのかな……？」

「は？……どういうことだ？」

四季「メイ……」

メイ「私達の事を思って、かのん先輩はああ言ってるけど……本当は、
すみれ先輩と同じくらい勝ちたいって」

「勝ちたいのなんか皆同じだよ……でも、すみれ先輩のあの発言は……」

四季「でも、冷静に考えてみたら……すみれ先輩、様子からしておか
しかった」

ハア…？ 俺は今日のすみれ先輩の様子を思い返してみる。

…：確かにおかしかつた様な気がしてきた。

夏美「それはおいておくとしても、学校の皆も期待してますし…」

四季「先輩たちも1年間、この時のために頑張ってきた」

きな子「メイちゃんはどう思ってるんすか？」

メイ「きな子は？」

そして、1年生が出した決断に俺は呆れながらも、心から…：本気で尊敬の念を抱いていた。

この頃には、俺の頭も冷静さを取り戻していた。

― 続く ―

勝利のために！

すみれ先輩は実家の神社の境内を掃除していた。

すみれ「しつかりしなさいすみれ！ 悪者になる覚悟は出来てたはずでしょ!!」「お姉えちゃん!」あやめ(すみれ妹)? どうしたの?」

あやめ「これ貰っていい?」

あやめが出した物は、

すみれ「それクウクウの! 駄目よ!!」

あやめ「ええくっ!? お姉ちゃんのケチ! ベーだっ!!」

そして妹さんは去っていく。

すみれ「くっ、あくっもう! どうすれば良いのよ!!」

きな子「すみれ先輩?」

すみれ「アンタたち…」

メイ「その格好…」

夏美「に、似合ってますの…:…凄く」

すみれ「じ、神社の娘なんだから巫女服くらい着るわよ!! で、何の用?」

きな子「いえ、すみれ先輩に…聞いて欲しいっす」

すみれ「え?」

そして俺とすみれ先輩が見守る中、お互いの手を取り4人は歌い出す。思いを込め、祈るように。

すみれ「っ!!」

歌い終わると、きな子が口を開く。

きな子「今、きな子たち4人の思いをすみれ先輩に送ったっす!」

メイ「だから、次のステージには立たない」

夏美「今回は2年生、5人で立つんですの!」

四季「そして…私達に…」

きな子「勝つところを見せて欲しいっす!」

そして、4人はすみれ先輩に頭を下げる。

すみれ「っ! …:…そんなこと、できるわけ無いでしょ!?!」

「え?」

すみれ「どれだけ練習頑張ってきたと思ってるのよ!! 朝から晩まで、毎日毎日ラブライブ! のために!!」

メイ「え? でも……」

すみれ「皆で一緒に喜ぶために、頑張ってきたんでしょ!？」

さつきと、言ってることが違う?

きな子「なんか……すみれ先輩、言ってることが変わってるっす……」

四季「2年生、5人で出たと言って言ったのはすみれ先輩」

すみれ「っ! それは……」

可可「9人で良いんデスよ!」

きな子「クウクウ先輩?」

突然現れたクウクウ先輩は、ズカズカとすみれ先輩に歩み寄る。

可可「大切なのは全員で歌うことデス! 皆で、最高のステージにすることなんデス!」

すみれ「っ! でもっ!!」

するとクウクウ先輩は優しい表情を浮かべ、

可可「ククは構わないって言ってるのに、どうして余計な事ばっかりするんデスか? 勝手に苦しんでるんデスか?」

すみれ「……嫌なの」

可可「えっ?」

すみれ「アンタと一緒にいたいよ……3年間、一緒にスクールアイドルやりきりたいの!」

可可「っ!!」

その様子を、かのん先輩たちも隠れて窺っていた。

すみれ「クウクウのバカ!!」

可可「すみれっ!!」

そしてすみれ先輩は走って行ってしまった。と、思ったら、あるものを取って戻ってきた。

そのあるものとは……

可可「そのティアラは……」

すみれ「去年の地区予選で私がセンターで歌ったときに、アンタが作ってくれたやつよ。アタシはあれに救われた。だからお礼がした

いの：私の力で、あんたに最後までスクールアイドルをやらせてあげたいの……上海に連れ戻させたくないの！」

メイ「上海？」

「どういうことですか!?!」

すみれ「帰つちやうのよ…勝てないと、結果を残さないと……この子が、クウクウが…連れ戻されちやうの！ いなくなつちやうの!!」
すみれ先輩は大粒の涙を流して崩れ落ちる。それですみれ先輩は、自分を悪者にしてまで……可々先輩のために結果を残そうと……。

可々先輩はしやがみ込むとすみれ先輩の涙を指で拭い言葉をかける。

可々「本当に、すみれは余計なことばかりするのデスね……ククの嫌がる事ばかり…、ククが決めたことに反対ばかりして、ククの言うことにいつもいつも口を挟んで」

すみれ「っ！ うるさい！ うるさい！ うるさい!?!」

可々先輩は思いつきすみれ先輩を抱きしめる。自分の想いを全て伝えるかのように、思いつき……。

可々「本当に…大嫌いデス……」

すみれ「っ！」

可々「大嫌い……、大好きデス…!!」

その言葉に、すみれ先輩は感情のダムが決壊したかのようにボロボロと涙をこぼす。

その様子を、俺たちは黙って見守る。

この人は、本当に仲間思いで…優しい人だったんだ。それなのに…俺はっ!!

四季「ナギサ…」ポンツ

「四季……っ！」

四季「ナギサも…泣いてるよ?」

「っ！」

するとメイと四季は二人で俺を抱きしめ、

四季「今は後悔しても良いから、後でちゃんと謝ること。」

メイ「それまではこうしてやるから、解決したら今まで以上に皆

を支えてくれよ?」

「ああ……………」ズビツ

メイ・四季 「ナギ (ナギサ) ……」 ポンポン
恋 「どうしますか?」

かのん 「決まってるでしょ!!」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌日、

「あの…………すみれ先輩、昨日は…その、本当にスミマセンでした!!」

すみれ 「い、いや…私も悪かったし…覚悟はしてたわ…………」

「いえ、それでは俺の気が収まりません!! すみれ先輩の気持ちも知らないくせに勝手なことを! どうか一発と言わず、先輩の気が済むまで俺をぶん殴って下さい!!」

すみれ 「だから人の話を聞いてくれる!? 仲間にそんなことをしたくないんだってば!!」

「そう言われても…………」

すみれ 「思ってたなかったけど、嘘ついてまで1年生を足手まといだなんて言ったのよ? この子達の努力を見てたのに…………だから、両方悪かったって事で手を打たない?」

先輩…………これで駄々をこねたら滑稽だな。なら、

「分かりました。お互いにごめんなさいってことで」

すみれ 「うん。それでいいわ」

すると、

千砂都 「おーい!! 練習メニューできたよー!!」

そして皆はメニューを受け取る。

夏美 「ゲツ!? こんなにやるんですの?!」

メイ 「体力持つかな…………」

「オーバーワークにならないようにちゃんと見てるから大丈夫だよ!!
クウクウ先輩?」

なんか可憐先輩が絶望したような顔になってるぞ?

すみれ 「できるの? 体力のない泣き虫のくせに?」

可可「その言葉そっくり返しマス！ 泣き虫グソクムシ!!」
すみれ先輩と可可先輩は睨み合うが、二人共笑顔に変わる。

いいコンビだな。

千砂都「じゃあ、1年生覚悟は良い？」

かのん「今日から特訓開始するよ!! この9人、いや……この10人で勝つために!!」

そして俺たちは指をVサインにして、それを全員で繋いで星型を作る。

かのん「L i e l l a ! ! ~ ~ ~ ! !」

L i e l l a ! 『スーパー……スタートツ!!』

いよいよ、東京大会に向けての特訓が開始される。

ー 続く ー

冬の北海道合宿

俺たちは現在山で猛吹雪に見舞われていた。

メイ「夏美ーっ!!」

「どこだーっ! 返事しろーっ!!」

俺とメイが辺りを見回すと後方数メートルに影が。そっちに少し戻ると……

夏美「……………」

「夏美!! 何やって…?」

夏美は自撮り棒片手に硬直していた。まさかこの吹雪で!?!…ん、何か言ってる?」

夏美「…こう視界が悪いと…撮れ高が……」

「よし、お前らほつといて行くぞ!!」

メイ「オイ!!」

そしてきな子の家のペンションに到着。皆部屋で、吹雪で冷えた身体を温めていた。

メイ「あんまり無茶すんなよ……?」

夏美「せっかくの北海道ですよ!? 日々新しい動画を出し続ける事がいかに重要か!! 「はいはい!!そこまで!!」」

すみれ先輩が温かい飲み物を夏美に渡す。夏美はコップを受け取ると手から伝わってくる暖かさでも暖を取り顔がフニャけていた。

夏美「温かいですの〜!! って聞いた話と違いますの!! なんですかこの状況は!!」

四季「それは……」

可可「スゴイ吹雪デス……」

かのん「アハハ……………ハア……」

恋「晴れていれば素晴らしい景色なのでしょうね。晴れてさえいれば……………」

かのん「天気予報見たら明日はすっかり晴れるみだよ? そしたら、たくさん練習できるね!」

千砂都「もう!! かのんちゃんの馬鹿!! かのんちゃんが…あのとき!!」

事の発端は数日前……

― 結ヶ丘スクールアイドル部部室 ―

千砂都「冬休みに強化合宿したいと思います!! 皆の意見を!!」

可可「ここはゼヒ、私の故郷上海に!!」

すみれ「そんな時間は無いでしょ?」

メイ「き、京都とか……」

四季「それはメイが行きたいだけでしょ?」

「多分な」

メイ「うぐっ……」

恋「渋谷区でも合宿できる施設はあるみたいですよ……」

夏美「でもそれだと代わり映えしませんの……」

うくん……どうするかな……ん? 待てよ?

「きな子? 夏休みに1年生の合宿で使わせてもらったお前の実家のペンションって無理か?」

きな子「え? 大丈夫ですよ? 前にかのん先輩も来てくれてお母

さんもまたいつでも来てね? って言ってたっす」

かのん「あつ! きな子ちゃんダメ!!」

きな子「へ? あつ!!」

気がついたときにはもう遅い。前にかのん先輩が来たのは秘密ってことになったのに……当然可可先輩たちはかのん先輩を睨む。

すみれ「説明してもらえる?」

かのん「あつ、いや……そのお……」

すみれ「私、きな子の家行ったこと無いんだけど?」

可可「一人だけ抜け駆けデスか!」

かのん「いや、そうじゃなくて……」

恋「無連絡……」

千砂都「ふーん……そうだったんだあ……」

かのん「ちいちゃん!? ち、違うの!! ほら、前にお父さんが忘れ

物したって言ったでしょ？ それを届けに行つたついでに……ヒイツ?」

千砂都「一言…言ってくれなかったのがショック」

かのん「きな子ちゃん助けてえっ!!」

◆◆◆◆◆

かのん「でも、こういう周りに何も無い環境の方が集中して練習できると思ってたんだ！ 1年生とももつと距離を縮めたいなって思ってたから!!」

四季「……一体感」

かのん「そうそれ!! ここなら自然に全員の距離が近くなると思うんだ!!」

メイ「それは分かるけど……」

きな子「それだけで先輩に追いつけるとは……」

夏美「ですよ!!」

何だよ弱気だな………?

かのん「今回は、1年生も一緒に!!」

翌日、吹雪も晴れて雪が積もりながらも天気は快晴。1年生でダンスが最も上手い四季は千砂都先輩と振り付けを、1年生の中で唯一ピアノが弾けるメイは恋先輩と作曲を、歌詞をノートに書き留めていたきな子のはかのん先輩と作詞、L Tuberの夏美は可先輩、すみれ先輩と東京大会に進むチームの紹介会見の舞台作成と、それぞれの得意分野に合わせて分担して取り掛かる。

「あの、俺は……」渚くんは各方を見て回って手が足りないと思ったところを手伝ってあげて?」分かりました!!」

かのん「よし、じゃあ始めるよ!!」

振り付け 千砂都・四季 side

四季「とは言ったものの……」

千砂都「大丈夫!! 東京大会で歌う曲は全部1年生と2年生が共同で作る! それが一快感を高めるには1番良いつて!!」

四季「それは理解できる。でも無理……」

千砂都「どうして? ダンス1年生で1番得意でしょ?」

四季「分かりやすく言うのと、千砂都先輩がミヤマクワガタだとすると、私は…ダンゴムシ。勝負にならない……」

千砂都「(例えが分かりにくいなあ……)大丈夫! 何も私と勝負するわけじゃないんだから、一緒に振り付けを考える、力を貸して欲しいんだ」

すると千砂都先輩は軽くステップを踏み、

千砂都「私が先に振り付けを考えて見るから、四季ちゃんがこうしたほうが良いつて言ってくれば」

四季「それなら……」

千砂都「よし! じゃあやろう!!」

作曲 恋・Meiside

メイ「あくっ! ちきしよう! こんな無理だろ!!」

恋「強すぎます!!」

メイ「さっきの鍵、やっぱり必要だったんじゃあ……」

恋「確かに! 戻ってゲットしましょう!」

メイ「ああ!!」

(何やってんだコイツら……)

メイ「ハッ!! ってそう言えば作曲するんじゃないのかよ!!」

恋「ハッ!? そうでした!! 久しぶりの協力プレイが楽しくて忘れてました!!」

「へ〜? 忘れてたんですかあ……」(言、##)

メイ「な、ナギ!」

恋「渚さんいつの間にな!」

「千砂都先輩ー!! メイと恋先輩がサボって…」「わーっ!! ゴメンなさいいいいいっ!!」「ムグッ!」

メイ「恋先輩やりますよ？ つて言っても、アタシに期待すんなよ？ ピアノつつつてもちいさい頃から少しやつてるだけで……」

恋「この前聞かせて頂きました。伸びしろは無限大です!!」

メイ「……勘弁してくれよ」

恋「続けてこられたという事は、嫌いじゃなかったはずですよ。さあ!!」

恋先輩がピアノを弾き始める。そして途中で一旦やめ、あとに続くメロディーをメイに思い浮かべて弾いてくれと言う。

メイは考えて後に続くメロディーを頭の中で組み立てて弾く。

ふむ。とりあえず時々監視が必要だけど今は大丈夫か。

ー 続く ー

東京大会出場者リポート会見

恋先輩とメイの次はかのん先輩ときな子を見に行つた。すると二人はヨガの様な体勢を取り精神を集中していた。

作詞 かのん先輩・きな子 side

きな子「かのん先輩……………」

かのん「歌詞、降りて来た？」

きな子「今の所はまだ……………本当にこんなので思いつくんすか？」

するとかのん先輩は突然ハツとした表情を浮かべると、

かのん「今日、調子悪い……………」

するときな子が、

きな子「かのん先輩！ きな子の部屋に、昔書き溜めた歌詞ノートがあるんす！ 良かったら……………やっぱり恥ずかしい／＼／」

きな子の頬が紅く染まる。ああ…やっぱりそういうのって見せるの勇気いるよな……………」

かのん「無理しなくて良いよ？ きな子ちゃんの大切な気持ちが詰まったノートだもんね？」

きな子「そんな……………きな子の言葉なんて……………」

うーむ、きな子も充分魅力はあるんだがどうしてこうも自信が無いんだろう……………」

1年生全員に言える事だが2年生と自分たちを比べる必要は無いのに……………」

かのん「実はね、私もスツゴイ恥ずかしいんだ？」

きな子「かのん先輩が？」

かのん「最初皆に見せるとき、「うあああ／＼／＼」って……………ノート全部ビリビリにしたいくらい」

きな子「信じられないっす……………」

かのん「ふふつ、私なんて一人じゃあてんでダメ。だから、きな子ちゃんが恥ずかしいって思ってくれてちよつとホツとしたの」

きな子「それじゃあきな子が巻き添えみたいじゃないですかあ……」

きな子が不機嫌そうな顔になるが、かのん先輩は柔らかい表情を崩さず。

かのん「まあね。でも、その後待っている嬉しさとか、感動とかも巻き添えにできるから!」

きな子「!!」

かのん「だから、きな子ちゃんにやって欲しいって思ったんだ。一緒に頑張ってみよう?」

このグループは中々良い感じになってるな。じゃあ次は……

会見設営 可可先輩・すみれ先輩・夏美side

夏美「オニナツツ!! 今日、合宿中のLielia!に密着ですのー!!」

可可先輩は全員の顔のボードが貼られた大きな立て看板を作っていた。つくか俺もいるけど良いのかな?

すみれ「ちよつと、何なのこれ?」

可可「他校に負けてないと伝えるためデス!」

すみれ「またこんなもん作ってどうするのよ?」

可可「この後に開かれる出場者のリモート会見、そこから既に戦いは始まるのデス!!」

すみれ「今の配信ならバーチャル背景でどうとでもなるでしょ?」

可可「う、うるさいデス!! Lielia!は手作りの良さを見せるのデス!!」

「というより俺の顔もあるの大丈夫なんですか?」

可可「何言ってるデス!! 例えステージに立たなくてもナギサもLielia!の仲間です!! 問題なんかありません!!」

夏美「あのく……」

可可・すみれ「なに!!」

夏美「い、いや……お二人共変ですの。抱き合って泣いて見たりケン

カしてみたり……それで良いんですの？」

すみれ「クウクウが強情なだけよ」

可可「何を!? すみれがうるさいからデス!!」

すると可可さんが脚立の上で少し暴れたことで看板と可可先輩の服に張り付いていたテープが引つ張られて看板が倒れてくる。

可可・すみれ・夏美「「あああああ〜っ!!」」

俊敏な動きで直ぐ様三人は協力して看板を支える。しかし重いのか三人は苦しそうだ。

夏美「マニーが!! 制作費というマニーがあっ!!」

可可「頑張るデスー!!」

すみれ「何やってんのアンタはー!!」

「やれやれ……」

俺も支えに加わり力で思い切り押し戻す。すると看板は元の位置に戻り、3人は重さから開放される。

可可「あ、危なかったデス……」ゼエハア

夏美「マニーが無駄になるとこでしたの……」ゼエゼエ

すみれ「お、重かった……」ハアハア



そして各自一旦取り止め東京大会出場者のリモート会見を行う。因みに俺はカメラマンをする。

そしてリモート会見が始まり、それぞれスクールアイドル達が順番に会見を行っていきいよいよLielia!の番。

司会「それでは次はLielia!張り切ってください!!」

千砂都「皆さんこんにちは!! 私達は……」

かのん「結ヶ丘高校スクールアイドル、

Lielia!『Lielia!です!!』

千砂都「えつと……」

千砂都先輩が言い淀むとかのん先輩が口を開き、

かのん「私達Lielia!は去年、決勝には進めませんでした。

それから1年、今年こそは全員で決勝に進むために頑張ってきた。叶うことなら優勝目指して、皆を笑顔にできるライブをしたいと思っています！」

千砂都「皆さんの応援、宜しくお願いします!!」

そしてLielia!全員が頭を下げ、ここでLielia!の会見は終了する。

かのん「はく、いつまで立っても慣れないなあ……………」

千砂都「そんなこと無いよ。助けてくれてありがとう」

かのん「うん。思わず話しちゃった……………」

そして続いては……………」

司会「続いては、今大会注目のウィーン・マルガレーテちゃん!!」

Lielia!『!!』

Lielia!全員、いや、他のスクールアイドルたちもモニター越しに注視していることだろう。ウィーンが映り、話し始める。

ウィーン「私がラブライブ!に出場するのは、ここが如何に低レベルであるかスクールアイドルたちに知ってもらうため。私が…本当の歌を教えてあげる。それだけ……………」

そして映像は途切れた。

……………ハア?

俺の頭の中が沸々と煮えたぎる。可可先輩とメイのスクールアイドル大好きコンビは特に激怒した。

可可「ラブライブ!が……………低レベルデスってえ……………?」プルプル

メイ「ふざけんな!!いきなり出てきて好き勝手なこと言いやがって!!」ワナワナ

四季「でも、最強と言われたサニパさんに勝った……………」

「それは……………」

その日の夜……………」

恋先輩、すみれ先輩、可可先輩が風呂に入っている間、何をしようかと思っていたらメイと四季、きな子と夏美が呼びに来た。

どうやらウィーンをコテンパンにするために特訓するから付き

合ってくれということだ。俺もあの女ムカついたからいくらでも付き合ってたやる。

「行くぞお前ら!! お高く止まったウィーンの鼻っ柱をへし折って再起不能にしてやるぞ!!」

1年生『おーーーーーっ!!!』

夏美（再起不能って……そこまでしなくても……）

そして練習をしている所を、2年生が窓から覗いていた事に気付かぬまま、1年生4人での特訓を続けた。

ー 続く ー

しばしの休息

翌日、今日も張り切って練習だと思っていたのだが、かのん先輩の考えで今日は練習を無しにしてめいいっぱい遊ぼうということになった。

きな子「急にどうして!？」

千砂都「頑張るためには休みも大事!」

きな子「でも……………」

恋「私達は、上手くなるために：勝つためについて、考え過ぎていたのかもしれない」
かのん「それを一回忘れたいんだ。歌も練習も全部忘れて、皆で楽しく遊ぼう!」

俺たちは数組に別れて遊ぶ。きな子と恋先輩とメイはスケート。四季とすみれ先輩と可可先輩はワカサギ釣り。かのん先輩と千砂都先輩と夏美は雪だるまを作っていた。

ー 天然スケートリンク ー

きな子「恋先輩流石っすね!!」

メイ「うわわわわっ!!」

メイはイス型の器具に座り、きな子に押しってもらって滑っていたが少しばかり恐怖を感じている様だ。

きな子「メイちゃん怖がりっすね〜」

メイ「う、うるせえ!!」

ー ワカサギ釣り場 ー

ピクッピクッ

すみれ「!!」

すみれ先輩が竿を上げると二匹のワカサギが食い付いており見事釣り上げた。

四季「大漁……………」

可可「なんでクウクウにはアタリが来ないんデスカあ〜!？」
すみれ「日頃の行いの差かしらね〜?」

すみれ先輩がクウクウ先輩を煽る。が、ここで四季の使っている二本の竿にも両方アタリが。

四季「!!」

四季が竿を上げると、二本の竿それぞれに6匹以上。合計12匹近いアタリがいつぺんに来ていた。

四季「……………大漁」

可可（四季さんどうなってんデスカ!?!）

すみれ（この子どうなってんのよ?!）

― 雪原 ―

千砂都先輩とかのん先輩は雪だるまを完成させ、千砂都先輩は自分の作った雪だるまの丸さに恍惚としていた。

千砂都「はあく／＼完璧なマル!!」

かのん「たこ焼きも作ってみる?」

千砂都「いいね!!」

夏美「そこのお二人さん? こんなのにいくら頑張ってもマニーにはなりませんの……………もっと映える映像を……………」

かのん「これで良いの! せっかく9人になったんだし、いっぱい思い出作ろうよ!!」

夏美「それは……………」

千砂都「たこ焼きは後で作るから、夏美ちゃんの……………やりたいことやろう?」

夏美「私のやりたいこと……………」

そして夏美は雪玉を握りかのん先輩たちを追い回す。

夏美「思いつきり雪合戦してみたかったんですの!!」

千砂都「3人じゃあ雪合戦にならないよ〜っ!!」

夏美「待つのです〜 アベシツ!?!」

夏美は雪に足を取られ盛大に転ぶ。雪には夏美の型の跡がつき、かなりマヌケな状況になってしまった。

かのん「夏美ちゃん!?!」

千砂都「じゃあ皆集めて、雪合戦やってみようか!」

そして思う存分遊びペンションに戻る。皆疲れたのかベッドに大の字になる。

メイ「ふっつ!! 遊んだ遊んだっつ!!」

夏美「東京大会前に、遊んでみたなんて動画あげられませんの……。時間をムダにしてしまいましたの……」

きな子「でも……1日違うことをしていただけなのに、もうレッスンしたいなあって思っちゃってるっす」

四季「私も」

「スッキリ気分転換できたみたいだな。心なしか表情もスッキリして見えるぞ?」

四季「そりゃあ楽しかったし」

メイ「こんな自然の中で遊んだのいつぶりだ? 遊園地とか公園ならあつたけど……」

「確かにな……」

メイ「でも、だからこそ練習したいって気持ちが強くなった」

四季「私も」

恋「実は私も練習したいって思っちゃってます……」

可可「クウクウもデス!」

きな子「先輩たちも!?!」

メイ「かのん先輩は?」

すると2階からギターの音色が聞こえる。かのん先輩が作曲のため弾くギターの音。心が落ち着いてくる。

きな子「新しい曲……」

メイ「遊んでいただけじゃなかったのか……」

四季「違った……」

可可「かのんが完成させようとしている曲を、皆で完成させましょウ!!」

L i e l l a ! 『はい!!』

ー続くー

渋谷の街に響く歌

練習が続く冬の北海道合宿。気分展開に1日めいっぱい遊んだ翌日から、また練習を再開する。

千砂都先輩と四季で考えた振り付けをみんなに教えてダンスレッスン。

体幹と体力強化の雪道ランニングでは、きな子と可可先輩の体力少ない組が力を合わせて走りきり、メイと恋先輩は共にピアノを使って作曲を続ける。

そうした活動を夏美は動画としてアップし続け、その結果どんどんLielia!のフォロワー数は増加。いいね!もどんどん増えていた。

ただ、夏美がすみれ先輩の許可なく、すみれ先輩の寝る前の顔パツクしている時の写真をアップして怒られたり……。

すみれ先輩は決勝大会の衣装デザインを考え、数日後、合宿の全ての工程が終了した。

最終日の夜、俺たちはキャンプファイヤーを囲み……、

きな子「できたつす。歌詞!」

四季「振り付け、決まった」

メイ「曲も完成したぞ?」

すみれ「衣装も考えてみたわよ?」

かのん「一生懸命頑張つて、皆に応援してもらつて…皆と一緒に成長できる。スクールアイドルって、本当に素敵だと思う!!」

可可「スツゴク楽しくて……」

メイ「スツゴク大変だけど……」

すみれ「でも、ここにしか無い喜びがあつて……」

四季「その気持ちが、歌になって溢れる」

千砂都「Lielia!って、思えばずっとそうだったよね?」

かのん「それが、私達にとつての本当の歌なんじゃないかな?」

恋「その言葉、マルガレーテさんの……」

夏美「本当の歌……」
かのん「そう。本当の……!!」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そして数日が経ちよいよ東京大会当日。東京大会に出場するスクールアイドルは5組。今3組目が終わったところであり、次がウィーン。トリがLielia!だ。

千砂都「いよいよだね……」

かのん「……うん」

ウィーン「澁谷かのん!」

かのん「っ!! マルガレーテちゃん……」

でたな……

ウィーン「私が本当の歌を教えてあげる。歌は力、そして私は、私の未来を……私自身でビルドする。歌の力で……」

……Lielia!と一緒に今までやってきたからこそ分かる。コイツは……何も分かっちゃいないんだと。

かのん「……違うよ」

可也「かのん?」

かのん「そんなの、本当の歌じゃない!」

そしてウィーンのパフォーマンスが始まる。確かに歌もダンスも圧倒的なパフォーマンス。だが、そこからは「勝つ」それしか伝わってこない。

何も情熱が、熱さがこもっていない。

そしてウィーンのパフォーマンスが終了。会場は大いに盛り上がりボルテージも桁外れに上がる。

Lielia!はと言うと……

きな子「なんすか……? コレ!!」

メイ「鳥肌立った……」

四季「勝者のオーラ」

恋「この後に……私達が……」

皆萎縮してしまったか? だが、2人だけ平常心を保っている者が

いた。

「大丈夫だ。あんなに練習頑張ってきたじゃないか!! 皆の信じる歌をしつかりと歌いきれば、今のお前なら絶対勝てる!」

かのん「さあ、行こう! 学校の皆も見に来てくれる! Lie lla!の歌を、渋谷の街に響かせようよ!!」

かのん「行くよ! 1!」

可可「2!」

すみれ「3!」

千砂都「4!」

恋「5!」

きな子「6!」

メイ「7!」

四季「8!」

夏美「9!」

「10!」

かのん「結ヶ丘スクールアイドル部、Lielia! たくさんの人に、歌を届けよう!! song for me! song for you!」

Lielia!『song for all!!』

そして始まったLielia!のパフォーマンス。皆が持てる力をすべて出し切り、それぞれの信じる物がひしひしと伝わってくる、熱の籠もったパフォーマンス。間違いなく、今のLielia!にできる最高のパフォーマンスを奏でていた。

そしてLielia!のパフォーマンスが終わり、いよいよ結果発表。5位と3位が順番に発表され、残すは2位と1位。

果たして、1位を獲得しラブライブ!決勝大会に進むのはウィーンか、Lielia!か?

― 続く ―

勝者と告白

現在東京大会の結果発表。順位が次々と発表され、次は第二位。そこに映し出されたのは…、

ー 第二位 ー

ウィーン・マルガレーテ

ウィーン「なっ!？」

かのん「えっ、てことは…!!」

続いて第一位、ファイナリスト。映し出されたのは…、

L i e l l a !

映し出されたのはL i e l l a !の文字。

メイ「勝った…!!」

すみれ「勝ったわぁーっ!!」

千砂都「かのんちゃん！ 次は全国大会だよ!!」

きな子「勝ったっす!!」

かのん「っ！ うん!! やったぁっ!!」

喜びに湧くかのん先輩たち。俺も舞台袖で思いきりガッツポーズしていた。

「よしっ!!」

よく頑張ったな…メイ、四季…。

しかしここでこの結果を受け入れられない者がいた。

ウィーン「納得できないわ!!」

ウィーンはズカズカと司会者に近づき、マイクを引っ手繰る。

ウィーン「私は、この結果を認めない!!」

往生際の悪いウィーン。流石にここで、俺も堪忍袋の緒が切れた。

「いい加減にしろ!!」

急に登場した男子に観客はざわめく。だがそんなものは関係ない。

「この結果は…ファンのみんなや、会場に見に来てくれたみんなが決めた物だぞ！ 絶対に不正なんかできない…!! この結果を素直に受け入れられないなら、もうラブライブ！のステージに立つな!!」

かのん「な、渚くん……?」

ウィーン「!! ふんっ!!」

ウィーンはさっさと去っていった。俺が啖呵を切った事に会場中の視線集まっていた。やべえ……………。

「……すみませんでしたあっ!!」

俺は急いで舞台袖にダッシュで戻る。観客が騒がないと良いけど……、

観客「あの人…カッコいいかも」

観客「ひよつとして噂のL i e l l a ! のマネージャー?」

かのん「あっ、あの!!」

かのん先輩が声を上げる。

かのん「今の彼は、私達のマネージャーです」

可成「カレが支えてくれたから、クウクウたちは練習に集中できました!」

すみれ「けど、女子の部活であるスクールアイドルで、皆がどう思うかは分かりません」

千砂都「けど、わたしたちはこれから彼とやっていきたいです」

恋「お願いします! 認めて下さい!」

観客シーンと静まり返る。するとポツポツと声が漏れ、歓声に変わる。

観客「いいぞーっ!!」

ライブ配信のコメントも……

『ビックリしたけど、L i e l l a ! の思いがよく伝わったわ。こういうグループも良いんじゃない?』

『フアイトだよっ!!』

『ハラショー!』

『凄く胸に刺さったズラ!』

『うゆ!』

『すっごくトキメいちゃったあ〜!!』

『私の目もパッチリ覚めちゃったぜえ〜。L i e l l a !、これから

も応援するね〜』

などなど殆どが好意的なコメントだった。

かのん「皆さん……!!」

そして、めでたくマネージャーとしての俺の存在はファンに公認され、表彰式を行い東京大会は幕を閉じた。

そして、俺たちは打ち上げにかのん先輩の実家の喫茶店に来ていた。だが途中で、俺と四季、メイの三人は一度外に出させてもらった。「おまたせ。じゃあ、返事するな……?」

メイ「ああ……」

四季「……………」

「じゃあ、後ろ向いてくれないか? 俺が選んだ方に、後ろからハグするから」

俺の言葉に二人は困惑しながらも、素直に後ろを向く。

「じゃあ、やるな……?」

そして、俺は目的の彼女のもとに歩む。思えば、彼女には元気を貰ってばかりだった。不器用ながらも、三人の関係を誰よりも大事にしていたのは彼女かもしれない。

その彼女とは……

ギョツ!

「四季、随分待たせちゃったな……」

クールぶった表情の内には、3人の誰よりも繊細な感情を持っていた、青髪の少女だった。

四季「あ……あ……、ナギサ……本当に?」

「ああ!!」

四季「でも、メイは……」

メイ「四季!! その言葉は、私への侮辱になるぞ?」

四季「! メイ……「あくあ……初恋……終わっちゃったな……」っ!!」

メイは……両目から大粒の涙をポロポロとこぼす。だが、決して恨むような言葉は言わなかった。それどころか、

メイ「四季！ お前が選ばれたんだから、絶対に幸せになれよ！
アタシの事は気にすんな！」

メイがニカツと笑うが、明らかに空元気であることは誰にでもわかる。

メイ……………

四季「メイ……………」

メイ「四季、振られた私が言うのも何だけど、これからもたまには…3人の時間があっても良いか？」

四季「メイ、何言ってるの！ そんなの当たり前!!」

「ああ!! 振った瞬間もうメイなんか知らねなんて言うわけ無いだろ!! 俺たちが積み上げてきたものを舐めるな!!」

メイ「ありがとう。じゃあ私は戻るな？ 明日からは程々によろしく」

そして、メイはかのん先輩たちがいる喫茶店に戻る。

四季「まったく、ナギサ……………本当に、私でいいの？」

「ああ、四季が良いんだ……………俺と、付き合ってくれるか？」

四季「うんっ！」

四季は俺の胸に飛び込んできた。俺をギュツと抱きしめてきた。俺も、四季の事を抱きしめ返す。

「随分…待たせちまったな……………」

四季「バカ……………メイを選べば良かったなんて、絶対に後悔なんかさせないから。絶対にナギサにふさわしい女になる」

「いや、もうなってるだろ……………むしろ俺のほうが見劣りするくらい……………」

四季「そんなこと無っ……………」ムグツ!?

俺は、四季の唇を奪った。お互いに初めての、いわゆるファーストキスだ。

∟
∟
∟
∟
∟

四季「自分からやったのに、顔真っ赤……………」

お前もじゃねえかよ。

四季「そっか……………私は、ナギサの彼女なんだ……………」

「これから宜しくな？」

そして、俺たちも皆のもとに戻った。俺たちの事を報告したら、皆に祝福されたが、約一名

可可「スクールアイドルが恋愛なんてダメデスよおっつ!!？」

クウクウ先輩の絶叫が響き渡ったが、皆完全に無視していた。

クウクウ先輩……不憫な……。

四季、これからよろしくな!!

ー 続く ー

年明け

Lielia! が東京大会を制して全国大会進出を決めた夜、俺たちはかのん先輩の実家の喫茶店で打ち上げの真っ最中。途中俺とメイ・四季の3人だけにしてもらい俺は二人に答えを出し四季に告白。メイは幸せになれよ、と言ってくれたが…当然気にしてない訳はないよな。でも、ここで俺がなにかしようとするれば余計に傷つけてしまうだけなので時間が解決してくれるのを待つしかない。

今は皆の楽しい時間なのでメイも気丈に振る舞っていた。

Lielia! 『乾杯!!』

皆コップに飲み物を注ぎ乾杯する。

かのん「ゴクツゴクツ はあく幸せ……」

きな子「こんな美味しいジュース初めてっす……!」

メイ「マルガレーテのせいで一時はどうなることかと思っただけだな…?」

千砂都「1年生が頑張ってくれたから乗り越えられたっ!」

可可「頼もしかったデスう!!」

メイ「本当に!?!」

夏美「ネットでも評判になってますの!! 今年から入った新メンバーが凄く頑張ったって!」

メイ「ほ、本当だ……!!」

確かに、皆凄く頑張ってたもんな……1年生全員、必死になって練習して…その努力が、こうして実を結んだんだ。

夏美「後、ナギくんの事も色々書いてありますの。”Lielia! 影の立役者”とか、”まさかの裏リーダー!?”とか」

「やめろよ……」

四季「でも、みんなからナギサがそう評価されるのは嬉しい」

メイ「ホントホント!」

まったく、恥ずかしいことを……メイもさっきのことには触れてほしくない事はこの場にいる全員知ってて分かっている。

触れないでいてくれる皆に俺は心のなかで頭を下げてお礼を言っ

ていた。

可可「次はついに全国大会……つ!! それにしても、ムカつくのはあのウイーン・マルガレーテ!!」

メイ「ああ!! 神聖なラブライブ!に泥を塗りやがって!!」

スクールアイドル大好きコンビの二人は大変ご立腹のようで、ウイーンをボロクソに言っていた。

まあ俺もムカついてるし。

夏美「あの子にとってあの発言は最悪ですの。今もネットで凄く叩かれてますの……」

夏美は東京大会の結果報告ニュースを見せる。下のコメント欄には、

かのん「えつと…、「もうラブライブ!に出てほしくない」

四季「あんなにいい歌だったのに残念」

恋「不満があってもあんなところで言うのはどうかと思う」

3人がコメントの批判内容を読み上げる。相当叩かれてるな。

すみれ「まあともかく、自業自得よね」

するとかのん先輩は目を細め、

かのん「なんであるなこと言っただらろう……」

すみれ「それは、悔しかったからに決まってるでしょ?」

かのん「……本当にそれだけなのかな?」

すると背後から近づいてきたありあさんが、

ありあ「ハッピーニューイヤー!!」

ドカアンツ!!

巨大なクラッカーを鳴らし叫ぶ。そう言えば今日って……、大晦日……ってことは!?

俺たちは急いでスマホの時間を確認する。すると、午前0時になっていた。

「年……明けちゃいましたね」

俺たちは急いで10人で近くの神社に初詣に出かける。もう人がごった返しており、お参りまでに30分近くかかった。

すみれ「流石に、夜中だけあって冷えるわね……」

きな子「北海道に比べたらなんてこと無いっす！ それにしてもスゴイ人っすね……」

かのん「毎年そうだよ？」

可可「かのんは毎年来てるのデスか？」

かのん「まつさかあ、人混み苦手だし……こたつでゴロゴロしてる方が良いよ」

恋「こたつ……？」

「恋先輩まさか知らないなんて言いませんよね？ こたつ……」

恋「恥ずかしながら、家にはこたつが無いので……」

すみれ「いや、無くても普通は知ってるわよ!!」

そして順番が来て10人でお参り。それぞれ願いを祈る。

かのん「今年1年、皆で仲良く皆で良いライブができますように!!」

L i e l l a ! 『できますように!!』

そして俺たちはそれぞれ家に帰り朝、

ピピピツ、ピピピツ バチン

「ん……もう朝？」

俺が1階に降りると、既に母さんがお雑煮を用意して待っていた。

父「渚、来たな。座りなさい」

「おう……」

そして日宮家の三人が食卓につく。

父「あけましておめでとう！」

母・渚「おめでとうー！」

父「今年一年も頑張つていこう。じゃあ、いただきます！」

母・渚「いただきます!!」

そしてお雑煮を食べ終える。今日はL i e l l a ! の練習は休みだが、四季とメイは自主練すると言っていた。俺も手伝ってくれと言われていたので部屋で運動着に着替えて用意をして家を出る。

「行ってきま〜す」

そして家を出て昨日付き合い始めた彼女の家のインターホンを押すと、四季のお母さんが出迎えてくれた。

四季母「あら、渚くんおはよう。自主練するんですってね？ そうだ、あの子昨日帰ってきてから凄く機嫌が良いのよ。あんな四季私達も見たことないわ、確かに東京大会で勝って嬉しいのは分かるけどあそこまで？ ってくらいに。渚くん何か知らない？」

あゝ言ってもいいのかな？

「実は俺、昨日から四季と付き合い始めまして……」

それを聞いたお母さんはビックリ。色々と根掘り葉掘り聞かれようとしたところに四季が来て俺たちは練習に向かった。

四季のお母さんが「今夜はお赤飯よ!!」とか言っており、四季が「ホントにやめて……」と、うっとうしそうな顔をしていた。

そしてメイの家のインターホンを押してメイと一緒に自主練場所の公園に向かった。

ー 続く ー

冬休み明け

冬休み中、あれからも時々自主練したりL i e l l a !の全体練習をしたりして過ごし、今日から学校が始まる。

結ヶ丘の体育館には全校生徒が集まり、俺たちL i e l l a !の結果報告会が行われていた。

恋「皆さんのお陰で、決勝に進出することができました!! 生徒会長として、L i e l l a !のメンバーとして、改めてお礼を言わせてください。ありがとうございました!!」

L i e l l a !『ありがとうございました!!』

生徒たちは……、

「その勢いで優勝だーっ!!」

「L i e l l a !なら夢じゃない!!」

「日宮く〜ん!!」

「ちよつと待ってなんで俺?!!」

なんか明らかに違う名前が聞こえたぞ?!四季が一瞬黒いオーラを放ったんですけど。

「笑顔で全員の力を合わせて応援しよう!!」

恋「みなさん……!!」

「優勝だーっ!!」

かのん「優勝……っ!!」

千砂都「ここまで来たら、次も笑顔で終われるように頑張ろっ?」

かのん「うん!」

可可「1年生も2年生も、いい人ばかりでクウクウ幸せデス!」

かのん「引き寄せるんだろうね……。恋ちゃんのお母さんが」

この学校の創設者にして、恋先輩の亡くなったお母さん。天国から、きつとこの光景を見て微笑んでいることだろう。

すみれ「そうね」

夏美「そのとおりかもしれない!!」

きな子「二人が言うのと、微妙に説得力が……」「なんですつってえ!?!」
ひいつ!?!」

千砂都「二人共、ステージ上だよ?」

すみれ先輩と夏美はしまったという顔をするときな子を一瞬睨み再び前を向く。

そして全校集会が終わり部室、

すみれ「さっきの微妙ってどういう意味?」

すみれ先輩はきな子の頬をつまんでお仕置きしている。

きな子「そ、それはあ…人徳というか…」

夏美「確かにすみれ先輩の人徳のなさには呆れますの」

すみれ「あなたに言われたくないんだけど!! 私はあるみたいにお金に意地汚く無いわ!!」

夏美「意地汚いとはなんですの!! グソクムシ先輩でも言っても良いことと悪いことが!!」

するとすみれ先輩は夏美の肩を掴み、

すみれ「誰に聞いたの!!」

すると夏美はスマホで動画を再生する。そこにはグソクムシのきぐるみを着て歌う幼いすみれ先輩が映っていた。

すみれ「やめてえーっ!!」

夏美「もう結構有名ですの」

すみれ先輩がトドメを刺されて崩れ落ちる。

千砂都「ほつといて良いの? クウクウちゃん」

可可「ハイ! 遊び相手が見つかったみたいで、せいせいするデス」

夏美「遊び相手では無いんですのーっ!!」

千砂都「はい、お喋りはそこまで!!」

かのん「決勝に向けて、今日から練習だよ!!」

すると扉がノックされ、理事長が入ってきた。

理事長「澁谷さん、ちよつと…」

かのん「理事長?」

かのん先輩が理事長室に連れて行かれて焦ったクウクウ先輩たちは理事長室の前でコツソリと聞き耳を立てていた。

可可「聞こえないデス…」

メイ「四季、中に集音マイク仕掛けてないのかよ？」

四季「流石に理事長室は無理。できたとしてもこの展開は想定外」
「いや仕掛けんなよ？」

すると話が終わったのか、かのん先輩がこっちに来る。

皆は急いで何もしてないみたいなのポーズを取るが、全員揃って部屋の前にいた時点で丸分かりだ。

かのん「皆？」

きな子「かのん先輩……」

すみれ「偶然ねえ」

かのん「バレバレなんですけど？」

「すみません。止められませんでした」

かのん「いや、良いよ」

可可「何を話してたのデス？」

メイ「まさか、私らに隠れて悪いことを……」

かのん「違うって……」

四季「ジューツ」

四季はかのん先輩が手に持っていたパンフレットを見ていた。

かのん「あつ、これは……ウイーンちゃんのことちよつと調べてて
や……」

L i e l l a ! 『ウイーンちゃん？』

俺たちは早速中庭でそのパンフレットをしてみる。

かのん「あの子、この音楽学校に入ろうとしていたらしくて……」

メイ「なんて書いてあるんだ？」

可可「ウイーン国立音楽学校……」

すみれ「エリートじゃない!!」

かのん「そうなんだよ。そしたら、理事長先生が資料を持ってると
て言うから……」

ページをパラパラとめくると、1つのページの写真にウイーンとよ
く似た容姿の卒業生と書かれた写真が載っていた。

「おい、これ……」

かのん「ウイーンちゃんのお姉さんらしいんだ……」

すみれ「お姉ちゃん？」

きな子「？ かのん先輩、どうしたんすか？」

かのん「ううん、何でもない」

するとかのん先輩は立ち上がり、

かのん「さあ、練習始めよう？」

かのん先輩は部室に向かっていく。俺たちはしばらく動かずに、

すみれ「かのんがこんなこと調べてたの、千砂都知ってた？」

千砂都「うん。ずっと気にしてる感じだったけど……」

俺たちは、かのん先輩の背中を眺めていた。

↓ 続く ↓

留学

かのん先輩が行ってしまった後俺たちも後を追いつ屋上にて練習を始める。そして今日の分の練習が終了しかのん先輩は先に帰っていった。

「かのん先輩今日どうしたんだろうな……?」

四季「何か用があるのかも……」「かのんちゃんはいる!?」な、何?」

屋上に七未先輩、八重先輩、九乃先輩の3人が飛び込んできた。

可可「3人ともそんなに慌ててどうしたんデスか?」

七未「ら、ラブライブ!が終わったら……かのんちゃんがウィーンに留学するって本当なの!」

すみれ「はい?!」

八重「学園中で噂になってるわよ!! 世界最高と言われる音楽学校から留学の話が来たって!!」

千砂都「うそ、そんな話聞いて……、もしかしてさっきの理事長との話は……」

メイ「とにかく追いかけて話を聞こう。そうしないと始まらねえぞ!」

「そうだな。行こう!!」

そして俺たちはかのん先輩の家に向かった。だが、すみれ「なんか面と向かって聞くの聞きづらいわね……」

可可「じゃあどうするって言うデス!」

きな子「とりあえずかのん先輩の様子を伺えれば……」

「じゃあ5人でメイと夏美ときな子とを肩車しますから、三人がその上から四季を肩車してください。四季、あの高さ調節できる縦型双眼鏡今あるか?」

四季「ある」

四季はバックから双眼鏡を取り出した。

すみれ「なんでそんなもの持つてるのよ……」

「じゃあ3人俺に重心かけて乗ってくれ。先輩たちは重さを分散するように支えてください」

千砂都「分かった!」

恋「分かりました!!」

可也「了解デス!!」

すみれ「仕方ないわねえ」

そして俺と先輩方5人の背にメイと夏美、きな子が乗る。そしてそのタワーを四季がよじ登り双眼鏡を使つてかのん先輩の部屋を覗こうとする。

しかし騒ぎ過ぎたのか、かのん先輩に見つかつてしまい、びっくりしてタワーは崩れてしまう。

「痛てて……」

四季「大丈夫ナギサ?」

「ああ……」

するとかのん先輩が家から出てきた。

かのん「皆大丈夫!? いったいどうしたの……?」

意を決してきな子が口を開く。

きな子「留学するって、本当ですか!!」

かのん「はい!」

恋「学園中で噂になつてるんです!」

メイ「かのん先輩、ラブライブ!が終わつたらウィーンに留学するって!!」

俺たちが話すと先輩は、

かのん「……大丈夫。行かないよ?」

Lieilia!『えっ?』

かのん「オファーがあつたのは本当だよ? でも、今の私の夢は、高校生活を、このメンバーと一緒にスクールアイドルやり切ることだから」

メイ「じゃあ、行かないんですね……?」

夏美「ずっと一緒にやれるんですね……?」

かのん「うん!」

Lieilia!『良かったあ〜!!』

皆は緊張の糸が切れて脱力する。その様子を見たかのん先輩は、

かのん「もしかして、それで心配して来てくれたの？」
きな子「当たり前じゃないっすかあ!!」

四季「かのん先輩が一緒じゃないとやだ」

メイ「Lielia!はこのメンバーでLielia!なんだから
当たり前だろ!!」

夏美「かのん先輩がいなかったら、他の先輩では信頼度が……」
「なんか言った?」
「いえ何も……」

かのん「皆……心配かけてごめんね? ありがとう」

恋「本当に良かったです……」

千砂都「そうだね……ん?」

千砂都先輩は、目線の先に人影が見えた。

千砂都「あゝ喉乾いて来ちゃった。ジュース買ってくるから待って!!」

かのん「ちよつ、ちいちゃん!」

千砂都先輩は見えた人影を追って走る。そしてその人影の腕を掴み、

千砂都「待って! 話があるの!!」

ウィーン「話してよ!! こっちには話すことなんか無いわ!! 答えは聞いた!」

千砂都「答え?」

ウィーン「かのんよ!! 留学はしない、ここに残るんでしょ!」

千砂都「どうして、留学の事を……」

ウィーン「あなたには関係ない!」

そしてウィーンが行こうとするが千砂都先輩は腕にしがみついて離さない。

千砂都「教えてくれるまで離さない!! 「なんで!」 教えて!!」

ウィーン「……」

ウィーンはついに根負けし、千砂都先輩に話す。

ウィーン「今日、家族から連絡があったの……かのんがウィーンに留学するなら、私も一緒に戻ってきて良い。かのんのもとで歌を学びなさいって……」

千砂都「かのんちゃんのもとで……?」

ウィーン「かのんに連れられて戻るのはシヤクだけど、それで学校に入れるなら……それでも……」

千砂都「かのんちゃん、そんなに評価されてるんだ……世界一の音楽学校に……」

ウィーン「……っ、離してよ! 言つとくけど、私の考えは変わらない。かのんがダメなら、自分の力だけで夢を叶えて見せるわ!!」
そして、ウィーンは行ってしまった。

千砂都（かのんちゃん……）

翌日、結ヶ丘理事長室

理事長「後悔しないのね?」

かのん「はい。やっぱり……ピンとこなくて……せつかくのお話だというのは分かるんですけど……」

理事長「……決めるのは、あなたよ? 良いのね?」

かのん「はい。失礼しました」

かのん先輩が出ていったあと、

コンコン

理事長「ん?」

ガラッ

理事長「嵐さん?」

千砂都「あの……」

その頃、練習のために屋上に集まっていた俺たちだが、
すみれ「うう、寒い……って、アンタたち……」

『はあ／＼／＼』

「おい、なにこたつなんか持ち込んでんだよ!!」

四季「こたつではなく体温回復機……」

きな子「ぬくいっす……」

すみれ「どう見てもこたつでしょうが!!」

恋「これがこたつなのですねえ……」

おい、誰かこのだらけきつた生徒会長たち、いや……コタツムリ共を

なんとかしろ!!

すみれ「本当にこたつ知らないの!?!」

すると練習着に着替えたかのん先輩が屋上に到着。張り切って練習だ!!と、気合充分だ。

メイ「ひえええ……」

夏美「見てるだけで寒いんですの……」

可可「さすがのククも、ややドン引きデス……」

かのん「だめだよそんなんじゃないよ!! 気合い入れて皆で練習していれば、寒さなんか気にならないよ!!」

するとかのん先輩はこたつを持ち上げて思いきり剥ぎ取る。

きな子「さ、さささ寒いつす……!!」ガチガチ

そこに今度は千砂都先輩が到着。

かのん「あつ、ちいちゃんメニユーできた?」

千砂都「かのんちゃん……ううん、皆も、話があるの」

皆がなんだろうと言う顔をしながらも千砂都先輩の言葉を待つ。

千砂都「反対されるのは分かっている。けど、正直な気持ちだから……ハッキリ言うね? 私、かのんちゃんに……留学してほしい」

かのん「ちいちゃん……」

L i e l l a ! 『え、えええええーっっ!!?!?』

ー 続く ー

第1部 終章：L i e i l a ! 1つの終わり 進むべき道

それは1つの物語が終わり、新たな物語への始まりだったのかもしれない。

千砂都「私、かのんちゃんに留学してほしい！」

千砂都先輩の言葉に、当然L i e i l a !の全員が驚愕する。まず声を上げたのは当事者のかのん先輩。

かのん「ちいちゃん……」

千砂都「かのんちゃんは、世界に歌を響かせるんでしょ？ 小さい頃からの夢だったよね？ 今こそ、夢を叶えるチャンスなんだよ？」

かのん「っ……」

千砂都「私は、かのんちゃんに夢を叶えてほしい。かのんちゃんにしか叶えられない夢を……」

きな子「そう思うのはきな子も同じっす……」

メイ「でもさ……、今じゃないとダメなのか？」

恋「っ……」

恋先輩？

千砂都「もし断って、この話が無くなっちゃったら？」

かのん「しょうがないよ。その時はその時……」

千砂都「皆もそれで良いの!？」

全員が表情を歪ませる。かのん先輩が留学を断れば俺たちはこれからも皆で活動できる。でも、かのん先輩を結ヶ丘に縛り付ける事になり、夢を奪ってしまうかもしれない。逆にかのん先輩が留学すればかのん先輩は自分の夢に大きく近づく。しかしL i e i l a !はおろか結ヶ丘ともお別れになる。

千砂都「もしそうだったら、私たちがかのんちゃんの夢を叶えるチャンスを奪ってしまう事になる。皆後悔するんじゃない？」

かのん「でも決めたのは私。私はこの学校に……「世界に歌を響かせるんでしょ!？」っ!!」

千砂都先輩の瞳から、必死に堪えていた涙がこぼれ落ちる。やつぱり千砂都先輩も辛いんだ…当たり前前だよな、ずっと一緒にいた親友なんだから……。

千砂都「今しかない、チャンスなんだよ?」

そして、俺たちは今日は帰ることになりそれぞれ別々に、かのん先輩にどうしてほしいか考えることになった。

ー 可_レ先輩の家 ー

可_レ「かのんの事が大好きなんですよ…。千砂都はかのんの事を、ずっと第一に考えていましたから……」

すみれ「幼馴染みだものね。子供の頃からの夢にチャレンジできる…凄いわね、かのんって。だからこそ、わたしたちが原因でこの留学の話が無くなるのは嫌。かのんがいくらこの学校にいたいと思ったとしてもね……」

可_レ「じゃあすみれも留学に賛成?」

すみれ「どうだろう……いてほしいし、いてほしくない……」

可_レ「なんデスそれ?」

すみれ「……相変わらず鈍感ね?」

ー 恋先輩side ー

チビ(犬)「ワンッ!」

恋「すぐ戻りますよ」

サヤ(メイド)「恋様……こんな時間に……」

恋「ご心配なく、友達に会いに行くだけですから」

そして恋先輩が向かった先は公園。そこには、

恋「千砂都さん!」

練習着を着てストレッチをする千砂都先輩がいた。

千砂都「っ、恋ちゃん! ビックリ…どうしたの?」

恋「遅くまで自主練されてるんですね……?」

千砂都「今日はバイトも無いし、じっとしていると逆にモヤモヤしちゃって……」余計なこと言っちゃったのかなあ?」なんて……」

恋「とんでもないです……千砂都さんの言葉が、皆に響いています…。かのんさんとのお別れとなると、まだ実感は湧きませんが

……」

千砂都「私も。かのんちゃんがない毎日なんて、想像できないよ」

恋「……羨ましいです」

千砂都「え？」

恋「私は、この学校に入るまで……深い絆を感じられる様な友人は一人もいませんでした。皆、どこか私を別世界の人のように見ている……だから、大好きな人に真正面からぶつかっていていける千砂都さんを、私は尊敬します！」

千砂都「恋ちゃん……ありがとう！ 私は、もちろん恋ちゃんも親友だと思ってるよ？」

恋「っ、私もです！」

千砂都「フリ、合わせてみる？」

恋「ええ！」

そして、2人で軽い練習を行いながら心を重ねた。

1 1年生 side 1

きな子「はあ……」

夏美「どうなりましたかね……先輩たちは……」

メイ「私達がどうこう言える話じゃ無いだろ？」

夏美「それは分かっていますの……ただ、」

四季「気にはなる」

「Lielia!の今後にも関わってくるからな……」

メイ「かのん先輩が、もし本当に留学するなら……Lielia!はどうなるんだ？」

きな子「それは、ラブライブ!の決勝にこの10人で挑んで、もし優勝できたら……晴れてかのん先輩はウィーンへ……」

四季「……9人の、Lielia!」

「想像できないよな……もうこの10人が当たり前になってたから……」

きな子は涙ぐんで嗚咽を漏らす。

夏美「っ、休憩時間終了！ 今私たちにできることは、練習ですの

！」

「そうだな！ 俺もしつかりサポートするよ」

メイ「今は先輩たちに喰らいついて、優勝目指さないと!!」

夏美「そうですね!!」

四季「じゃあ、ランニングもう1セット」

きな子「ハイッす!!」

そして、1年生は決勝に向けてのラストスパートをかけていた。

ー 続く ー

葛藤

俺たちがそれぞれに別れてかのん先輩の事を考えていた時、当のかのん先輩はというと……

「いらっしやいませー！」

かのん「たこ焼き1パック下さい……」

そしてかのん先輩がたこ焼きを買って家に戻ろうとすると、自然と足は可可先輩の家の方に向いていた。

かのん「っ！」

かのん先輩がとっさに壁の影に隠れる。可可先輩の家のベランダには、2人でたそがれる可可先輩とすみれ先輩の姿があった。

かのん（っ……）

かのん先輩が路地を通って反対側に出ようとする、ランニング中の俺たち1年生に出くわしかけた。残念ながら、俺たちは誰も気付かずにそのまま通り過ぎて行った。だが、かのん先輩にとっては助かっただろう。

かのん「ただいま」

かのん母「お帰り〜」

かのん「うん」

かのん母「どうしたの？　なんか落ち込んだ顔してるわよ？」

かのん「そ、そんな事無いよ。ほら……うう……」

かのん先輩は必死に笑おうとするが、胸の奥から思いが込み上げ涙を流す。

かのん「たこ焼き買ってきた……」グスツ

かのん母「はあ、かのんちよつと座りなさい？」

そしてお母さんは、ありあさんを呼んでかのん先輩と2対1の対面で話をする。

かのん母「かのんよく聞いて？　あなたが留学を断った事を、お母さんは反対してない。だって心配だし、寂しくなっちゃうしね……。でも、ちいちゃんと言いたい事が、もう分かっているから悩んでるんでしょ？」

ありあ「世界に歌を響かせる」

かのん母「あなたにきたこの話は、誰にでも来る物じゃない。お母さんだったら喜んで行っちゃうかな」

かのん「それはお母さんが能天気だからでしょ？」

かのん母「ふふつ、そうかも。お母さんは、かのんがどの道を選んでも応援する。だから後悔だけはしないようにね？」

かのん「うん」

ガチャツ

その時喫茶店の扉が開いた。

かのん「？ ウイーンちゃん？」

ウイーン「あの………、今お時間良いですか？」

かのん母「……分かったわ。今飲み物出すわね？」

そしてウイーンはカウンターの席に座り、かのん先輩も隣に座る。

………

ウイーン「っ！」

かのん「ごめん、温め過ぎちゃった？」

ウイーン「美味しい……」

かのん「良かった」

ウイーン「でも、喫茶店なのに何でたこ焼き？」

かのん「さつきちいちゃんがバイトしてるお店の近く通ったから……」

ウイーン「ちい……？ ああ……千砂都ね。あの子に留学の詳しい話をしたの、私よ？ あなたが留学すれば、私も付いて戻る事ができるの……。家族からは、”かのんの下で歌を学びなさい”って言われていてね」

かのん「そんな事に……」

ウイーン「それだけ評価されてるんだ……凄いなあ”って、あの子言ってた」

かのん「……やっぱり、自分の話じゃ無いみたい……あなたにきた

話よ?」っ!」

ウィーン「あなただけに来た話」

かのん先輩の目には戸惑いの色が浮かぶ。なかなか自覚できなかったのだろう。

ウィーン「自分の力でウィーンに戻ってみせる」私ってば口先ばかり……。あなたに連れられて戻るのは嫌だけど、自分の夢のためだから……どんな方法でも、条件でも……。私は構わない」

かのん「…私にとって、Lieila!や学校の事が自分の夢くらい大切な存在なの。私、結ヶ丘に入学していなければ…歌を辞めていたと思う。そんな大切な場所と仲間を失ってしまうのが、正直恐いんだ……」

ウィーン「贅沢な悩みね」

かのん「ゴメン……」

ウィーン「それなら、留学しても恩返しはできる。むしろ留学したほうが、あなたの学校の力になれるわ」

かのん「えっ?」

ウィーン「言ったでしょ?ウィーン国立音楽学校は、世界的に有名な。あなたが留学すれば、必ず学校も注目される。世界中から結ヶ丘に入学を希望する生徒が集まるかもしれない」

かのん「っ!!」

ウィーン「つて、勘違いしないでね? 私はウィーンに戻れたらそれで良いの。でも、飛び込んでみたら? とても大切な事よ?」

話を終えたかのん先輩は、自身の部屋でウィーン国立音楽学校のパンフレットを見ていた。

かのん「歌を目指す人の憧れの場所……夢……」

ブーツブーツ

かのん先輩のスマホのバイブが鳴り、スマホを手に取るかのん先輩。千砂都先輩からの着信があった。

千砂都『かのんちゃん今から学校来れる?』

LINEにはそう表示されていた。

かのん（どうしたんだろう……）

かのん先輩が家を出ようとするとお母さんが呼び止めた。

かのん母「かのん？」

かのん「ちよつとだけ。すぐ戻る」

かのん母「すぐじゃなくて良いわよ。ちゃんと考えて答えを出しなさい？」

かのん「っ、うん!! マンマル、行ってくるね？」

そしてかのん先輩が結ヶ丘に到着すると、千砂都先輩が中から門を開けた。

千砂都「ういっす」

― 続く ―

かのんの決意 留学へ・・・

かのん先輩は、千砂都先輩に呼び出されて夜の学校の校内を歩いていた。

千砂都「夜の学校ってワクワクするね！」

かのん「怖いよ!! ん?」

かのん先輩が目線を左に向けると、理事長室に明かりが付いていた。

かのん「理事長……?」

千砂都「終わるまで待っててくれるって。行こう?」

そして千砂都先輩がかのん先輩を連れてきた場所は、俺たちが共に過ごしたスクールアイドル部の部室だった。

かのん「電気付いてる…」

千砂都「入って?」

そしてかのん先輩が部屋に入るとそこには……、

かのん「皆!!」

俺も含めたL i e i l a !のメンバーが勢揃いしていた。

すみれ「遅いわよ?」

きな子「かのん先輩に会いたくて来ちゃったつす!!」

かのん先輩が呆気を取られていると傍にいた千砂都先輩が口を開く。

千砂都「ワガママ言っただけゴメンね? かのんちゃんが考えて出した

答えをもう一度確かめたくて……」

かのん「ううん、見透かされてるなって……。留学しないって決めたはず何だけど……」

千砂都「私、やっぱりかのんちゃんに留学してほしい」

かのん「ちいちゃん……」

千砂都「かのんちゃん、皆を元気にできる。皆に勇気を与えられる。L i e i l a !で1番のスーパースター。それって……」 才能

”だと思っ!”

かのん「っ……」

千砂都「だから、その声をもつと遠くまで…もつともつと遠くまで響かせてほしい!!」

かのん「っ、……私、ここに来る前に決めてきた。留学、しようと思う。留学して、結ヶ丘の代表として…この学校がもつともつと有名になるように。そして、自分自身がもつと成長できるように…挑戦してみる! だから、皆とは…」「かのん先輩?」渚くん……」

「かのん先輩が留学しても、俺たちが仲間だっていう事は変わりませんよ? 過ぎした時間は、消えることは無いんですから」

すみれ「良いこと言うじゃない。かのんがいたから、ここまで頑張つて来られた」

恋「私もです」

可可「もちろんククもデス!」

きな子「きな子もっす!」

メイ「アタシも!!」

四季「me too!」

夏美「悔しいけど私もですの」

「もちろん俺もです!!」

一人一人自分の思いを口にする。皆、かのん先輩がいたからこそ、挫けずにここまでやってこられた。皆同じ思いだった。

かのん「皆……」

千砂都「かのんちゃんがないLielia!はLielia!じゃない。それが私達の出した答え」

かのん「っ……」

恋「ラブライブ!、優勝しましょう!!」

すみれ「それで、夢に向かって踏み出さない!!」

可可「かのんの夢は皆の夢デス!!」

きな子「かのん先輩には、思いつきり歌を響かせてほしいっす!!」

千砂都「……決まりだね?」

かのん「うん。でも、1つだけお願いがあるの!!」

お願い? 俺たちが聞く体制を取るとかのん先輩は願いを話す。

かのん「Lielia!は続けてほしい。一人でも欠けたらLielie

lila!じゃない。この10人でLielia!だっていうのは分かるよ? 私だってそう思う。でも、辞めて欲しくない……私にとつてLielia!は青春、この結ヶ丘から私がいなくなる事でLielia!が無くなるのは嫌なんだ……」

きな子「でも考えられないっす!! かのん先輩がいないLielia!なんて……」

かのん「そんなことない……皆凄くキラキラしてる。すごく素敵……皆が結ヶ丘で歌っているって思えば、離れていても勇気が貰える。Lielia!を感じていられる!!」

千砂都「フム……全国大会が終わったらLielia!は解散かと思っただけ、辞められなくなっちゃったね?」

かのん「ちいちゃん!」
夏美「せつかくならかのん先輩の後のセンターは私が奪いに行きますの!!」

恋「頼もしいですね」

すみれ「あら? センター争いなら負けないわよ?」

可可「良く言うデス」

メイ「できるかな?」

四季「かのん先輩が背中を押してくれた」

きな子「きな子やるっす!! やってみるっす!!」

「かのん先輩がいなくなった後も、俺が皆を支えます!!」

千砂都「分かった、約束する!!」

かのん「うん! ラブライブ!、必ず優勝しよう!!」

すみれ「それしか無いわね!!」

夏美「この10人で!!」

メイ「っ、……うおおおおっ!! なんか熱くなってきたっ!!」

四季「me too!!」

かのん「皆で、全力で歌おう!!」

そして、俺たちは指をVサインにして繋げ、ライブ前の掛け声の体勢を取る。

かのん「結ヶ丘のために! Lielia!のために!! song

l
続
く
l
L i e l l a !
『 s o n g
g f f
o o
r r
a y
l o
l u
!! !
』 『

第1部 最終話 私を叶える物語

かのん先輩が留学の決意を固め、残される俺たちもLieilia! を続けてかのん先輩の夢を応援しよう! と決めたその日から、ラブライブ! 全国大会までの間、俺たちは毎日必死に練習した。

俺たちは絶対に優勝してかのん先輩を笑顔で送り出す為に、かのん先輩は優勝して皆との最高の思い出を残すために。

皆それぞれの思いを抱えて、毎日必死に練習の日々を送っていた。

俺たちが校外にランニングに出ると、

「頑張ってー!!」

「ファイトーっ!!」

沿道から皆が応援の言葉を毎日の様にかけてくれる。それが俺たちに次から次へとやる気を与えてくれていた。

メイ「くーっ、寒みい……」

四季「頬の感覚無い」

きな子「温かいっす……」

すみれ「本当に? さすが北海道出身ね?」

きな子「そうじゃなて、皆の応援が温かいんす!!」

すみれ「っ! ……確かに、そうかも!!」

ダンス練習も四季と千砂都先輩が中心になり

四季「7、8、1、2、3、4、5、6、7、8!!」

四季の掛け声に合わせてダンスのリズムを覚える皆。一旦休憩を取ると、

「はい水、寒くても身体は凄く水分消費してますからしっかりと飲んでくださいね? はい、千砂都先輩」

千砂都「ありがとね?」

「ほらメイも」

メイ「おう。サンキュ!!」

四季「ナギサ……」ギョッ

すると、四季が突然抱きついてきた。

「お、オイ四季?!」

四季「疲労度が増加してるからナギサ成分補給して身体を癒やしている」

「つたく……」

俺が四季の頭を撫でてやると四季の顔はフニャツとなり幸せそうになる。だが、

可可「ナギサさん！ 四季さん！ 付き合ってるとはいえ練習中にイチャイチャしない!!」

怒られてしまった……。

メイ（見せつけてんのか……？） イラッ

フィジカルアップの筋トレ中も、

「ナツツー!!」

夏美は足がもうパンパンだが気合でスクワットを続ける。意気込みは充分だ。

千砂都「後10秒!!」

可可先輩ときな子も体幹を鍛えるために腹筋を使って身体をV字にしてバランスを取って耐久する。

可可「ク〜っ……き、きついデス!!」

きな子「でもやるっす!!」

かのん先輩と恋先輩とすみれ先輩は校外にランニングに出る。

「かのんちやくん!!」

「ライブ見に行くよ〜っ!!」

全校生徒皆が、そして地域の人まで応援してくれている。皆の暖かさが心に染み込んだ。

合間を縫っては可可先輩とすみれ先輩が共同で全国大会のライブ衣装のデザインを考える。

そして数日後、全国大会での衣装が完成した。

かのん「うわあ〜っ!! ステキ!!」

可可「こんなに早くできるなんて!!」

かのん「ありがとう!!」

八重「学校の皆、協力してくれてるから!!」

九乃「他にもやれることあったら何でも言っ!!」

恋先輩とメイも共同で曲作りの最終調整。夏美のオニナツツチャンネルにも、L i e l l a ! を応援するコメントが大量に届いていた。

理事長「決めたのね？」

かのん「はい!! 皆が背中を押してくれて…だから決断できました! 歌で世界を幸せにしたい。世界に歌を響かせられる様に、精一杯頑張ります! それがL i e l l a ! の、結ヶ丘の未来にも繋がって行くと思いますから!!」

理事長「ふふっ、いい顔をしてるわね。行ってらっしゃい」

そして月日は流れ、いよいよ全国大会当日。神宮国立競技場には、各地の地方予選を勝ち抜いたスクールアイドル、そしてファンの皆が集結した。

そしてついに、ラブライブ! 全国大会のステージ直前になる。男の俺がいる事に他のグループは戸惑っていたが東京大会の時の映像に俺が映っていた事で、” そう言えばL i e l l a ! には男マネがいたっけ? ” と思い出してくれたのか自然と視線は少なくなった。

そして俺の脇には、衣装に着替えた皆がいた。

恋「本当にここで歌うんですね…」

きな子「こんな大きなステージで……」

メイ「あ、あ” ああ” あ” ……」

四季「メイ落ち着いて。ナギサ、行ってくるね?」

「おうー!」

夏美「んゝっ! マニーの香りがしますの!!」

すみれ「ギャラクシーな私に相応しい舞台と言えそうね!」

千砂都「全部出しきらないとね!!」

可可「このステージを夢見て、ここまで頑張つて来たのデス!! 結ヶ丘が始まってから……L i e l l a ! を始めてからずっと!!」

かのん「私達の全部を、このステージで!!」

その頃客席では

悠奈「はい！」

前年度ラブライブ!の王者、サニーパッションがLielia!の応援に来てくれていた。

摩央「ありがとう」

悠奈さんが摩央さんにサイリウムを手渡す。すると、

摩央「こんなにステージを遠く感じる時が来るなんて……」

悠奈「なぐに染み染みしてんのっ? 今日はLielia!を全力で応援しちゃうよーっ!!」

サニーパッションの2人も、盛り上がる準備はオツケーだった。

ありあ「すごい人……」

かのん母「さすが全国大会……」

?「すみません? もしかして澁谷かのんさんのご家族ですか?」

かのん母「はい。あなた方は……?」

渚母「申し遅れました。私Lielia!マネージャーの日宮渚の母です」

四季母「若菜四季の母です」

メイ母「米女メイの母です」

かのん母「ああ、あの3人の!! かのんが、すごく中のいい幼馴染の3人組が入ったって言ってましたし実際に会いましたから知ってますよ。こうしてご家族と合うのは初めてですね」

?「澁谷さん!」

かのん母「あら、嵐さん!!」

すみれ母「嵐さんコチラは?」

千砂都母「こちらは澁谷かのんさんのお母さんです平安名さん」

?「す、すみません…Lielia!の皆のお母さんですか?」

かのん母「はい?」

?「私、鬼塚夏美の母です……」

何気にLielia!メンバーの家族が揃っていた。

渚母「親同士が顔を合わせるのは初めてですね。若菜さんと米女さんとは知り合いですけど……」

千砂都母「私も澁谷さんとは前から知ってましたけど他の方とは初

めてですね」

四季母「まあこうして知り合えたんですし一緒に子供たちの応援し
ませんか？」

そして家族皆で応援することになった。

ウイーン「……………」

2階の客席通路には、L i e l l a !を見届けに来たウイーンがい
た。

七未「声枯らして行くよーっ！！」

結ヶ丘生徒『『おおーっ！！』』

結ヶ丘の生徒たちも盛り上がる準備は万端。そして、次はいよいよ
L i e l l a !の番になる。

かのん「皆行くよ、1！」

可可「2！」

すみれ「3！」

千砂都「4！」

恋「5！」

きな子「6！」

メイ「7！」

四季「8！」

夏美「9！」

「10！」

かのん「L i e l l a ! っ！！ スーパー…」

L i e l l a ! 『スターツ！！』

そしてL i e l l a ! のパフォーマンスが始まる。俺が今まで見
てきた中で、その全てを凌駕する最高のパフォーマンス。皆が自分の
出せる全てを出し切り、圧巻のダンスと歌を奏でていた。

新潟県、とある男子中学生がいた……

？「凄い……L i e l l a ! か。俺も……この日宮さんみたいにL i

e l l a ! を支えてみたい！ 俺の受験する高校は決まったかな？」
また、東京の某所、

「姉者、昔とは見違えるほど生き生きしてる。夢……、か……」

別々の場所に、今度中学を卒業し、入試で結ヶ丘を受けることにした2人の中学3年生がいた事を、俺たちは4月に知ることになるのだった。

そして、万感の拍手と共に全国大会は終わりを告げた。

そして後日……、

結ヶ丘の周辺は L i e l l a ! 一色。地元の学校がラブライブで優勝したことで、街はものすごく賑わっていた。

ー 結ヶ丘スクールアイドル部室 ー

可可「じゃじゃーん!! とりやあつ!! L i e l l a !、優勝しましたあつ!!」

可可先輩が優勝旗を振り回す。皆は喜びを爆発させているが、「嬉しいのは分かるけど、もう何回目だよ……」

すみれ「そうよ。こうやって喜ぶの何回目よ！ 恥ずかしい!!」

可可「恥ずかしいとはなんデスか!! 優勝デスよ!?! ラブライブ！優勝!!」

きな子「何度見ても良いっすね……」

メイ「ああ……。最っ高だ!!」

夏美「ま、私がいれば当然ですよ!」

しかし夏美は小声で、「初めての一等賞……」と喜びに浸っていたのを俺は聞いていた。

すみれ「どうしたの?」ニヤニヤ

夏美「っ、何でも無いですよ!!」

四季「皆、頑張った……」

あの普段無表情な四季の目から感動で涙が溢れる。本当に嬉しかったんだな。

「涙出てるぞ?」

すると四季は涙を拭き取り、

四季「違う。これは汗」

まったく、嬉しいなら嬉しいってハッキリ言えば良いのに……。

恋「幸せです……。お母様の作った学校を、皆の力で大きく成長させることができました」

恋先輩の言葉に皆が恋先輩を見つめる。そうだな、1番嬉しいのは恋先輩かもしれないな。

夏美「ところで……。かのん先輩はいつまで学校に？」

かのん「え？」

夏美「出発間近のハズでは？」

すみれ「さっさと帰って準備しなさいよ！」

かのん「い、良いじゃん！ 家にいたって落ち着かないんだから……」

きな子「逆にこっちが心配で……」

恋「落ち着きません……」

千砂都「ほら、のんびりしてるとかのんちゃんが帰りづらくなっちゃうから練習練習!!」

可可「そうアス！ かのんの分まで可可はもっともっと頑張りマス！だから大船に乗ったつもりで、行ってくるのデーーース!!」

そして、皆はかのん先輩をつまみ出した。

ー かのん side ー

かのん「はあ、つまみ出されちゃった……。荷造りは、全部済ませちゃってるんだよなあ……。ん？」

かのん先輩が何かに気づき前を向くと、何故か結ヶ丘の制服を着たウィーンが立っていた。

かのん「ウィーンちゃん？ えっ？その服……。えっ？」

ウィーン「見ての通りよ、留学は中止」

かのん「え”?! そ、そんな急にどうしたの……。？」

ウィーン「あなたの元へも手紙が届いているはずよ？」

かのん「ええええええっ!!」

ー 渋谷家 ー

ありあ「お母さん、この手紙なんだろう?」

かのん母「さあ…? お母さんドイツ語読めないからなあ…」

ありあ「お父さーん!!」

かのん先輩の家には、確かに国際郵便で留学中止を知らせる手紙が届いていたとさ……。

どうやら、かのん先輩を含めたL i e l l a!の物語は、まだ終わらないらしい。

かのん「ど、どうなっちゃうのーっっ!!?」

― 第一部・終 ―

幕間：新年度へく 春休み
転校生!?! 天才空手姉妹

俺は今走って学校へと向かっていた。だが今は信号で立ち往生している。

「ヤツベ、練習遅れる!! まさか寝坊するなんて!!」

? 「あのー……すみません」

「早く行かないと行けないのに……」すみませんっ!!」へ?」

俺が声のした方を振り返ると黒髪のショートとポニーテールの女の子が二人立っていた。顔がスゲエよく似てる。双子か?

? 「すみません。結ヶ丘高校の方ですか?」

「はい。そうですけど……どちら様で?」

? 「申し遅れました、私たちはこの度結ヶ丘に転校してきました。

私は真田紗夜と言います」

? 「真田陽菜だよ! 宜しく!!」

「ああ、これはぐー丁寧に……日宮渚ひのみやなぎさと言います。で、どのようなご要件で……?」

紗夜「実は……」

紗夜さんが事情を説明してくれる。

「道が分からなくなった?」

紗夜「はい。良ければ案内してくれないでしょうか? どうやら学校に向かうところだった様ですし……」

ふむ、転校生か。まだ右も左もわからない子を突き放す訳にはいかなな。

「了解。でも俺急いでるからちよつと小走りでも良いか? 数分で着くからさ」

陽菜「うん! 分かったよありがとうございます!!」

紗夜「ありがとうございます」

「じゃあ行くぞ」

そして俺たちは軽く走って学校へと向かう。そこからは意外とス

ムーズに来れたので3分位で結ヶ丘ゆいがおかに到着した。

紗夜「ここですか？」

「そだよ？ 転校生ってことはひよつとして職員室に行く？」

紗夜「はい。そうです」

「じゃあそこまで連れて行くよ。でも、そこからは自分で何とかしてくれる？ もう時間がギリギリだから」

紗夜「分かりました」

そして学校の中に入り内履きに履き替えると転校生の真田姉妹を職員室に連れて行く。到着すると真田姉妹はありがとうとお礼を言ってきたがすぐに俺は屋上に向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

恋「まったく、遅刻はしないでくださいね？」

「はい……すみませんでした……」

結論を言います。結局遅刻しました。あくもうツイてない!!

そしてお昼までスクールアイドル部の練習があり、正午が近づいたので今日の練習はお開きになった。

かのん「じゃあまた明日ね？」

「失礼します」

四季「お疲れ様でした」

メイ「お疲れ様でした!!」

そして3人で昇降口の所まで行くと先程の姉妹がちょうど帰る所だった。

紗夜「あつ、先程の……」

四季「ナギサ？」ゴゴゴゴ

四季から黒いオーラが発せられる。勘弁して……

メイ「おい、あの二人誰だ？」

「転校生だよ」

四季「何でナギサがそれを知ってるの？」

「来るときに道に迷っててさ、案内がてら一緒に来たから」

四季「ふくん」

四季は俺にガツチリと抱きつき顔を二人の方に向けて威嚇する。
「ナギサは渡さない」と言わんばかりだ。

紗夜「あの？ 何か……」

「気にしないでください。ただの嫉妬ですから」

陽菜「嫉妬？ あっ、もしかしてその男の子のこと好きなの？」

四季「そんなハッキリと……まあ、付き合ってるけど」

陽菜「へく？」（・▽・）ニヤニヤ

紗夜「陽菜！ 失礼でしょ？ すみませんでした」

四季「いえ……」

「あの……いい加減帰りませんか？」

そして俺たちが校門のところまで出ると、

不良「おっ、ラッキー!! 結ヶ丘のスクールアイドルじゃん!!」

四季「っ!!」

メイ「なんだコイツら!？」

紗夜「スクールアイドル？」

「4人とも下がってろ」

陽菜「えっ？」

すると、口の中でガムをクチャクチャと噛んだいかにもといった男
が絡んできた。

不良「おーおーカッコつけちゃって、その子達渡しな」

メイ・四季「っ!!」

「断る……と言ったら？」

不良「へっ、お前ら!! やっちまえ!!」

すると取り巻きの二人が殴りかかってくる。一人目のパンチを軽くいなしてカウンターでボディブローを喰らわせる。二人目が隙を突いて回し蹴りを放って来たのでわざともらってあたって瞬間相手の足を掴んだ。

不良「なっ!? コイツわざと!？」

「オラァっ!!」

俺は掴んだ足を思い切り捻って不良を転倒させると体重落下の勢いに乗せて思い切り相手の身体に肘を入れた。

不良「グホオツ?!」

不良「なっ、何だと!?!」

取り巻きの二人がアツサリとやられリーダー格の男は驚いているようだが俺は警戒を怠らない。すると真田姉妹が突然俺の脇に立ち、「後は任せてください」「カッコ良かったよ?。」と

「おい!・危ないぞ?!」

不良「女にやられる訳無えだろ!! 舐めんな!」

この状況を舐められたと感じた男は怒りで突進してくる。すると、

陽菜「ふっ!!」

陽菜ちゃんが素早く姿勢を下げ足を払う。あまりの速さと威力に躲せなかった男の身体は浮き、

紗夜「せいっ!!」

ボグシャアツ!!

紗夜ちゃんの渾身の正拳突きが、身体が浮いてしまい身動きの取れない男の無防備な顔面に吸い込まれる。男はピクピクと身体を痙攣させて倒れた。

「す、凄げえ……」

四季「3人とも、今警察を呼んだ」

「は……びびったあ……」

陽菜「にしても凄いな? 私達に下がってろって……」

メイ「へ?」

紗夜「真田幸村の子孫の空手天才姉妹、真田紗夜・陽菜って聞いたことありません?」

するとメイが、

メイ「あつ、前にTVで見たかも!! そっか。どっかで見たような気がしてたんだ!!」

「真田幸村の子孫って……まあ強いのは分かったよ」

紗夜「ふふっ、けど少し嬉しかったです。自分で言うのも何ですけど、私達強いから同じ状況だといつも助けを求められる側だったので……」

陽菜「うん! ちょっとだけときめいた!!」

四季「ギロツ」

紗夜「心配しなくても盗りませんよ？ それと日宮さん、私の事は呼び捨てで大丈夫ですよ？ あなたは男性として信用できると思っただので」

陽菜「あつ、私も良いよ？」

「了解。俺のことも渚で良いよ？」

するとパトカーのサイレンが聞こえてきた。お巡りさんに事情を説明し、男たちは連行されていった。

俺たちも一応聴取は受けたが被害者と認識され無罪放免。やったぜ！！

紗夜「渚くん、それでは新学期に」

陽菜「バイバ～イ」

「紗夜さん、陽菜ちゃん、またな～」

四季「ナギサ……浮気は許さないからね？」

「分かってるよ！！ 言われなくても俺は四季を捨てたりしないっての！！ 第一呼び捨てだったらきな子や夏美だってそうだろう？」

四季「ナギサ……分かった」

「全く、そんなに嫉妬するなんて……四季はカワイイな」

四季「っ／＼／＼／」

赤面する四季。

メイ「ハイハイ分かったから……」

こうして、新年度から結ヶ丘に入ってくる双子の姉妹と出会った俺たち。果たしてこれからどんな関りができるのか？

転校生!? 天下無双の剣士

春休み中の4月のある日、今日はLielia!の活動は休み。

俺は一人で書店でラノベの新刊を探していたら目的の物があつたので手に取ろうとした。

?・渚「あつ……」

すみれ先輩とよく似た顔立ちと髪色だが、よく見ると違う。というか背に剣道の竹刀の入れ物を担いでいる。

「あの、これ読みたかったですか?」

?「えっ、あ…はい。いつも読んでるので。でも、一冊しかありませんね……」

「ああ、俺は別のところで探しますよ。どうぞ」

するとすみれ先輩とそっくりな女の子は慌てた顔になる。

?「そんな!! 良いんですか?」

「ええ。じゃあ俺はこれで……」

俺が店を出ようとする時、

?「あつ、ちよつと待ってください!!」

ん? 俺が何かと思うと、その娘は会計を済ませて俺のところに来る。

?「お礼に見つかるまでは付き合いますよ……」

「ええ?…そこまでしなくても……」

?「私の気が済まないんです!!」

凄く生真面目な子だな。逆に心配になって来るぞ……

「分かったよ、じゃあしばらくよろしくね?」

?「はい! 私は”宮本ライカ”と言います。アナタは?」

「俺は日宮渚と言います」

ライカ「? 日宮……渚? ひよつとしてLielia!のマナー

ジャーの?」

「知ってるんですか俺の事?」

するとライカさんはクスツと笑い、

ライカ「はい。従姉妹から聞いてます」

「従姉妹？」「平安名すみれ、私の従姉妹です」

!?! すみれ先輩の!?! つ、そうかだからか……

「だからすみれ先輩に似てたのか……ひよつとして年上ですか?」

ライカ「いえ、渚くんと同じ年です。今度高2になります」

そうなのか。ん? 待てよ?

「ひよつとして今結構頑張って敬語話してる?」

ライカ「え? なんで分かったんですか……?」

「いや、すみれ先輩常識人だけど敬語とかは苦手な人だからもしかしてと思つて。無理に敬語にしないで良いよ? 同じ年なら尚更」

ライカ「本当? じゃあそうさせてもらおうわ!」

おお……、一気に口調が砕けたな。

「じゃあ本屋とか回るから付き合ってくれる?」

ライカ「アタシが言い出した事だからね。勿論よ!!」

そしてライカさんと二人で本屋やGAMES等を回る。運良く2店舗目のGAMESであったので買って来る。

ライカ「あつて良かったじゃない」

「うん、ありがとう。おかげで楽しかったよ」

ライカ「ええ。それじゃあ私はこれで。新学期に学校で」

「うん」

何とライカさんは新年度から結ヶ丘に転校してくるらしい。この間の真田姉妹と言い、最近歴史偉人子孫系転校生によく会うな……。

え? 歴史偉人子孫ってなんだって? 何とこのライカさんは剣の達人として名を残した”剣豪”宮本武蔵の子孫らしい。だから剣を使わせたら敵は無いそう。去年のインターハイの剣道大会では全国優勝まで成し遂げていると言っていた。

ライカさん曰く、全国大会の決勝も相手が弱すぎてつまらなかつたと言っていた。いやいや、全国大会の決勝がそんなレベルに感じるつてどんだけ強いんだよ?

そしてライカさんと分かれて俺はすみれ先輩の家の神社に行く。何か男手が欲しい用事があるから手伝ってくれて言われてたからな。

俺が神社へと通じる石段の前までたどり着くと……

ライカ・渚「あれ!？」

なんで?

ライカ「な、なんでここに?」

「いや、俺すみれ先輩にちよつと男手が欲しい用事があるから来てくれって……」

ライカ「っ!! すみれ……」

全てを察したようなライカさん。 ?

ライカ「実はね? 私結ヶ丘に編入するにあたって、これからすみれの家にお世話になるの」

「ああ、従姉妹だから?」

ライカ「まあね。それで、荷物はもう送ってあるんだけど、結構重いがあるのよ……」

「あつ、すみれ先輩それで……」

ライカ「多分ね。手伝って欲しいってことだと思うわ」

「あくそれだと嫌だつて娘もいるよな……すみれ先輩に話して今日は帰……」 「いや、貴方なら別に良いわ」 え?」

ライカ「デリカシーのない男だったからお断りだったけど、貴方は女性に対してちゃんと気を使ってたし。問題ないわ」

何か信頼を勝ち取っていたらしい。

「じゃあ行きますか」

く 平安名家 く

すみれ「渚、遅いじゃない! つてあら? なんでライカと一緒に?」

ライカ「今日街で知り合ったのよ。それよりもすみれ!! この人なら良いけど、勝手に男の子に手伝わせようとししないでよ! 下着の入った段ボールだつてあるんだからね!」

怒るライカさんに、すみれ先輩もタジタジだ。

すみれ「わ、悪かったわよ……。でも今渚なら良いって……それはただの結果論でしょ!」 ハイ……」

「あゝ、帰りましょうか……?」

ライカ「いや、手伝って」

「あつ、手伝うんですね」

すみれ「じゃあ部屋に案内するわ」

そして部屋に通された俺とライカさん。二人の指示で俺は荷物運びを主な仕事でやり、中の荷物を取り出してダンスや机に入れるといった作業は女子がやった。

そして1時間程で作業は終わった。

「終わったあゝじゃあ帰りますね?」

すみれ「渚、夕飯食べてく?」

「いや、親に連絡してないんで良いです」

ライカ「今日はありがとね?」

「おゝ、ライカさんまたねゝ」

ライカ「ライカって呼び捨てにして良いわよ? アンタ気に入ったわ」

「あゝそう。じゃあライカ、また学校でね」

ライカ「ええ」

そして渚が帰った後の平安名家では、

すみれ「ライカ? 渚、彼女いるからカン違いされないようにね?」

ライカ「あつ、そうなんだ。分かった……（そっか、結構いい人だと思っただけだなあ……先約がいたか）」

― 続く ―

真田姉妹の弱さ

春休み中、今日はLielia!の練習が休みなので俺は町に遊びに出ている。四季は新作の発明品に掛かりきりで部屋から出てこないらしい。

まあしようが無いな。

表参道の辺りをぶらついていると、雑貨屋の扉が開きこの前知りあつた顔が2つ覗いた。

「あれ、紗夜さん？ 陽菜ちゃん？」

紗夜「あつ、渚さん……こんにちは」

この間出会った天才空手姉妹だった。

陽菜「奇遇だね。1人？」

「うん。2人は買い物？」

陽菜「うん。この街ってなんかさー、やけにナンパが多いんだけどなんで？」

んー思い当たることといえば1つしか無いけどな。

「2人が可愛いからだろう？」

紗夜「そういうこと言わないで下さい／＼／＼ 彼女さんに怒られますよ?。」

「だな。聞かなかつた事にしてくれると助かる」

陽菜「どうしよつかなく？」ニヤニヤ

イタズラな笑みを浮かべる陽菜ちゃん。こっちも釣られて笑顔になる。すると、

? 「あれ? 真田?」

紗夜「え……、!?!」

急に声を掛けてきた男の方を見ると、紗夜さんは驚愕の表情を浮かべていた。

陽菜「アンタ……!! まさか西野?!」

西野「覚えてたか」

西野と呼ばれたその男は、ニヤニヤと気色悪い笑みを浮かべると、紗夜さんの肩を掴んだ。

紗夜「ビクッ」

? 何か今震えなかったか?

西野「変わってないみたいだなあ? 何か空手が強くなったって聞いたけど、中身は弱いままみたいだなあ?」

紗夜「っ!!」

陽菜「アンタ!!」

なんだコイツ?

紗夜「誰が弱いつて?!」

すると紗夜さんは西野と呼ばれた男に掴みかかろうとする。ヤバイ! こんな道の往来で!!

「やめろ紗夜さん!! 手を出して警察沙汰になったらマズい!!」

俺は必死で紗夜さんを抑える。ヤバイ、力強い!!

紗夜「離して!! 今の私が弱いか試してやる!!」

紗夜さんの敬語が外れてる。これ相当逆上してるぞ!?

西野「っ!? ハッ……これから楽しみだな……」

そして西野は去っていった。

紗夜「待てえ!! 止めないで!!」

「ダメだつて!!」

紗夜「止めないでよおっ!!」ガクッ

西野の姿が見えなくなり、紗夜さんは瞳に涙を浮かべ、その場に崩れ落ちる。周りには野次馬が集まってきてる。

「おい、場所変えるぞ」

陽菜「う、うん……」

紗夜「……………」

そして近くの公園に場所を移した俺たち。俺は先程の男について二人から話を聞く。

「で、あの嫌な感じの男は誰なんだよ?」

陽菜「アイツは、小さい頃私をイジメた奴。でも紗夜が私を守ってくれて……でもそのせいで矛先が紗夜に向いちゃって。転校してっただけだ。まさかこの街にいるなんて……」

「は、イジメ？ でも、二人共相当強いって…「今はね」

陽菜「昔の紗夜は弱ったんだよ。臆病で泣き虫だったの」

紗夜「陽菜!!」

陽菜「ゴメン。でもここまでできた方の方が良いと思って」

紗夜「っ!!」

陽菜「続けるね？ 紗夜が空手を始めて強くなったのは小学三年生のとき。そのときにはもうアイツはいなかったんだけど、強くなったとはいえ、昔の思い出がトラウマになってた。だから紗夜は昔の弱い自分が大嫌いなもの。それからかな？ 誰に対しても敬語で話すようになったのは」

「なるほどな」

大体分かった。

西野「よお、さつきぶりだな？」

陽菜「!!」

紗夜「西野お!!」

西野「ああ？ 西野さんだろ？」

紗夜「ふざけないで!! ここで決着つけてやる!!」

西野「上等じゃねえか……」

そして、紗夜さんが西野に殴り掛かる。ヤバイ!!

「止めろおおおっ!!」

ボグシャアツ!!

思い切り振り抜かれた紗夜さんの拳は、西野ではなく俺の顔を撃ち抜いた。

紗夜「!?!」

西野「ああ？」

陽菜「な、なんで……」

「ぐっ、……紗夜さん、逃げずに向き合え」

紗夜「向き合ったじゃない!! だから強くなるために必死で!!」

「今のお前のドコが強いんだ!!」

紗夜「なっ!!」

「くっ、自分の弱さから目を逸らさず……しっかりと向き合うんだ。

自分の弱さを理解し向きあう、それが…本当に強いって事なんだ!!
昔の君は、確かに臆病だったかもしれない。けど、妹の為に…恐怖に立ち向かう気持は持っていたんじゃないのか? それだったら、今の君より、昔の君のほうがずっと強い!!」

紗夜「!!」

陽菜「渚くん……………」

西野「ハッ、くだらねえこと言ってるな!!」ドガッ!!

渚「ぐあっ!!」

紗夜「渚くん!?!」

陽菜「渚くん!!」

西野「ほら、邪魔者は片付けたぜ? かかってこいよ」

紗夜「許さない…………!!」

紗夜さんは血が出るのではというほどに拳を握り締める。

「紗夜さん…………、怒りに身を任せちゃダメだ!! その拳は、誰かを”守るため”に身に着けたんじゃないのか!!」

紗夜「!!」

そうだ…………。私は、陽菜を守るために強くなろうとしたんだ。必死に鍛錬して、自分ではなく、大切な物を守るために。でも、いつの間にか…………自分の弱さを隠す為の物に変わってしまったんだ。なんで忘れちゃってたんだろう…………。

陽菜「紗夜!!」

紗夜「陽菜……………」ニコッ

陽菜「え?」

笑ってる?

紗夜「もう大丈夫」

西野「何だあ? やるのかやらないのかハッキリしろ!」

紗夜「待たせて悪かったわね。勿論やる。でも、私のくだらないエゴを守るためじゃない…………私の大切な物に振りかかる火の粉を払うためにやる!! 行くよ!!」ダンッ!!

勢いよく西野に急接近する紗夜さん。拳を西野の顔目掛けて突き

だす。

西野「甘いぜ!!」ガシツ!!

!! アイツ、あのパンチを掴んで止めやがった!!
すると紗夜さんは腕を振りほどき思いきり踵落としを放つ。

西野「こんな物!!」

西野は上を見上げ、降りてくる足をクロスさせた腕でガードの体勢を取る。

紗夜（釣かった!!）

紗夜さんは落とした足をフェイントに使い、視界から外れている逆の足で西野の大事な所を蹴り上げた。

西野「グホオアツ!」

股間を押さえて悶絶する西野。紗夜さんは追撃するような事はせずに、覚束ない足取りで逃げていく西野を見送った。

紗夜「渚くん大丈夫!」

陽菜「そうだ!! 大丈夫!」

「おう。何とか……紗夜さん思い切り殴り過ぎ……」

紗夜「ご、ゴメンナサイ……」

叱られた子供みたいにシユンする紗夜さん。俺はハアと息を吐くと紗夜さんの頭を優しく撫でる。

紗夜「え?」

「少しくらいは、言ってること分かってくれたみたいだね?」

紗夜「うん。昔はそうだったのに、いつの間にか忘れちゃってたみたい。情けない……渚くんは、自分の弱い所が嫌じゃないの?」

「そりゃあ嫌さ。けど、だからって目を背けてたら、いくら強くなつても、内側は成長しないから」

紗夜「そうなんだ……」

陽菜「!? 紗夜、言葉使い……」

紗夜「ああ、もう自分を隠すのは止めようかな?」って。自分の弱さから目を逸らしちゃ駄目だって、教えてもらったし!」

「そっか……」

陽菜「あつ、もうこんな時間だ……。紗夜、帰ろう?」

紗夜「そうだね。渚くん家まで送るよ？　巻き込んで怪我させちゃったし」

「大丈夫だよ。気をつけてな？」

陽菜「うん。渚くん、その……紗夜を救ってくれてありがとう!!」
「俺は何もしてないよ。じゃあな？」

紗夜「またね？」

陽菜「じゃあねく!!」

渚が帰ったあと、

紗夜「ねえ、渚くん……強かったね。私達が今までに出会ったどの男性よりも……」

陽菜「うん。心が強かった!」

紗夜「帰ろうか？」

陽菜「うん。あくあ……渚くんの彼女さんは幸せ者だなあ……」

紗夜「ホントだよね？　出会うのが遅すぎたよ」

悔しそうな口調をしていたが、決して暗い顔はしていない仲良し姉妹の姿が、夕暮れの街に消えていった。

宮本ライカの心

春休みのLielia!の練習が午前中で終わったある日の午後、俺は足を伸ばして秋葉原に来ていた。

「よし、ラノベの新刊ゲット! 早速帰って読もう……ん? アレは……」

渚が視線を向けた方には、女の子がチャラそうな男2人に絡まれていた。

(あく、ナンパなんて場面に遭遇するとはな。女の子凄く嫌がってんじゃない。仕方ないか……ってあれ?)

その女の子は、渚には見覚えがあった。

ヤンキー1「ねっ? ちよつと一緒にお茶するだけだから」

男がライカに手を伸ばす。

ライカ「嫌よ! 何でアンタみたいな奴と! どっか行って!!」パチン!

ライカが手を振り解く。が、

ヤンキー1「はは、振りほどかれちゃったよ」

ヤンキー2「取り敢えず路地裏連れてくか?」

マズい……ライカの脳裏に最悪の展開がよぎる。

ライカ(相手が一人ならどうにでもなるけど、大人の男二人は流石に……竹刀も無いし!!)私はどこにも行かないわ! アンタたちがドコか行きなさい!!

ヤンキー2「ちよつと声がデカいかなキミ?」

周りの人たちは見て見ぬふりで助けてくれる気配がない。

”怖い”……。このままじゃあ

その時、

「ライカ、ゴメン待ったか?」

ライカ「え?」

突如自分の名前を呼ばれ、そちらを見ると……

ライカ(な、渚くん!? 何でここに!!)

しかしそんなライカの心境も知らず渚は言葉を並べていく。

「秋葉原、久々で待ち合わせ場所分からなくてさ。ん？この人たちは何？待ってる間話し相手にでもなってくれてたの？」

ライカの頭の中は？で埋め尽くされていた。ライカは別に渚と待ち合わせしていたわけではない。ならなぜ？

男たちの顔を見ると、そちらも訳の分からない顔をしていた。

ライカ(コレはもしかして”とある”の上〇さんの知り合いのフリして切り抜く作戦？ まあフリじゃないけど……乗るしかないわね)「じゃあ俺達約束してるんでここらで失礼しますね？話し相手になつてくれてありがとうございます」ペコッ

ライカ「本当に遅いわよ？待ってたんだからね？」

そして俺とライカは離脱した。残された男たちはというと、

ヤンキー1「男の連れがいたのかよ……」

ヤンキー2「失敗かよ……帰ろうぜ？」

そしてある程度の距離を取った渚とライカは、

「ん、思ったより食って掛かってこなかったなアイツら。この作戦はこれからも使えそうだな」

ライカ「あ、あの……渚、ありがとね？」

「おう。怯えてた様に見えたしほっとけ無くてな」

ピクッ

ライカ「怯えてたって……」ん？ ああ、何か強気な態度取ってたけど何かな……やっぱり女の子が大の男2人に絡まれたら怖いよな」っ
!!

「？ どうした？」

ライカ「ちよつとついて来て？」

「？ おお……」

そして渚とライカが近くの公園のベンチに座ると、ライカが話始めた。

ライカ「私ね、今ではこんなだけ……昔から怖がりな上に臆病でね……でも、私の家の事話したでしょ？ 強くなきゃ、弱さはあつてはならない、弱さは必要無いって思ってきたから必死に修練したんだけど……やっぱり心の奥底はそう簡単には変わらないわね。まさか怯

えてたの見抜かれるなんて……………」

ふむ、まあそういう家に産まれるとそうなったりするの……。

「別に怖がりでも良いんじゃないか?」「え?」ライカは家の事を例に挙げたけど、先祖がいくら凄い人でも関係なくないか?　ライカはライカ……だろ?」

ライカ「私は私……」

「それにさ、自分が恐がりなのを知っててそれを何とかするために必死に剣道頑張ってるまで強くなっただら?　自分の欠点に向き合って乗り越えようとできるんだから、例え怖がりでもライカは弱くはないと思うけどな?」

ライカ「!!」

「まああくまで俺はそう思うっただけだから。押し付ける気は無いよ?」

ライカ「本当に?　怖がりでも……私は弱くない?」

渚は真顔から優しく笑い、

「必死に自分の欠点を克服しようと努力できる人に、弱い人はいないよ。ケンカとか、身体がって意味じゃなくて……」心”がね”

ライカ「っ!!」

「っ!?!　ライカさん?!」

限界だった。ライカは涙を流し、渚に勢いよく飛びついた。渚の腰回りに腕を回し、お腹に顔を埋めて泣く。

ライカ「うう……………うっ……………」

「やれやれ……………」

渚はライカの背中を優しく擦ってやると、ライカはだんだんと落ちていく。

数分後……………」

ライカ「ありがとう……………」

「良いつて。カワイイ姿見れたし……」ニヤニヤ

ライカ「っ!?!／／／」カアアアツ／／／

ライカの顔が真っ赤になる。

「あれ?　照れてんのか?」

ライカ「うるさい!! バツとして私を家まで送りなさい!!」

「分かりました。すみれ先輩の家までエスコートさせて頂きます

……」

渚は両手を挙げてヒラヒラと振る。

もう!!

ライカ「彼女さんに言うわよ?」

「それだけはやめて!」

これだけは、私のささやかな抵抗だ。／／／

真田姉妹・宮本ライカ 四季とメイ・渚との邂逅

春休みも終盤に差し掛かったある日の早朝、四季、メイは新年度に向けてスクールアイドル活動のために、渚は2人に付き合っただけで体力作りの一環として早朝ランニングをしていた。

現在は普段皆でトレーニングをしている公園まで走っている所だ。

メイ「ハツハツ、なんか慣れちゃって凄いな。去年の夏は走ってヘトヘトになってたのに今じゃあまだ余裕があるぞ……」

四季「me too……」

「それだけ2人が成長したってことだろ？ さすがラブライブ！優勝メンバー!!」

俺が煽るとメイは顔を赤くして「うるせえ……」、四季は無言だった。顔がほんのり赤くなっていた。

そして公園に着き、俺がスマホに入った音源を再生させて、2人がダンスの練習をしようとすると、

？「あれ？ 四季ちゃん、メイちゃん？」

？「あつ、本当だこんな時間に……」

四季・メイ「「え？」」

2人が振り向くと、

紗夜「久し振りだね」

陽菜「ヤッホ！」

メイ「あつ、確か転校生の空手姉妹……」

紗夜「空手姉妹って……真田紗夜だよ（笑）」

陽菜「真田陽菜！ 覚えてよ。もく」

メイ「ワリイワリイ……で、こんな時間に何やってんだよ？」

紗夜「私達は毎日の日課のランニング。そういう3人は？」

「俺は四季とメイのスクールアイドルの体力トレーニングの手伝いだよ」

四季「うん。ナギサに手伝ってもらって……？」

陽菜「そうなんだ……」

すると、渚と真田姉妹の様子に四季が違和感を感じた。

四季「ナギサ？　なんか2人と仲良くなってる？」

「えっ!?　あくそれは……」

陽菜「もしかして言ってるの？」

メイ「何が？」

陽菜「この間渚くんが紗夜を助けてくれてね。お陰で紗夜は自分の弱さとしつかり向き合える様になって……渚くんのこと凄く信頼してるんだよ」

四季「ナギサ？」

「は、ハイ……」

四季「そんな事があったなら何で言わなかったの？」

「いや、だって相談乗っただけでそんな話する必要あるか？」

四季「そうだね。相談に乗っただけだったら必要ないね。でも紗夜ちゃんの様子からしてそれだけじゃない」

メイ「ナギ……」

「すみません。気をつけます……」

紗夜「大丈夫だよ四季ちゃん、渚くんは浮気なんかするような最低の男じゃないと思うよ？」

四季「そんな事は分かってる。けどやっぱり少し嫉妬する……」

陽菜「女心は複雑だね〜？」

メイ「だなあ……」

真田姉妹が、「スクールアイドルの練習見せてよ!」と言うので、2人に見学してもらいながら四季とメイはダンスの練習を始める。するとやっている途中で……、

？「渚？」

メイ「あ、すみれ先輩？　けど何か違うような……」

「あつ、ライカ……どうしたこんなところで？」

ライカ「ランニングよ。剣道も体力使うからね……」

「お前もか……ナギサ?。(言)「またかよ!!」

渚は四季にじめんに正座させられ、事の経緯を話した。

四季「ラノベを買いに本屋に行ったときに出会った子で、すみれ先輩の従姉妹と……」

メイ「そんでまた例に漏れずこの子のトラウマも払拭したと……」
「ハイ……」グスツ

何でこうなるの!? イミワカンナイツ!

ライカ「はじめまして。宮本ライカです。貴女が噂の渚の彼女さんね?」

四季「呼び捨て?」

ライカ「ええ。私は普通にそう呼んでるわよ? 渚も私のことを呼び捨てにしてるし……」

四季「……」

「スミマセン私が全て悪いです。なのでそんなに睨まないください。怖いです……」

恐怖で震え上がったちゃうじゃねえかよお……泣いちゃうぞコノヤロー……」

四季「はあ……。まあ……。ナギサのいつものお人好しが出たんだろうけどね……。困ったことに、そこがナギサの良い所でもあるから……」

ライカ「そうね。言っとくけど確かに渚のことは気に入ってるけど、奪う気は無いから心配しないで?」

紗夜「私も良い人だとは思ってたけど、彼女いるのに奪い取ろうとは思わないから」

四季「そう……」

四季はフウト、一息つきやっと落ち着いてくれたようだ。すると、メイ「それにしても、宮本武蔵の子孫って……二人も確か……」

陽菜「うん。真田幸村の子孫だよ?」

四季「歴史偉人子孫転校生……」

ライカ「同じく転校生ってことには驚いたけど、真田姉妹のことは知ってたわよ? 私は剣道だけど、武道の界限では有名なだしね」

紗夜「私もライカさんのことは知ってた。有名だし……」

ライカ「ライカで良いわよ? 堅苦しいのは好きじゃないわ」

紗夜「じゃあ私のことも紗夜で良い」

陽菜「私も陽菜で良いよ?」

ライカ「了解よ。紗夜、陽菜」

武道界隈の有名人たちが出会って親睦を深めていると、
ピピピツ、ピピピツ!

渚のスマホのアラームが鳴った。

渚「あつ、そうこう言ってるうちに時間来ちまったぞ?」

メイ「練習できなかつたな?」

四季「全くナギサは……「スミマセン私が悪いです……」分かつて
るなら何で言わないかなあ?」

すると、

陽菜「ねえ、さつきから気になってたんだけどそのバスケットボー
ル渚くんの?」

「ん? おう。この公園バスケのゴールあるんだよ」

ライカ「へえ? バスケやるんだ…見せて?」

紗夜「あつ、私も見たいかも」

陽菜「私も!!」

「分かったから。じゃあコート行くか」

そしてバスケットコートに移動。渚は軽くレイアップシュートをして
ウォーミングアップして身体を慣らしていく。

陽菜「渚くん上手いの?」

四季「見てればわかる」

「おっし、メイ! いつもの頼む!!」

メイ「オツケー!」

そしてメイはゴールにボールを放る。それを俺は助走を付けて跳
躍。空中でボールをキャッチしてそのままダンクを叩き込んだ。

紗夜「 Dank!」

ライカ「しかもアリウープで叩き込んだ!」

陽菜「てか1メートル近く跳ばなかつた!」

「よし、じゃあ次は……」

渚はスリーポイントラインの外側に立ち、1本毎に地点を変えなが
らスリーポイントシュートを順番に放っていく。シュートはリング
に掠りすらせずに真ん中を射抜き続け、初めて見る三人は唾然。

「ありがとう、もう良いぞ?」

メイ「よし、じゃあ帰るか?」

ライカ「渚、アンタ凄いのね……」

陽菜「カッコいい!!」

紗夜「陽菜!」

メイ「クスッ」なんか……楽しい奴らだな?」

四季「うん。ねえ、良かったら連絡先交換しない?」

紗夜「うん。良いよ?」

陽菜「オツケー!!」

ライカ「私も良いわよ?」

「それぞれお互いに連絡先を登録する。」

紗夜「ライカちゃんも四季ちゃんたちもよろしくね? 渚くんも」

陽菜「渚くん、四季ちゃん、メイちゃんよろしくね、ライカちゃんも!!」

んも!!」

ライカ「ええ。渚、紗夜、陽菜、四季、メイ、よろしくね?」

メイ「ああ。よろしくな!!」

四季「よろしく……」

「よろしくな!!」

全員お互いの連絡先を交換し、家に戻った。

新たな友と ガールズトーク（前編）

四季とメイも真田姉妹、ライカとも仲良くなり後日、四季の家に女子たちで集まっていた。

渚は今日にはおらず、1人で走り込みをしている。

― 四季の家 ―

メイ「へえ、紗夜そんなに強いのに昔は臆病だったのか……」

四季「でもさすがナギサ。それは確かに心は昔の方が強い」

紗夜「うう……私も渚くんに言われて、今になってやつと分かったのよ……。身体が強いよりも、内面的に強い方が良いつて……」

陽菜「紗夜はそれから自分の過去から目を逸らさないで向き合おうとしてきたもんね？ 昔の私の大好きで憧れだった紗夜が帰ってきて嬉しかったよ？ あっ!! 勘違いしないでね？ 今も大好きだから!!」

慌てて訂正する陽菜ちゃん。紗夜ちゃんは「分かってるよ」と笑顔で陽菜ちゃんに言う。仲の良い姉妹だね……。

ライカ「私と似てるわね。私は過去と向き合いはしてたけど、身体は強くなっても心の奥底が中々変わってくれなかったから。でも渚は、「自分の弱さとちゃんと向き合ってたんだっいたら決して私は弱くない」って言ってくれたわ。後、コレはこの中では私と紗夜と陽菜に言える事だけど、”先祖がどんなに凄い人でも、私は私だって。先祖を真似る必要は無い” って……」

紗夜「さすが渚くん。良い事言うー!」

陽菜「こんな男の子いるんだねえ……」

四季「勿論。ナギサをそこらの男と一緒にしないでほしい」

メイ「同感だ」

するとここで、四季とメイはどういった事が過去にあったのか気になり、代表してライカが2人に質問した。

ライカ「2人は渚とどんな事があって好きになったの?」

紗夜「確かに。気になるね……」

陽菜「うん!」

メイ「しょうがねえな…。確かアレは…。8年前だったな。アタシと四季とナギは同じ小学校の同じクラスだったんだけど、アタシと四季、結構クラスで浮いてたんだよ…」

四季「私は根暗女って言われてたし…。メイは昔から目が悪くて目を凝らしてただけなんだけど、そのせいで目つきが悪いと取られてヤンキーって言われてた」

紗夜「いや、確かに四季は自分からはそこまで積極的に話す方じゃない印象はうけたけど、根暗女って…」

ライカ「ソイツら2人の事何も見てないのね。四季もメイもこんなに良い子なのに…」

陽菜「それ男子が？」

メイ「いや、女子からも言われてたな…」

3人は女子もそんな事を言っていたのか…。と、四季とメイを悪く言った2人の元クラスメイトに少しばかりイライラしていた。

メイ「でな？ その事をけっこうハツキリとクラスの奴らに面と向かって言われてな、アタシ涙目になっちまって…。四季も無言だったけど悲しかったと思う」

四季「うん。でも、そしたらナギサなんて言ったと思う？」

紗夜「なにになに？」

ライカ「たぶんカッコいいこと言ったのよ」ニヤニヤ

四季「うん。クラスの子たちにキレて、「お前ら!! 2人の事を見かけだけで判断するな!! 2人の事なんか何も知らないくせに!!」ってキレて。その結果ケンカになってナギサが怒られちゃったんだけど……」

メイ「その時思ったよ。「アタシたちを本当に理解してくれるのはナギだけだ」って。その時からかな？ あたしがナギを好きになったのは……」

陽菜「へえ、やっぱりカッコいいね？ 渚くん」

メイ「まあ今はクラスに友達も大勢できて楽しくやってるけどさ？

スクールアイドル部の同級生も先輩たちも優しいし!!」

四季「うん！」

メイの過去を聞いて、紗夜たちは改めて渚に感心していた。ここまでの心を、小学生の時に既に持っていたことに驚いている。

紗夜「なるほどねえ……四季は？」

四季「私は中学生の文化祭の時。科学部の出し物で発明品を作って展示してたんだけど、「何でこんなもの中学生が作れるんだ?」とか、「マッドサイエンティストかよ? 引くわ」とか言われて。慣れてたはずなのに、私泣いちゃったの」

陽菜「うわ、酷いねそれ……」

四季「そしたらそれを見たナギサがブチギレちゃって、悪く言った人たちは身体のだこかに最低1箇所以上は青痣作られて……、ナギサはそのせいで先生に大目玉食らっちゃって。でも、その日私とナギサは一緒に帰ったんだけど……ナギサに、「あんな事して後で面倒な事になるとは考ええないの?」って言っちゃったの。本当は、凄く嬉しかったのに……」

陽菜「で? で!?!」

ライカ「勿体つけずに言いなさいよ?」

四季「そしたら、「考えねえな。群れで囲んで陰険なんざ男だろうと女だろうとただのクズだ。気に入らねえ」って言ったあとで、私の化学の知識は決しておかしなものじゃない。誇れる物なんだって言うてくれて……、そこで気づいたの。私もナギサが好きなんだって。けど、その時はナギサとメイは付き合っただけじゃなかったけど、両思いなのが私は分かってたから、私は自分から諦めようとしたの」

この言葉に3人は驚いた。

陽菜「えっ!?! じゃあなんで今、四季ちゃんが渚くんの彼女なの?」

メイ「アレは去年の林間学校の時だな。ちよつと四季の様子がおかしくてさ? アタシが気になって様子を見に行ったら……四季も渚のことが好きで、もう我慢できなくなってきたことに気づいて……。『そんな溜め込んでるんだったらなんで堂々と勝負しようって言えないんだよ?』って言ってやった。「アタシと若菜四季の関係は、男を取り合ったくらいで壊れない。第一それでアタシが選ばれたとしても、大切な友達の悲しみの上に成り立つ幸せなんか喜べない」っ

て言っただけ？」

ライカ「それでお互いに渚に告白して正々堂々勝負した結果、四季が勝ったって訳ね？」

四季「そういう事」

紗夜「凄い……。なんかドラマみたいな展開なんだけど……」

陽菜「そんなことがあっても、3人の絆は壊れないんだねえ……」

ライカ「お互いがお互いを凄く大切にしているのが伝わってくるわ」

四季「うん。メイもナギサも、私の宝物だから！」

メイ「アタシも。四季とナギは絶対に失いたくない！」

陽菜「きつと渚くんも同じこと思ってるよ」

ライカ「結果としてメイは振られちゃったけど、渚を好きになったことを後悔してる？」

ライカは真剣な顔でメイに問いかける。

メイ「まさか！ 確かに振られたのはショックだったけど、ナギはちゃんとアタシと四季の想いに向き合って、ちゃんと答えを出してくれた。だからナギを好きになったことに後悔なんか無い！」

その答えを聞いたライカはフツと優しい表情になり、

ライカ「それを聞いて良かったわ。それにしても、改めて渚の良い所が浮き彫りになったわね」

紗夜「ホントだよ？ こんな人、本当にいないよ？」

陽菜「四季ちゃん、自分はかなり前の幸せ者だって自覚はしてね？」

でないといけない女の子から恨まれることになりかねないから。渚くん絶対モテるし……隙あらば奪おうとする子は絶対にいるよ？」

四季「うん。分かってる！ 誰が来ても、ナギサは絶対に渡さない！」

メイ「よし。じゃあ、次は何の話する？」

こうして、ガールズトークはたいそう盛り上がったそうなの。

新たな友と ガールズトーク（後編）

ー あらすじ ー

初めて全員顔を合わせてから仲良くなった四季、メイ、紗夜、陽菜、ライカの5人。今日は四季の家でガールズトークに花を咲かせていたのだが、話題は当たり前と言わんばかりに渚の事。

5人の渚との出会いや、好意を持ったきっかけ、四季とメイの恋が芽生えた時のことなど、女の子同士で話していた。

そして、話題は次の話へ……………。

ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

四季「3人の得意な事って何？」

紗夜「私は勉強なら一通りできるよ？ 中学の時も、定期テストや

小テストで全教科90点以下取ったことないし」

メイ「はあ!? それって天才何じゃあ……………」

陽菜「うん。紗夜は天才だよ？ 後、紗夜は料理もすごく上手いんだよね。人に教えられるくらい！ それに紗夜はバイクにも乗れるの！ 免許持ってるし」

他の3人は「へえ〜」と興味津々。すると紗夜は、

紗夜「陽菜は料理はそこまでだけど、機械いじりが得意でドローンの免許持ってるんだよ？」

ライカ「ドローン…凄いわね……………」

メイ「要するに真田姉妹は2人揃って天才ってことか……………」

四季「機械いじり…、陽菜ちゃんとは気が合うかも。私もーから自分で設計して発明するから」

四季の言葉に今度は陽菜ちゃんが興味津々。四季に、これまでにどんな物を作ったのかを聞いてみる。

四季「強制二人三脚装置とか、強制ランニングマシン。後は倍率を自由に変えられる眼鏡」

陽菜「へえ〜？ その強制二人三脚装置ってどんな物なの？」

四季「2人の足に装着すると、片方の人の足の神経伝達をブロック。もう片方の足を自分の自由に動かせる足とシンク口して無理矢理動

かさせる」

それを聞いた3人は若干顔が引き攣っている。

陽菜「神経にまで作用できるんだ……凄いな?」

紗夜「それ、高校生のレベルじゃない気が……」

ライカ「なんか、紗夜よりも四季の方がよっぽど天才の気が……」

四季「そう?」

メイ「四季は昔から科学とか機械関係の本とか読み漁ってたからな……。お陰で四季は、数学と科学はテストで100点以外取ったことないんだよ。他の教科も最低でも60は取ってるし」

陽菜「アハハ……ちよつと極端なんだね?」

メイ「ああ。ライカはどんな事が得意なんだ?」

ライカ「私は……やつぱり料理かしらね? たまにすみれや妹さんに作ってるわ」

メイ「ライカも料理得意なのか……」

3人が自身の得意な物を話すと、次はメイが話し始めた。

メイ「アタシも料理はある程度できるな。後はピアノ」

ライカ「メイ、ピアノ弾けるの?」

メイ「少しだけだな……後は、前までは隠れて花嫁修業してたし……」

”花嫁修業”。メイの言葉に3人はビックリ。だが、

ライカ「あつ、もしかして渚?」

メイ「ああ……そうだよ。でもアタシは振られちゃったしな……」

少し落ち込むメイを、紗夜と陽菜が慰める。

陽菜「大丈夫だよメイちゃん! やつてきたことは絶対に無駄にはならないから!!」

紗夜「そうだよ!! メイちゃんならたぶん今一人暮らししろって言われても生活できるでしょ? それだけ家事とか料理を練習してきたんだつたらさ?」

メイ「まあ……自信はある」

ライカ「でもそっか……当たり前前だけど、皆けつこう得意なことが違うのね」

確かに……。

紗夜「そうだね。ねえ？ そろそろお昼だよ？ ご飯どうしよつか？」

四季「お母さんいないから、皆で作って一緒に食べない？」

メイ「おつ、賛成。じゃあ皆で作るか！」

そして場所を四季の部屋からキッチンへと移動。陽菜は料理がそこまで上手くないらしいので四季、メイ、紗夜、ライカの4人で作る。

ライカ「ご飯物が良いかしら？ それとも麺類？」

紗夜「ご飯物が良いんじゃない？ 麺類だとこんな人数要らないし」

四季「そうだね」

そして分担は紗夜がメインで炒飯を。

ライカは餃子を、

四季はサラダを、

メイが中華スープを作ることになった。

そして4人の調理は手際良く進み、そこまで時間も掛からずに完成した。

ライカ「完成ね」

四季「ナギサにも食べてもらいたい……」

四季の言葉に4人は「確かに……」と意見が一致。するとメイはスマホを取り出しどこかに電話をかける。

メイ「あつ、ナギか？」

『メイ？ どうした？』

相手はやはり、個人トレーニング中の渚だった。

メイ「いやさ、トレーニングもう終わったか？」

『おう、今家に帰ってるところ。「じゃあさ、四季の家に来てくれないか？ 今日女子で集まって、昼飯作ったんだけどナギにも食べてもらいたいなって話になってさ？」マジで!? 行く!!』

メイ「じゃあ待ってるからな？」

そして通話は終了。

メイ「ナギ今帰ってるところだからすぐ来るってさ？」

四季「そう」

すると、

ピンポン

ライカ「速っ!!」

紗夜「もしかしたらすぐその道にいたのかもね?」

四季「出てくるね?」

そして四季は玄関に出て渚を家に入れる。

四季「ナギサ、いらっしやい」

「おう。でも、今思ったけど女の子同士の集まりに良かったのか?」

四季「大丈夫。皆が手料理食べて欲しいって言ってたから」

「分かった」

そしてナギサがリビングに入ると、皆がナギサを手招きする。

「手を洗ってくるからちよつと待ってな?」

そしてナギサが席につき、皆で頂きます。

ナギサは紗夜ちゃんの作った炒飯を口に運ぶ。すると、

「!? 何だコレ!! 滅茶苦茶美味い!!」

紗夜「そう? 良かった……//」

紗夜ちゃん?

「おっ、餃子もある」パクッ

ナギサは次にライカちゃんの作った餃子を一口。またしても美味

い!とビックリしてる。ライカちゃんも満更でもない顔してるし

……。

「じゃあサラダ貰おうかな」

ナギサは私の作ったサラダを食べる。するとナギサはすぐに私の

作ったものだと気づいた。

「これ四季の作ったヤツだな。このオリジナルドレッシングが四季の

料理の味だ」

ライカ「えっ!! そんなの分かるの!?!」

メイ「ナギはアタシと四季の料理は判別つくぞ?」

陽菜「またしてもモテる要素だね」

「メイ、このスープも美味いな?」

メイ「お、おう……／＼／＼」

陽菜「つていうか皆食べないの？」

紗夜「ごめんごめん。じゃあ食べようか？」

そして女の子5人も食べ始めると、渚も含めた6人で洗い物をし、今度は渚も含めて色々話した。

四季とのお泊り

四季の家でと紗夜やライカ、メイたち皆と色々話した日の夜、今日は俺の家に親が両方とも仕事でいないので四季が泊まりに来ていた。四季の両親は俺のことを信頼してくれているようで、付き合い始めから、初めて”2人”でお泊りすると言っても四季を快く送り出した。

それで良いのかな……？

そして夕方5時30分頃、お泊り道具を持った四季がやって来た。

四季「お待たせ……」

「おう、いらっしやい。入りな」

俺が四季に入るように促す。四季は「お邪魔します」とおずおずと入ってくる。

「そんな恐る恐るとどうした？」

俺が四季に聞くと、

四季「だって、彼氏彼女になって初めての2人でのお泊りだもん……そりゃあ緊張する」

っ／／／ そりゃあな……俺だって緊張してるし。

「そうだな……／／／ 俺も緊張してるし……／／／」
すると四季は抱きついてきて俺の胸に顔を埋めて、

四季「そっか……／／／」ニコッ

上目遣いで下から俺の顔を見上げる四季。ヤベエ……四季がメチャクチャ可愛い!!

「じゃあ取り敢えず荷物置いてこいよ？ その後夕飯のこと考えよう？」

四季「うん」

そして四季は俺の部屋に入り荷物を置いて俺の待つリビングに降りてくる。

四季「お待たせ……／／／」

「おう……／／／」

先程のこともあり顔を真赤にする両者。

間が持たない……。

「じゃ、じゃあ適当に作るから座ってて？」

俺が夕飯の支度をしようとするのと、

四季「待って!!」ガシツ!

四季がしがみついて止めて来た。

四季「私に…作らせて欲しい」

「わ、分かった……」

そして四季は冷蔵庫を開けて中身をチェック。レシピを考える。

四季「よし、あれにしよう!!」

すると四季はまずはブロッコリー、人参、じゃがいもなどの野菜を切っていく、それが終わると牛赤身肉をゴロツとしたような大きさに切る。

そして四季は鍋に水を入れて沸騰させ野菜と肉を投下。ある程度火が通ってきたらビーフシチューのルーを投入する。

四季「うん。いい感じ……」

そしてルーがしっかりと混ざり、具材にも火が通り、ルーと具材が絡み合った頃に火を止めてかき混ぜて予熱で温める。

するとそこで四季がオーブントースターに入れていたパンが焼ける。

四季「焼けたね。じゃあシチューを盛って……」

作ったシチューを皿に盛って行く四季。焼けたパンと一緒にテーブルに並べる。

四季「できたよ?」

「おお! 美味そう!!」

四季「うん。こういうシチューナギサ好きでしょ?」

「大好物です!!」

四季は俺の好み知ってるからな。わざわざ俺の好物作ってくれたのか……。

四季「じゃあ食べよう?」

「おう!!」

そしてお互いに向かい合って席に座る。

渚・四季「いただきます!!」

そして食べ始める俺と四季。俺はまず四季の作ったビーフシチューを一口頬張る。

すると酸味と共にの中から肉と野菜から出た旨味がジュワツと口の中に広がる。肉は食べごたえのある大きさで”肉”って感じがするし、野菜もしつかりと火が通り甘い。

うん。美味しい!!

「美味しい〜!!」

俺が顔を綻ばせて言うと、四季も笑顔になり、

四季「良かった……。パンを漬けて食べてみて?」

四季に言われた通りパンを手に取り割ってシチューに浸して食べる。パンがシチューを吸い、パン自体の食感と合わさり柔らかい口溶け。

「美味あ〜い!!」

四季「良かった。私も食べよう……」

四季も同じ事をして食べる。

四季「うん。美味しい……」

「本当に美味しいよ!!」

そして夕食を食べ終わり、2人で洗い物をして終わったので俺の部屋で談笑していた。

……はあ／＼／＼

「な、なんか恥ずかしいな……／＼／＼」

四季「そ、そうだね……／＼」

二人の間に沈黙が流れる。

「……し、「ねえ、ナギサ?」な、なんだ?」

四季「ナギサはさ……。アタシと……その、シタって思ったりする?／＼／＼」

はあっ!? 何言い出すのこの子!!

四季「どう?」

「そ、それは……」

正直に言うとう物凄くシタい。けど、それでもしもの事があつたら責

任をまだ取れないし……、

「そ、それは……責任取れないし……」

四季「それはそうだね……じゃあ、」

すると四季は俺の頭を抱えるように自分の胸に抱きしめてきた。

(~~~~?!?!/~/)

俺の顔面に押し付けられる四季の胸。デカイ…、柔らかい……/~/

四季「んっ/~/ どう?」

「へえあつ?! そ、その……嬉しい……です」

正直に言った俺。すると、

四季「エツチ……/~/」

そして四季は拘束を解くと、

四季「続きはお風呂入ったらね?」

そしてその日の夜、楽しんだ後俺のベッドで四季と一緒に寝て、次の日の朝、

「ん、ん……」モニユモニユ

ん? なんか手のひらに柔らかい感触が……

俺が目を開けると、俺の右手は四季の胸を、左手はお尻を鷲掴みにしていた。

子供ができるようなことはやってないけど、やっぱりヤバイかな

……?

今更思う俺であった。

ー 続く ー

新たな出会い 結ヶ丘の新1年生

四季の家で紗夜ちゃんたちやライカと皆で話して親睦を含めた次の日、俺は毎年春と秋に原宿で開催されているストバスの大会に出場するためにウエアを着て会場に来ていた。

選手のエントリーはすでに済ませており、今は開始前のウォームアップをしている。

四季「頑張つてねナギサ!!」

メイ「しつかりな!」

「おう!!」

ライカ「見せてもらおうわよ?」

紗夜「渚くんがんばつて!!」

陽菜「頑張れ!」

そしてアナウンスが鳴り俺の番になる。

「行ってくる!!」

この大会も秋と同様にサドンデスルールを採用。攻守をお互いに1回ずつ行い、ポイント差がついた時点で決着となる。

渚と対戦相手がフィールドに立つ。まずは相手のオフエンスからスタートだ。

ボールを持った相手がドリブルでコチラの出方を窺う。相手が細かくフェイントを入れてくるが、渚は神経を張り巡らして警戒する。

相手「!!」

相手がドライブで抜きにかかる。渚はゴールと相手を結んだ線の中に立つような位置取りをしてディフェンスする。相手は急停止からジャンプシュートを撃ってくるが……、

「甘い!!」

ドガアアアツ!!

渚が跳躍してシュートをブロック。シュートは叩き落とされて外に出た。

観客「おお、ハエ叩き!!」

観客「あんまり身長差無いのにな?」

それを聞いていた紗夜は

紗夜「ハエ叩き？」

メイ「シユートを叩き落しただろ？ ああやって完璧に叩き落とすとハエが叩き落とされたように見えるからそう言われてるんだよ」

紗夜「へえ〜」

陽菜「やつぱりジャンプ力凄いね渚くん」

ライカ「優勝経験があるって言うのは伊達じゃないみたいね」

そして今度は渚のオフセンス。渚はドリブルしながら相手の構えを見ると、左に抜くような姿勢を取り相手を釣った所で逆方向へのダックインフルドライブ。相手は完全に置き去りにされて渚はガラ空きのゴールに跳躍。スピニンして背面ダンを叩き込んだ。

会場は今のでヒートアップ。ヒノミヤゴールが鳴り響く。

ライカ「す、スゴイ!!」

紗夜「ゴールも見ずに何であんな事できるの？」

四季「ナギサの努力の成果だよ」

メイ「ああ。小さい頃からナギは本当に頑張ってきたもんな……」

そして1回戦は渚の圧勝。続く2回戦も問題無く勝利して3回戦。

相手は渚よりも15cmはデカイ。もう少しで2mになるかという大男だ。

やはりパワーでゴール下まで押し込んで決めてくるスラッシャータイプだったが、

渚「甘いぜ!!」

渚は相手のダンを正面からブロックするのではなく、ボールの横から叩いて力の入りが物理的に甘い方へとブロック。ボールはコートの外に出た。

メイ「やった!!」

今度は渚のオフセンス。渚はスピードとテクニクを活かしてゴール下まで侵入したがゴールとの間に相手が身体で止めに入り完全に袋小路に追い込まれた。

渚（っ!! イチかバチかだ!!）ヒュッ

何と渚はゴールの裏からボールを放り、ボールは裏から放物線を描

いて表のゴールへ、
ガンツ!!

(っ!?)

ボールはゴールリンクに直撃。グルグルとリングに沿って周る。
そして、

ポスト

リングの内側にボールは落ち得点。渚の準決勝進出が決まった。

司会「日宮選手、準決勝進出!!」

(危ねく……入って良かったわ)

陽菜「す、凄い!!」

紗夜「カッコいい!!／＼／」

ライカ「まさかここまでなんてね……」

四季「でも、今のシュートはナギサにとってもイチかバチかだった
と思う」

メイ「だな。アイツのあんなシュート見たことないしな……」

紗夜「そうなんだ……」

そして準決勝、これは引き分けが続き、第4ゲームまで纏れ込む接戦となった。渚が後攻で相手のシュートを先に止めている。これを決めれば渚の勝ちだ。

渚はクロスオーバーからのレッグスルーで切り返し、相手を揺さぶるが相手も必死に喰らいつく。しかし、相手の一瞬の硬直を見逃さず一気にフルドライブで抜きにかかる。

相手「っ!!」

相手は何とか追いついて後ろからブロックに跳ぶ。

(来てるな……なら!!)

渚はゴールの方を向く様に真横に向けて跳び、ゴール脇からシュートを放る。完全に相手のブロックを躲し、シュートはガラ空きのゴールネットを揺らした。

司会「日宮選手、決勝進出!!」

「おっしやあ!!」

メイ「良いぞナギアー!!」

四季「ナギサ、ナイスシュート!!」

紗夜「四季ちゃんごめん、渚くんを奪いたくなっちゃった。ダメ?」

四季「ダメ!!」

陽菜「紗夜!? 顔真っ赤だよ!」

紗夜「だ、大丈夫だから!!」

ライカ（凄いわね渚は……）

そしてもう1つの準決勝も決着が付き、いよいよ決勝戦。対戦相手は初めて見る人だ。

司会「それでは決勝戦、日宮渚選手 v s つきしろそう月城奏選手の試合を始めます!!」

渚・奏「お願いします!!」

司会「それでは、月城選手のオフエンスから開始です!」

そして試合開始のブザーが鳴り、月城がボールを構える。

（っ?! コイツ……強い!!）

構えを見ただけで分かった。コイツは物凄く強いと。気を引き締めて掛からないとやられるのはコツチだ。

渚が一気に警戒体勢に入る。しかしそれは月城も感じ取っていた。

奏（さすが日宮さんだ……一瞬で見抜かれたか。なら!!）

月城は一気にフルドライブで抜きに掛かる。しかし、その練度と速度が桁違いだ。

「甘っ!!」

何とか渚は食らいつきディフェンスを掛ける。堪えられたことに月城は驚いた。

奏（俺の最高速ドライブに着いてきた!? なら!!）バツ!!

月城は急停止からのジャンプシュート。しかしその繋ぎと流れが恐ろしいくらいにスムーズかつ滑らかだった。渚は一瞬、相手がシュートを撃ったことに気付けなかった。

（しまっ!?!）

シュートはそのままゴールのど真ん中を射抜き、月城が先制した。

「くっそ、なら次はこっちの番だ!!」

渚はボールを持つと、すぐにシュート体勢に。ゴールに全く近づか

ずにシュートを放つたことに観客も月城も虚を突かれ、シュートはそのままゴールのど真ん中を射抜いた。

奏（っ!! さすが……!!）

その様子を見ていたメイたちは……

四季「あの月城っていう人何者なの？」

メイ「えつと……あつ、情報があつた。新潟の……つてはあ!?今年

度新高校一年生!」

紗夜「うそ!? この間まで中学生だったの!」

陽菜「うそでしょ? ……あつ、渚くんが止めた!!」

—————

渚が月城のシュートを止め渚のオフエンス。渚は先程の開幕シュートの構えを取る。

奏(!? 撃つのか? いや、もしフェイクじゃなかったら……跳べ!!)

月城は迷わず跳躍する。しかし渚の動作はフェイク。跳躍した間にフルドライブで抜き去る。

奏（っ、くそっ!!）

月城は急いで渚を追い掛けるが、追いつくことはできずに

「終わりだあっ!!」

ドガアアッ!!

渚のダンクが叩き込まれ、勝敗は決した。

司会「決まったあ!! 優勝は日宮渚選手だあっ!!」

「ふくっ……」

奏「負けたか……」

「おつかれ、何者だお前?」

奏「俺は……」「ナギサ、お疲れ様!」っ!!」

「四季、何とか勝てたよ……」

四季「うん。お疲れ様……」

紗夜「月城くんだったっけ? 君もすごい強かったよね。この間まで中学生だったんでしょ?」

「ハア!？」

奏「そうですよ？ 日宮先輩！」

つてことは今年度に新高校一年生なのかって、ん？

「先輩？」

奏「はい！ 月城奏、新潟県立西万代中学卒業！ 今年度から結ヶ

丘高校1年生です。それで、去年の日宮先輩に憧れて、スクールアイ

ドル部”Liella!”にマネージャーとして入部希望です!!」

「え？」

渚・四季・メイ「「えええええええええええつ!!!?」」

いよいよ、新たな出会いが……。

四季・紗夜の交流

ある日の夜、渚と四季とメイはテレビ通話アプリで話していた。

「あつ、四季は明日紗夜さんと出かけるのか……」

四季「うん。仲良くなつたから2人で遊びに行こうって」

「そっか。メイは？」

メイ「アタシは陽菜に誘われてる。四季や紗夜とは別で遊びに行かないか？って」

ふむ。ということとは明日は俺は完全に1人か……。

「分かった。楽しんできてな？」

四季・メイ「うん（ああ）！」

そして次の日……

ー ここからは四季視点 ー

私は紗夜ちゃんとの待ち合わせ場所である原宿駅前に来ていた。今日は紗夜ちゃんとウインドウショッピングをしたりカフェでお茶しながら話したりするらしい。

四季「待ち合わせまで後10分……」

すると、紗夜ちゃんが向こうから走って来た。

紗夜「四季ごめん待たせちゃった？」

四季「大丈夫。時間通り」

紗夜「じゃあ行こうか？」

そして私と紗夜ちゃんは2人で街へと向かう。服屋でそれぞれ意見を出し合いながらお互いに似合いそうな服を選んだり……

紗夜「これ四季に似合いそうじゃない？」

そう言つて紗夜ちゃんが差し出したのは白いフリルの付いたワンピース。

四季「こんなの私には似合わないと思う……服が可愛すぎて……」

紗夜「そうかな？ 四季ちゃんだって十分かわいいと思うけど。服に着られるようなことはないと思うよ？」

四季「そ、そう……？／／」

紗夜「うん。渚くんもきつとカワイイって言ってくれるよ!!」

四季「!! じ、じゃあ、チャレンジしてみようかな……／＼／＼」

紗夜「うん!（あれ? ひよつとして四季ちゃんに塩を贈っちゃった? まあ良いか!!）」

四季「紗夜ちゃんはこれなんか似合うと思う。」

四季が選んだのは白いシャツに黒色系のレディースのジャケットを併せたコーディネート。少しボーイッシュなコーディネートだが、紗夜のイメージには逆に合う。

紗夜「おお、良いかも……。じゃあ試着室で着てみてお互いに見せ合おうか?」

四季「うん」

そして二人は試着室に入りお互いの選んだ服を着る。そして試着室から出ると、

紗夜「四季……カワイイ／＼／＼ 女の私でさえ惚れちゃいそう……」

四季「紗夜もカッコいいとカワイイが両立されてていい感じ」

紗夜「そっか……」パシヤリ

（紗夜は四季の写真を撮り、渚に送った。）

四季「ちよつと!?!」

紗夜「大丈夫だつて!!」

するとすぐさま渚から返信が。

渚『四季、カワイイ……／＼／＼ もっと送って待ち受けにするから!!』

四季「待ち受けにしなくて良い!!」

紗夜「ホラホラ……良かったじゃん」

すると四季は、

四季「仕返し……」パシヤリ

四季は紗夜の服装を撮り渚に送った。

紗夜「四季ちゃん!?!」

するとすぐに渚から返信が……

渚『紗夜さんも中々カワイイな……四季と含めて永久保存しとく』

紗夜「しなくて良いから!! スマホを粉々にするよ?!／／／」
四季「良かったね?」

紗夜「四季くっ!／／／」
紗夜は四季の頬をグイグイと引っ張る。

四季「痛ひやい痛ひやいっ!!」

そして紗夜は四季の頬を放す。四季は頬を擦る。四季の頬は真つ赤になっていた。

紗夜「もう!! 私は良いの!!」

四季「でも紗夜ちゃんもカワイイって言ってもらえて良かったね?」

紗夜「うっ／／」

真つ赤になる紗夜ちゃん。カワイイ……。

紗夜「じゃあ買って店出る? なんか見られてるよ?」

四季「知ってる……」

周りの買い物客が二人が可愛い過ぎて鼻血を出していた。

二人は試着室でもとの服に戻り試着した服を購入。そしてお昼時になり、

四季「そのカフェで良い?」

紗夜「うん。良いよ?」

そして二人は近くのカフェに入りそれぞれ軽食を取る。紗夜はサンドイッチに紅茶。四季はパンケーキにブラックコーヒーを注文。

そして食事をしながら話す内容は、やはり渚のことだった。

紗夜「四季とメイちゃんは渚くんとは幼稚園も一緒だったの?」

四季「うん。幼稚園、小学校、中学校、今の高校と全部一緒。まあずっと隣りにいたからね……」

紗夜「そっかあ……私はそんなに仲の良い友達がいなかったからなあ……」

四季「陽菜ちゃんは友達多そう」

紗夜「そうなんだよ。陽菜はあの性格だからねえ……。友だちも多かったよ。でも、今は私にもとちりいるから」

紗夜は四季を見てニコリと笑う。

四季「……ギョツとして良い？」

紗夜「なんで!？」

周りの客は……

((和むわあ……))

会話が聞こえていた。

そしてお昼も食べ終わり再び街へ。今度は紗夜が四季に付き合いホームセンターへ。

紗夜「何を買うの？」

四季「ネジとかレンズのパーツ」

紗夜「ああ発明品の部品ね……何を作る予定なの？」

四季「望遠鏡」

紗夜「そんなの作れるの!？」

紗夜はビツクリしたが、四季なら作れるかもしれないと納得していた。

四季「よし、部品はこれで大丈夫そう」

紗夜「ねえ？ 作つてるところ見ても良い？」

四季「別に構わない。面白くはないと思うけど」

そして会計を済ませ、四季と紗夜は四季の家へ。

四季「よし、じゃあ始める」

四季は買ってきた円筒形の筒やレンズ等をネジで止めていき、倍率を変えるダイヤル機構も取り付ける。かなり本格的な望遠鏡に紗夜は呆気にとられていた。

紗夜（凄い……、こんなの私に作れつても無理だよ。周りからは天才って言われるけど、上には上がいるなあ……）

四季「よし、完成!!」

そして四季の組み上げた望遠鏡が完成。紗夜は興味津々だ。

紗夜「凄い……!!」

四季「夜までウチにいる？ 星とか月とか見てみよう？」

紗夜「うん!!」

そして夜、四季の作った望遠鏡は抜群の性能を誇り、二人は天体観測を楽しんだ。

次回、メイ・陽菜サイド。

メイ・陽菜のお出かけ

ー メイ視点 ー

サイドが変わってメイ。メイは現在、陽菜と一緒に都心の方のRO
UND1に来ていた。

陽菜「メイ、今日はいっぱい遊ぼうね!!」

メイ「おう!!」

そして入場料を払って二人は施設の中へ。二人が最初に選んだア
トラクションは、

陽菜「バスケ?」

メイ「おう。この間のナギを見たらやりたくなってな」

陽菜「分かる!! 私もちよつとウズウズしちやったし……!」

メイ「今人いないからやろうぜ!」

陽菜「うん!!」

そしてバスケットコートに入ったメイと陽菜。メイが先にデイ
フェンスをする。

メイ「よし来いっ!!」

陽菜（っ!?）なんか貫禄がある……すごく上手いんじや……）

陽菜は空手で鍛えた体運びを使って一気にドリブルして抜きにか
かる。しかし、

メイ「おっと!」ザッ!

陽菜「っ!?!」

しかし陽菜の進路はあっさりと塞がれてしまい、気を取られたとこ
ろにメイのステイールがきれいに入ってメイが勝った。

陽菜「やられた……」

メイ「へへっ!」

陽菜「メイひよつとして練習したことあるの?」

メイ「いや? 練習らしい練習はしたことないな。けど、ナギの練
習に小さい頃からたまに相手してやってたことがあるからそれくら
いかな?」

陽菜「それでか……」

陽菜は納得したような顔をした。次はメイのオフエンス。

メイ「よし、行くぞ!!」

メイはスピードを活かしてドリブルで斬り込む。しかし陽菜も負けじとついていく。

メイ（ここで、切り返す!!）ダムツ!

陽菜「!?!」

メイがクロスオーバーで切り返す。陽菜は体勢を崩され、メイのレイアップシュートが決まった。

メイ「よし!」

陽菜「ちよつとメイ、私バスケは初心者なんだよ!?!」

メイ「わ、悪かったよ……じゃあ次はさつき下にあったパンチマシーン行かないか?」

陽菜「えっ? 良いの?」

メイ「ああ。間違いなくアタシが負けるけどな」

陽菜「ううん、行こ行こ〜!」

そしてパンチマシンの所にやってきた2人。ゲームを起動するとランキングが表示される。最高得点は139点だ。まずはメイがグローブを装着して思い切り殴る。

メイ「オラアツ!!」

ドガアアアツ!!

マシンがパワーを計測。結果は……

メイ「86点か……」

陽菜「けっこう良い記録何じやない?」

続いて陽菜の番。

メイ「壊すなよ?」

陽菜「オツケー! うらあああつ!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

メイの時とは明らかに音が違い、パンチマシーンがパワーを計測。壊れなくて良かった……

陽菜「結果は……413点、まあまあかな?」

いやドコが?!

明らかにヤベエ記録を出した陽菜の周りに野次馬が集まってくる。

「なんだよ413って……………」

「あの子人間じゃないだろ……………」

メイ「お、おい陽菜！ 行くぞ!!」

陽菜「あつ、待つてよ!!」

アタシは陽菜を連れてこの場を離脱した。

メイ「ハア〜…………お前どんな力してんだよ……………」

陽菜「えっ?あれでもだいたいぶ加減してたし紗夜なら多分500以上は出るよ?」

結論、この姉妹は絶対に怒らせてはならないということが分かった。

メイ「そ、そつか…………じゃあ次は何する?」

そしてその後はボウリングやフットサル等で思う存分身体を動かし、お昼時になりフードコートにやって来た。

メイ「アタシはハンバーガー買ってくるよ」

陽菜「あつ、アタシもそうする」

そして2人でハンバーガーとポテトとドリンクを購入。食事を摂る。

その間も話していたが、話題は当然…………、

陽菜「メイちゃんは渚くんの事が好きだったんだよね? 渚くんは

四季ちゃんを選んだけど…………嫉妬心とか湧かなかったの?」

メイ「そりゃあ湧いたさ…………でも、それ以上にナギも四季もアタシの大事な友達だからな。妬むよりも、祝つてやろうって…………まあアタシを選んでくれたら文句なかつただけだな!!」

メイが苦笑すると…………陽菜がメイを抱きしめた。

陽菜「渚くんってばこんなに可愛い子を!! お仕置きしてやる!!」

メイ「いや、ナギは悪くないんだ!! アイツはちゃんとアタシたちに向き合ってくれたし…………後悔もしてない!! ただ、考えちまうんだ。もう少し速くアタシが素直に気持ちを伝えていたらどうなっていたんだろう…………ってさ?」

陽菜「メイちゃん…………大丈夫だよ。メイちゃんの良いところを分

かってくる人は絶対に現れるから!!」

メイ「うん……。だと、良いな……」

そして食事が終了し、2人が午後を選んだアトラクションは、

陽菜「カラオケ?」

メイ「ああ! 思い切り歌おうと思っとな!」

陽菜「良いよ!!」

トップバッターは陽菜。選んだ曲は、

《残響散歌》

人気のTVアニメのオープニング曲だ。

陽菜はその曲を激しくもキレイに歌い上げた。

陽菜「得点は!? 91点! まあまあかな?」

メイ「よし、じゃあ次はアタシだな」

そしてメイが入力した曲は……今は伝説となっているスクール

アイドルグループの代表曲、《START:DASH!!》。メイは歌詞

をすべて暗記しており、リズムも乱れることなく歌い上げた。

得点は……

メイ「やった!! 98点!!」

陽菜「さすが現役スクールアイドル!!」

そしてこの日は午後から二人は歌いまくり次の日、メイと陽菜は声がガラガラになっていた。

四季・メイ・ライカ 3人のお出かけ

四季が紗夜と、メイが陽菜と一緒に別々で遊びに行った次の日、四季とメイはライカに誘われて一緒にCDショップに来ていた。

メイ「ライカってどんな曲を普段聴いてるんだ？」

ライカ「そうね……すみれがスクールアイドルを始めたって聞いてからはスクールアイドルにも興味が出て偶に聞いているわね。私が持つてるのだと……昔のグループだけども、sとかAqoursとか、虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会の近江彼方さんとかかな……」

メイ「おお!! スゲエ有名所じゃねえか!! 曲名は分かるか？」

ライカ「"ユメノトビラ"とか"想いよひとつになれ"とか、"Butterfly"よ?」

メイ「おお!! それならアタシも良く聴くぞ?」

メイとライカの2人がスクールアイドルトークに盛り上がっていると、

四季「メイはどんなの聴くの?」

メイ「アタシか? アタシはけっこういろいろなグループの聴くけど……その3グループで言ったら……」それは僕たちの奇跡"や"MY舞☆TONIGHT"、"Colorful Dreams! Colorful Smiles!"かな?」

ライカ「あく確かにどれも良い曲よね……四季はどうなの?」

四季「私? 私は虹学の聴くことが多いかな?」

ライカ「へ? 例えば?」

四季「"虹色Passions!"、"夢がここからはじまるよ"、"Eternal Light"、"Futurer Parade"かな?」

メイ「四季は虹学の全員曲が多いんだな。1つはユニット曲だけど……」

ライカ「そうね……」

そして3人でスクールアイドル談義をしながらCDの視聴をして良いと思った曲を購入し店を出る。

メイ「はあくいい買い物したな!!」

四季「メイは本当にスクールアイドルが大好き……私も好きだけど気持ちの強さではメイには負ける」

メイ「何いつてんだよ四季！好きって気持ちに強いも弱いもないだろ？」

四季「……………うん！」

ライカ「メイ良い事言うわね？　そうよね、好きって気持ちを比べる事なんか無粋よ！」

そして3人が笑い合う。そして次は本屋に行くことに……………。

四季「ライカちゃん何を買うの？」

ライカ「ラノベよ」

メイ「へへ、ライカもラノベ読むんだ？　アタシもたまに読むぞ？」

あつ、そう言えば今日アレの新刊が出てたはず……………買ってこよ」

ライカ「もしかしたら同じやつかもね？」

そして3人はライトノベルのコナーに。メイとライカが手に取ったのは、

メイ「あつ、やっぱりこれだったか……………」

ライカ「メイもS A O読むのね？」

四季「これか……………ナギサに前貸してもらって読んだことある」

ライカ「へえ？　どうだった？」

四季「フルダイブ型VRゲームは気をつけようと思った」

メイ「現実になんなゲームはないと思うけどな……………確かに実際巻き込まれたら恐ろしいな。ライカはゲームなんかはやるのか？」

ライカ「ゲームは……………あまりやらないわね。そんな暇があるなら鍛錬するわ」

あまりにストイックなライカの発言に四季とメイは苦笑する。

メイ「へ、へえ……………そうなのか」

四季「凄く努力してるんだね」

ライカ「何言ってるの？　2人だって努力してるじゃない。全国優

勝なんて本当に、その年に日本で1番頑張った人しか味わえないのよ？」

メイ「そっか……そう言ってもらえると嬉しいな」

四季「うん。ありがとう……」

そして3人でライカの下宿先であるすみれ先輩の家へ。2人はライカの鍛錬に付き合った。

四季「トレーニングのカウントとかすれば良いの？」

ライカ「ええ。お願い」

そしてライカの鍛錬を見た2人は、心のなかで「こんなの女の子のやるトレーニングじゃない……」と青くなっていたという。しかもライカはそれを涼しい顔でやっているから驚きだ。

メイ「な、なあライカ……？ このトレーニングいつからやってるんだ？」

ライカ「え？ そうね……中1の春だったかしら？」

メイ「中いっ……!？」

四季とメイは真田姉妹のときと同じく、この少女も決して怒らせてはならないと心に誓った。

そして1時間程でトレーニングは終了し、ライカと2人は解散。

各自家に帰った。勿論渚に「真田姉妹とライカちゃんだけは絶対に怒らせちゃだめだよ？」と意味ありげな文章をLINEで送るのを忘れずに。

日宮渚と月城奏

あのストバスの大会が終わった後、渚と奏は同じ学校の先輩後輩、そして数少ない男子仲間になるということで連絡先を交換していた。そして今日は四季は紗夜、メイは陽菜と遊びに行っている。渚は奏を家に呼んで一緒に話していた。

奏「これが日宮先輩の家……………!!」

「別に普通だろ?」

奏「いえ、憧れの人の家に来れただけで嬉しいです!!」

「憧れねえ……………」と言って渚は苦笑する。そして気になったことを奏に聞いてみる。

「月城はいつLielia!を知ったんだ?」

奏「Lielia!を知ったのは予備予選の時です。”Chance Day, Chance Way!”を歌ったときですね。その後今までのライブの動画を全部見始めて結ヶ丘に入ることを決めたのは全国大会のライブを見たからです。俺も日宮先輩みたいにLielia!に関わってみたい。支えてみたいって」

「そっか……………」

中々嬉しい事を言ってくれるな。そう言えば……………、

「月城は誰が推しなんだ?」ニヤニヤ

奏「うっ、それは……………言わなきゃ駄目ですか?」

「ダメ」

奏「その……………、米女先輩です…」

っ!! ほう。メイか……………」

奏「あつ、でも狙ってるとかそういうことじゃ無いですよ?! 良いなあとは思ってるけど……………って何言ってるんだ。そうじゃなくて……………」

あたふたとする奏。面白い後輩だな。

「そっか、実はな…俺と四季とメイ、幼馴染なんだ」

奏「あつ、知ってます。グループ紹介のページに書いてありました」

あいつらそんな事書いたのか……………」

「後もう一つ言うとな、俺去年四季とメイ2人に告白されたんだ。悩

んだ末に四季を選んだけど……」

奏は「えっ!?!」とビックリ。メイが俺に告白したと聞いて目に見えて落ち込んでる。分かりやすっ!!

奏「でも日宮先輩は若菜先輩を選んだんですか?」

「ああ。だからメイは完全フリーだし、ちよつと精神的にも不安定になることがあるかもしれない。そんな時にお前が支えてやればもしかしたら……な?」

すると奏の顔が赤くなる。「そんなんじや無いですよ!」と言ってはいるが明らかにそんなんだろ。

「でも、振ったとはいえアイツとは昔から一緒にいるからさ……アイツに新しい出会いがあるまでは俺も安心できないんだよなあ」

奏「日宮先輩……米女先輩の事、大切に思ってるんですね」

「当たり前だろ? 四季もメイも、俺の自慢だからな!!」
するとお昼時になり、

「何か作るよ。何が良い?」

奏「あつ、俺に作らせてくれませんか? 実は実家が中華料理店やってて、俺も従業員に賄い作りとか任されてたんで」

「ほく、それは楽しみだな!! じゃあ頼むわ」

そしてキッチンに案内し、奏に冷蔵庫の中を見せる。

奏「ふむ、これならアレができそうだな……スミマセン、食材自由に使って良いですか?」

「ああ、良いよ。好きに使ってくれ」

奏「分かりました」

そして奏は料理開始。豆板醤や余っていた豆腐、味噌、片栗粉等を使いとろみのある麻婆豆腐を作る。

奏「よし、こっちも良いかな?」

それと並行してインスタントの担々麺の袋麺を茹でていた。スープの元は麻婆豆腐を作るときにそこに投入していた。

そして茹で上がった麺に麻婆豆腐をぶっかける。おお、美味そう……!!

奏「できました。簡単な麻婆麺ですけど……」

「いや、充分だろ……美味そう。頂きます!!」

渚は麺を麻婆タレに絡めてすする。唐辛子の辛さが味噌のお陰でマイルドになり辛くなりすぎると食べられない人がいますからね。日宮先輩の

奏「あまり辛すぎると食べられない人がいますからね。日宮先輩の好み分らないし……」

「いやメツチャ美味しい! サンキュー!!」

奏「良かったです。じゃあ俺も頂きます」

そして2人で昼食を食べ終わり、1時間ほど休憩。会話の内容はやはりLieila!の事だった。すると、

奏「先輩の家、庭にバスケのゴールあるんですね?」

「ああ。スペースはあまり無いけどな……フリースロー対決でもしてみるか?」

奏「良いですね! 俺もこの間のリベンジしたいですし!!」

「おっ、言うねえ……じゃあやるか!!」

そして2人は、ボールを持って庭に移動。ジャンケンで先攻後攻を決める。

奏「俺が先攻ですね」

そして奏がボールを放る。シュートはゴールのど真ん中を射抜き、ネットを揺らした。

「やるね……次は俺か……」

そして次は渚の番。渚のシュートも奇麗な放物線を描き、ど真ん中を射抜いた。

奏「さすが……」

そこからはかなり良い勝負が続き、18回目の渚の番。奏が先に決めている。

「よし、フツ!!」

渚のシュートは先程同様のループに見えたがやや高く、リングに当たって弾かれてしまった。

「ヤベツ!? 負けた!!」

奏「おしっ!! 勝った!」

「やっぱりスゴイなお前……」

奏「日宮先輩も！「渚」へ？」

「名前で良いよ。俺も奏って呼んで良いか？」

奏「っ!! ハイッ、渚先輩!!」

そしてその後しばらく、今度はバスケット談義をして夕方になり奏は帰って行った。

(アイツになら……メイを任せられる気がする)

そんなことを、渚は思っていたのだった。

― 続く ―

集決する新たなL i e l l a ! (星)

今日はL i e l l a ! の練習があり四季やメイたちはもう学校にいる。

渚は皆のもとに連れて行く人がいるためその人の家に迎えに来ていた。

その相手とは……

奏「いよいよL i e l l a ! の人たちと対面するのか……、緊張するなあ……」

新入生であり、マネージャー志望の奏であった。

「そんな緊張しなくても皆優しいから大丈夫だって。それとメンバーではないけど手伝いが3人いるから。奏も会ったことある奴ら」

奏「あのバスケ大会の時の人たちですか？ 確か紗夜さんと陽菜さんとライカさんでしたっけ？」

「そうそう。よく覚えてたな？」

そして2人で話しながら学校まで向かう道中でマネージャーとしての仕事内容を、身振り手振りを交えながら一通り説明する。奏は聞き逃さないように真剣に聞いている。

そして、いよいよ結ヶ丘に到着した。

「よし、行くぞぞ？」

奏「は、ハイッ!!」

そして校舎の中に入って階段を上り、渚と奏は部室へと向かう。

「ここだ」

そして渚は扉をノックし、

「今入って大丈夫か？」

すると中から四季が応答する。

四季「ナギサ来たの？ もう皆着替え終わってるから入って良いよ？」

「オッケー！ じゃあ行くぞぞ？」

奏「は、ハイ!!」

そして扉を開け渚と奏が部屋に入る。

かのん「渚くん、何か用事だったの？　ってあれ？」
すみれ「どうしたの？　って、アナタ誰？」

可可「知らない男子デス！」

千砂都「でも結ヶ丘の制服着てるね？」

恋「もしかして新入生ですか？」

先輩たちが口々に話している。事情を知っているメイと四季が渚に先を促す。

「ああ、4月に入ってくる新入生なんだってさ。それで……ほら！」

奏「は、ハイ！　えつと……月城奏つて言います。去年の皆さんの活躍に心を惹かれて結ヶ丘に入学してきました。マネージャー志望です！」

かのん「!!　マネージャーとはいえ新メンバー!？」

可可「こんなにアツサリと!?!　去年とは大違いデス!!」

きな子「きな子も先輩になるんすねく／＼／」

夏美「私も先輩になりますのく／＼!!」

奏「あつ、桜小路先輩、鬼塚先輩、宜しく願います!!」

”先輩”。その言葉にきな子も夏美もテンションブチ上げだ。

千砂都「そつか、私は部長の嵐千砂都です。よろしくね月城くん！」

奏「ハイ！　よろしく願います、嵐先輩!!」

千砂都「うくん……メンバー皆、名前で良いよ？　苗字呼びだとなん

か他人行儀だし……仲間になるなら……ね？」

奏「ハイッ！　えつと……千砂都先輩!!」

千砂都「よろしい!!」

すると恋先輩が……、

恋「うう……去年がウソのようです。こんなにもスクールアイドルが新入生に浸透しているなんて……」

すみれ「ホントよねえ……」

そしてここに手伝いの3人が到着した。

紗夜「渚くん、四季ちゃん、メイちゃんゴメン遅れた」

陽菜「おはようございます！」

ライカ「おはようございます」

きな子「まさかまた新メンバー?!」

すみれ「ライカ!? 何でアンタが?」

千砂都「すみれちゃん知ってる人? って何かすみれちゃんに似てる……」

すみれ「私の従姉妹よ」

従姉妹、その言葉にざわつくLielia!だが、俺がすぐに自己紹介をさせる。

紗夜「結ヶ丘に転校して来ました。新2年生の真田紗夜です。渚くんと四季ちゃん、メイちゃんとは友達でたまにLielia!の練習を手伝ってくれて言われています」

陽菜「同じく真田陽菜です。紗夜とは双子で私が妹です」

ライカ「宮本ライカ。すみれの従姉妹で本職は剣道よ、よろしく!二人と同じくLielia!にサポートとして入ります」

可可「要するにマネージャーとサポーターが入ってくれるという事デスね!! ではククたちも自己紹介しましょう!!」

そして先輩たちやきな子と夏美。四季とメイ、俺も改めて皆に自己紹介する。

真田姉妹とライカはみんなの顔と名前を覚えた様で普通に名前ですべて呼べるようになった。

奏は事前知識があったので初めからメンバーの名前と顔は一致している。

怪しいのは真田姉妹とライカくらいだな。

ライカとすみれ先輩、従姉妹だけあって似てるし、紗夜と陽菜は双子だから顔の作りがそっくりだし。

千砂都「じゃあ練習始めようか!!」

Lielia!『はい(うん)!!』

「じゃあ仕事教えるな?」

奏「ハイ! ご指導お願いします渚先輩!!」

「2人はそれぞれスポーツドリンクとか冷却タオルの類の管理頼む!後でドリンクの補充もしてくれると助かる」

紗夜「分かったわ!」

陽菜「りよ〜かいつ!!」

「ライカは皆の練習を手伝ってやって? セット数と回数のカウントとかやってくれると助かる」

ライカ「了解よ!!」

「じゃあ奏、仕事教えるな?」

奏「はい!!」

そして奏に教えながら3人の仕事をチェックをし、練習中のメンバ―の動きの細かなズレや表情等から身体及びメンタルに何か問題を抱えていないかを見極める。

何かあったらライブどころじゃないからな。奏はそんな俺を尊敬の眼差しで見つめてくる。

よせやい、照れるじゃねえか／／／

この日は特に何も問題が無かったので無事3時間の練習が終了。

だがかのん先輩が奏と3人の歓迎会をやろうと言い出し、他のメンバ―も賛成したため皆でかのん先輩の実家の喫茶店へ。

そして奏は新潟から上京してきた事を驚かれ、真田姉妹とライカは先祖が真田幸村と宮本武蔵だということに驚かれていた。

可可先輩が奏にL i e i l a ! の中で推しはいるのか?と聞いたので奏は正直に「米女先輩です……／／／」と、答えた。

メイは「アタシ?!」とビックリしていたが、少し顔がニヤけていて嬉しそうだった。

マネージャーとサポーターが新たに増えたL i e i l a ! 。

これから先、面白くなりそうだ!!

― 続く ―

月と紅星

春休み中、今日もLielia!は練習があり練習に励んでいた。

まだ新年度は始まっておらず、入学式はまだ行われていないため奏はまだ正式メンバーではないのだが、渚と知り合い結ヶ丘に入学すると話してから、入学してマネージャーになるために毎日Lielia!の練習渚指導の元手伝い、研修のようなものを受けていた。

そして、今日も練習が終わった。

渚「お疲れ様でした!」

四季「お疲れ様です」

千砂都「お疲れ様。しっかりとストレッチして疲れを残さないようにね?」

そして、すみれ先輩や可可先輩も帰っていく。恋先輩はこれから生徒会の仕事があるらしい。

きな子「あれ、メイちゃん帰らないんすか?」

メイ「ああ……アタシはもう少しやっていくよ」

夏美「そうですね、お疲れ様ですの〜」

メイ「ああ、お疲れ……」

奏（メイ先輩居残り練習するのか……夕方だし、遅くなると危ないよな……よし!）

帰ろうとしたが、メイが居残り練すると聞いた奏は部室でメイの練習が終わるまで待ち、終わったら一緒に帰って家まで送ろうと待つことにした。

奏（メイ先輩、カワイイから悪いやつに狙われるかもしれないからな……）

そして、皆が既に帰りしばらくして居残り練習を終えたメイが帰る支度をするために部室に入ってくる。

メイ「あれ?! 奏、まだいたのか?」

奏「あつ、はい。遅くなったらメイ先輩危ないかなと思って……家まで送ろうと待ってました」

メイ「別に良いのに……、アタシを襲うやつなんかよほどの物好き

だろ？」

それを聞いた奏は、

奏「何を言ってるんですか!? メイ先輩凄くカワイイんですから心配するのは当然ですよ!!」

メイ「かつ、カワイイ?!／／／」

恥ずかしさからメイの顔が紅くなる。

メイ「先輩をからかうなよ……」

奏「からかってません!! 事実を述べたまでです!!」

メイ「……／／／（なんだコイツ／／ アタシをカワイイなんて言ってくれたの、ナギ以外に初めてだぞ……）」

メイは奏に対して、渚と似たものを感じた。そして、

メイ「そ、そこまで言うなら……家まで送ってくれるか?／／／」

奏「はい!! なんとしても無事に送り届けます!!」

メイ（ちよつと大袈裟だな……でも、なんか嬉しいかも……）

そして奏とメイは2人で一緒に帰る。その途中は色々と話ながら帰っていたのだが、メイがふと話題を振る。

メイ「奏はさ、アタシの目つきどう思う?」

それは、メイが小さい頃から言われ続け最近までずっと気にしてきた事だった。

しかし……、

奏「え? 何がですか?」

メイ「目つきが怖くないかなって……」

メイの表情が一瞬暗くなる。奏を悪いやつとは思ってないが、昔から言われ続けたことを気にするのは当たり前だった。奏とは出会ってからまだそんなに経っていないのだから尚更……。

だが、一瞬でも暗い顔をしたのをこの男は見逃さなかった。

奏「怖いなんて思いませんか? それどころか、メイ先輩の蒼い目、凄く綺麗ですよ……」

奏は、メイの目つきが怖いとか、そんなことは全く思っていなかった。

メイ「ツ!!／／／（昔のナギと同じ事言ってくれた……。コイ

ツなら、大丈夫なのかな？／＼／＼」

メイは、心臓の鼓動が高鳴っていくのを感じていた。渚と四季、L
iella!のメンバーや高校のクラスメイトたち以外にも自分を
肯定してくれた人がいた事に顔が綻ぶ。

メイ「奏……」

奏「何ですか？」

メイ「L i e l l a ! のマネージャー、宜しくな？」

奏は一瞬呆けた顔をしたがすぐに顔を引き締め、

奏「はい！」

そう、しっかりと返事をした。

そして、メイの家に着き……

メイ「あつ、ここだ。ありがとな奏」

奏「いえ、それではまた明日。失礼します！」

そして奏は帰っていった。

そして、その後メイは家の自室のベッドで、

メイ「……／＼（ドキドキ）あれだけでこんなになるとか、アタ

シちよろ過ぎだろ……」

奏への好感度が少し上がったメイだった。

― 続く ―

きな子・夏美 転校生組との交流（前編）

春休みが明けるまで後数日となったある日、今日もLiella!の練習がありメンバーは練習場所である学校の屋上に集合していた。勿論新たなマネージャーとして入部予定の新入生、奏と、サポートとして入る紗夜、陽菜、ライカも来ていた。

渚、四季、メイ、そして奏、紗夜、陽菜、ライカの7人は先輩たちよりも早く来ており、四季メイ以外の5人は練習準備をしていた。

きな子「おはようっす!!」

きな子が部室に入ってくる。部室にいた皆が『おはよう』と挨拶をする。着替えがあるので渚と奏は部屋の外に出る。

メイ「きな子おはよ……」

四季「きな子ちゃんおはよう」

3人が挨拶を交わすと、他の3人も……

紗夜「桜小路さんおはよう」

陽菜「おつはよ!!」

ライカ「おはよう……」

きな子「3人もおはようっす!! っていうかきな子で良いって言うてるっす……。なんか渚くんや四季ちゃんメイちゃんに比べて壁を感じるんすよね……」

きな子がしよんぼりする。すると紗夜は慌てて謝る。

紗夜「ごめん……何ていうか、あの三人は出会ってからよく会ってたから打ち解けてて」

陽菜「じゃあきな子ちゃんって呼んでいい?」

さすがコミュニケーションの高い陽菜。そう言うと、

きな子「勿論っす!!」

きな子も笑顔で答える。嬉しそうだな……。

するとそこへ、

夏美「おつはようですよ〜!」

夏美がやって来た。

きな子「あつ、夏美ちゃんおはようっす!」

メイ「おはよ」

四季「おはよう」

夏美「ハイですの……御三方もおはようですの〜!」

鬼塚も本当は明るい性格のため、自信を取り戻した今はスツカリ陽キヤとなつている。元気な挨拶に三人は…、

紗夜「あつ、うん……鬼塚さんおはよう……」

陽菜「おっはよ〜!!」

ライカ「おはよ」

三者三様に挨拶を返す。

夏美「紗夜さんいつになったら名前と呼ぶんですの？ サポーターでもメンバーになるんだつたら普通に名前と呼んで良いですのに……」

紗夜「ゴメンね……渚くんたちは慣れたんだけど、その他はまだ慣れてなくて……」

陽菜「紗夜は敬語外すとちよつとコミュ力がね〜?」

紗夜「嫌いわよ陽菜!!」

ライカ「二人共落ち着きなさい!」

すると四季が、

四季「じゃあきな子ちゃんと夏美ちゃんの二人と紗夜たち3人で遊びに行つて親睦を深めて来れば?」

メイ「おお! 良いなそれ!!」

紗夜「うつ、二人は行かないの?」

メイ「アタシたちが行つたらあんまり意味なくなる気がするからな。大丈夫だつて! きな子も夏美も良いヤツだから! アタシが保証する!」

四季「me too……」

四季とメイが3人に勧めると、

紗夜「分かつた。まあメンバーになつた以上は避けては通れないしね。丁度いいか!」

陽菜「そしたら明日練習休みだし遊びに行こうよ!!」

ライカ「良いわよ?」

きな子「行くっす行くっす!!」

夏美「遊びに行くのですの〜!」

部屋の中で女子たちが盛り上がり上がっていると、
ドンドン!

渚が扉を叩く。

渚『着換え終わったか?』

きな子「あつ! すまないっす! まだ着替えてないっす。今着替えるっす!!」

きな子と夏美は急いで練習着に着替え始める。すると、

奏『あつ、先輩方、お疲れ様です』

千砂都『ういつす〜! 皆は着替え中?』

渚『はい』

かのん『じゃあ私達も着替えるね』

ガチャ

そしてかのん先輩、可可先輩、すみれ先輩、千砂都先輩、恋先輩が
部室に入る。

中で女子たちが楽しく話しながら着替えてるんだろうな……っ!

想像すんな俺のバカ!!

奏「渚先輩、声が漏れてくるせいでイケない想像が……」

渚「耐えろ。俺も同じだから……」

まったく、今度からこの待ちの時間に準備をできるように工夫する
か。

(そうすりゃ声も聞こえないし変な想像しなくて済むだろ……)

そう心に決める渚だった。

ー 続く ー

きな子・夏美 転校生組との交流（後編）

前回の話通り、今日はLielia!の練習休みでメンバー内の親睦を深めるため、きな子、夏美、紗夜、陽菜、ライカの5人でROUNDIに遊びに来ていた。

ここには色々なアトラクションがあるしカラオケもある。いろんな分野の人が一緒に遊ぶにはぴったりだ。

店員「はい、5名様ですね。カラオケは2時間で終了なので部屋に入るときにお声掛け下さい。ではどうぞ…」

そしてアミューズメントエリアに足を踏み入れた5人。

何をやるかと迷っていると……

陽菜「ねえ？ ちよつとバッティング行こうよ?」

陽菜がバッティングセンターエリアに行きたいと提案する。

きな子「きな子は良いっすよ?」

夏美「私も構いませんの。自信はありませんが……」

紗夜「私も良いわよ?」

ライカ「オツケーよ」

全員の了承を得てバッティングセンターエリアに向かう5人。

まずは手頃な100キロくらいのスペースに入る。まずはきな子だ。

陽菜「ガンバレきな子ちゃん!」

きな子「は、ハイっす! 来るっす!!」

きな子がバットを構える。するとピッチャーの映像が動き出し、マシンからボールが撃ち出される。

ドシュツ!

きな子「っ!?」ブンツ!

バアンツ!

きな子のスイングは盛大に空振り、当たって跳ね返ったボールが転がって帰っていく。

きな子「100キロってこんな速いんすか!? 甲子園とかだともっと速いっすよね!!」

紗夜「あくまあ男子だからね。こんな球私も投げろって言われても無理かも」

陽菜「空手の動作と野球のスローイングじゃあ、使う筋肉や筋肉のそもそもの使い方が違うしね」

そして全15球を終えたきな子。結果は一球も当たらなかった。

きな子「悔しいっす……」

悔しがるきな子。すると、

陽菜「よし、じゃ次は私が行く」

そして次は陽菜がルームに入りバッターボックスに立つ。するとピッチャーの映像が動き、ボールが撃ち出される。

ドシュツ!

陽菜「ツ!!」チツ!!

バチンツ!

陽菜の振ったバットにボールが掠りファールになって背後の板に当たる。キャッチャーが怖そうなファールだった。

夏美「掠りましたの!!」

陽菜「よーし……来い!」

ドシュツ! ブンツ!

ドシュツ! カーン!

ドシュツ! チツ!

ドシュツ! ブンツ!

そして15球を終え結果は、4ヒット、3掠り、残り空振りという結果に終わった。

陽菜「あくもう! 悔しい!」

きな子「陽菜ちゃん凄いつす!」

紗夜「さすが陽菜!」

皆が盛り上がっていると、

ライカ「私行って良い?」

夏美「もちろんですよ! しっかり見てますのよ!」

そしてライカがバッターボックスに入る。しかし、きな子「? ライカちゃん変わった構えっすね?」

ライカは左打席に立ち、腰にバットを構えてまるで剣士の居合斬りのような構えを取った。

そして映像が動き、ボールが撃ち出される。
ドシュツ！

ライカ「シツ!!」カキイイーンツ!!

ライカは右腕の一本でまるでボールを斬り捨てるように打ち返す。
ボールは鋭い弾道で上に直進していき、
バコツ！

アナウンズ『パンパカパーン！ ホームラン!!』

何と、ホームランにしてしまった。これには皆もビックリだ。

ライカ「次！」

ライカは再び同じ構えを取り、

ドシュツ！ カキイイーンツ!!

ドシュツ！ カアアーンツ！

ドシュツ！ カキイイーンツ!!

そして15球が終わり、6ホームラン、8ヒット、1空振りという脅威の数字を叩き出した。

ライカ「ふう……」

そして、ライカがルームから出てくる。きな子や陽菜たちはもちろん、他のお客さんも呆気に取られていた。

ライカ「お待たせ。ん？ どうしたの？」

紗夜「ライカちゃん……、スゴいね……」

夏美「”天下無双の剣士”……、四季さんの言う通りですね」

陽菜「よ、よくし……次どこ行く？」

夏美「夏美はバスケエリア行きたいですの！ナギくんのやってるところを見て少しやってみたくなってますの！」

紗夜「うん。じゃあ行こうか？」

そして次はバスケットコートへ移動。チーム分けは最初

オフエンス

1、きな子

2、陽菜

3、ライカ
デイフェンス

4、夏美

5、紗夜

で、一回終わることに上の番号へとスライドしていく。(1の人は終わったら5の番号に行きデイフェンス)方式を取った。すると、

ライカ「夏美パス!!」

夏美「ライカさん!」パスツ!

ライカ「行くわよっ!」シュツ!

ライカがシュートするが

陽菜「ふっ!!」バチイツ!!

陽菜が自慢の脚力から生まれる跳躍でライカのシュートを叩き落した。



紗夜「陽菜!」パスツ!

陽菜「ナイス紗夜!」ダムツ、シュツ!

陽菜がレイアップシュートを放とうとする。

ライカ「させないわっ!」

夏美「ですのーっ!!」

二人がかりでブロックに入るが、

夏美(た、高い!!)

ライカ(届かないっ!!)

パスツ!

二人の上からレイアップシュートは決まった。

ライカ「陽菜…渚ほどじゃないけどジャンプ力がヤバいわね……」

きな子「陽菜ちゃん凄いつす……!」

陽菜「えへへ〜! 足の力なら自信あるよ!」

紗夜「そうね。私に怒られそうになると逃げ足速く逃げるしね〜?」

私も追い付けないしね〜?」

紗夜がジト目で陽菜をからかう。

陽菜「うっ…、ま、まあ今は良いでしょ?! そろそろ次のところ行こうよ?」

紗夜「その前にもうお昼だし腹ごしらえしない?」

夏美「賛成ですの!」

そして、5人はフードコートに移動した。

きな子「きな子はサンドイッチにするっす」

ライカ「私はハンバーガーにしようかしら」

陽菜「アタシは和食にしようかなく?」

紗夜「なら私も和食にしようっつと」

夏美「夏美はラーメンにしますの!」

そしてそれぞれ別の店舗でお昼ごはんを買い、午後は何をして遊ぶかという話になる。

夏美「ゲームコーナーでゲームで対戦したいですの!」

この案に皆は、

ライカ「確かにスポーツ系が続いたからね。良いとおもうわ」

紗夜「私も良いよ?」

陽菜「オツケー!」

きな子「きな子も良いっすよ?」

そして案が纏まり、食事を終えた5人はゲームコーナーに移動した。

く ゲームコーナー く

陽菜「紗夜! ダンスゲームで勝負!」

紗夜「!! 臨むところ!」

きな子「二人共頑張れっす!!」

夏美「紗夜さんファイトですの!」

ライカ「陽菜頑張れ!」

他にも、

夏美「夏美のドライブینگテクニック見せてやりますの!!」
ライカ「負けるもんですか!」

.....

きな子「落ちるなっす! 落ちるなっす!!」

紗夜「取れる取れる!!」

ポスツ!

きな子・紗夜「取れたっつ!!」

二人でクレーンゲームで遊んだりした。

夏美「最後にカラオケしていきませんか?」

きな子「良いっすよ?」

紗夜「私も良いよ?」

陽菜「現役スクールアイドルのお手並み拝見!!」

ライカ「高得点取るわよ!」

そして5人で順番に歌ったり、時にはデュエットしたりして楽しんだ。

点数的には、一度も80点以下は出なかった。

そして、夕方になり岐路に立つ付いている途中...

ライカ「いや、遊んだ遊んだ!!」

きな子「楽しかったっす!」

夏美「ですの!!」

紗夜「私も楽しかったよきな子ちゃん夏美ちゃん! ...あっ!」

陽菜「クスツ 紗夜もすっかり打ち解けたみたいだね?」

紗夜「あ、アハハ: そうだね」

きな子「きな子は嬉しいっすよ?」

夏美「夏美もですの!」

皆すっかり打ち解け、

紗夜「うん...。じゃあ明日の始業式に私達が正式に転校してくるからよろしくね!」

陽菜「よろしく!」

ライカ「きな子、夏美、よろしくね?」

きな子「楽しみにしてるっす!」

夏美「一緒に頑張りましょう！」

そして、各自家に帰って行った。

その日の夜、LINEのトーク欄では……、

渚「5人とも打ち解けられたみたいで良かった……」

皆でのトークの様子から、大成功を察した渚が部屋で笑みを浮かべていた。

ー 続く ー

第2部 序章：ネクストステージ 2年生へ……新年度始業式

いよいよ春休みが明け、明日には新入生の入学式を控えた今日。
今日は今いる生徒で新年度の始業式を行う。

その日の朝……、

ピピピツ ピピピツ ピピ…バチンツ!

「ふあく、朝か…今日から2年生だな……」

おはよう! 俺の名前は日宮渚。って、もう皆知ってるかな? 去年結ヶ丘に入った俺は、幼馴染の二人とスクールアイドル部、”Lie l i a!”に加入。って言っても、俺は男だからマネージャーだけだな。

幼馴染の二人は女の子なのでスクールアイドルとして活動。昨年の大会では全国大会まで勝ち上がり、見事全国優勝を成し遂げた。

そのため、地元は勿論全国的にもかなり有名人になってしまった。

「着替えるか……」

そして渚は着替えてリビングに降りる。

(明日の入学式であの女が入ってくるらしいからな……憂鬱だ。俺アイツに嫌なイメージしかないんだよな……、周りが騒ぎにならないと良いけど)

渚が心のなかで呟いていると、下では母さんが朝ご飯の準備をしており、父さんは新聞を読んでいた。

「おはよう……」

渚母「おはよう渚。はい、朝ごはんね」

「ありがとうございます……いただきます」

そして渚は朝ご飯のトーストとコーヒーを食べ始める。すると父さんが口を開き、

渚父「今年も頑張るんだぞ? まあお前はしっかりと努力できるヤツだから心配は要らないかもしれないが……」

「ああ…勉強も部活も頑張るぞ。ご馳走さま!!」

そして洗面所で顔を洗ったり歯磨きして身支度をし、家を出る。「行つてきます!!」

そして渚はいつも通り隣の家のチャイムを押す。すると中から俺の幼馴染が出てきた。

メイ「おつ、ナギおはよう! 四季は一緒じゃないのか?」

「これから迎えに行くところ」

メイ「自分の彼女なんだから四季の方先に行けよ……」

ジト目で見つめてくるメイ。いいじゃんかメイの家の方が近いんだから……つて言つても家1個分だけだな。

知らない人に言つておくと、俺たち幼馴染3人の家は3つ並んで建っている。なのでお互いの行き来は物凄く楽なのだ。

すると

ガチャン

背後からメイの家の門が開く音がした。

「おつ、四季! おはよう!!」

四季「おはようナギサ」

これで俺たち幼馴染組が揃った。日宮渚、米女メイ、若菜四季、幼稚園よりも前からの付き合いである俺たちは、いつも一緒にいた。去年は色々あったけど(詳しくは第1部を見てね?)、結果的には四季と付き合うことになった。

「じゃあ、行くか?」

そして俺たち3人でいつもの通学路を歩く。他愛もない話をしながら、楽しそうに。

メイ「いよいよアタシたちも2年生か……!」

「俺たちも先輩になるんだなあ……」

四季「L i e l i a ! にも新メンバー入って来るかな? 楽しみ」

「でも、去年を考えると尚更入りたい人少ないかもな?」

全国優勝したグループ。練習がキツそうと思われても仕方ない。

メイ「まあそれでも本当にやりたい人は入ってくるさ」

「だな」

そしてしばらく歩いて俺たちの高校、結ヶ丘高校に到着。校門から

はいると、何人かの生徒から朝の挨拶をされる。

俺たちも挨拶を返し、それぞれのクラスに向かう。

教室の外に貼ってあった張り紙を見ると、

「おっ、俺たち3人また同じクラスだってさ?」

四季「良かった……」

メイ「だな!」

そして席表通りに座ると、ん?

「って、なんでふたりとも俺の隣?」

四季「平等なランダム配置によって導き出されたもの。つまり偶然」

メイ「一年のときと一緒だな……。まあ去年はアタシが真ん中だったけど」

「俺たちが3年になったたら四季が真ん中だったりしてな?」

四季「さすがにその確率は低い」

3人で話していると、

きな子「あつ、3人ともおはようつす!!」

夏美「おはようですの〜」

「おはよ……ふぁ……」

渚が欠伸1つすると、

きな子「渚くんお眠つすか?」

「ああ……昨日遅くまで勉強しててな」

四季「無理しないでね?」

「分かってるよ……」

渚が四季の頭を優しく撫でると四季は気持ちよさそうに身を預ける。

メイ「おい、皆の前だぞ?」

気づいて手を引っ込める渚。四季は名残惜しそうにしていたがとりあえず我慢する。

すると先生が入って来てホームルームが始まる。

先生「おはようございます! 今日から皆さんは2年生です。明日入って来る後輩に恥ずかしくない先輩になれるよう、上級生としての

自覚を持って行動してくださいね？ それでは、講堂へ向かいましょう」

そして講堂に向かう俺たち2年生。そして講堂に入り、全校生徒が入って来て準備が整うと始業式が始まる。

理事長「こうして無事に新年度を迎えられたことを嬉しく思います。最上級生となる第一期生、2年生となる第二期生、共に明日入って来る1年生と共に、これからの結ヶ丘を作り上げていってください」

そして理事長は挨拶を終え、次は生徒会長の挨拶になる。

恋「今年は、いよいよ3学年が揃います。皆さん、結ヶ丘の生徒であることに誇りを持てるような、素晴らしい学校を共に作り上げて行きましょう！」

そしてそれぞれの挨拶も終了。そしてお知らせが話される。

理事長「最後に、この結ヶ丘に3人転校生が入ってきます。3人も2年生になりますが、皆さん仲良く過ごしてってください」

転校生3人、アイツラだな。（詳しくは”幕間・新年度へ” 春休み”参照）

理事長「それでは、入ってきてください」

そしてステージ上に転校生の3人が立つ。その中の一人を見て、「えっ、すみれ先輩？」などという声もチラホラ聞こえる。

理事長「では、自己紹介を」

紗夜「真田紗夜です。岐阜県の高校から来ました！宜しくお願ひします！」

陽菜「真田陽菜です！ 紗夜とは双子の姉妹です。宜しくね！」
ライカ「宮本ライカです。山口県の高校から来ました。宜しくお願ひします!!」

そして3人が頭を下げると、生徒たちから拍手が起こる。
そして始業式は終了。各クラス教室に戻る。

ー ホームルーム中 ー

紗夜「改めまして、真田紗夜です。特技は料理と空手です。春休み

に日宮くんたちと知り合ってスクールアイドル部のサポーターとして加わる予定です」

陽菜「真田陽菜です！ 私も紗夜と同じくLiella!のサポートとして加わりま〜す!!」

ライカ「宮本ライカです。渚と春休みに出会ってスクールアイドル部の人たちとも知り合って、私もサポートとして加わる予定です。因みに平安名すみれは私の従姉妹です」

ライカがすみれ先輩の従姉妹だと知ると、「あつ、だから似てたんだ…」と納得する声が。

うん、まあ気持ちは分かるよ。似てるもんね。

ホームルームが終わった後、俺も三人との出会いを根掘り葉掘り聞かれ疲れたが一つ一つ返してやった。

皆納得してくれたが、「やっぱり日宮くんは日宮くんだね」とみんなが言っていたのがなんか引っ掛かる。

すると、

クラスメイト「そう言えば、かのん先輩って留学してないの？」
Liella!のメンバーがなんとも言えない複雑な顔をする。

「ああ……してないよ。実はな、あの話取りやめになったんだ」
皆の驚愕の中、その日は下校した。

3期目の春 結ヶ丘高校新入生入学

始業式が終わり次の日……

結ヶ丘の体育館には、上級生が席に着席し、新入生の入場を待っていた。

……そう、今日は結ヶ丘高校入学式の日。

既に保護者席には新入生の親御さん方が座っており、カメラを構えていた。

四季「ねえ？ 1つ良い？」

すると、四季が突然話しかけてきた。

「何？ もうすぐ式始まるぞ？」

四季「なんで……ナギサの隣の席が夏美ちゃんなの？」

あく……そのことか。現在俺のクラスは前後2列に別れて座っているのだが、俺の隣は夏美で前列。その真後ろの後列に四季とメイになってしまっていた。

「先生に言えよ……」

この席を決めたのは先生だ。俺は悪くない。

四季「……あの年増」

夏美「四季さんキャラ崩壊してますの……。心配しなくても盗らないんですの」

四季「でも……」

メイ「四季、もう始まるから後でたつぷり甘えれば良いだろ？」

四季「分かった……」

そして入学式が始まった。新入生が左右に別れた上級生の席の間を入場してくる。すると、

(出たな……)

ウィーン「……………」

昨年のラブライブでLielia!と激突するも破れた少女、ウィーン・マルガレーテが入ってくる。それを見た先輩たちや同級生たちは、

「えっ!?! ウィーン・マルガレーテ? なんで結ヶ丘に?」

「どういう事?」

会場が小規模だがザワツキだす。するとメイが、
メイ「アイツ本当に入ってきやがった…!! 絶対にLiella!
になんか入れないからな!!」

四季「かのん先輩の留学中止が決まってそれを説明しに来たとき可先輩も怒ってた。「ダレがオマエなんか入れるかデス!! ラブライブを低レベルとか言うやつヲ!!」って……」

「だよなあ……印象、最悪だよな」

普通のライバルキャラだったら話しは別だったろうけど、自身もスクールアイドルをやっているながらラブライブを下らないとか低レベルと豪語したアイツをスクールアイドル大好きな二人が入れるとは思えないし。

話を戻そう。次々と新入生が入ってくると、一人ミントグリーンの髪色をしたクールそうな女の子が入って来た。

? 「チラツ」

(?)

あれ、あの子俺を見た? あと夏美も。

そしてその次、一人男子生徒が入って来た。俺たちの知っているやつだ。

(来たな……奏!!)

その少年、月城奏(詳しくは”幕間:新年度へ”春休み”を読んでね?)は渚に視線をやると軽く会釈し席に着席した。

そして新入生が全て着席し、入学式が始まり何事もなく終了。新入生も上級生も教室に戻りHRが始まる。一年生は今頃自己紹介しているだろうな。

先生「ハイ、じゃあホームルームはここまで。気をつけて帰ってね?」

クラスメイト「起立! 礼!!」

そしてクラスの皆は友達同士で話したり、遊んで帰ろうとする中、俺たちは教室の外でどうするか話していた。

きな子「きな子たちはどうするっすか？」

メイ「今日は練習無いしな？」

ライカ「どっか寄って帰らない？」

「じゃあ奏や紗夜たちを誘って皆で遊んで帰るか？」

そしてスクールアイドル部の2年生皆で帰ろうとする。すると、

夏美「あつ、夏美はちよつと用事が……。申し訳ないですがちよつと今日は……」

「？ 何かあるん……」姉者あああああッ!!」!? なに……ッ!!」

ドゴオオオおおおんっ!!

入学式のとくに俺と目が合ったミントグリーンの髪の色をした女の子が、廊下を猛ダッシュしてきて勢いそのままに背後から俺を蹴り飛ばした。

「ギヤアアアあああああっ?!?!?!」

四季「ナギサ!」

メイ「お前何を!」

渚を蹴り飛ばした謎の新生の女の子に突っかかる2人。だがその子は二人を気にもかけず、

？ 「姉者無事ですか!!」

夏美「冬毬!^{とまり} 何をやってるんですの?!」

？ 「へ? だってその男に何かされてたのでは……」

夏美「そんな訳ありません誤解ですの!! 謝りなさい!!」

？ 「へ、誤解? 違うんですか？」

そこに、真田姉妹2人が騒ぎを聞きつけて教室から顔を出す。

陽菜「どうしたの? 何か凄い勢いで渚くん吹っ飛んだけど」

紗夜「どうかした?」

騒ぎに皆が集まってくる。

「痛てて……」

四季「ナギサ大丈夫?」

四季が俺を心配して急いで駆け寄ってくる。優しいなあ……。

「夏美…その子誰だ?」

渚が夏美に質問すると、キツ！ とした視線で俺を見る女の子。俺
何かした!?

夏美「この子は鬼塚冬毬^{おにつかとまり}。夏美の妹ですの」

冬毬「鬼塚冬毬です。先輩方、宜しくお願いします」

謎の新生の女の子は、堂々とそう答えた。ただ、俺を睨んだまま
……。

メイ「えっ?」

2年生『『妹おおおおオオオオオツ!!?』』

(夏美、妹いたんだ……。つてか、なんで俺いきなり蹴り飛ばされたの
?)

波乱の幕開けか?

┆ 続く ┆

鬼塚冬毬

「い、妹……?」

夏美が自身の妹だという少女に突然背後から蹴り飛ばされ、蹴られた腰をさすりながら起き上がる渚。

夏美「な、ナギくん申し訳ないですよ!!」

冬毬「姉者!? 何を……」

夏美「冬毬も謝りなさい!!」

夏美に凄い剣幕で怒られて渋々頭を下げる冬毬ちゃん。この子の俺に対するヘイトは何なのだろう……。

「えーつと…、なんで妹さんはそんな俺に敵対心剥き出しなのか理由を聞いて良いかな……?」

冬毬「そんなの決まっています! 姉者が魅力的だからってセクハラを働いたからです!!」

「ハイ?!」

セクハラ!? なんだよそれ!! そんなことした覚え無いぞ!!

「セクハラなんてした覚え無いぞ!!」

冬毬「シラを切るんですか!!」

夏美「冬毬!! ナツツはセクハラなんてされてませんの!! いったいなんのことを言ってるんですの!?!」

冬毬「だってたった今嫌がる姉者をしつこく誘ってたじゃないですか!!」

夏美「夏美は別にそんなことされてませんの!! ナギくん以外にも部活の友達皆で一緒に遊んで帰らないか誘われてただけですよ!! それにまったくしつこくなんかなかったですよ!!」

冬毬「友達!? 部活に入った事でさえ大丈夫か心配だったのに姉者に友達なんかできるわけ無いですよ!! 小・中と友達いなかったのに!!」

夏美「冬毬……っ!! 庇うフリしてさり気なくフレンドリーファアイアはやめるですよの……っ!!」

メイ「なんか……すごい妹だな」

四季「夏美ちゃん…友達いなかっただ…」

「それを言ったらお前らも俺たち3人以外にそれらしいのいなかったじゃねえか……」

四季とメイが渚を睨む。ホントのことだろう？

夏美「とにかく!! 冬毬はお姉ちゃんの友達に無礼を働いたんですの!!」

冬毬「ホントに友達できたんですか!!」

夏美「失礼ですの!! 同級生だけじゃなくて先輩たちとも仲良いですの!!」

冬毬「あの姉者が……」ツ―

ん？ なんか妹さん泣いてない？

きな子「な、なんか泣いてないっすか？」

冬毬「ああ失礼。感動して泣いてただけです。で、でもじゃあ入学式のとときにその男性が姉者の隣に座ってたのはなんでですか!! 気があるかちよつかい出そうとしたんじゃ……」

紗夜「いや違うから。あの入学式の席を決めたのは先生だから」

陽菜「それに渚くんにはもう彼女いるしね」

冬毬「へ、先生が決めた？ お相手ももういる？」

夏美「そうですの!! 夏美以外のね!!」

冬毬「……ホントに誤解？」

夏美「だからそう言ってますの!!」

数秒の間沈黙が流れる。冬毬ちゃんは冷や汗をかき……

冬毬「す…スミマセンでしたあっツ!!!」

冬毬ちゃんが土下座した。

冬毬「やつとできた姉者のお友達に私はなんてことを!! どうかお怒りは私に!! どうか姉者の友達をやめないであげてください!!!」

夏美「ちよっ?! 冬毬恥ずかしいですの!! やめなさい!!」

ハア……

「まあ誤解と分かってももらえたなら何よりだよ……。妹さんはお姉ちゃんの事が大好きなんだね……」

冬毬「はい……」

「許すからもうちよつと人の話は聞いてね?」

冬毬「分かりました。ありがとうございます……」

「ほら、立って」

そう言つて冬毬ちゃんを立たせる。いつまでも土下座なんかさせとくわけにも行かないからな。

四季「まったく、ナギサは甘すぎ……」

メイ「まあそれがナギのいいところだけだな」

すると、

奏「渚先輩く!!」

「おつ、奏! どうした?」

奏「帰りどうしようかなと思つて……あれ、鬼塚さん?」

冬毬「たしか月城くんでしたっけ?なんでここに?」

奏「ああ、春休み中に先輩たちと会つてさ、明日スクールアイドル

部に入部届出すつもりなんだ。マネージャーで」

冬毬「スクールアイドル部!? まさか姉者を狙つて……」

奏「へ? 姉者? …お姉さん? 鬼塚……あつ! もしかして夏

美先輩の妹!」

夏美「あつ、奏くんそうですの……」

奏「そうなんですネ……鬼塚さん、えつと冬毬さんの方耳貸して」

冬毬「なんですか……?」

奏「俺が良いなと思つてるのはメイ先輩だから心配いらないよ?」

なんかゴニョゴニョ言つてる……まあ大体察せるけど。

冬毬「なら問題は無いです」

奏「良かった」

すると、

冬毬「そう言えばスクールアイドル部ってどんな感じの部活なんですか……?」

? もしかして興味あるのか?

ー 続く ー

2年生 with 奏 お台場へ

結ヶ丘の入学式が終わり、帰りに皆で遊んで帰ろうかと話していたら、突然俺は背後から夏美の妹、冬毬ちゃんに蹴り飛ばされた。

どうやら俺を大好きな姉に手を出す不届者と勘違いしてしまったらしく、夏美や紗夜たちが説明してくれて誤解は解けた。

なのだが、

冬毬「スクールアイドル部ってどんな部活何ですか？」

冬毬ちゃんが興味があるようなことを言い、これは新入部員獲得のチャンスかもしれないと俺は思った。

「興味あるんだったら練習風景の動画送ろうか？」

冬毬「良いんですか？ ではください！」

スマホを取り出した冬毬ちゃんに、俺もスマホを取り出して動画を送る。ついでに夏美が初センターで歌った去年の学園祭ライブのも送っとくか……。

「はい、送ったよ？」

冬毬ちゃんが送られてきた動画を確認する。

冬毬「ありがとうございます！ あと、この動画去年の学園祭の時のですよね？ 姉者がセンターだったので覚えてます」

「よろこんでもらえたなら何よりだよ。じゃあ俺たちは帰るから時間あつたら動画見てみて？」

冬毬「はい！ ありがとうございます！」

夏美「ナギくんありがとうございます!!」

メイ「じゃあ夏美、また明日な？」

きな子「また今度一緒に遊びに行こうっす!!」

夏美「勿論ですよ！」

四季「それじゃあ……」

紗夜「じゃあね？」

陽菜「バイバイ！」

ライカ「それじゃあね？」

奏「それじゃ夏美先輩、鬼塚さん、また明日！」

そして俺たちは昇降口へと向かった。

夏美「まったく、いきなりナギくんを蹴り飛ばすなんて……」

冬毬「ごめんなさい、姉者……」シユン

シユンとする冬毬。やれやれ、世話のかかる妹ですの

夏美「じゃあ帰りますの！ 今日はお母さんたちが冬毬の高校入学祝いをするって張り切ってましたから、早く帰るですの!!」

冬毬「御意」

そして、冬毬とナツツは真っ直ぐ家に帰りましたの！

その頃、街へと繰り出した俺たちは電車に乗ってお台場方面に向かっていた。

紗夜「お台場かあ……、行くのは初めてね」

陽菜「確か○○テレビがあるところだよね？」

メイ「そうだぞ？ でも、今回行くのはDiversityっていう総合ショッピングセンターだな」

四季「私とメイとナギサは一緒に行ったことある」

きな子「へえ、きな子は無いっす」

ライカ「私も行ったことは無いけどたまにチラシ入ってくるし、すみれからも聞いてたから知識としては知ってるわ」

奏「俺は中学の修学旅行でテレビ局に行ったきりです」

やっぱり初めての人が多いんだな。っていうか今気づいたけど、ここにいるの俺と四季とメイ以外は東京出身いな……。

「そっか。もうすぐ着くぞ?」

そして電車が最寄り駅へと到着。降りてショッピングセンターへと向かう途中、

奏「うお〜！ 1／1スケールのユニコーンガンダムだ!! 始めて

見た!!」

奏は等身大のガンダムに興味津々だ。

「因みにこれ、イベントとかで実際に動くぞ?」

奏「マジですか!」

奏の興奮した様子……。

メイ「ガンダム好きなのか?」

奏「あつ、ハイ……。アプリで初代からのアニメ見てて」

ライカ「男の子ってそういうの好きそっだものねえ……」

「まあ取り敢えず今日はDiversityに行くぞ?」 奏、今度い

つでも見に来れば良いから今日は別のところだ」

奏「あつ、ハイ!!」

そして、俺たちはDiversityの中の雑貨店や服屋を見て回る。

紗夜「どうかな?この服……」

陽菜「紗夜可愛い! いいと思うよ! 渚くんどうかな?」

陽菜さんに引つ張られ紗夜さんと対面する俺。

「あつ、うん……。凄く可愛いと思います……」

俺は顔を紅くし、直視しないように顔を背ける。

陽菜「あつ、照れてる〜!」ニヤニヤ

紗夜「……………」

お互いに照れていると?

四季「ナギサ?」。(言)(ゴゴゴゴゴ)

「分かってるよ! 浮気なんかしないから!!」

四季は案外独占欲が強いらしい。まあ俺もだけど。

奏「この服……いいと思うけど俺が着られてる感が……」

メイ「んな事ねえって! 中々良いと思うぞ?」

ライカ「ええ、カッコいいと思うわよ? きな子はどう思う?」

きな子「えっ……あつ、その……カッコいいっす」

顔を紅くしてしどろもどろになりながら答えるきな子。

ライカ（これは……、きな子のハートにクリティカルヒットだったかしら？）

〽 雑貨屋 〽

陽菜「紗夜！ このパスケース可愛くない？」

紗夜「良いわね！ 買おっか？」

陽菜「うん！」

二人は相変わらず仲が良い。

奏「あつ、イヤホンがセールやってる……。最近調子悪いからな。

2つくらい買つとくか」

「俺も買つとこ……」

男子二人はセール中のイヤホンを買い、

メイ「練習ノートもうすぐ無くなりそうなんだよな……」

四季「私も授業で使うノート、新しいの買つてなかった」

きな子「あつ！ きな子もつす!!」

ライカ「ここに5個入りで安いのあるわよ？」

メイ、四季、きな子は練習の記録や授業で使うノートを買う。

そして俺たちはフードコートに行き食べ物を頼む。

きな子「きな子はうどんつす！」

紗夜「私はまぐろたたき丼」

陽菜「私は鶏そぼろ丼だね」

ライカ「私はかけ蕎麦にしたわ」

4人が続々とメニューを決めてテーブルに持ってくる。

「ん〜…カレーにするかな。けどチキンとグリーンどっちにするかな」

四季「じゃあ2人でそれぞれ頼んではんぶんこしない？」

「採用！」

俺と四季はチキンカレーとナンのセットとグリーンカレーとナンのセットを頼む。

メイ「アタシはハンバーガーで良いか」

奏「俺もそうします」

メイはエビカツバーガー、奏はベーコンレタストマトバーガーのそれぞれセットを注文し、商品を受け取ってテーブルに戻る。

そして皆で話しながら料理を食べる。俺と四季は紗夜と陽菜、ライカから「ラブラブだね〜」などと茶化されたが……………、

食事も終わり、後は何しようかと考えるが、特に何も思いつかなかった。今日で今日は家に帰ろうという事になり再び駅から電車に乗って。原宿・表参道方面に戻る。

きな子「じゃあまた明日っす!」

紗夜「また明日ね!」

陽菜「バイバイ!!」

ライカ「また明日!」

奏「失礼します!」

皆がそれぞれ帰っていく。俺達も3人で歩き慣れた道を歩いていく。

メイ「ん〜っ! 今日楽しかったな!!」

「な? 楽しかった」

四季「ナギサが蹴られた時は何事かと思ったけど」

「はは…………。まあ、誤解は解けたから大丈夫だろ?」

四季「そうだね…………。冬毬ちゃん、スクールアイドルに興味がありそうだった」

「な? 新入部員が獲得できると嬉しいけど…」

メイ「でもなあ、アイツも何かいるからなあ…………」

「ああ、ウイーンな」

四季「去年の東京大会の後相当叩かれてたからね。Liellaに入れたらその影響があるかもしれない…………」

メイ「四季はアイツを入れても平気なのかよ?」

四季「…………今はあまりツンケンした感じはしない気がするから」

「まあ…………。まっ、その時考えれば良いだろ?」

そして家に着き、

「じゃあまた明日な？」

四季「またね？」

メイ「おう、また明日」

いつもの通り3人同時に、それぞれの家へと入っていった。

ー 続く ー

Liellaメンバー誕生日特別編

〈平安名すみれ〉誕生日特別編・平安名（へあんな）家のお手伝い

9月28日、今日はLiella!の練習が休みで完全オフなのですが、俺はすみれ先輩に頼まれてすみれ先輩の家の神社に向かっていった。

「昨日」

すみれ「渚、ちよつと良い?」

「はい? 何でしょう?」

すみれ「実は、あたしの実家の神社が明日荷物を整理するから家族総動員でって言われてたのに、お父さんが前日になってぎっくり腰になっちゃったのよ……」

あら? それは大変だ……もしかして……

「もしかして男手が無くなってしまったから手伝いに来てくれて事ですか?」

すみれ「話が速くて助かるわ!! お願い!! 家族の中の知り合いで、ある程度の力がある男の人ってアナタしかいないのよ!!」

ふむ…俺はLiella!のマネージャーだ。例え家庭の事情でもメンバーのピンチを見てみぬふりしてマネージャーを名乗れるか、いや名乗れない!!

「分かりました! お手伝いに行かせてもらいます。家の場所と何時位に行けば良いか教えてくれますか?」

すみれ「ありがとう! えつと…じゃあ朝9時に……」

そして現在、神社に向かっている所という訳だ。

「あつ、この石段登った先だな」

俺が石段を登って一番上に行くと、巫女服を着たすみれ先輩とお母さんが用意していた。

すみれ「もうじきかしらね…」すみれ先輩!!「あつ、来た!!」

すみれ先輩が駆け寄ってくる。それと一緒にお母さんと妹さんも

駆け寄ってくる。

お母さん「すみれ、この人が手伝い頼んだ人？」

「はじめまして、日宮渚です。結ヶ丘でLieilia!のマネージャーをやっています」

俺が自己紹介するとお母さんも自己紹介をしてくれる。

お母さん「まあ、これはご丁寧に：平安名かぐや（以下：かぐや）といます。今日は宜しくお願いします」

「こちらこそ宜しくお願いします!!」

すみれ先輩のお母さん、かぐやさんが頭を下げてきたのでこちらも頭を下げる。

礼には礼を。その辺りの生真面目さはすみれ先輩に通ずるものがあったのでやりやすかった。すると妹さんも自己紹介してきた。

すみれ妹「平安名あやめ（以下：あやめ）です。宜しくお願いしますゆ：っ!」カアアアッ／／／

噛んだ……。だが慣れないながら精一杯自己紹介してくれたのが分かったためこちらもちゃんと自己紹介する。

「日宮渚って言います。君のお姉ちゃん：すみれ先輩には、いつもお世話になってます」ニコッ

俺が笑いかけるとあやめちゃんはパアアアと、顔を輝かせて「今日はよろしくね!」と言ってきた。

うん。宜しく!

かぐや「じゃあ早速始めましょうか? すみれ、教えてあげてくれる?」

すみれ「分かったわ。ほら、渚行くわよ!」

「はい!!」

そしてすみれ先輩の指示で次々とこれからの時期に必要な荷物を外に出してもう今年は使わない荷物を中にしまおう。

かなり重い荷物もあり、コレは確かに女性だけでは無理だったかも。

そして使う荷物を出し終えたところでお昼ごはんの時間帯に。かぐやさんとあやめちゃんが俺とすみれ先輩が作業している間におに

ぎりを作ってくれていたため。時間になり作業の手を止めて手を洗ってからおにぎりをご馳走になる。

かぐや「どうぞ?」

あやめ「召し上がれっ!!」

「頂きますー!」ハムツ

おにぎりの中は鮭や梅、おかかにとたらこなど一個一個違う具材が詰められており、「コレはなんだろう?」と食べる楽しみを味わいながらおにぎりも味わう。

かぐや「ふふっ、美味しそうに食べるわね?」

あやめ「アタシもお腹すいた!」ハムツ

すみれ「アタシも貰おうかしら」

かぐや「私も……」

そして平安名家の三人と俺の計四人でお昼ごはんを食べ、少し休憩を挟んだ後午後の作業に移る。

午前中に出した荷物のダンボールから備品を取り出して建物を飾り付けたり、無くなりそうになっていた御守やおみくじを補充。

そしてそれらが全て終わり、入っていたダンボールを片付けたときには既に夕方になり日が傾き掛けていた。

かぐや「今日はありがとう。助かったわ!」

「いえ、俺も良い経験になりました」

すみれ「渚、ありがとね? 今日助かったわ」

「お役に立てたなら幸いです」

するとあやめちゃんが足元に抱きついてきて、

あやめ「渚お兄ちゃん! お姉ちゃんあげるから結婚してウチで暮

らそう?」

ぶっ!? 俺とすみれ先輩が二人して吹き出す! 何を言ってるん

だこの子は!?

かぐや「こら、あやめ? そんなこと言ったら困らせちゃうでしょ?」

あやめ「やだーっ!!」

はは……参ったな。

「ゴメンね？ 俺もう好きな子いるからそれはちよつと……」

あやめ「ぶーっ！！」

かぐや「あらら……すつかり懐いちゃったわね」

「はは……じゃあ俺はコレで「あつ、待つて」え？」

かぐや「これ、今日のアルバイト代。大変だったでしょ？ タダで

なんてやらせられないわよ」

「あー……分かりました。ありがとうございます」

すみれ「完全にそんなこと頭に無かったわね……」

「すみません別の事考えて……「別の事？」すみれ先輩、今日誕生日でしよう？」

すみれ「!? 知ってたの？」

「L i e l i a ! のメンバーの誕生日とかのデータは入学前にメイに基礎知識として暗記させられたんで。というわけでこれ、プレゼントです」

すみれ「あ、ありがとう……／／／ 開けてもいい？／／／」

「ええ。どうぞ」

すみれ先輩が箱を開けると、中にはすみれ先輩がしてるカチューシャと同じデザインだが、新品の物が入っていた。

「すみれ先輩の結構傷だらけだったから。けど毎日してるし、気に入ってるんだろうなと思って同じやつ探しました」

すみれ「っ／／／ もう、こういうのはあの二人にしなさいよ？」

「ハハッ、すみません。では失礼します!!」

そして俺は帰った。

その後、

かぐや「あの子も凄くいい子じゃないの!! はあ、好きな子がいなければすみれに狙わせたのになあ……」

すみれ「人の相手を勝手に決めるんじゃないわよ!!」

まったく……。

すみれ「これ、明日から付けて見ようかな／／／」

すみれ先輩がプレゼントのカチューシャを握りしめてそう呟いていたのを、俺は知らなかったとき。

|
す
み
れ
ち
ゃ
ん
H
a
p
p
y
B
i
r
t
h
d
a
y
!!
|

〈米女メイ〉誕生日特別編：赤の少女と

今日は10月29日、俺たち幼馴染の一人、メイの誕生日だ。今までは家で俺たち3人でパーティーをしていたのだが、今年は違う。かのん先輩たちがサプライズを仕掛けようと提案してきたので俺と四季は了承。

俺はメイを1日家から遠ざけるために二人で、出掛けていた。

メイ「今年は四季がいないのか……」

「仕方ないよ。どうしても外せないらしい……。その代わりと言ったらなんだが、俺がエスコートしてやるからな！」

メイ「っ、ああ。じゃあよろしくな！」

俺とメイはまず身体でも動かさそうかとボウリング場に。

スター1

スター2

というプレイヤー名にしたらメイに突っ込まれた。センス無いのは分かってるけど、L i e l i a ! はやっぱり星っていうイメージだったからな。

そして迎えた第1ゲーム終盤最終レーン、ここで俺がストライクかスピアを出さないと俺の負けだ。くそおっ……。因みにこのゲームで負けたほうが次に行くクレープ屋で奢ることになっている。

メイ「へっへー。やっぱりナギはボウリングは下手だな!!」

いい気になるなよ？

俺の第一投目、ボールは左端のピン二本を残して全部倒れた。

メイ「やべっ!?!」

「よし……。これで、終わりだあっ!!」

そして俺の第二投、結果は……

メイ「あーむっ！ あく、やっぱりナギの奢りで食うクレープは格別だなあ……」ニヤツ

「……………おう」

結論から言うと負けました。

ちよっと変な力がこもってしまったのか、最初はピンに向かって

真っ直ぐだったんだが……突然カーブしてしまいそのままガードレーンに。

こんなことってある？

だが勝負は勝負。仕方無いので俺の奢りでクレープを食べている。

メイ「でも、ナギはクレープ買わなくて良かったのか？」

「今月少し大きな買い物をしてな、金がもう少ないんだ。気にせず食べさせてくれ……」

メイ「自分の分ケチって少しでも安く済ませようってか……。なんかこつちが悪い事してる気分になるな……。ナギほら、よかつたら一口食うか？」

「食べる……」

俺は一口メイのクレープを分けてもらう。甘い……。

メイ「全く……何を買ったんだよ？」

「……後で分かる」

メイ「なんだよそれ？」

そしてメイと二人で次はファミレスで昼飯。メイの分も奢ってやりたかったがもうヤバイ……。仕方なく自分の分は自分の出だして貰った。

メイ（本当に何買ったんだか……）

そして、俺のスマホに準備OKと四季からLINEが来た。

「メイ、ちょっと付いてきてくれるか？」

メイ「ん？ どこ行くんだ？」

「良いから!!」

そして俺たちがやってきたのは、

メイ「何だよ、あたしの家じゃんかよ」

「自分の部屋行ってみて」

メイ「何だよ一体……？」

そしてメイが、家に入り自身の部屋の扉を開けると、

パパアアアああんっ!!

盛大にクラッカーが鳴り、待ち構えていたLieila!のメンバーが一斉に、

L i e l l a ! 『メイちゃん誕生日おめでとう!!』

メイ「……………」(・o・) ポカン

四季「フフツ、サプライズ成功」

メイ「四季!? いや用事があるって……」

四季「今日私にメイの誕生日を祝う以上に大事な用事なんて入っていない。最もそんな用事存在しないけど」

かのん「メイちゃんびっくりした?」

メイ「かのん先輩!」

恋「大成功の様ですね?」

可可「悩んだかいますシタよ!!」

すみれ「アンタはこういう事考えさせたら右に出る者はいないわね」

きな子「メイちゃんおめでとうっす!!」

夏美「おめでとうですの!!」

メイ「皆……………っ!!」

「じゃあパーティーを始めるか!!」

L i e l l a ! 『オー……っ!!』

そしてそこからは皆でゲームをしたりお話ししたりお菓子を食べてりして楽しみ、いよいよプレゼント渡し。

千砂都「はいコレ2年生から!!」

先輩たちからは新しいヘアアイロンが贈られた。

メイ「あたしの今壊れてたんだよ!! ありがとうございます!!」

きな子「きな子と夏美ちゃんからはこれっす!!」

きな子と夏美からは今話題の映画の無料チケット。こんなによく取れたな。

メイ「これ見たかったやつ!! サンキュ!!」

四季「次に私から。これ」

四季からはメイが好き猫のぬいぐるみ。それも凄く可愛いヤツ。

メイ「がわいい”い”いいいっす!!」

すごい声出てるぞ? 大丈夫か?

次は俺の番。

「次は俺の番なの？ はいこれ」

メイ「なんだこの包？」

「開けてみな？」

メイが包を開けて中のものを見た瞬間動きが止まった。

可可「何デスか……………っ!？」

メイ「れ、歴代のラブライブ優勝グループのラブライブファイナルステージパフォーマンス集……………。こ、これ、確か中古でも8万近くするはずじゃあ……………」

「ああ。だから悪いけど中古品なの？ 流石に新品は買えなかつた」

可可「こ、こんなのどうやって手に入れたデスか!？」

「色んなところのDVDショップや本屋探しまくった。見つけたときは店の中で雄叫び上げちまつたぞ。お陰で変な目で見られた」

メイ「こんなの貰って良いのか？」

「寧ろ貰ってくれないと困るんだけど。俺の努力が無駄になつちまう」

メイ「っ!! ありがとうナギ!! 最っ高に嬉しい!!」

可可「め、メイさん!! 可可も観たいデス!! 今観ませんか!？」

メイ「ああ! 皆で観よう!!」

そして、俺達はDVDを鑑賞した。俺たちの中で特に印象的だったのはA|R|I|S|Eやμ's、aquoursなどのグループ、そしてオマケボックスに入っていた虹ヶ咲がお気に入りになった。

かのん「じゃあね」

可可「また明日デス!」

最後の二人が帰ったため、俺と四季、メイの三人は今度は俺の家で久しぶりのお泊まり会をする。

メイ「／／／ナギ!!」

四季「ナギサ……………」

「お休み……………」

メイがあんなに喜んでくれたなら貧乏人になった価値はあったかな？

ーメイちゃん Happy Birthdayー

〈葉月 恋〉誕生日特別編：作曲相談

暦の上では季節はもう冬に入った11月のある日、今日も放課後の練習が終了し、皆それぞれ下校する。

メイと四季は急ぎの用事があつたらしく先に帰ってしまい、俺はマネージャーとしてスクールアイドル部の活動日誌を書いたり後片付けをしていた為に遅くなってしまった。

作業も終わり、生徒会室で仕事をしている恋先輩の所に報告を兼ねて帰りの挨拶に行く。

「恋先輩、こっちは終わりました。じゃあお疲れ様でした…「あつ、渚さんちよつと待ってください」？」

恋「今度の土曜日、私の家に来てくれませんか？ 新曲の作曲をしているのですが、男性の目線からもアドバイスをいただけないかと……」

「男性目線ですか……？」

恋「はい。スクールアイドルのファンは女性ばかりという訳ではないですし、別の視点からの曲に対するアプローチがあった方が良くかと思ひまして……」

なるほど……、そういう視点も視野に入れたほうが今後のためになるか……。しかし、

「俺の好みが多くなってしまうかもしれませんが、大丈夫ですか？」

恋「はい。お願いします」

そうして、俺は今度の土曜日に恋先輩の家にお邪魔することになった。ん？今度の土曜日って確か24日だよな？

恋先輩誕生日じゃん、なんか持っていたほうが良いかな？

俺は恋先輩への誕生日プレゼントを何にしようか考えながら家に帰った。

そしてついに土曜日、11月24日。俺は葉月家にやって来た。

「何度来てもデケエ家だな……」

俺がインターホンを押すと、メイドとして働いているサヤさんが出

てくれた。

サヤ『どちら様でしょうか?』

「あつ、今日恋さんに来るように言われてたL i e l l a ! の日宮です」

サヤ『あつ、承っております。只今出ますので少々お待ち下さい』すると屋敷の扉が開きサヤさんが門を開けて通してくれた。

サヤ「いらっしやいませ。恋様の元にご案内いたしますね?」

「お願いします」

そしてサヤさんの案内で屋敷の中を歩き、ある扉の前で止まった。中からはピアノの音がする。

サヤ「コチラです」

するとサヤさんは扉を3回ノックし、

サヤ「恋様、日宮さんがいらっしやいました」

するとピアノの音が止まり、扉が開き中から恋先輩が出てきた。

恋「渚さん、お待ちしておりました。では早速手伝っていただけますか? サヤさんは渚さんに何か飲み物をお出ししていただけますか?」

サヤ「畏まりました」

そう言つてサヤさんは下に降りていった。

「俺が力になれるかは分かりませんが頑張ります!!」フンスツ!

恋 クスツ「そう固くならないでください。じゃあ入ってください」

そして部屋に入り、恋先輩からある程度の曲の方向性の説明を聞き、恋先輩の演奏が始まる。

今度の曲は、イメージはアップテンポながらも、ときおり静かなリズムが流れる曲で、曲調のバランスを取らねば一気に崩れてしまうかもしれないと言った感じだった。

恋「こんな感じなのですがいかがでしょうか?」

「ん〜…そうですね……、強いて言うなら、アップテンポの部分をもう少し短くして落ち着いた曲調の部分を少し長くしても良い気がしますね。その変わり、その繋ぎの部分を一気に落とす感じじゃなくてだ

んだんと緩やかに落ちていく感じが良いかと……」

恋「激しい部分を削って緩やかに落ちる時間を確保するということでしょうか？」

「あつ、そうですねそんな感じですよ！」

恋「となると……」

恋先輩はフム、と考え込むと譜面にペンを走らせ何かを書き込む。

恋「じゃあもう一度弾いてみますね？」

恋先輩が再びピアノを演奏する。今度は繋ぎがスムーズに流れる様な曲調に変化。逆の静かなリズムから激しいリズムに戻るところもスムーズになった。

しばらく試行錯誤していると、サヤさんが戻ってきて紅茶を、出してくれた。俺と恋先輩は途中休みながらも話しながら曲を組み立てていく。

「静か”から”激しい”の変化はもう少しだけ激しさがあっても良いかも……」

恋「音が下がるときと上がる時の変化を変えろということですね？」

「そうですね……、俺の主観で申し訳無いですけど……」

恋「いえ、私が頼んだ事ですから……では、こんな感じではどうでしょうか？」

今度は音が”上がる”時に少し音の高低を鋭くして音を上げた。

俺には良いと思う。恋先輩は？

恋「なんか良い感じになったと思います！ 今までのLieilia!には無かった曲調ですけど決して悪い意味では無く良い意味で斬新な感じがしますね……!」

「じゃあ、力になれましたかね？」

恋「はい!! ありがとうございます!! 本日はこれで以上になります。後は後日皆さんと最終調整という形になりますね。でもベースはこれで良いと思います」

じゃあ外も暗くなってきたら帰ろうかな？

恋「あつ、渚さん1つお願いがあるのですが……作曲とは関係ないの

ですけど……その、ゲームで分からないところがあるので教えていただけませんか？」

「ああ、いいですよ？　じゃあゲーム部屋行きましょうか？」

そしてゲーム部屋に移動。恋先輩は問題のゲームを起動する。

恋「ここなんです。次のフロアへの扉が開かなくて……」

「ああ、コレは右上の大部屋にいる中ボスを1分以内に倒すと鍵が確定でドロップしますよ？」

恋「そうなんです、やってみます!!」

「じゃあ俺はそろそろ……」

恋「あつ、お見送り致しますよ？」

そして門の所まで恋先輩が見送ってくれた。

恋「今日はありがとうございますでした」

「いえ、こちらこそ楽しかったですよ？　あつ、そうだ……恋先輩コレ」

俺は、恋先輩に紙袋を渡す。

恋「？　コレは？」

「誕生日プレゼントです。恋先輩今日誕生日でしょ？」

恋「っ！　覚えててくれたんですね……」

「ええ。一応」

恋「開けても良いですか？」

「どうぞ」

恋先輩が紙袋を開けると、星型のヘアピンが入っていた。

「髪留めのリボンにしようかと思ったんですけど、恋先輩のリボンは亡くなったお母さんがくれたものだって言ってたからダメだなと思ってる。”だったらコレなら一緒に着けても変じゃ無いかな?”と思いますまして……」

恋「っ！　ありがとうございます！　渚さん、凄く嬉しいです!!　フツ、メイさんと四季さんが羨ましいです。渚さんみたいな方が小さい頃からそばにいるなんて……」

「そう言っていただけだと嬉しいです。ではこれで」

恋「今日はありがとうございます!!」

そして、恋先輩の家を出て俺は帰った。喜んでくれたし良かった

……。

その後、

┆ 恋 side ┆

フフツ、まさかプレゼントを用意してくれていたなんて……。それに、私の相談にも嫌な顔一つせず真剣に聞いてくれて……、

恋「私まで好きになってしまいそうです……／＼／＼でも、あの三人に……私が入る余地はなさそうですね……」

恋が、少しせつなさを感じさせる口調でそう呟いていたのを、渚は知らなかったのだった。

┆ 恋ちゃん Happy Birthday!! ┆

〈嵐 千砂都〉誕生日特別編：ちいちゃんの勝負

ラブライブ全国大会が近づく2月の中旬、俺たちLie!lia!は今日も授業が終わった後練習していた。

まあ俺はサポートだけど……。

千砂都「はい、今日はここまで！」

メイ「疲れたっつ！ けど……」

きな子「入ったばかりの頃に比べたら、着実に進歩してる気がするっす!!」

四季「me too!」

夏美「ですよ！」

4人が確かな成長を感じていると……

かのん「うん！ みんな確実に成長してるよ!!」

きな子「ほんとっすか!？」

恋「ええ!!」

4人とも嬉しそうな笑顔を浮かべる。ふふっ……

千砂都「あつ、渚くん少し良いかな？」

千砂都先輩が小声で渚に声をかけた。

「何ですか？」

千砂都「ちよつと来てくれる？」

渚は千砂都先輩に連れられて行くと、千砂都先輩が話始める。

千砂都「実はさ……、私コレに出るんだよね……」

千砂都先輩がチラシを見せてくる

「東京ウィンターダンスカップ」……ダンスの大会ですか？」

千砂都「うん。皆には内緒で帰ったあとに練習してたんだよね」

それはまた……、ん？

「開催日……2月25日か」

千砂都「うん。皆には練習頑張ってほしいから言わなかったんだけど……渚くんには言っておこうかなって」

「……分かりました。千砂都先輩が体調とか崩さないようにフォローしときます」

千砂都「ゴメンね？ 大会が終わったら皆には言うから」
そして千砂都先輩は屋上に戻って行った。ふむ……、

↓ L i e l l a ! S i d e ↓

そして迎えた2月25日、今日も練習のため、結ヶ丘にメンバーが集まってきた。

すみれ「千砂都和渚遅いわね？」

可可「何かあったのでシヨウか？」

メイ「ナギは今日どうしても外せない用事ができたから休むって連絡貰ったぞ？ まったく……」

四季「千砂都先輩は私に連絡くれた。今日行けないから私にダンスの練習監督頼むって……」

………これ、偶然かな？

かのん「皆お待たせ！ ってあれ？ ちいちゃんと渚くんは？」

きな子「かのん先輩も連絡貰ってないんすか？」

四季「……臭う」

メイ「臭うって……」

すると、屋上の扉が開き……

理事長「あら？ あなた達いたの？」

かのん「理事長？」

恋「はい。練習の予定だったのですが……」

理事長「嵐さん言っていないのかしら……」

夏美「というと？」

理事長は説明を始める。今日は千砂都先輩のダンスの大会があり、選手1人に1人だけ登録できるサポートメンバーとして渚くんが行ってる事。

L i e l l a ! 『ええっ!?!』

かのん「ちいちゃん……そんな事一言も……」

すみれ「なんで言わないのよあの二人は!!」

可可「不本意デスが意見が合いましたね……」

すみれ「不本意って何よ!!」

すみれ先輩と可先輩が小競り合いを始める。

メイ「四季！ 電話!!」

四季「今かけてる…『もしもし?』っ！ ナギサ！
恋「渚さん!! 何で言ってくれなかったのですか!」

『あく…バレた?』

きな子「『バレた?』じゃないっすよ!!」

電話越しにナギサは苦笑して言葉を続ける。

『悪かったな。千砂都先輩から、今は大事な時期だから言うなって言われててな。皆には気にせず練習してて欲しいって』

メイ「そんな…『渚くん誰?』千砂都先輩!」

千砂都『その声メイちゃん? アハハ……バレたか…』

かのん「ちいちゃん、何で言ってくれなかったの?」

千砂都『あたしのせいで皆の練習時間削りたく無かったし……「そ
んなの!」ごめんね? 今回は一人で挑戦してみたいんだ』

かのん「!! 『じゃあ結果でたら教えるね?』ちよつと!」

そして、電話は切れた。

メイ「つたく、あの二人は……」

恋「どうするのです?」

かのん「決まってるよ……、今日の練習は中止! 皆でちいちゃん
の応援に行こう!!」

四季「of course!」

きな子「行くっす! 場所はどこっすか?」

すみれ「東京体育館って書いてあるわね」

かのん「急ごう!!」

そして四季たちは東京体育館に向かった。

↓ 東京体育館 ↓

場所は変わり東京体育館。次々と選手の発表が終わり、この後二人
目が千砂都先輩の番だ。

「次、エントリーNo. 32番」

モブ「はい!!」

「次ですよ千砂都先輩……」

千砂都「うん……頑張る!!」

そして32番の子のパフォーマンスが終わり、

「次、エントリーNo. 33番」

千砂都「はい!!」

そして、千砂都先輩がステージ上に立ちパフォーマンスを始める準備をする。

すると、2回の観客席の扉が大きく開き、光が差し込んでくる。

千砂都「!?」

かのん「ハア、ハア……ちいちゃんは？」

可可「あっ! 今やるところみたいデスよ!!」

メイ「ギリギリだったな……」

きな子「つすね……」

千砂都「皆!？」

「あいつら……千砂都先輩!!」

渚は舞台袖から、千砂都先輩に向かってサムズアップした。

千砂都「っ! うん!!」

そして、千砂都先輩のパフォーマンスが始まる。Lieila!では見たことのない様な千砂都先輩のアクティブのダンスに、会場中が魅了されていた。

メイ「スゴイ……!」

四季「Beautiful……」

そして、千砂都先輩のダンスが終わると……割れんばかりの拍手が溢れた。

そしてしばらく時間が空き、全ての選手のダンスが終了。結果は……、

◆◆◆◆◆

千砂都「アハハ……優勝しちゃいました!」

千砂都先輩の手には、大きな優勝トロフィーが握られていた。

「おめでとございませす先輩!」

きな子「先輩凄かったつす!!」

メイ「うんうん!! 見てて鳥肌立った!!」

千砂都「皆……ゴメンね言わなくて」

かのん「ホントだよ……何で言ってくれなかったの?」

千砂都「ゴメンね? 皆には気にせず練習しててほしくて」

すみれ「私達が知ったら絶対に応援に来ると思ったわけね? 全国

大会が近いのに、そんな時間は勿体ないと……」「うん」バカねえ……」

可可「仲間が頑張ってるんデスよ? 応援に行くに決まってるデス

!!」

千砂都「ハハ……やっぱり、私は皆がいないとダメみたい。皆の姿が見えた瞬間、凄く嬉しかった!」

かのん「ちいちゃん! じゃあ、私の家に行こうか!」

恋「そうですね。せっかく千砂都さんに内緒で企画したんですし

……」

千砂都先輩は「えっ、何? どういう事?」と言ってる。分からないのか?

かのん「ちいちゃん、誕生日パーティーだよ!!」

千砂都「っ! 皆……ありがとう!!」

そして、並んで歩く皆は……笑顔に溢れていた。

| 千砂都ちゃん Happy Birthday |

〈桜小路きな子〉誕生日特別編：渚ときな子で……

渚たちが2年生になり今日は4月10日土曜日。今日はこのあときな子の誕生日パーティーがある。

だが、パーティーのことはきな子には秘密のため、皆がかのん先輩の家で用意している間、渚ときな子の2人で街に遊びに行く。待ち合わせ場所には既に渚がおり、きな子を待っていた。

「……時間は、まだあるな」

そしてしばらく待っていると、

きな子「お待たせっす〜!!」

イエロー系の色のワンピースを見を包んだきな子が走ってきた。

「いや、時間ピッタリだよ?」

きな子「本当っすか? なら良かったっす!!」

「きな子、今日の服可愛いな。似合ってる」

きな子「／／／／ もう、四季ちゃんに怒られるっすよ? だいた

いきな子と二人で遊びに行くって言うのも怪しいんすからね?」

確かに。四季に隠してやってたら大問題だな。

「分かってるよ。四季はこの事知ってるし、浮気をするつもりは無いからそこは心配しないで大丈夫だよ」

きな子「信じるっすよ? 浮気だけはダメっすからね?」

渚は「分かってる」と返すと、きな子の手を取って二人で歩き始めた。まずは前にきな子が行きたいと言っていた神保町の老舗和菓子屋に行く。

そして電車に乗って10分ほどで神保町にやって来た。

きな子「あっ! ここっすよ!!」

やってきたのは”穂むら”という和菓子屋さん。……どつかで聞いたような気が……どこだっけ?

きな子「この”ほむまん”って言うお饅頭が美味しいってこの間のTVでやってたんすよ!!」

「へえ……じゃあ入ろうか?」

そして扉を開けて中に入ると、店番をしているオレンジ掛かった長

い茶髪のお姉さんが店番をしていた。

うわ……スゲエ綺麗な人……。

？「あつ、いらつしやいませ〜!!」

「えっと……ほむまんを、きな子何個食べる?」「3個くらい欲しいっす!!」じゃあ5つお願いします」

？「は〜い! えっと、ほむまん5つね。はいどうぞ〜」

きな子「ありがとうございますっす!!」

お饅頭を受け取り、代金を精算。そして店内に併設されたイトインスペースで買った饅頭を早速食べていると扉が開き、青髪のロングの美人さんと、ベージュ色をしたトサカのような独特なヘアースタイルのこれまた美人さんの二人組が入って来た。

？「あつ、海未ちゃんことりちゃん! どうしたの?」

海未? 「どうしたのでは無いです! 今日は久しぶりに穂乃果の家で9人集まると言っていたでしょう? きつと昔のように散らかしてると思ったので穂乃果に片付けさせようかと」

穂乃果? 「えー!? 海未ちゃんヒドイよ!! 私たちもう何才だと思ってるの!?! ことりちゃんもそう思うよね!!」

ことり? 「アハハ…穂乃果ちゃん、片付けくらいキッチンとやろうね?」

穂乃果と呼ばれた店員さんはショックから崩れ落ちる。

「(穂乃果? 海未? ことり……) あっ!?!」

ここで渚は、メイから何度も教えられた何年も前の伝説のスクールアイドルグループの名前を思い出す。確かそのグループの2年生の名前は……、

渚の声に、話していた三人がこちらを見る。

海未「? あの……何か?」

きな子「渚くん? どうかしたっすか?」

「あつ、いや……スミマセン。気にしないでください」

穂乃果「そう? 大丈夫なら良いんだけど」

「はい。スミマセン……」

きな子「?」

気になりはしたがまあ良いかと食べるのを再開するきな子。

きな子「ん〜♪ 美味しいつす〜！」

そして店を後にしてその後、街をぶらつきながらきな子の気になったお店に入ってウインドウショッピングに付き合う渚。時間が経ち、丁度正午が近づいてきたのでかのん先輩の家に向かう。

きな子「ん〜♪ 楽しかったつす!! でも、かのん先輩の家に行くんすか？」

「ああ。今日のメインイベントだからな」

きな子「？」

そして神保町駅から再び電車に乗って原宿駅まで行き、徒歩で表参道までいく。そこからのん先輩の家の前へ。

(えつと……)

渚がスマホをチェックすると、準備オツケーのメッセージが。

「じゃあきな子、入れ」

きな子「？ 分かったつす」

そしてきな子が入ると、

パァンツ!! パァンツ!!

盛大にクラッカーが鳴り、L i e l l a ! の面々が一斉に声をかける。

L i e l l a ! 『きな子ちゃん、お誕生日おめでとう!!』

きな子「……………あ、ありがとうつす〜!!」

きな子は嬉しいのか涙を流し、皆の輪の中へと入っていく。

可可「さあ! きなきな誕生日パーティーを始めマシヨウ!!」

そして全員のグラスに飲み物を注ぎ乾杯をしたあと、プレゼントを渡す。

まずはかのん先輩たち3年からそれぞれ渡し、その後で渚たち2年生から渡す。

どちらのプレゼントも、きな子は喜んでくれて…パーティーをした甲斐があるって物だ。

そして皆でしばらく話していると、

メイ「ナギ、きな子とどこ行ったんだ？」

「穂むらつていう和菓子屋。μ☒sの穂乃果さんと海未さんところりさんがいた」

メイ「はあくっ?! お前ときな子ばかりズリいぞおおおおおっ!!」

メイの絶叫が響き渡る。皆がこつちを見る。

「特に話した訳でもないから……今度行ってみるか?」

メイ「行く!!」

四季「私も…行く」

千砂都「3人でまたどっか行くのかな?」

すみれ「メイのあの様子だとアイドル関連っぽいわね」

しつかりと思考パターンを読まれているメイだった。

きな子「……初めて男の子と二人で出掛けたっすけど、彼氏がいたらあんな感じなんすかねえ?／／／」

きな子にも初めての体験だったようだ。

| きな子ちゃん Happy Birthday |

〈澁谷かのん〉誕生日特別編：〜ifかのんルート〜

渚が高校を卒業してもう10年が過ぎた。今では渚は結婚し、仕事で多忙な妻に代わって専業主夫をして暮らしていた。

そして今日は5月1日。愛する妻の誕生日だ。

「よし、料理はできたっ……と」

ありあ「渚さんすみません……。お姉ちゃんの誕生日祝を手伝ってもらっちゃって……」

「いや、俺の奥さんでもあるんだから当然だよ」

そう、俺の妻というのは……

かのん母「かのんってば、高校生までは春が来るのか心配だったけど、いい人を見つけてくれてホッとしたわ。オマケにウチの喫茶店の事を考えて婿養子で入ってくれるなんて……」

「かのんにとってもこの喫茶店は大事なものだって言っていましたからね」

そう。俺の奥さんとは高校時代の先輩である、澁谷かのん先輩のことだ。

俺は四季とメイや紗夜、ライカたちに告白されていたのだが、自分の気持ちに正直に告白を断りかのん先輩と交際した。

因みに俺の今の名前は澁谷渚となっている。

そしてそこからかのん先輩は自身の夢である”世界に歌を響かせる”を叶えるためにシンガーソングライターとして活動。活躍が広まり、今ではプロのアーティストとなった。

（スクールアイドル出身のアーティストってことで話題性もあるからなあ……）

なにより、かのんの透き通るような優しい歌声に心を奪われた人は数多く、そんな話題性など無くとも人気歌手になった未来は容易に想像ができるが……。

かのん母「さてと、飾り付けと料理はできたわね。後はかのんが返ってくるのを待つだけね」

「千砂都先輩たちLieila!の皆も来たがってたんですけど予定

が入ってて無理だったみたいですね……」

ありあ「まあしょうがないよ。あれから10年近く経ってるんだもん……」

俺たちが過去を思い返していると、

カラン カラン

かのん「ただいま」

「おっ、お帰りかのん。もう準備できてるよ?」

かのん「うん、ありがとう。荷物置いてくるね?」

かのんは階段を登って自室へと戻っていく。しかしすぐに降りてくる音がしてかのんが姿を見せる。

「じゃあ、かのん……誕生日おめでとう!!」

かのん母・ありあ「おめでとー!!」

パパああんっ!!

盛大にクラツカーが鳴り、目の前に誕生日ケーキが出てくる。

かのん「うわー! 美味しそう!!」

そしてケーキを分け、飲み物をグラスに注ぐ。

ありあ「じゃあ食べよっか?」

そして家族で食事を取る澁谷家の皆。チキンや、かのんの大好物ハンバーグなど、料理は盛り沢山だった。

かのん「はくむっ! んっ!! このハンバーグ、美味しい!!」

ありあ「お姉ちゃん、それ…渚さんが作ってくれたんだよ?」

かのん「えっ、そうなの!?!」

「気に入ってもらえたなら良かった……」

渚はクスツと笑い、かのんを見る。

かのん「渚……」

あっ、因みに家でかのんは俺のことを渚と呼ぶ。俺はかのんって呼ぶしお互いに呼び捨てにしている。

かのん「ありがとっ!!」ニコッ!

かのんの満面の笑顔。はあ、癒やされる……。

そこへ、

ピロン!

かのんのスマホから通知音が鳴り、かのんがスマホをチエックする。

かのん「ん、誰だろう……あつ、皆からだ。お祝いメッセージがた
くさん」

「あつ、四季たちからも来てるね」

かのん「そうだね……あの頃は楽しかったなあ……」

「そうだな……」

すると、

かのん「あの時出会った男の子が私の旦那さんになつてるなんて思
わなかったよ……」

「俺も初対面のときはさすがに……」

ありあ「ねえ？ 因みにどっちの方から告白したの？」

かのん「えっ!? そ、それは……その、私から……」

ありあ「えっ!? お姉ちゃんからだったの!？」

かのん「うん。私が高3の時ね……実は不良に襲われたの」

その話が初耳だった二人はびっくり。かのんに問い詰める。

かのん母「襲われたって……大丈夫だったの!？」

かのん「うん、渚が駆けつけて助けてくれたの。カツコよくてね

……それで堕ちちやっただかな」

「そんな事もあったなあ……」ズズツ

話を聞きながら飲み物を飲んでいる俺。するとお母さんとありあ
ちゃんが、

かのん母「かのんを助けてくれてありがとうね……?」

ありあ「ありがとうございます!!」

「いや、別に当たり前前の事しただけですし」

かのん「いや、今思い返すと私も単純だな……」

ありあ「いや、しようがないでしょ。そんなピンチを救われたら惚
れてもおかしく無いって」

かのん母「なんで言わなかったのよ?」

かのん「……スクールアイドル辞めさせられると思ったから」

「その犯人が、かのんの厄介ファンだったんですよ……」

ありあ「なるほどね……」

かのん母「それでも言って欲しかったな……。辞める辞めないは別にしても」

かのん「お母さんの気持ち考えたらそうだよ。ゴメン」

何か空気が暗くなっちゃったな。

「とりあえず今日は誕生日祝いなんですからこういう話は止めにしてません？」

ありあ「そうだね……！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ふく……」

ちよつと疲れた渚は、店の外に出て気分をリセットしていた。すると、

かのん「渚っ！」ギョツ

「っ!! かのん?」

かのん「どうしたの?」

「ちよつと外の空気を吸に。かのんは?」

かのん「アタシはトイレから戻ったら渚がいないなと思って」

「そっか……」

二人の間に沈黙が流れる。

「かの…「ねえ?」? 何?」

かのん「プレゼントなんだけど…」

「ああ…何がいい?」

かのん「そろそろ欲しいかな? って……／／」

そう言ってお腹を擦るかのん。

「っ!!／／／ そっか。分かった…じゃあ、俺ももつとかのんを支え

られる様に頑張らないとな!!」

かのん「ありがとう……／／／」

そして、夜も更けていく中二人は一緒に夜空を見上げていた。

┆ かのんちゃん Happy Birthday!! ┆

〈若菜四季〉誕生日特別編：～ Mainルート ～

渚と四季、メイたちが結ヶ丘を卒業してから8年が過ぎた。今では渚は四季と結婚し、スポーツトレーナーとして働いており、四季はある企業の科学関係の製品開発部門のエースとして活躍している。

まあ四季の科学の知識は学生の頃から突出していたからな。

そして今日、6月17日は四季の誕生日だ。

四季はある理由から現在休職していた。渚は今日、有給を取って職場を休み、家で妻である四季の誕生日を祝っていた。因みに近くに住む友達夫婦のメイと奏も来てくれている。

メイ「四季！ 誕生日おめでとう!!」

奏「四季先輩おめでとうございます！」

四季「ありがとうございますね？」

そう。この二人は毎年誕生日を祝いに来てくれているのだ。勿論俺と四季もメイと奏の誕生日になると二人の家へと祝いに行くが……。

メイ「大切な親友の誕生日なんだから当然だろう？」

四季「……／／／」

顔が朱くなる四季。

「2人ともありがとう……、ほら、料理できたぞ？ 四季とメイはゆっくりしてろ。奏、運ぶの手伝ってくれ」

奏「あ、はい!!」

四季「もう……私もメイも予定日近くて安定期入ってるから大丈夫なのに」

メイ「な？」

そう。四季の休職の理由、それは現在四季、そしてメイのお腹には新たな生命いのちが宿っているためだ。だから俺と奏は二人して最近ソワソワしっぱなしなのだ。

両親からは「少し落ち着け」と小言を貰っている。

奏「渚先輩のところは予定日は2週間後でしたっけ？」

「ああ。奏のところは1ヶ月くらいあったよな？」

そして料理を運んできた渚と奏。四季とメイに椅子を引いてやって座らせる。

「よし、じゃあ食べるか!」

そして料理を食べ始める渚たち。メイと奏からはこれから産まれる子供用の玩具をたくさん貰った。

メイたちの所が産まれたらお返ししよ……。

そしてその日は高校時代の事や最近のお互いの事について談笑し、時間はあっという間に過ぎて夜の9時過ぎになった。

「時間経つの速いな……片付けるか」

奏「あっ、手伝いますよ」

そして男二人で洗い物を片付ける。そうしている間に、もう夜の10時近くになった。

メイ「じゃあアタシたちは帰るよ」

「そっか。今日はありがとな?」

奏「いえ、俺たちも楽しかったです」

そして、四季と一緒に二人を玄関まで見送りに来た。その時……!!

四季「ウツ!!」

突然、四季がお腹を抱えて蹲った。

「四季? 四季!! どうした!!」

四季「うっ、ううう……っ!!」

メイ「お、おい……これまさか陣痛じゃあ……」

「は!? だって予定日まではまだ2週間も……」

奏「渚先輩速く救急車!!」

「わ、分かった!!」

俺は急いで電話して救急車を呼ぶ。その間もお腹を抑えて苦しむ四季を見てたら、どうにもできない自分がもどかしかった。

すると数分後、救急車が到着した。

救急隊「失礼ですがご主人は……」

「あっ、自分です!」

救急隊「分かりました。病院まで同伴願えますか?」

「分かりました……! 財布とスマホ持ってくるんで待ってください」

そして俺は急いで2つを持ってくる。

メイ「ナギ、アタシたちが家に戸締まりしてすぐに追い掛けるからお前は先に……」

「分かった。これ家の鍵な？ 頼む!!」

そして、渚と四季を乗せた救急車は病院に向かった。

メイ「アタシたちも行くぞ奏!」

奏「俺が家の戸締まりしてくるから、メイは先に車に乗ってこのことを渚先輩の両親と四季先輩の両親に電話してくれ!」

メイ「分かった!!」

そして、奏の運転する車で二人も後を追って病院に向かった。

― 病院 ―

「……………」 トントントン

渚は落ち着きなく四季の入った分娩室の扉を座りながら見つめていた。

メイ「ナギ!!」

「メイ! 四季は分娩室に入ってる。大丈夫なのかな……………」

すると、分娩室の扉が空いて看護師さんが出てきた。

「妻は大丈夫なんですか? 予定日は2週間も先なんですよ!」

看護師「赤ちゃんの状態で予定日が前後することはよくあることなので」

「でも!!」

俺がなおも声を上げると奏が止める。

奏「渚先輩、先輩が落ち着かないと四季先輩も不安になりますよ?」

四季先輩は今、一人で頑張ってるんですから……………」

奏……………」

「そうだな……………」 悪い」

そこへ、

渚母「渚!!」

「つ!! 母さん、父さん…………お義父さんとお義母さんも…………」

四季父「渚くん…………四季は…………」

四季母「無事なの？」

「今、分娩室に入ってます……」ソワソワ

渚母「渚、難しいかもしれないけど落ち着きなさい。四季ちゃんならきつと大丈夫。きつと無事に赤ちゃんと一緒に戻ってくるわ！」

「母さん……うん」

そしてしばらく時間が経ち、最初に四季が分娩室に入ってからもうすぐ16時間が経過する。

「長すぎないか……」

渚母「大丈夫よ。初めて赤ちゃんを産む人っていうのはこのくらい掛かる物なのよ」

「そうなのか……？ でも、」

すると、

おぎやああアアアツ!!

『!!!』

分娩室の中から、赤ん坊の産声が聞こえてきた。それと同時に、部屋のランプも消える。

そして、部屋の扉が開き先生が出てきた。

「先生……妻は……!」

医者「母子ともに無事です。元気な男の子が産まれましたよ？」ニ
コッ

それを聞いた瞬間、渚は膝から崩れ落ちた。

「良かった……、良かったあ……」ボロボロ

渚の瞳から大粒の嬉し涙がボロボロと溢れる。

渚父「渚……これでお前も父親だ。しっかりな？」

「……ああっ!」

四季父「頼んだよ、渚くん……」

「ツ! ゴシゴシ はい!!」

時計を見ると、とつくの昔に夜は明け昼間になっており今は6月18日の昼14時46分。子供の誕生日は、四季の誕生日の翌日になった。

すると、台に乗せられた四季と赤ん坊が部屋から出てきた。

「四季!!」

四季「渚……頑張ったよ……私／＼／」

「ああ……、よく……頑張ったな……!!」

四季母「よく頑張ったわね……さすが私の娘だわ!」グスツ

渚は、四季の頭を撫でる。四季はくすぐったそうに見をよじる。

医者「産後の後遺症が無いかの精密検査がありますから。そろそろ……」

「ああ……、お願いします!」

四季「ナギサ……最高の誕生日プレゼントを貰っちゃったね?」

「ツ!ズビツ……ああ!!」

その日、奇しくも四季の誕生日に神様からの大きな贈り物を与えられた。

四季と、大切にこの子を育てていこうと心に誓った。

┆ 四季ちゃん Happy Birthday!! ┆

〈唐 可可〉誕生日特別編：酔いどれクウクウ

夏も始まりを迎えた今日、7月17日はクウクウ先輩の誕生日だ。今日はクウクウ先輩の家でLielia!の皆で誕生日パーティーをしていく。

かのん「クウクウちゃんお誕生日おめでとう!!」

千砂都「おめでとう!!」

奏「お誕生日おめでとうございます!!」

可可「ありがとうございますマス!!」

皆の言葉に笑顔になるクウクウ先輩。だが1人だけ黙っている人がいる。

「ほら、すみれ先輩。言わなくて良いんですか？」

すみれ「わ、分かっているわよ……」

そう言っつてすみれ先輩が前に出る。

可可「すみれ……」

すみれ「一緒に3年間スクールアイドルやれる事が決まったからには、絶対に連覇するわよ?」

その言葉に、1人を除き俺たち全員頷く。

可可「すみれにしてはなかなかの心構えデスね? 言われなくともデス!!」

そして二人は笑い合う。

ウィーン「私だけ疎外感を覚えるわ……」

まあね……。

「仕方無いだろ。お前は去年はライバルだったんだから……」

去年のラブライブで立ちはだかった強敵が今では仲間。分からないものだな。

可可「ラブライブを低レベルと言ったこと、ククは忘れてませんよ!!」

メイ「そうだ!!」

はあ、コイツらは……

「いい加減許してやれよ……去年散々叩かれて罰は充分受けただろ

？」

かのん「そうだよ。もう許してあげたら？」

可可「かのんとナギサは甘過ぎマス!!」

メイもウンウンと頷く。つたく、

「でも、入部は認めたじゃないか」

可可「確かにウィーンの心構えが少し変わったなと思ったから許しましたが言ったことが消えるわけでは無いのデス!!」

ハア……全く。

「同じグループのメンバーにそんな感情向けたままステージに立つたら、ラブライブ以前の問題になっちゃいますよ?」

四季「仲間を信頼してないグループは、どんなに個々の実力が高くても通用しない……」

メイ「づつ……、それは……」

四季の言葉に二人共反論できない様だ。

恋「これからのウィーンさんの成長を見て判断すれば良いんじゃないんですか?」

冬毬「同感ですね。いつまでも過去を引きずるのは得策とは言えません。非効率です」

メイ「分かったよ……」

可可「づうづう……」

夏美「クウクウ先輩の不満そうな顔……」

紗夜「クウクウ先輩の練習メニューだけ10倍にしても良いんですよ?」

瞬間、可可先輩の顔が青ざめ、「わ、ワカリマシタ……」と。

今度からこの手を使わせてもらおうかな?

陽菜「いや、止めてあげたほうが良いんじゃない?」

あー、心を読まれた。前に言われたけど、ホントに俺って顔に出やすいのかな?

ライカ「ええ。すごく顔に出てるわね」

うーむ……俺がどうしたものかと考えているとかのん先輩がパ
ンツと手を叩き、

かのん「はい、この話はおしまい!! パーティーの続きしよう?」
その後、皆でゲームをやったり話したり色々していた。

可可「くう、ハア〜ッ!／／／ だいたいナギサはちよつと気をつ
けなさすぎなのデス!!」

? なんか顔赤いぞ?

「酔っ払ってません?」

すみれ「ええ? お酒なんか買ってないわよ?」

すみれ先輩がクウクウ先輩の飲んでいた缶を見ると、酒とは書いて
なかった。

すみれ「やっぱりジュースよ?」

クウクウ「気分の問題レす……ヒツク／／／」

かのん「まさか気分で酔ったの!?!」

んなアホな……、するとクウクウ先輩は俺に絡んできた。

可可「ナギサはシキさんとイチャイチャしすぎなのデス!! 本来ア
イドルは恋愛禁止なのレス!」グビツ!

そしてクウクウ先輩は飲んでいた缶ジュースをグビツと行く。

可可「プハア〜!／／／ シキさんも! アイドルの自覚を持ちな
サイ!!」

四季「ウザ……、かのん先輩止めて下さい」

かのん「無理無理! こんなクウクウちゃん見たことないもん!!」

千砂都「それより四季ちゃんも言うね……」

恋「今ウザいって言いましたよね?」

すると、

可可「かのんたちもかのんたちレスよ!! なぜ止めないデスかあ
?！／／／」

酔っつかのん先輩たちの方にも絡むクウクウ先輩。

かのん「四季ちゃん、気持ちがあつたよ。ウザいね確かに……」

千砂都・恋「同意……」

すみれ「ほら、あんた少し休みなさい!!」

すみれ先輩はクウクウ先輩に落ち着くように促す。

可可「すみれえ〜!! ククの事を考えて悪者役を引き受けてくれて

感謝してマス／＼／＼ズビツ（鼻水を啜る音）すみれには感謝してもしきれませんよ！！うわああああああんっ！！」

すみれ先輩に抱きつき号泣するクウクウ先輩。すみれ先輩は困って引き剥がそうとするが満更でもないようだ。

すみれ「い、いや／＼それ程でも……／＼／＼」

「すみれ先輩、録音してますから後で渡しますね？」

すみれ「ありがとう。気が利くわね」

メイ「ナギ……」

メイに呆れられる。

そして眠ってしまったクウクウ先輩。その間にパーティーの後片付けをし、クウクウ先輩が起きた所で皆で帰った。

すみれ先輩にはしっかりと先程の録音データを渡した。

すみれ「今度お礼するわね？」

） 可可ちゃん Happy Birthday ）

〈鬼塚夏美〉誕生日特別編・オニナツツチャンネル出演

俺は今、夏美のエルチューブチャンネルの動画配信に出演していた。

夏美「オニナツツ!! アナタの心の鬼サブリュ! 鬼塚夏美ですの〜!! 今日夏美の所属するスクールアイドルグループLielia!のマネージャー、日宮渚くんにお越しいただきましたの〜!! ナギくん、自己紹介をお願いしますの〜!!」

「ひ、日宮渚です。よろしくお願いします!」

俺がカメラに向かってお辞儀をして挨拶すると、コメント欄に

『緊張してる〜?』

『緊張してるのか? 固いな〜』

『初めまして〜!』

『マネージャーさんイケメン〜!』

などのコメントが流れる。イケメンか……ちよつと嬉しいぜ!!

ここは夏美がフォローしてくれた。

夏美「ナギくん少し緊張してるみたいですよ!! では、緊張を取るためにここでゲームをしますの〜!!」

「ゲーム?」

コメント欄には、

『ゲームって何するの〜?』

とか、

『最近のオニナツツのチャンネル面白いから楽しみ!!』

などの声がたくさん。去年までは考えられなかった事らしい。

夏美「今回遊んでいくのは、”ポケットモンスターSV”ですの〜!! ナギくん、言われた通りデータの入ったSwitchは持ってきたですよ?」

「おう! 言われた通り持ってきたぞ?」

夏美「では、対戦を始めますの〜!!」

そして夏美は撮影器具を自分のスイッチに取り付け起動する。

俺も起動し、ゲームを開いて対戦ボタンを押す。

しばらく進み、相手のポケモンチームと自分のチームが表示される。

ふむ、夏美は……

オニナッツ		ナギ
キラフロル		カバルドン
ヒスイヌメルゴン		サーフゴー
テツノツツミ	vs	ハバタクカミ
ハバタクカミ		サンダー(原種)
ヘイラツシヤ		ウーラオス
クレセリア		クレセリア

渚(ん)「ちようはつ」撃つてきそうなやついない……。ならカバルドン出したいところだけど読まれてツツミ出されると嫌だしな……)

夏美(取り敢えずツツミとクレセは選出っと)

そしてバトルが始まる。夏美が初手で繰り出すポケモンは、

夏美「行くですよ! テツノツツミ!!」

テツノツツミだった。俺は……

渚「行けサンダー!!」

俺が繰り出したのはサンダーだ。

するとここで夏美のテツノツツミは道具発動。ブーストエナジーか……

さて、普通ならサンダー不利の対面。相手に100%先攻を取られて上から氷技で倒される対面だ。

夏美(ここは引いてきますね。取り敢えずフリドラ安定ですよ)

夏美はフリーズドライを選択した。

「……………」

ポケモンの行動。ここで、

夏美「っ!? 引いてこないですよ!」

サンダーは引かずに居座る。案の定サンダーにフリーズドライが直撃。大ダメージを負う。と、思われたが、

夏美（っ!?） 耐えた!? しかも半分以上HPを残して!!)

何とサンダーは耐えた。そして返しの、

「お返した!!」

サンダーの10万ボルトが炸裂。ツツミは一撃で消し飛んだ。

夏美「っ!! まさか特殊耐久特化のとつげきチヨツキ!」

「大正解!」

夏美（ま、不味いですの……ここは!!）

ここで夏美はヒスイヌメルゴンを繰り返す

2ターン目。

夏美（ここは”たてこもる”ですよ！ 防御を上げて”ボディプレス”で吹き飛ばしてやるですよ!!）

ここで夏美は”たてこもる”を選択する。

サンダーは、

「行け!」ボルトチェンジ!!」

サンダーはボルトチェンジで攻撃。ヌメルゴンを削りつつ交代する。出てきたのは、

「行けっ! サーフゴー!!」

ここで出てきたのはサーフゴー。夏美のヒスイヌメルゴンはたてこもるで防御を二段階上げる。

夏美（むむっ、ヒスイヌメルゴンが不利な相手が出てきましたの……ここはクレセリアに引きましますの!!）

3ターン目、

夏美は決断してクレセリアに引く。サーフゴーは、

”サーフゴーのトリック!!”

夏美（っ!?)

クレセリアにサーフゴーの”こだわりスカーフ”が渡ってしまふ。サーフゴーにはクレセリアの持っていた”おんみつマント”が渡る。クレセリアには相当キツイぞ?

コメント欄には

『手加減なしやんwww』

『いや、今のトリックは読めるでしょ?』

『オニナッツ負けそう』

と、コメントが来ていた。

夏美「ムムム!!」

4ターン目、

夏美は堪らずクレセリアを引つ込めてヒスイヌメルゴンを出す。

”サーフゴアのわるだくみ!!”

ここでサーフゴアは特殊攻撃力を二段階上げる。

5ターン目、

ここでサーフゴアはシャドーボールを放つ。テラスタルをしなくても半分近くのダメージが入る。

ヌメルゴンは、

”ヌメルゴンのヘビーボンバー!”

ここでヌメルゴンはヘビーボンバーを使う。鋼タイプの攻撃技は、同じ鋼タイプのサーフゴアには今ひとつ。なので四分の一程度しかHPを削られなかった。

6ターン目、

ここで、サーフゴアはテラスタルを切る。サーフゴアはゴーストテラスする。

”サーフゴアのシャドーボール!!”

テラスタルにより威力の上昇したシャドーボールで、ヒスイヌメルゴンは倒れた。

夏美（っ！ ま、不味いですの!!）

コメント欄には、

『あつ、オニナッツ敗けたな』

『お疲れ様』

『スカーフ持たされたクレセリアじゃ何もできない』

などのコメントがたくさん。もう負けムードだ。

夏美は最後の、”こだわりスカーフを持たされたクレセリア”を繰り出す。

夏美「ここはっ!!」

ここで夏美はクレセリアをフェアリーテラスする。

夏美「ムーンフォース”で倒しますの!!”

「いや、させるわけ無いじゃん」

ここで俺はサーフゴーを引っ込めてさっきのサンダーを繰り返す。

夏美「っ!!」

クレセリアのテラスタルムンフォオがサンダーに当たる。しかし余裕で耐えるサンダー。

そして次のターン、

”サンダーのでんじほう!”

夏美「はあ!?　なんでそんな技を!!”

しかも夏美の不運なことにクレセリアに直撃したでんじほう。ダメージと一緒に麻痺の状態異常を負う。

コメント欄は……

『悲惨過ぎ乙』

『容赦ないなあ……』

『でんじほうなんか普通使われない技だから奇襲としてぶっ刺さり』

『降参しろオニナッツ。勝ち目なんかもうねえよ』

夏美「うう……もう無理ですの降参ですの……」

ここで夏美は降参。渚の勝利だ。

「あざっした!」

夏美「ナギくん容赦無さすぎですの!!」

「悪い悪いwww」

夏美「うう……っ!!」

そして俺はカメラに向かって声をかけた。

「皆、今日何の日か知ってる?」

「?　何の日?」

『知らね』

『何かあったっけ?』

まあ分からないよな。

「今日はオニナッツのお誕生日です!!」

俺が言うと、

『おおマジか!!』

『おめでとう!』

『お祝いスパチャしとくわ!』

次々と投げ銭を放り込むリスナー。夏美は「ありがとうございます!」と大喜び。

夏美「実を言うと夏美の誕生日だからナギくんを呼びましたの!

夏美を救ってくれた人に、祝ってほしかったんですの!」

『おつとお? (・▽・)』

『告白?告白?』

夏美「こ、告白はしないですの。ナギくんには彼女いるので」

『失恋だあー!www』

『→失礼』

「まあ誕生日プレゼントは持ってきたけどな」

夏美「えっ?」

俺は夏美にプレゼントを渡す。

夏美「あ、ありがとうございますの／＼あけても良いのですの?」

「どうぞ」

そして夏美がプレゼントを開けると、中には夏美のイメージカラーのピンク色のヘアアイロンが入っていた。

「やっぱりこういうの方が良いかなって」

夏美「ナギくん……、ありがとうございますのーっ!!」

「おわっ?! 夏美!! 配信中!!」

夏美に押し倒される中、動画のコメント欄には

『付き合えよ馬鹿野郎』

『ナギくんさんの彼女さん激怒案件www』

など、下世話なコメント欄が多かったそうなの。

うっせえよ馬鹿野郎!!

| 夏美 Happy Birthday |

番外編・後日談

番外編：夏休みの休日

Lieila! に夏美が加入し、北海道から戻ってきた数日後、今日は練習が休みなので俺は家でダラダラしていた。

「暑いな……………」

外ではミンミンとセミが忙しく泣いている。この様子だとまだもう少し暑さは続くか……

ピンポーン

「ん?」

その時家のインターホンが鳴った。そう言えば母さんいないだっけ……………いるのは俺一人。

どうしようかと思っていたらまたチャイムが鳴った。

ハイハイ今行きますよ……………

そして玄関を開けると、

四季「ナギサ、今平気?」

「四季…メイもどうしたんだよ?」

メイ「3人でプール行かねえか?」

は? プールか……………まあ暑いし外には出たくはないけどプールに入ってしまったえば涼しいか……………仕方ないな。

「分かった。準備するから入って待っていてくれ」

そして二人を家に入れて俺は部屋に戻ってダンスの奥から海パンを引っ張り出す。後はタオルと財布とスマホと……………コレで良いか。

「お待たせ」

メイ「よし、じゃあ行こうぜ」

そして3人で近くの体育館の建物の中に併設されている屋内型の市民プールに。入場料を払ってそれぞれの更衣室に別れて着替える。

男子の着替えはやはり早いものであつという間に着替えてプールサイドで待つ。そしてしばらくして水着に着替えた二人がやってくる。

四季「お待たせ」

メイ「あ、あんまりジロジロみんなよ……／＼／＼」

かく言う俺は二人の水着姿に見惚れてました。メイは赤色のビキニタイプの水着で四季は薄緑色のチューブトップタイプの水着を着ていた。

周りの男共から「ホウ……／＼／＼」と惚ける声。このままという訳にもいかんな。

「じゃあ行くか？」

メイ「おう!!」ムギユツ

四季「行く」ムニユツ

二人が俺の両腕に抱き着く、それも胸を押し付けるように。俺の腕は二人の柔らかい幸せな感触を味わっていた。柔らかい……／＼

『チツ!!』

周囲から隠そうともしない盛大な舌打ちが聞こえてきた。まあ気持ちには分かるよ……。

そして俺達は3人でプールで遊ぶ。するとメイがウォータースライダーをしたいから一緒に来いと言うので行く。

四季「……………」

「四季、メイが終わったら一緒にやろうぜ？」

四季「っ！ うん!!」

四季の表情が僅かに明るくなる。しかしこの僅かな表情の変化でも四季の場合は物凄く喜んでいる。

かわいい奴だな……。

そしてメイとウォータースライダーを滑る。係員の指示で俺がまず座りメイが俺の足の間に座り二人一組で滑る。

うわっ！ 結構速い!!

メイ「うおおおおおおっ!!」

「おわあっ!?!」

ムニユツ

すると急カーブのときにメイの身体を抑えていた手がズレてメイ

の胸を揉んでしまった。

メイ「!?／／」

俺はすぐに手を退けたが次の瞬間スライダーが終わりプールに着水。

ヤベエ……………

メイ「……………／／」プルプル

「……………」ダラダラ

俺の額から冷や汗が滝のように流れ落ちる。殺されるかも…………。

「ナギ!!」

ビクウツ! 「は、ハイ!!」

恐怖で呼ばれた瞬間背筋がピシッと伸びる。大丈夫チビってはいない。

メイ「例えわざとじゃなくてもアタシと四季以外にやったら殺すかな?」。(言)

「は、はい……………ってか四季は何で良いんだ?」

メイ「別に良いなんて言ってるじゃない! ただあたしたち二人だったら偶発的だったら謝れば許してやらんこともないって言ってるだけだ。あたしたち以外にやったら謝っても許さないからな?」

よくわからんが変なことは言わないほうが無難だな。

「わ、分かりました…………」

メイ「よし、じゃあ次四季の番行って来い」

「はい…………」

そして四季の元へと行くと四季が駆け寄ってくる。

四季「…遅い、何してたの?」

「わ、悪い……………その……………」

四季「言い訳しないで。見えてたから分かってる」

「そ、そう…………」

四季「だからナギサが前に乗って」

「そ、そうだな。それなら安全か…………」

そして今度は四季と。俺が前に乗り後ろから四季が俺の体に密着する。

ムニユウツ!

?!?!?! 後ろから抱き着かれたせいで俺の背中に四季の大きなお胸様が押し付けられフニヤリと形を変える。

男には毒だぞ……………

そしてウオーターズライダー出発し背中の気持ちの良い感触以外は何事もなく着水。

四季「? ナギサ顔真っ赤」

「当たり前だろ……………」

そして四季とメイの元に戻るとメイは何故か不機嫌そうだった。

「め、メイどうした?」

メイ「四季の胸、気持ちよさそうで良かったな」(ジトーツ

「そう言うなってえ……………」ハア…………

四季「どうしたの?」

分かってないのか…………?

メイ「四季、猿芝居は止めろ」

は?

四季「やっぱりメイの目は誤魔化せない」

「お前っ! 分かってやってたのか!」

四季「of course」

コイツ…………小悪魔かよ。

四季「ナギサに少しお仕置きしただけ」

「ほんっと心臓に悪すぎるよ…………」

メイ「まあ、こうしてても何だしもう少し遊ぼう」

そしてメイ、四季と泳力対決を(俺は一人で50メートルを泳ぎメイと四季は25メートル交代で泳ぐ)をしたりして遊んだ。帰る頃にはすっかり涼しくなっており体育館の自販機でアイスを買って食べて3人で話しながら家に帰った。

「じゃあ練習あるからまた明日ね」

メイ「おう!」

四季「今日は楽しかった。また明日」

そして夕飯を食べて風呂までの間部屋でゴロゴロしていると四季

からLINEが来た。

四季 『ナギサってやっぱり少しエッチだよね?』

「うるせえ……………」

そう部屋で一人呟いた俺の声は誰にも聞こえていなかったとき。

「男なら仕方ないよな? 仕方ないよね?」

ー 続く ー

番外編：幼馴染の辿った道

今日は練習オフの休日。今俺とメイ、きな子と夏美、そして四季の1年生組5人は四季の家でお喋りをしていた。

これからのLieila!のことや今までの事、個人の昔の思い出について等を語っていたのだが、夏美が本棚に入ったある物に気づき、それを取り出してきた。

夏美「四季さん、これアルバムですか?」

四季「うん。小さい頃の私やナギサにメイとの写真や家族写真とか色々入ってる」

夏美「……………見ても良いのですか?」「ダメ」硬いことは…言いつ子なしですの〜っ!」バツ

四季「ああっ!!」

夏美は戻すと見せかけ思い切りアルバムを広げた。やりやがったなコイツ!!アルバムからこんにはする俺たちの小さい頃の写真。

3家族揃ってキャンプに行った時の写真、お泊まり会や誕生日パーティーなど、様々な写真が入っていた。

四季「夏美ちゃん覚えてなよ……………?／＼」プルプル

あつ、四季が顔を真っ赤にして恥ずかしがってる。

メイ「おい…あんまり見ないでくれよ」

きな子「3人ともカワイイツす〜♡」

全く……………あれ、この写真

「四季、メイ、この写真初めて俺たちがお泊まり会したときだよな?」

メイ「ああ。確か幼稚園の年長だっけ?」

「そうそう。確か3人で一緒に風呂入ったよな。しかも3人とも裸だったし。今思い出すと恥ずかしいけど」

四季「っ!! 思い出させないで恥ずかしいから!!／＼」プシュ〜

メイ「は、恥ずい／＼」カアアアツ／＼

二人して顔を真っ赤にして恥じらっている。ちよ、ちよっと加虐心がくすぐられるんだけど。イジメちゃだめ?

……………後でタコ殴りにされる未来が見えるからやめとこう。

きな子「お、男の子と一緒に風呂：／／／」ボシユ／／／
夏美「す、すごいですの……／／／」カアアアツ／／／

「いやあ、今とな…」「ナギ（ナギサ）!!」「ゴメン…」

夏美「これは良いネタになるかも…」「もし動画のネタにしたら絶交だからね夏美ちゃん!!」：四季さんそんな大声出せましたのね」

「いや夏美、気にするところそこかよ。夏美？ 絶対動画にするなよ？」

夏美「それはしろというフリ…」「夏美？」わ、分かりましたの……」ブルツ

全くコイツは……

夏美「じゃあこれ以上は身の危険を感じるのでアルバムは片付けますの」

四季「賢明な判断」

メイ「いつか覚えてろよ？」

きな子「渚くんは小さい頃から二人が直ぐ側にいてドキドキしたりしたことなかったんすか？」

ん？ 何を言ってるんだ？

「ずっとドキドキしてたよ……特に俺は高校入るまではメイのことが気になってたからな」

それを聞いて驚愕の表情を浮かべるメイ。「聞いてない!!」みたいな表情してる。

「でも、そこから今までで気持ちが変わったんだよな。それで気づいたときには四季のことが好きになってた」

メイ「ちよ、ちよつと待てよ!! アタシの事が好きだった!？」

「ああ。フラれて関係が崩れるのが恐くて伝える勇気が無かったけど」

メイ「じゃ、じゃあ…もしアタシが告白したら…」

「その時だったら間違いなくOKしてたな」

メイ「そんな……」

愕然とするメイ。俺もメイの気持ちを知ったのは林間学校の時だったからな。多分あのときには四季に天秤は傾きつつあったんだろうな。

四季「でも、ハッキリ言うけど私にはナギサもメイも気持ちバレバレだった」

きな子「あくきな子も出会って4日くらいで気づいたっす」

夏美「むしろアレで気づかないほうがどうかしてますの」

メイ・渚「?!」

なに？　じゃあバレてたの？

四季「本当、私は胸焼けしながら必死に気持ちを抑えてたっていうのに……………」

メイ「やばい、また恥ずい／＼」

メイが顔を隠して俯く。耳まで真っ赤だぞ。

きな子がメイの背を軽く撫でて落ち着かせようとするが逆に「うるせえ!!／＼」と顔まっ赤なメイから怒られるきな子。

「そういうきな子と夏美は今までに好きな人とかいかなかったのかよ？」

きな子「き、きな子は…その、小学校・中学校と少しぽっちやりしてたせいで、男子からはからかわれてたんすよね……。だから好きな人はいなかったっす」

夏美「私は…男子からも女子からも変わり者って見られてたので。なので私も”アンタたちなんかこっちから願ひ下げですの!!”と言った感じでしたの」

きな子「だから…その、幼馴染同士で奪い合って、メイちゃんは振られたのに今までとあまり変わらず関係が続いてるって凄いい絆を感じるっす」

夏美「ですの。正直なところ凄く理想的な関係だと思えますの」

メイ「まあ、選ばれなかったことはショックだったけど…だからって四季の邪魔をしようとは思わねえよ」

四季「私も。メイが選ばれてても、そりゃあ悔しいとは思うけど、メイの邪魔だけはしたくないと思う」

きな子「友情っすね〜」ニコニコ

夏美「ですの〜」ニヤニヤ

すげえムカつく笑顔……。

メイ「おい、そのムカつく笑顔やめろ」

四季「私も少しばかりイラツときた」

メイ「だな。少しばかりオシオキするか」

四季「任せて」

きな子「またまた、二人共良い子なのは分かってるんすよ？ そんな事できな……」きな子ちゃん、夏美ちゃん、Lielia！加入前のこと忘れちゃった？ そしてここは私の家「サー」

きな子と夏美の顔が青くなる。四季の発明した”強制二人三脚マシン”と”強制ランニングマシン”。二人は加入前に恐怖を味わってるからな。そしてここは四季の部屋、押し入れの中には発明品がゴロゴロある。

きな子「あつ、きな子用事思い出したつす!!」

夏美「ず、ズルいですの!! 私も……」

ガシツ!!

ガシツ!!

きな子「な、渚くん!？」

夏美「メイさん!? 離すですの〜つ!!」

四季「二人共そのまま抑えててね」

渚・メイ「「ラジャー!!」」

四季「さて、どの子を試そうか……」

四季が発明品の入った押し入れを漁る。

きな子・夏美「「いや〜つ!!」」

このあと、二人は酷い目に遭い、もうからかうのはやめておこうと固く誓ったという。

― 続く ―

番外編：四季への告白 先輩からの言葉（フォロー）

ラブライブ！東京大会でウィーンに勝利し、見事全国大会への切符を手にしたLielia！。今は祝勝会のため、かの先輩の家が経営する喫茶店に向かっていた。

するとその道中、俺にすみれ先輩が小声で声を掛けてきた。

すみれ「渚、ちよつと良い？」ゴニョゴニョ

「なんですか？」

すみれ「いや、四季とメイの事どう思ってるのかなって思ってたね。半年近く見てたけど、そろそろハッキリした方が良いんじゃない？ あの2人もアンタも、お互いに好きなんですよ？ 恋愛の意味で。傷つけるのが怖くても、アンタは選ばなきゃならないわよ？」

ああ、そう言えば言ってたなかったっけ。

「実は、東京大会が終わったら結果に関わらず答えを出すって約束してるんです。なので喫茶店に行ったら、祝勝会を始める前に少しばかり3人だけにしてくれませんか？」

すみれ「ああ、そうだったのね・・・分かったわ。しっかりと向き合って来なさいよ？」

「ハイ！ つていうか気づいてたんすね？」

すみれ「アレで気付かないほうがおかしいわよ？」

ハハ、さいですか……。するとこちらに気づいた千砂都先輩も声を掛けてきた。

千砂都「ん？ すみれちゃんと渚くんどうしたの？」

すみれ「何でもないわ。渚がこの後あの2人に対して答えを出すっただけ」

千砂都「!! そっか・・・、見てて焦れなかったからね。どっちになるやら・・・」

ニシシ、とイタズラっぽそうな顔をして笑う千砂都先輩。というか千砂都先輩も気付いてたのか。

千砂都「寧ろ気付かないほうがおかしいよ？」

「・・・心を読まないでくれます？」

千砂都「いやいや、渚くんは顔に出るから分かりやすいんだって。じゃあ、後で3人だけになれるようにちゃんとフォローしてあげるから。ちゃんと漢おとしみせて来なよ?」

「・・・ありがとうございます」

本当に、この先輩たちには感謝しかないな。つか、俺ってそんなに分かりやすいのか?

そしてメンバー同士他愛もない話をしながら20分程歩き、かのん先輩の家に到着。かのん先輩のお母さんと、妹のありあさんが料理を作ってくれており、2人で出迎えてくれた。

かのん母・ありあ「おめでとーっ!!」パパァンっ!!

2人が盛大にクラッカーを鳴らしてお祝いしてくれる。俺達は全員頭を下げて応援してくれた事への感謝と、場所を提供してくれた事のお礼を言う。

ありあ「じゃあお姉ちゃん、ジュース持ってくるね?」

かのん「うん。ありあ、ありがとね?」

恋「それでは始めますか?」恋、ちよつと・・・「すみれさん?」すみれ先輩が恋先輩に何かを耳打ちする。さっきの話だな。

恋先輩の顔が少し明るくなり「まあ!」と小声で言った。可可先輩は頭に”?”を浮かべていた。

あ、これ可可先輩だけ気づいてないパターンやな。

恋先輩はコホンと咳払い1つすると仕切り直し、

恋「では、始める前に渚さんとメイさんと四季さんはやるべき事を済ませて来てください。待ってますから。」

メイ「! ありがとうございます!!」

四季「ありがとうございます」

「ありがとうございます。では、ちよつと出てきます」

そして俺達は3人で外に出るが、俺が出る直前・・・すみれ「渚、しっかりやんなさいよ?」

千砂都「ひよつちやダメだよ!!」

恋「しっかりと返事をして来てくださいね?」

きな子「渚くんファイトっす!!」

夏美「頑張ってくるんですの!!」

!! 勿論……!!

「はい!!」

そして、俺も外に出た。しかし、

可可「5人とも何の話をしてるデスカ?」

すみれ「アンタあれで気づいてないの?」

可可先輩に、皆の呆れが籠もった視線が刺さる。

可可「な、なんデスカその目は!!」

かのん「あゝ、今日答えを出すって事だったのかな?」

千砂都「らしいよ? 東京大会が終わったら結果に関わらずって事だったみたい」

きな子「きな子たちは3人の絆を信じて見守るっす!」

夏美「ですよ!」

可可「だから何がデスカっ!?」

すみれ「しょうがないわねえ……戻ってきたらあの子達に直接聞きなさい」

く く く く く く く く く

そして10分後、告白を終えて俺たちは喫茶店に戻ってきた。俺の腕に四季が抱きついていてのを見て、俺が四季を選んだのだと悟ったかのん先輩たち。

先輩たちときな子と夏美は、アイコンタクトでこの事には触れずにメイをできるだけそつとしておいてやろうと決めたという。

そして、可可先輩に何をしていたのか聞かれた俺が正直に答えると……、

可可「スクールアイドルが恋愛なんてだめデスよっ!!」

名画”ムンクの叫び”のような表情になった可可先輩の絶叫に近い声が響き渡るが、すみれ先輩や恋先輩、千砂都先輩が宥めてくれた。可可先輩は「皆さんなんでそんなに落ち着いてるデスカ?!」と驚愕していたが、皆は”寧ろ拗れる前に決着がついてホッとしている”といった表情をしていた。

千砂都「四季ちゃん、渚くんも、ようやく念願叶って嬉しいかもし

れないけど、私達はスクールアイドル。交際してることをあまりオープンにはしないでね？ 分別ぶんべつはちやんとつけるように！」

渚・四季「分かりました!!」

千砂都「うん、良い返事!! じゃあ祝勝会を始めようか？ 全員コップを持つて？」

俺達は各自ジュースが注がれたコップを手に取る。

千砂都「乾杯！」

L i e l l a ! 『乾杯!!!』

こうして、四季と付き合うことになった俺。四季と一緒に、これからも色々なことを経験していきたいな。

番外編：ラブライブ！全国大会前夜

去年の大晦日に行われたラブライブ！東京大会でL i e l l a ! が、サニパの敗退した今最大の障壁であったウィーンを打ち破り、全国大会への切符を手にした。

そして2ヶ月後の来たる全国大会まで、四季もメイも、きな子も夏美も、先輩たちも皆必死に練習していた。

渚はそんな皆を、時には後ろから鼓舞するように、時にはメンバーのペースに合わせて共にと、メンバーに寄り添い支えていた。

かのん先輩と千砂都先輩が引っぱり渚が押す。そんな構図ができつつあるL i e l l a ! だが、かのん先輩は全国大会が終わったら留学する。

かのん先輩を笑顔で送り出すためにも、絶対に優勝するんだという意気込みを持ちながら練習の日々を過ごしていた。

そして、いよいよ明日は全国大会の本番。今日はL i e l l a ! は明日に疲れが残らぬように軽い最終調整で早めに練習を切り上げた。

四季「お疲れ様です」

メイ「お疲れ様でした!!」

「お疲れ様でした!」

かのん「うん。明日は絶対に勝とうね!!」

渚・メイ・四季「はい!!!」

きな子「3人ともお疲れっす〜!」

夏美「お疲れですの〜」

そして、これまで何度も通った帰り道を幼馴染の3人で歩く。入学式の日は、1年後にまさかこんな大舞台で俺たちが闘う事になるとは思ってたなかつたなあ……。

まあ実際に踊るのは四季たちだけど、心は1つってことで。

夕暮れの道を歩いていると、ふとメイが声を出す。

メイ「高校入る前は、まさかアタシがL i e l l a ! に入ることになるなんて思ってもみなかったなあ……」

「でも、先輩たちはお前を悪くは思いもしなかったよな。メイだって、

入ったことに後悔なんて微塵も無いだろう？」

メイ「当たり前前だ！ 大変だけど、こんな充実した日々を送れて後悔なんかあるはずが無いだろう？ それに、大切な親友2人と一緒にできるんだからさー！」

四季「メイ……………／／ 私も、メイとナギサとLieila!に入って良かった。今、スゴく楽しい……………／／」

四季……………。

「まったく……………。俺はまさかマネージャーやることになるなんて思っ
てなかったんだからな？ スクールアイドルに男が入っちゃダメだ
と思ってたのに」

メイ「……………じゃあ、ナギは嫌だったのかよ？」

メイが不機嫌そうな声色で渚に問いかける。

「いや、ビックリはしたけど……………正直嬉しかった。あのときは、コレで
俺は1人だけど2人が自分のやりたいことをできるようになるから
構わないって思ってたから……………」

四季「ナギサがいないんじゃないじゃあ、私もメイも心からスクールアイ
ドルを楽しめなかった……………」

メイ「まったく、お前も自分を犠牲にして私達のためについて考えてた
のかよ？」

「仕方ねえだろ？ お前ら二人揃って意地っ張りな上に頑固なんだか
ら……………。あの、2人して脇腹抓らないで？ 痛い……………」

メイ「ふんっ！ どうせ意地っ張りで頑固だよ!!」

四季 プイツ

2人して不機嫌になる。でも…………、

「そんな2人だから、俺は心の底では離れたくなかったんだろうな」

メイ・四季「っ！／／」

「だから言わせてくれ。マネージャーに誘って…ありがとう
!!」

メイ「な、何だよ…急に……………／／ こっちこそ、アタシをスクー
ルアイドルにさせてくれてありがとな!!」

四季「私も、ナギサとメイと一緒にスクールアイドルできて、今が

凄く幸せ……ありがとう！」

そして、話してるうちに、家に着いた。

「明日、絶対に優勝するぞ……」

メイ「ああ……！」

四季「うん!!」

「じゃあまた明日な？」

メイ「ああ、また明日！」

四季「またね」

そして、3人はそれぞれ自分の家に入った。

そして渚が部屋に荷物を置くとLINEにメッセが届いた。

「ん？ 四季？」

四季『私、今日は家に親がいないの忘れてた。心細いから隣にいてほしい』

ハア……しようがないな。

『ならウチに来いよ。母さんたちには話しく』

そうメッセを飛ばし、下の階の母さんたちに話しに行く。

「母さん、なんか四季の両親今日いないんだって。それで明日の事が頭をよぎると心細いから隣にいてほしいっていうんだけど……ウチに泊まってもらって良い？」

それを聞いた母さんは、

渚母「何言ってるの？ 男だったら彼女がそんな状況なら迷わず決

断しなさい!!」

「つてことは……？」

渚母「勿論良いわよ。四季ちゃんのことメイちゃんのこと私も私は昔から知ってるんだから。実の娘のように思ってるわ。ちゃんと四季ちゃんを支えてあげるのよ？ 他の誰でもない、アンタが彼氏なんだから」

「分かった！」

本当に、理解のある親で良かったよ……。

渚母「あつ、避妊はちゃんとするのよ？」

「んなことしねえよ?!」

前言撤回。やはりしようもない親だった。

しばらく経つと四季がやって来た。俺が玄関を開けてやると四季が入って来る。すると母さんも出てきた。

渚母「四季ちゃんいらつしやい。こんなバカ息子で良ければいくらでもこき使ってくれて良いからね?」

おい!! 息子を何だと思っただ!!

四季「ありがとうございます。でも…1つだけ。ナギサは、バカ息子なんかじゃないです……」

四季は母さんに反論する。四季! そこまで俺のことを!!

俺が感激の涙を流していると、

渚母「まあ、本当に良い子ね。知ってたけどww 自分の家だと思っただけでゆっくりしてね?」

四季「はい。ありがとうございます」

「じゃあ部屋行くか。荷物持つよ」

四季「ありがとうございます」

そして2人で俺の部屋に行き四季の荷物を置く。そして下のリビングに戻ると、四季は母さんの料理の手伝いを始めた。

四季「お義母さん、手伝います」

渚母「あら、ありがとう?」

そして2人で、夕食を作りできたので食事を摂る。腹ペコペコだよ……。

そして食事中、

「このハンバーグ四季が作ったのか? 美味いぞ」

四季「っ／＼／＼ あ、ありがとうございます」

渚母「何? 渚あなた誰が作ったやつ分かるの?」

「母さんの味と違うなって思っただけ。因みにメイの料理も食べれば分かる」

母さんが四季の方を向くと四季がコクリと頷く。

渚母「へえ?」ニヤニヤ

ニヤニヤと……殴りたいこの笑顔。

そして食事も終わり、風呂も沸いたので入り（勿論別々）部屋でベッドを背もたれに座ってるんだがさつきから四季が俺の肩にコテンと頭を乗せて腕に抱き着いている。俺はもう片方の腕で四季の頭を撫でてやる。

四季「んっ……………／＼／＼」

「四季……………／＼」

四季「ナギサ……………不安」

やれやれ……………

「四季……………」 チュッ

俺は、四季を抱きしめ、唇にキスをした。四季も目をトロんとさせて委ねている。

そして数分後……………ようやくキスを止め、

「絶対に勝つぞ……………」

四季「……………うん！」

そして二人で一緒に、お互いの温もりを確かめ合いながら就寝した。

いよいよ明日、全てが決まる!!

……………因みに次の日、渚が目覚めたら寝ぼけて四季のお胸様を鷲掴みにしており、よりによって四季はその状態で起きていたため、朝からお互いに赤面したのは皆には内緒だ。

後日談・番外編：奏と真田姉妹

今日はLielia!の練習があるため結ヶ丘にいた渚たち。練習のサポートをしていたら、渚は練習後の水分補給で使うドリンクパウダーや、その他の消耗品が切れかけていることに気づき、奏に買い出しを頼むことにした。

「奏！ 悪いんだけど備品の買い出しを頼めるか？」

奏「あつ、ハイ！ 分かりました。何を買ってくれば良いんでしょうか？」

「ちよつと待ってくれ、今メモに書く……」

そして渚はメモに必要な物を書いていく。そして紗夜と陽菜を呼ぶ。

「二人共ちよつと来てくれ！」

紗夜「？ なくに？」

紗夜と陽菜が駆け足で近づいて来たので事情を説明する。

「部活の備品の在庫が切れかけてさ……奏に買い出しを頼んだんだけど俺の経験上量が結構な量になりそうだし……。手伝ってやってくれないか？」

紗夜「ああ、そんなことなら良いよ？」

陽菜「私も大丈夫だよ！」

二人は快く了承してくれる。

「じゃあ頼むわ。コレ代金な？ 何なら互いを知るって意味でも奏とゆつくりしてきても良いからさ？」

そして渚は奏に一万円札を手渡す。

奏「さすがにそれは……」

奏は「さすがに先輩が練習してるのにそれはどうなのだろう？」と、難色の色を示しているが、「まだお互いの事何も知らないだろうからさ？」と薦めると「分かりました……」と、了承した。

紗夜「よろしくね奏くん？」

陽菜「よろしく!!」

奏「はい、紗夜先輩、陽菜先輩お願いします!!」

そして買い出しに出掛けた3人。まずはドリンクパウダーをケースで買うために大型のスポーツ店に行く。

毎日の部活でそれなりの量が使われるため、買い出しに行く頻度の効率化を図るためにもケース買いが基本なのだ。

後それ以外にもタオルなども予備としてあって損はないため買っておく。ただしこちらは精々1・2枚で充分だ。

店員「いらつしやいませ〜！」

陽菜「ここなら来たことあるよ？ 確かこっちの方！」

陽菜が店の奥の方へと入っていくのを二人が後を追う。そしてドリンクパウダーを見つけたので手に取る。そして店内を移動しタオルの袋を2枚手に取りレジへと向かう。

店員「4, 540円です」

奏「あつ、これをお願いします。ポイントカードもお願いします」
奏は渚から預かった部費の1万円札を出して会計する。奏がこの店の会員カード兼ポイントカードを持っていたため4,400円での購入まで割引され、奏は尚且つポイントが入った。

陽菜「こういうのって自分のポイントカード出して良いの？」

と、陽菜が奏に聞いたが……

奏「渚先輩から特に指示も無かったし、安く買えたんだから良いんじゃないですか？ 別に誤魔化そうなんて思ってますし……レシート見せて説明すれば。140円でも積もれば大きいでしょ？」

紗夜「それもそうだね？」

スポーツ店を出て続いて3人がやってきたのはドラッグストア。メンバーが練習中に怪我をしたときのための傷薬、絆創膏、包帯、冷却スプレー等を購入する。

今度も奏が来たことのある店だったため特に探すこともなく商品を手に取りレジへ……

店員「2, 810円です。」

奏「カードから10ポイント使用お願いします。残りは現金で」
金額から10円引かれて2,800円。残金の5,600円から出

してお釣りは2,800円。

因みにいつもの渚が行っていた時だと普通に同じ買い物でも残り2,600円近くまで飛ぶ。

因みにカードを提示したため奏にはまたポイントが入った。

そして買い物終了したため学校へと戻ろうかと言うとき、

陽菜「因みにそのポイントどうするの?」

奏「皆さんが必要になったときに使おうかなって。まあ微々たるものですけどね」

紗夜「へえ? 自分で使うのかと思った」

奏「んなことしませんよ……あくまでも部費での買い物なんですから……」

陽菜「そつかあ……ねえ? 少し飲み物飲んで行かない?」

そして陽菜が指さしたのはカフェ。

奏「今持つてるの部費しか無いんでムリですけど……」

陽菜「渚くん言ってたじゃん! お互いを知る意味でも少しゆっくりしてきたら? ってさ!! ならそのためって言えばセーフじゃない?」

奏「なんつー暴論……」

奏は渋っているが……

紗夜「良いんじゃない? ダメって言われたら学校戻ったら財布から払えばいいんだし」

奏「分かりましたよ。じゃあ30分くらい話しましょうか?」

そして3人はカフェに入りお茶する。3人がこれまでどういう道を辿ってきたのか、渚やLieila!との出会いなど話してらうちに、3人はどんどん打ち解けていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

奏「戻りました!」

「お帰り。色々話せたか?」

紗夜「うん。あつ、渚くん? ゆっくりしてきて良いって言われたからお釣りでカフェに入ったんだけどダメだった? ダメなら今払

うけど……」

「いや、良いよ？　そもそも俺が良いって言ったんだしな。で、備品の買い物はどれくらいしたんだ？」

奏「あつ、それは……」

奏はその店のポイントカードを提示して買い物したから割引があったこと、少しポイント使用して買ったから僅かに安かった事を話し、買い物では7,200円使ったことを話す。

奏「カード使ったらダメでしたか？　ダメなら次から止めますけど……」

「安くなるならそれに越したことは無いからオツケーだ。ちゃんと報告もしたしな。レシートあるか？」

奏「はい。コレです」

奏は…渚にレシートを手渡し、渚がチェックする。

「ん。間違いないな……3人ともありがとな？　じゃあ奏、仕事に戻るぞ？　二人は休んでるか？」

紗夜「いや、わたしたちもまだできるよ？」

陽菜「寧ろまだまだ!!」

「じゃあ頼むわ」

紗夜「奏くん、一緒に頑張ろうね！」

陽菜「がんばろう!!」

奏「ハイ!!」

この一日で、お互いを少し理解した3人だった。

後日談・番外編：奏とライカ

今日はLieila!の練習が休みなので、奏はボールを持って近くの公園のバスケットコートに来ていた。

奏「シュツ！」

奏の放ったボールはキレイな放物線を描いてリングに掠らずど真ん中を射抜く。

スパツ!!

奏「よしっ!! 休憩にするか……」

そして奏はコートを仕切るフェンス越しに腰掛け、タオルで汗を拭う。

奏「(今度は秋の大会で渚先輩と一緒に出ようって誘われたからな……今度は勝ちたいし!) よし!!」

そして奏は立ち上がり再びコートの中へ入ろうとする。すると、

? 「あれ、奏?」

奏「?」

奏が呼ばれた声に振り向くと、

奏「あつ、ライカ先輩!! こんにちは……」

声を掛けたのはライカだった。

ライカ「ええ、こんにちは。バスケの練習してるのかしら?」

奏「はい。また秋の大会と一緒に出ようって渚先輩に誘われましたからね。今度は勝ちたいなって思っただけ練習を……。ライカ先輩は?」

ライカ「私はトレーニングの一環としてランニングしてたのよ。今終わって公園内を少し歩いてたら奏がいたから声を掛けたの」

奏「そうだったんですね……」

しばしの間、両者に沈黙が生まれる。しかしライカが先に口を開き、

ライカ「良かったら少し練習を見てても良いかしら?」

奏は、「面白くはないと思いますけどどうぞ」と了承。言葉に甘えてライカは見学することにした。

奏「じゃあスリーポイント撃ちますね? 地点を変えて3本ずつ撃

ちます」

そして奏はまずはゴールのほぼ真横からボールを放った。

サイドからのシュートは、ボードを使えないため直接ネットに叩き込まなければならぬ。よって、よりゴールまでの距離感が大事になる。

奏「シュツ！」

奏の放ったボールはキレイな放物線を描く。高いループで放たれたボールは、ネットのほぼ真上から真ん中に落ちた。

スパツ!!

奏「次！ シュツ！」

スパツ!!

奏「ラスト！」

スパツ!!!

サイドからのシュートが3本ともほぼ同じ軌道でネットに吸い込まれた。

すると奏は、次は角度を変えて斜めの角度からシュートを放つ。斜めの場合は角度と当たる位置によってはボードに当てて入れることができる。だが、よほどうまく当たらないと無理だ。なのでこれも直接入れたほうがかえってやりやすいだろう。

奏「シュツ!!」

スパツ！

スパツ！

スパツ!!

これも3本とも立て続けに決めた奏。続いて正面から撃とうとすると、ライカが声を掛けた。

ライカ「すごく難しいはずなのに、あまりにもキレイに決まるせいで簡単に見えちゃうわね……。3球だけやらせてもらっても良いかしら？」

すると奏はライカにボールを渡し、

奏「どうぞ。まずは正面からが良いと思いますよ？」

ライカ「そうね。サイドからは無理だと思うわ」

そしてライカがボールを持ってゴール正面に立つ。

ライカ「けっこう距離を感じるわね……シュツ！」

ライカの放ったボールはゴールの横にズレ、リングに当たって外れた。

奏「距離感はいい感じじゃないですか。ただ撃ち出す角度がズレましたね」

ライカ「まっすぐ…真っ直ぐ!!」

2度目のライカの放ったボールは、今度は真っ直ぐ飛んだ。だが、今度は距離が大きすぎてボードの上部に当たり、弾かれて戻って来た。

ライカ「いや難しいわね……ありがとう。もう良いわ」

奏「じゃあ正面から撃ちますね？」 シュツ!

奏の放ったボールは3連続でゴールを射抜いた。2球目がやや力の入りが甘かったのか、リングに当たる。だが、リングの内側をグルグルと回って入った。

ライカ「それでも決めるのね……ここまでノーミスじゃない」

奏「次は反対側に行きますよ?」

奏は今度は逆側の斜めに立つ。奏の放ったボールはまたしてもゴールに直接叩き込まれた。しかし3球目、

奏「シュツ! (!! ヤバい爪の掛かりが甘い!!)」

奏の放ったボールは、リングに弾かれてコートをバウンドしながら転がって行った。

奏「あちゃー、ミスった……」

ライカ「でも合計で11連続で決めてるじゃない。私はよく知らないけど、スリーポイントシュートを11連続で決めるって、例え練習でもできる人って中々いないんじゃないの?」

そう。ライカの言う通りコレは驚くべき事だ。普通の高校生が同じことをやったら、11回も連続でシュートを決める。ましてや”スリーポイント”などほぼ不可能だ。

距離のあるシュートの基本のフリースローでさえ、10本撃って8〜9本入れば良い方だと言われるくらいなのだから。

ライカ「何でバスケの強い高校行かなかったの？」

奏「……去年の秋までは、俺もそのつもりでしたよ？ でも、ある日ライブの予選のとあるグループのライブを見て衝撃を受けたんです」

ライカ「あるグループ？ ……って、もしかして？」

奏「はい。L i e l l a ! です。地区予選で先輩たちが歌った曲を聞いて、スクールアイドルや…L i e l l a ! に興味が湧いて、それから受験勉強の合間にL i e l l a ! の曲を聞くようになって、極めつけは全国大会の映像を見て、先輩たち凄くキラキラしてて…、東京大会の映像でマネージャーをやってる男子の先輩がいることは知ってたんで、俺もその先輩と一緒にL i e l l a ! に関わってみたって…バスケよりも興味が出ちゃったんですよ」

ライカ「なるほどね…因みにL i e l l a ! では誰を推してたの？」

奏「……前に渚先輩にも言ったんですけど言わなきゃダメですか？」

ライカ「教えてくれると嬉しいかなあ？」

ライカは少し意地悪そうな笑みを浮かべる。奏を困った顔にして遊んでいた。

奏「……メイ先輩です」

ライカ「へえ、メイか…けっこう良い目の付け所じゃないの」

奏「ライカ先輩も紗夜先輩、陽菜先輩も四季先輩やメイ先輩と仲良いですもんね？ 会ってまだあまり経ってないんじゃないかなかったですっけ？」

ライカ「ええ。初めて会ったのは春休みの最初らへんだからね。それから一緒に出掛けたりして仲良くなったわね」

奏「良いなあ…」ボソツ

ライカ「ほら、そんな顔しないの！ なら今度メイを遊びに誘ってみたら良いじゃない？」

奏「そんな勇氣はありませんよお…」

ライカ「ヘタレねえ…「うぐっ！」でも、奏が頑張れば可能性はあ

ると思うわよ？　メイ、フラレたから完全フリーだから」

奏「フラレたばかりで行くのはどうかと思うんですが……」「うっさいわねえ？　恋っていうのは正攻法だけじゃあ勝てないの!!」……経験あるんですか？」

ライカ「……無いわよ!!」

ズコツ！　奏がズツこける。

無いんかい……。するとここで、

ライカ「あつ、そろそろ良い時間だから私は帰るわね？」

奏「あつ、ホントだ……俺も帰ろうかな」

そして奏は帰り支度を始め、途中までライカと一緒に帰った。

奏（今度、勇気出してメイ先輩を誘ってみようかなあ？）

― 続く ―

番外編：中学時代 科学部設立

1年と半年前……四季、メイ、渚が外苑西中学に通っていた中学3年生の頃のとある日……、

クラス担任「はい、今日の授業はここまで。皆気を付けて帰ってね？」

日直「起立！ 礼!!」

生徒「ありがとうございました!!」

そして授業の担当教師が教室から出ていく。他のクラスメイト反応も、友達と集まる者、部活へと行く者、さっさと帰る者と様々だ。

「四季、メイ、帰ろうぜ?」

メイ「おう!」

四季「うん」

俺達はいつもの3人で帰ろうとする。すると、

バスケットクラスメイト「おい日宮！ 今日もバスケット部の見学来ないのか?」

いつもの生徒が渚を誘う。

「もう3年生の後半だぞ? 今更行かねえよ……」

渚がうっとおしそうに断る。メイは……、

メイ「良いのかナギ? せっかく誘ってくれてるのに」

「良いんだよ。確かにバスケットは好きだけど、俺はメイや四季と一緒にいるほうが好きで大切なんだ!!」

メイ「っ／／／」

四季（私もなんだ……／／／ っってなんで私ドキドキしてるんだろ
う?）

このときの四季は、まだ自分の気持ちに気付いていなかった。渚の事は好きだが、それは友達としての好きだと想っていた。

「帰ろうぜ? じゃあな?」

そして3人で下校する。下校中、メイは夢中になって今気になっているスクールアイドルの話をしている。

「L i e l l i a ……?」

メイ「そう!! 去年新設された結ヶ丘高校のスクールアイドルでさ？ アタシ、代々木スクールアイドルフェスに出場した”クーカー”の時から気になってんだ!!」

四季「クーカー？」

メイ「今は5人だけどさ？ 初めは2人だったんだよ。 澁谷のんさんと唐可可さんの2人で始めたんだ!!」

「へえ、^{クウクウ}可可さんのクーとかのんさんのカーでクーカーなのかな？ 今度動画観てみよっと！」

メイ「是非!!」

メイが目をキラキラさせて言う。それを見た四季は優しく笑い、

四季 クスツ「メイは本当に音楽とスクールアイドルが大好き……。 ねえ？」

四季が俺たちに言葉をかける。 何かな？

四季「私、科学部作ろうと思ってるんだ……」

「科学部？」

四季「うん」

メイ「確かに四季にはピッタリかもな？ あれ、けど確か創部条件って……」

四季「うん。 部員3名以上で申請。 だからメンバー集めるの手伝ってくれない？」

四季が申し訳無さそうに頼んで来る。

？ 何を言ってるんだ？

「何言ってるんだ？ 探す必要無いだろ？」

渚の言葉に一瞬四季がショックを受けたような顔になる。

四季「っ……どういう、「四季を含めてここに3人いるだろ？」っ!!」

メイ「そうだな。 四季のやりたい事、残りの中学生活……付き合うぜ？」

「まったく、最初から頼めばいいのに……」

四季の瞳から薄っすら涙が溢れる。 四季は目を擦って涙を拭くと、

四季「ありがとうっ!!／／／」

とても嬉しそうに微笑んでいた。

↓ 次の日・昼休みの職員室 ↓

俺たち3人は、創部届けを持って職員室に来ていた。

四季「科学研究会、創部届けです!!」

教師「ほう、いわゆる科学部か。部長は…若菜か。たしかに若菜は理科の成績は凄まじいからな。副部長は日宮か…、活動日程は平日の放課後。活動内容は実験や発明…。部室は科学室。書類上は問題ないな…よし、良いだろう」

そして教師は創部届けに承認の判子を押す。

教師「今日から活動できるぞ? 放課後になったら職員室に科学室の鍵を取りに來い」

四季・メイ・渚「はい!!」

そして放課後……、

科学室に集まった俺達は、

四季は「それでは……今日から科学研究会の活動を始めます。部長の若菜四季です」

「副部長の日宮渚です」

メイ「なにやっつてんだよ二人共……アタシたち3人なんだから知ってんだろうが……」

四季「こういうのは雰囲気……」

「そうそう。分かってないなあメイは……」

メイ「アレ?! アタシがおかしい感じか?」

3人の間に笑いが生まれる。

「じゃあ何する?」

四季「取り敢えず薬品を使って実験するときには先生立ち会いでって言われてるから顧問のいない今はできない。だから簡単な物を作ってみようと思う」

「作るって言っても材料は……」「ある」え?」

どこからともなく色いろなパーツを取り出す四季。どこから出したんだよそんなもん……。

メイ「じゃあ作ってみるか。四季、指導よろしく!!」

四季「任せて!!」フンスッ!

そして作るものを決め、四季の指導の元作り始める俺達。俺とメイは、取り敢えず簡単なペットボトルロケットを作ることにした。

そして作っていると、

四季「こんな簡単なので良いの?」

メイ「こんな物しか作れないんだよアタシたちは…」

「四季はどんな物を作りたいんだ?」

四季「強制二人三脚マシンとか、可変倍率式眼鏡とか…」

渚・メイ「んなもん俺（アタシ）たちが作れるか!!」

四季は「そう?」と、可愛く首を傾げる。

「…」

中学生活も残り半年…。でも、これから更に楽しくなりそうな気がする!!

バレンタインデー特別編：渚のモチ期？

今日は2月14日。今日も渚は学校に登校しようとして家で朝食を食べて身支度を済ませて家を出る。

「行って来まーす」

渚母「行ってらっしゃい。今年も二人から貰えるかしらね？」ニヤニヤ

「うるせえな……四季は付き合い始めたからともかく、メイは振ったからな……無いんじゃないか？」

渚はぶつきらぼうに母にそう答えると、とっとと家を出た。

メイ「あつ、おはよナギ！」

四季「おはよう……」

「ふあくあ……、おはようさん……」

渚は大あくび1つしてからおはようと挨拶し、「学校行こうぜ？」と、さつさと歩いていく。

メイ「あつ、待てナギ……コレ」

メイが差し出したのは、

「チョコか？」

メイ「おう、まあ振られたから義理チョコになったけどな……いつも世話になってるから」

メイはふいっと顔を反らして渡してくる。横顔がほんのり紅い気が……

メイ「……、

「分かった、大事に食べせもらうよ。サンキユ」

メイは顔を赤らめ「お、おう……」とたじろぐ。やっぱりまだ振つ切りきれてないんだな。

四季「じゃあ私も。ハイこれ／＼／」

「お、おう……／＼／＼ ありがとう／＼／」

四季からもチョコを貰い、2人から貰ったチョコを鞆に入れる。

四季「頑張って作った……／＼／」

四季の顔が目に見えて紅くなる。恋人からのチョコ……、コレも大

切に食わないとな。

「じ、じゃあ行くか……／＼／＼」

そして俺たちはいつも通り3人で登校し、

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

― 結ヶ丘高校 ―

結ヶ丘に到着し、俺たちは自分の下駄箱で靴を履き替えようとしたんだが……

メイ「あれ？ ナギの下駄箱開いてね？」

四季「本当だ……」

「イジメじゃなきゃ良いけど……」ガチャ

渚が下駄箱を開けると、

ドサドサドサツ！

下駄箱の中から雪崩の様に包が崩れてきた。おいおい……、

崩れてきた包の1つを四季が拾う。

四季「……………チョコ？」

メイ「マジか……………？」

「こんな事今まで無かったんだけどなあ……………」

渚が軽く放心状態になっていると、

四季「取り敢えず拾おう？」

「そうだな……」

落ちた包みを拾い集め、渚は鞆の中に入れる。

(この調子だと恐ろしいことになりそうな気が……)

渚が憂鬱になりながら教室に行くと、

クラスメイト「あつ、日宮くんおはよう！ これ、受け取って！」

クラスメイト「ズルい！ 私のも!!」

クラスメイトの女子が押しかけてくる。何だどうした!?

四季「ナギサ……………？」

四季がドスの効いた声で渚を呼ぶ。渚はビクツ！となりながら、お仕置きを回避しようと皆に説明を求める。

「ちよつ、ちよつと待て！ 何で皆して？そんなに皆と深く関わった

ことは無かったと思うんだけど?」

クラスメイト「ああ……渚くんはこの学校の唯一の男子。そしてこの学校の期待の星、L i e l l a ! のマネージャーだからね。この学校で1番と言って良いほど知名度があるんだよ?」

クラスメイト「それにL i e l l a ! のために頑張つてるところもみんな知ってるし、人格面に問題が無いところも日常生活で知れ渡ってるし……」

クラスメイト達『『そりやあモテないわけないよね!!』』

ワオ、クラスメイト達の凄い良い笑顔。メイと四季は「初めて知った……」と愕然としていた。

そこへ、

きな子「あつ、渚くん、メイちゃん、四季ちゃんおはようっす!」

夏美「おはようですよ!!」

「お、おはよう……」

メイ「おはよう」

四季「Good morning……」

すると、

きな子「あつ、渚くんコレどうぞっす!」

夏美「夏美からどうぞですよ!」

きな子と夏美は小さい箱を取り出した。

『お前らもかよ!!』と、心のなかで叫ぶ渚。いい加減四季が纏う黒いオーラがどんどん濃く成ってきてきて怖いんだが……。

「あの、二人は知ってるよね? 俺は……」

きな子「知ってるっすよ?」友チヨコ” ってやつっす!」

夏美「夏美も同じくですよ!」

それを聞いた四季から、二人に対しての刺すようなオーラは消えた。だがまだクラスメイト達と渚に対しての威圧感が残っている。

クラスメイト「? 二人共本命じゃないんだ?」

それを聞いたきな子は、

きな子「本命? 何言ってるんすか? 渚ちゃんと四季ちゃん付き合ってるっすよ?」

きな子の放った言葉で一瞬クラスメイト達が凍り付く。そう言えばコイツラ知らなかったつけ？まあ言う必要も無いけど……。

クラスメイト「えっ？ 若菜さんと日宮くん付き合ってるの？ それって交際してるってこと？」

すると四季は渚の腕に抱きつき、

四季「そう。ナギサは私の彼氏」

堂々とそう言い放った。

するとクラスメイト達は黙りこくり、やがて…

クラスメイト「な、何だそうだったんだ？ なら私達は付き合えないね？」

クラスメイト「そうだね！ 二股なんて最低だし！」

クラスメイト「ご、ゴメンね？ ちよつと…私トイレ」

クラスメイト「わ、私も!!」

すると、Lielia!のメンバー以外のクラスメイトが全員いなくなってしまう。

メイ「あく……、きつと泣いてんだろうな……」

「俺にどうしろと!」

きな子「きな子余計なこと言っちゃったつすかね？」

「いや、言ってくれて助かったから大丈夫……」

そしてしばらくして皆が戻ってきてその日も変わらず授業を受け、
放課後……

かのん「渚くん、はいこれ！ ハッピーバレンタイン！」

四季「かのん先輩……？」

かのん「怖いよ?!」

可可「ククたち5人で作りまシタ！ 日頃の感謝の印とシテ!!」

すみれ「私も一応アンタには感謝してるしね？」

千砂都「ありがとね渚くん!!」

恋「ありがとうございます」

四季「そういうことなら……」

四季の放つ威圧感が消えた。

千砂都「大丈夫だよ四季ちゃん？」

可可「シキはナギサの事が大好きデスからね!!」

すみれ「心配しなくても私達は盗らないわよ」

恋「はい!」

かのん「誤解させちゃったならゴメンね?」

四季「いえ、私も早とちりしてしまいました……」

どうやら丸く収まった様だ。

千砂都「で、さつきから気になってたんだけど渚くんのバックからはみ出てる大量のチョコは何?」

「この量、どうしよう……」

渚の惨状?に、先輩たちは軽く引いていた。

┆ 特別編・完 ┆

後日談：勘違い

ある日、メイ、紗夜、陽菜、ライカの4人は四季から相談があると学校の科学室に呼び出されていた。

紗夜「相談ってなんだろうね？」

ライカ「さあ？ 多分渚には言えない類の事じゃないかしら？ 少しでもなかったら四季なら渚を頼りそうだし……」

メイ「確かにな……」

陽菜「あつ、噂をすれば来たみたいだよ？」

科学室の扉が開き、四季が入って来る。

四季「ゴメンね、来てくれてありがとう……」

メイ「それは良いけど……どうしたんだ？」

四季「実は……」

四季の相談とは………、

ライカ「渚が最近冷たい？」

四季「うん。話しかけても上の空っていうか、聞こえてないことが多いみたいで……」

メイ「疲れてるだけじゃないのか？」

四季「あのナギサが？」

メイ「確かにアイツはどんなに疲れてても、アタシや四季に話しかけられて聞こえてない様に黙ってる所は見たことないな……」

ライカ「私最近クラスの子に聞いたんだけど、渚が商店街のカフェでバイトしてるところを見たって子がいたわよ？ そのせいじゃあ……」

四季「っ?! そんな話聞いてない!!」

えっ？ 四季が聞いてないって何かおかしいな。今までのアイツは、必ずアタシか四季のどちらかには大事な事は言ってたし……

紗夜「そんなに気になるならこれからそのカフェに行ってみない？」

ライカ「そうね。そうすればハッキリするでしょ？」

陽菜「浮気じゃなきゃ良いけど」

四季「……………」ジワッ

陽菜の言葉に、四季の瞳に涙が滲む。

紗夜「四季!? 陽菜! 余計なこと言わない!!」

メイ「とりあえず行こうぜ?」

そして5人は、渚がバイトしていると目撃情報があったカフェへと向かった。

ライカ「ここね……………」

紗夜「あっ! 渚くん!!」

陰から隠れて覗くと、渚がバイトしていた。

四季（ナギサ……………何で言ってくれなかったの?）グスッ

メイ「あくもう! 泣くな四季!」

陽菜「あっ!! 渚くんが女の人と話してる!!」

メイ「ええっ!?!」

急いで見ると、渚が二十歳くらいの女性店員と話していた。何か凄く楽しそう……………、

陽菜「ま、まさか本当に……………?」

メイ「ナギが……………? う、ウソだろ……………?」

四季「……………」グスッ

!? 四季が涙を流した瞬間、我慢の限界とばかりに紗夜と陽菜とライカが突貫した。

紗夜「もう許さない!! 渚くんはそんな男じゃないと思ってたのに!!」

ライカ「アイツ!! あんな奴だったなんて!!」

陽菜「それはアウトだよ渚くん!!」

メイ「おい! 3人共!?!」

紗夜と陽菜とライカの3人が脇目もふらずに店の中に突っ込む。

アタシは四季に付いてやることにした。

カフェの自動ドアが開き、中に入る3人。

「いらっしやいませ……………って、ライカ!? 紗夜!? 陽菜!?!」

ライカ「渚覚悟!!」

紗夜「この浮気者!!」

陽菜「渚くん！流石にそれだけはダメだよ！」

「えっ!?… ちよつと待って何の話……みぎやあああああああつ
!!?!?」

紗夜とライカの2人に滅茶苦茶ボコボコにされた渚だった。しかし、陽菜は突っ込んで来たが言葉の説教で鉄拳は飛んで来なかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

四季「勘違い……………」

四季たちも店の中に入り、今は従業員の休憩スペースで渚の話を聞いていた。

「ああ。お前らが疑ってたあの女の人は俺の母親の友達の娘さんで、この店のオーナーでな。そのツテでバイトさせてもらってたんだよ」

陽菜「じゃあ最近四季に冷たかったっていうのは……………」

「あく…バイトするのは初めてだったんだけど、やっぱり大変でさ……神経も使うし。疲れてたんだ。四季にも謝らないと思ってたんだけどな」

メイ「じゃあ、黙ってバイトしてたのは……………」

「四季にサプライズでプレゼントでも渡そうかなと思ってて。プレゼントを買うための資金を稼いでたんだよ」

紗夜「じゃあ、あの人と話して笑ってたのは……………」

「接客業は職場で辛そうな顔見せたり無愛想な顔できないんだよ。できるだけ笑ってろって言われててな」

メイ「そういう事だったのか……………」

四季「なんだ……良かった……」グスツ

陽菜「ホントに良かったね……………」勘違いだったんだ」

「あくもうほら泣くなって……………」

渚はハンカチで四季の涙を拭く。疑ってたのが馬鹿みたいだね。さて、考えずに突撃した挙げ句暴力を振るったこの二人は……………」

紗夜・ライカ「大変申し訳ありませんでした……………」

両手をきつちり揃えて、キレイな土下座を披露していた。

「つたく……………」

「あく良いよ。四季にはサプライズの予定だったから言えなかったけど、お前らには言つとけば良かったな。そしたらこんな無駄にボコされなくて済んだのに……」

紗夜・ライカ フィツ

渚が少し皮肉を言うのと、二人は目を合わせられずに顔を背ける。渚は今、顔が二人に殴られアザだらけなのだ。

陽菜「良かったね四季ちゃん。浮気じゃなくて!!」

四季「うん……っ」

「は……そこまで勘違いさせちゃってたか。悪かったな」

四季「そんな！ ナギサは悪くないよ！」

「まあそれでも……な？ 飲み物くらいなら一杯だけ奢ってやるから、店の席に座って待ってな。ほら、二人もそろそろ立って皆と待ってろ」

ライカ「渚あああくっ!!」(号泣)

紗夜「流石渚くん！ 心が広いよ！」(ガン泣き)

「分かったから離れろ!!」

泣きついてくる2人を引き剥がし、5人を席に案内する。注文を聞いて渚が飲み物を作っていると、

その間に、渦中のオーナーが5人の座る席に来た。

オーナー「誤解は解けたのかしら？」

紗夜「はい。スミマセンでした……」

オーナー「全くもう……、四季ちゃんだっけ？」

四季「はい……」

オーナー「良い彼氏ね？ 大切にしなさいよ？」

四季「っ！ はい!!」

「お待たせしました……あれオーナー？ 何を話してたんですか？」

オーナー「何でもないわよ。それより渚くんは今日でバイトの期間は終了よね？ コレ、今渡すから今日は帰ってこの子達と一緒にいてあげなさい？」

「えっ、でも……「良いから！ 今後店を最良にしてくれたらいいから」はあ、分かりました。ではお言葉に甘えて。短期でしたがありが

とうございました！」

そして皆の会計を済ませ、帰り道を歩いていると……

「イテテ……」

渚が顔の痣を触り痛そうにする。

紗夜「あ、あの……ゴメンナサイ」

ライカ「悪かったわ……」

「ん、ああ……こっちこそ悪かったな」

紗夜「渚くんは悪くないわよ！ 知らぬ事とは言え、私達が無実の渚くんをボコボコにしちゃったのが悪いの……」

ライカ「……」

二人はもう完全に落ち込んでる。

「良いって。それより、四季のために怒ってくれてありがとな？ やっぱりお前ら良い奴だ！」

陽菜「渚くんはお人好しだねえ……」

メイ「それがナギだからな」

四季「二人共、ナギサはもう良いって言ってる」

紗夜「でも……」

んくどうしようか……あつ、

「なら二人共罰として何か今度俺の頼みを聞くって言うのでどうだ？ もちろん実現可能な範囲だけ」

ライカ「そうね。そうしてくれた方が気が楽だわ」

紗夜「うん。逆に何か償いがあった方が良い……」

「じゃ決まりで。あつ、言っとくけどエツチな事とかそんな事は絶対に要求なんかしないからな？」

紗夜「分かってるよ……」

ライカ「渚がそんなことしない人だって言うのは今回で嫌というほど思い知ったわ……」

そして6人はそれぞれ家に帰り、今日の事を思い返すのだった。

ー 渚の家 ー

渚母「渚!! そのケガどうしたの!?!」

「ちよつと階段から落ちた」

家でも、紗夜とライカをチャツカリと庇っていた。
― 続く ―

番外編：マジでBADなサイエンス

ある練習日、渚とメイが部室に来ると先輩達の荷物はあつたが誰もおらず、二人して首を傾げた。

メイ「先輩達どこ行つたんだ？」

「さあ、先に準備しようぜ？ その内来るだろ」

そして二人は練習の準備を終えたのだが、未だに誰も来ない。

おかしいな……。

メイ「今日練習だよな？」ボリボリ

「ああ……って、何食つてるんだ？」

メイ「ここにあつたお菓子。美味いぞ？」

「まあ暇だし待つてるか……」

そして渚も手を伸ばしてお菓子を食べる。

「んっ、美味い……」

そして咀嚼して飲み込む。その時、

四季「お待ちせ……って!？」

メイ「あつ、四季……きな子たちもどこ行つてたんだ？」

かのん「ちよつと理事長に呼ばれてね。？ どうしたの四季ちゃん

……?」

四季「渚、メイ……ここにあつたお菓子を食べた？」

メイ「ああ……食つたけど「それ、私の発明品」は？」

その瞬間渚とメイに嫌な予感が。その時、二人の身体が発光した。

メイ「な、なんだ!？」

「身体が熱い!!」

カツ!!

そして……眩い光に包まれ……、

すみれ「な、なによいつたい……って!？」

視線の先には、幼稚園くらいの小さな男の子と女の子がブカブカの結ヶ丘の制服を纏ってチョココンと座っていた。

夏美「な、何ですのコレは!？」

四季「私が開発した時間退行クッキー。食べた人の精神と身体を子

供に戻す。効果は30分位で切れる」

可可「なんて物を作ってるんデスカあっ!!」

四季「テヘツ」ペロツ

すると渚くん？だよね……が、ぐずりそうになった。

かのん「あくもう、よしよし……いい子だから泣かないでね？」

ロリ渚「あア……う、うう……」

夏美「か、可愛いのですの!! ボク、御名前は言えますかですの」

ロリ渚「ひのみやなぎさ……5さい……」

渚くんが瞳に涙を浮かべて上目遣いで答える。

L i e l l a ! 『はうっ!! ♡!!』

恋「カワイイですね〜! アナタはお名前は？」

ロリメイ「よねめメイ……アタシも5しやい……」

きな子「メイちゃんかわいいツス〜!!」ギョツ!

きな子がメイのことを抱きしめる。メイは軽く怯えて泣き出しそうだ。

ロリメイ「うつ、うう……」

可可「きなきな何やってるデスカ! ごめんなさいデスね〜」

すみれ「これじゃあ練習所じゃあ無いわよ……」

すると、小さい渚くんとメイちゃんはお互いにギョツと抱き合い

……コチラを警戒する。

千砂都「警戒しちやってるね……」

四季「私に任せて……。ナギサ、メイ、私の事分かる？」

ロリメイ「えっ？」

メイが私のことを見つめるすると、

ロリメイ「もしかして……しき? おとなになったの……?」

ロリ渚「ホントだ……しきちゃんだよね? なんで……?」

四季「実は二人の方が若返ったんだ……」「えっ?」「まあ今は良いや。この人たちは二人が覚えてないだけで私達の友達なんだよ? だから大丈夫」

ロリ渚「ホントに……?」

かのん「うん。ホントだよ?」

ここでようやく二人はコチラに対する警戒を緩めた。

かのん「ねえメイちゃん？　メイちゃんの好きな物って何？」

ロリメイ「えっと……あいどる……と、しきちゃんとなぎさくん!!」

ロリ渚「っ！／／／」

可可「へえ／／渚くんが好きなん德斯ね」

もう知ってるのにニヤニヤと笑うクウクウ先輩。

ロリメイ「うん！　しょうらいはしきちゃんとふたりでなぎさくんのおよめさんになるんだ!!」

四季ちゃんが吹き出す。顔真っ赤じやん……

きな子「二人が幼稚園の時こんなだったんすか？」

四季「うん。私とメイは良く今みたいな話してた」

きな子「へえ／／」ニヤニヤ

夏美「ニヤニヤ」

四季「……二人も食べてみる？」

きな子「すまねえっす!!」

夏美「御勘弁を!!」

かのん「渚くんはなにが好きなのかな？」

ロリ渚「う／／／／」

すみれ「恥ずかしがってるわね」

千砂都「渚くんは四季ちゃんと、メイちゃんの事大好きだもんね？」

ロリ渚「なんでしってるの!？」

ロリメイ「なぎさくん!!」ギョツ!

かのん「あらら、服が脱げちゃった……」

恋「もうすぐ30分経ちますよ？」

千砂都「あれ？　そういえば服は……」

すみれ「服までは変化しないから……って不味いわ!!　ほら服着て!!」

ロリ渚「うわわ!!」

ロリメイ「な、なに／／!？」

するとそのしゅんかん2人の身体が発光し、
カッ!!

煙が晴れると、

「つて!? うわわ見るな!」

きな子「渚くん速く服着るっす!!」

「見るなってー!」

渚は急いで服を着る。

メイ「ちよつと待て! 何でっ!? アタシ裸じゃねえか!!」

かのん「うわわメイちゃん!!」

すみれ「渚は見ちやダメっ!!」

すみれ先輩が急いで渚の目を隠す。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

渚・メイ「……………」

かのん「アハハ…。まさかさっきの事覚えてるなんて……………」

メイ「アタシなんて大胆な事をつ／＼」

メイの顔はもう真っ赤。茹でダコのような。どうやら先程の「四季

と2人で渚のお嫁さんになる!」と言ったのを、元に戻っても覚えて

いるようだ。

一方の渚は……………、

千砂都「渚くんは…さっき戻った時に上半身を出しちゃったからね

……………私達の前で……………」

可可「焼き付いて離れません……………筋肉凄かったデス……………」

恋「でも不可抗力ですし……………元はと言えば四季さんが原因かと」

結局渚とメイの黒歴史はLieila!の秘密になった。

四季は当然二人からお仕置きされたようだ。

渚も……………、

「もうやめてくれ……………」

今回ばかりは精神的に参ってしまったようだ。

― 続く ―

番外編：中学時代 修学旅行①

今日、外苑西中学の3年生は朝早くに学校の校門前に集まっていた。

メイ「はあく楽しみだな!!」

四季「うん」

「これから北海道に行くのか!!」

そう。今日は外苑西中の3年生は北海道に二泊三日で修学旅行に行く。今日はこれからバスで羽田空港に向かい、そこから飛行機に乗り北海道の新千歳空港に発着。そこから更にバスで小樽に向かう。皆が待っていると、時間になったので先生が学級長に指示を出す。先生「全員いるか？ 各自のクラスでいない奴がいなかチエツクしろ！」

そしてクラスの学級長が足りない生徒がいなかを確かめて先生に報告する。

「どうやら全員いた様だ。」

先生「よし、では各クラス毎ごとにバスに乗り込め！ 座席は自由で構わん」

そしてバスに乗り始める皆。渚、四季、メイの3人は3人列に渚を挟む形で座る。

そして、バスは走り出し……羽田空港へと向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

羽田空港に到着し、生徒たちが降りる。そして先生の指示の下、空港内部に入り搭乗チケットを配られる。

先生「このチケットは乗るときだけでなく降りるときも必要になる。無くすなよ!!」

そしてチケットを貰い、案内員に連れられて搭乗ゲートに向かう。案内員「それでは金属類を係の人に渡して案内に従ってゲートを

潜くぐってください!!」

そして金属探知ゲートを潜くぐっていく皆。メイと四季も無事に潜くぐり、

渚の番になる。すると、

ビーツ、ビーツ、ビーツ!!!

「えっ!?!」

金属探知ゲートが反応。渚も一瞬戸惑う。係の人が来て、何か金属を持ってないかと問われる。

金属……あっ!?!

俺はズボンにしているベルトを見せる。バックルが金属なのでこれではないかと言い、ベルトだけ外してもう一度通ると、音はならなかった。

良かった……。

それを見ていた他の生徒は、

「マジ?・ベルトで反応するの?」

「私服で来ることになってたけど俺もベルトしてんだけど…今だけ取るか」

クラスメイトのベルトをしていた男子たちが一斉にベルトを外し始める。シユールな光景だな。

そして他の生徒も無事に潜^{くぐ}り抜け、待合ロビーで飛行機を待つ。あっ、勿論皆ベルトは回収してつけ直したぞ?

そして待っている間にクラスメイトたちは雑談を始めた。

メイ「ナギ、ビックリさせるなよ……お前が一緒に来れなかったらつまらなくなるじゃんかよ……」

四季「まったたく」

「いや仕方ねえじゃん……まさかベルトに反応するなんて思わねえよ……」

二人の言葉に渚は肩をすくめて答える。だが、二人も心の中ではホツとしている様で……

四季「でも、無事に通れて良かった」

メイ「ああ。ナギと四季と楽しい旅行に行きたかったからな!!」

先生「はい静かに!!」

ここで先生が声を掛ける。どうやら飛行機が来たみたいだ。

案内員「ではこれより飛行機に乗り込みます。初めは座席表の通り

に乗ってください。まあ本人同士が了承すれば離陸前なら席を代わっても構いませんが……、離着陸の前は全員必ずシートベルトを着用すること。良いですね？」

全員が頷く。それを確認した案内員さんは「それでは……。」と、1組から順番に飛行機に乗せていく。

そして俺たち3組の番になり、通路を通って飛行機の中に入っていく。

「これが飛行機の中か……初めて乗った」

メイ「アタシもだよ……」

四季「私も……」

そして座席表の通りに座る。だが当然、渚は四季とメイと他の子が座ってる席に行き、

「悪い、席変わってくんね？」

クラスメイトの女の子に頼む。すると、

「うん。良いよ？確か日宮くんの隣って佐々木くんだったよね？」

「ああ。悪いな」

「ううん？ 大丈夫……／＼／＼」

ん？ 何かこの子顔が赤いような……、そして無事に代わってもらい四季とメイの間に座る。

「さっきの子どうしたんだ？」

メイ「ああ……アイツその佐々木の事好きなんだってさ。だから意図せず隣になれて喜んでんだよ」

「そっか……、聞いたことは黙ってこ」

四季「そうしたほうが良い」

そしてしばらくして離陸体制に入った飛行機。一気にスピードに乗って離陸した。

「うわ速っえ!!」

メイ「ナギがはしゃいでる……」

四季「知らなかった一面」

そして旋回して北海道へと飛び立った飛行機。空の海を駆け抜け、北の大地へと飛び立った。

― 飛行機内 ―

飛行機の飛行中、渚たち3人は一緒にお菓子を食べたり話したりと楽しんでいた。

メイ「でさ！ ライブで澁谷さんが……って四季？」

「ん？」

隣を見ると、四季がウトウトしていた。

四季「う、ううん…ゴメン……」ウトウト

「朝早かったから眠いんじゃないか？ 起こしてやるから寝てていいぞ？ 肩貸してやるから」

四季「ありがとう……遠慮な…く……ムニヤ」

そして四季は渚の肩にコテンと、寄りかかって数秒も経たずに眠り始めた。相当眠かったんだな。

メイ「あらら……四季のやつ寝ちまったな？」

「ああ……カワイイ寝顔」

メイ「あん？ 四季のこと好きなのか？」

「好きってどういう意味合いで？」

メイ「恋愛対象……女の子として」

「どうだろう……気になる子は既にいるからなあ……」

メイ「……そっか」

するとメイは自身の腕を渚の腕に絡めた。

「お、おいメイ?!」

メイ「……………／／」ギョッツ!!!

渚が抵抗しようとすればするほどホールドする力が強くなる。渚は観念して素直にメイの好きにさせることにした。

メイ「〜♪」

(づ)機嫌だなく……俺の気になる子っていうのが自分だなんて思っ
てないんだろなあ……) ギョッ

すると渚は、メイと四季の手を、自分の指を絡めて握った。

メイ「っ！」ニコッ

どうやらメイのお眼鏡に叶ったようだ。

四季「渚あ……ムニヤ」ギョッ

すると四季は寝ぼけながらメイと同じ様に自身の腕を渚のもう一方の腕に絡める。その副産物として、

ムニユツ!

四季の柔らかいお胸様に渚の腕がサンドされ、渚の顔は真っ赤になる。

(柔らかい……／／／／)

すると、

ギユッ!!

メイが思いつきり脇腹を抓って来た。痛いって！俺が何したって言うんだ!

「痛い！痛たた!! メイ止めろって!!」

メイ「ふん!!」プクッ

メイの顔がフグみたいに膨れる。その頬つぺた押してイタズラしてやろうか……ダメ? ダメか……。

メイ「変態……」

「悪かったな……」

そして、北海道に向けて飛行機は飛んでいくのだった。

― 続く ―

番外編：中学時代 修学旅行②

メイ「着いたーっ!!」

「騒ぐなよ恥ずかしい!!」

四季「う、うゝ…」目ゴシゴシ

飛行機内でメイから変態扱いされたり色々あったが、外苑西中3年生を乗せた飛行機は北海道の新千歳空港に到着。

四季は先程まで寝ていたので眠気を払おうと目を擦っている。

今は預けていた荷物を回収し、空港ロビーで先生と案内員さんの話が終わるのを待っている所だ。

案内員「はい、皆さん揃ってますね？ 荷物は全て受け取りましたか？」

生徒たちに確認を取ると全員が頷く。

案内員「ではこれからバスに乗って小樽に向かいます。小樽に着いたらお昼ごはんを食べてその後は各自自由に街を見て回ってください。因みに私からはガラス館でのガラス作り体験がオススメです」

ガラス作り体験。初めての体験ができるかもと生徒たちの雰囲気ワクワクしたものに変わる。中には他に見てみたいものがある人もいると思うが。

案内員「まあ、それは着いてからじっくり考えてください。では、バスに乗り込みますよ?」

そして各クラス毎にバスに乗り込む。2人2列だったので俺の隣にメイが。通路を挟んで反対側に四季が座った。

メイ「へへっ♪」

「メイ、ちょっと離して…」やだー!」はあく」

メイが渚の腕にしがみついて離さない。すると四季が、

四季「ムウ……」

なんか不機嫌になってる。

「どうした四季?」

四季「分からない……」「へ?」自分でも分からない。何をこんなイライラしてるのか……」

「そ、そうか……」

四季「……………」

「……………」 ナデナデ

すると渚は四季の頭を優しく撫でてやる。

四季「っ!? 何やって……………」

「いや、自意識過剰かもしれないけどメイに嫉妬したのかなって……
違ったかな?」

四季「……………いや、分からないけどイライラが収まった」

「そ、そうか……………」 ナデナデ

四季「く♪／＼」

メイ「むう、ナギ! アタシも構ってくれよ!!」 ユサユサ

「ちよっ!? 揺らすなって!!」

クラスメイト・大人（（ちっ、イチヤイチャしやがつて…………））

この時、クラスメイトや先生、案内員さんは見せつけられているように
うで内心穏やかじゃなかったとあとから聞いた。

案内員「では、コレより小樽に出発します!!」

そして、生徒たちを乗せたバスは小樽へと走り出した。道中、案内
員さんから北海道についての豆知識等を聞き、大いに盛り上がった。

そして数時間後、バスは小樽に到着した。バスはパーキングに止ま
り、生徒たちとせんせいが降り、昼食会場になっている建物の中に入
る。

中に入ると、豪華な海鮮物の料理の数々が並べられていた。刺し身
に焼き魚、昆布出汁を使ったお吸い物など、その用途は多岐にわたる。

生徒『おおーっ!!』

先生「それでは席につけ。全員座ったら食べ始めるぞ」

すぐに全員が席に座る。それを確認した先生はいただきますと宣
言し、それに続いて生徒たちも「いただきます」と、手を合わせる。

食べ始める皆。あまりの美味しさにみんな幸せの笑みが溢れる。
四季とメイも美味しいとパクパク食べている。

「うえ……………」

メイ「あつ、そっ、いやナギはタコとイカと貝ダメだったな……………」

四季「迂闊。忘れてた……私のところに入れて良い」

メイ「じゃあアタシは貝貰うよ」

四季「じゃあ私はイカとタコを貰う」

「悪い……………」

ハア…、カツコ付かないな……。

そして食事終了の時間になり、全員が街に出る。予定では午後3時にバスの止めてあるパーキングに戻れば良いらしい。

渚と一緒に回るのは当然……、

メイ「どこ行く?」

四季「さっき案内員さんが言ってたガラス作り体験してみたい……………」

「良いな。ガラス館行ってみるか!」

そして渚たち3人はガラス館に向かう。すると、

メイ「うわ、ほぼ皆来たのか……………」

「なあ、他にも体験できるところあるみたいだぞ? そっちに行ってみないか?」

四季「そうだね。ここ人が多いかも」

そして他のガラス作り体験が出来る施設を見つけて無事体験を終えた。作ったものは後日家に郵送されてくるそうだ。

「にしてもやっぱり四季器用だったな……………」

メイ「ああ。流石だったよ」

四季「細かい作業は得意…」フンスツ

四季が得意げに胸を張る。おお、大き…ギロツ…メイに心を読まれたので目線を逸らす。あの、メイさん、足踏まないで。痛いから……。

メイ「ふんっ!! アタシはどうせ小さいよ!!」

「誰もそんな事は言っていない?」

メイ「うゝゝつ!! そうかももしれないけどゝゝつ!!」

「あゝ…複雑な乙女心ってやつね。じゃあ俺が悪いわ」

メイ「分かっているじゃないか……………でも、アツサリ認められすぎて逆にバカにされてるように聞こえるな?」

「どうしろと?」

四季「メイ、そこまでにして。ナギサを困らせて楽しい？」
メイ「うっ、分かったよ……」

はあ、

「メイ、帰ったら一緒に出掛けような？」

メイ「っ／＼／ バカ……でも、楽しみにしてる／＼」

そして時間が近付き、パーキングに戻る渚たち。チラホラと戻ってきている生徒がすでにいた。そして続々と皆が戻って来て、先生が数を確認。全員いたので、今日の宿泊場所となる富良野の旅館に向かう。



― 富良野 ―

泊まる旅館に到着した渚たち。旅館の見た目は……

メイ「こういうのって海外とかだとモーテルっていうんだよな？」

「まさにその呼び方がピッタリな見た目だな……」

四季「同意」

そして案内員さんに連れられて宿の中に入った渚たち。男子と女子で棟が別れており、それぞれの行き来は禁止だそう。ただし風呂は男子棟の方にあるためその間だけは行っても良い。

因みに今は夕食の時間で皆食堂に来ている。

メイ「ハア〜ナギと一緒に部屋が良かったな〜……」

四季「同意」

『えっ?!』

クラスメイトや先生たちの驚いた声が響く。

「馬鹿野郎声に出てるぞ?!」

メイ「やべっ!?!」

四季「しまった」

すると先生が恐る恐る聞いてくる。

先生「あの、3人ともまさか一緒に寝たことあるの?」

「え? ああ、家同士が隣で家族ぐるみの付き合いがあるし……、良く

お互いの家に泊まりに行ってるから……」

メイ「良くあるよな？」

四季「うん。私達はコレがデフォルト」

全員あんぐりと口を開く。開いた口が塞がらないとはこのことだと思わせる様子だった。

先生「そういうのはやめたほうが……」

「つて言っても……ゾクツ!? ん?」

見るとクラスの男子共の怨念と嫉妬と憎悪に満ちた表情。あ、死ぬかも……。

「そんな怒るなよ!! 小学校の1年以降は一緒に風呂入った事もないから!!」

全員『っ!?!』

メイ「ナギ! それはダメ!! っ!?!」

男子「女子と一緒に風呂だと……?」

男子「しかも美少女と?」

「お、おい……その手に持った食器をどうするつもりだ?」

男子「こうするんじゃあああっ!!」

「危なっ!?!」

男子共が肉切りナイフやフォークを手に持って襲い掛かってきた。

先生「み、皆!?! 気持ちは分かるけどやめなさい!!」

案内員「暴動になってるじゃないの!!」

大人たちが慌てる。必死に止めようとするが、嫉妬に燃える男子たちの耳には入らない。

メイ「止めろ!!」

四季「止めて!!」

四季とメイが渚を守るように立ち塞がる。

男子「若菜さん米女さん、そこ退いて!」

四季「やだ! 退かない!!」

先生「ストップ!!」

ここで先生がチャンスとばかりにストップを掛ける。助かった……。

先生「あなた達何やってるの!? 犯罪者になりたい訳!？」

男子達『うっ……』

先生「日宮くんも変な事言わないの!!」

「す、スミマセンでした。つい……」

その後、渚たち3人と他の生徒たちは別々に夕飯を食べて、渚は一人部屋になったという。

ー 続く ー

番外編：中学時代 修学旅行③

渚の言葉が発端となったクラスの男子の嫉妬騒動の後、渚たち3人は別々に夕飯を食べることになってしまい、夕食後に渚は先生に一人部屋にされてしまった。

理由としては他の男子と一緒にだときっきのことから本気で命が危ないかららしい。

同感……………。

「はあく風呂の時間かあ……………どうすつかなあ……………」

渚は風呂に入りに行こうとしているのだが、クラスメイトに溺死させられかねないと警戒していた。

すると、

ガチャ

先生「日宮く、居るか？」

扉が開き、先生が入って来た。

「あつ、先生。何すか？」

先生「日宮、お前は風呂の時間皆とはずらすぞ？ 教師の入浴時間

になったら行く様に」

「あつ、分かりました」

そして出ていく先生。だが、

「つてことはそれまでヒマだなく……………」

どうやって時間を潰すか考えていると、少し喉が渴いて来たことに気づき、財布を持ってロビーの自販機に向かった。

(えっと、アクエリは…つと) ピッ

ガコンツ

飲み物を買って部屋に戻ろうとすると…………、

チョンチョン

(ん?)

誰かから後ろから肩をつつかれ振り返る渚。すると、
ギユツ!!

振り返りざまに、突然抱きつかれた。誰……………ん?

「っ?! メイ……?」

メイ「へへッ……ビツクリしたか?」

「そりゃあいきなり抱きつかれたら驚くって……」

四季「やつほ」

「あつ、四季……」

メイと四季は、風呂上がりなのか髪が湿っており、こわくてき 凄いいろか 色香を放っていた。

スゲエドキドキする………

四季「渚はお風呂まだ?」

「ああ……教師の時間になったら入れってさ」

メイ「そつか………」

因みにメイと四季は今浴衣姿。その下はすぐに下着を来ている状態でメイに抱きつかれている。すると、見えるんだよ……隙間からメイの胸の谷間が……

メイ「ん? ……変態……」

「抱き着いといてそれはないでしょ!」

四季「……ナギサ?」

ん? 四季の方に顔を向けると、

四季「チラッ」

四季は浴衣の足元をずらして太腿を見せてきた。こんにちはする四季の太腿。さつきも言った通り二人は浴衣の下はすぐに下着の状態。

よつて、太腿と一緒に微かに四季の下着も一緒に見えてしまう。

するとどうなるか……、

「ブツ!!」 ブシヤアアッ!!

渚は盛大に鼻血を吹き出して後ろに吹っ飛ぶ。出血多量を心配する勢いで鼻血の流出が止まらない。

メイ「な、ナギ大丈夫か!」

「な、なんのこれしき……ちゃんと輸血パック持ってきてるから……」

メイ「何で輸血パックなんか持つてるんだ?!」

メイの突っ込みが炸裂する。四季はというとイタズラが成功した

子供みたいに笑う。

四季「アハハ…ナギサ興奮しすぎ」

「お前なあ……………」でも、安心した」え？」

四季「私でも興奮してくれるんだ」って」

ハア？

「なに言ってるんだよ、当たり前だろ？　メイも四季も、凄え可愛いんだからさあ……………」

メイ・四季「「っ!?!／／／／」」

メイ「あ、ありがとう…………／／／／（そつかあ…ナギからしたらアタシ可愛いのかあ／／／／）」

四季（私が…カワイイ／／／／）テレテレ

二人揃って顔を真っ赤にさせている。ん？　俺何か変な事言ったかな？

「どうした？　「あつ、日宮、若菜、米女！　お前ら何やってるんだ!!」先生…………」

先生「日宮、お前何をやって…………飲み物を買いに来たのか？」

「あつ、ハイ」

先生「二人は風呂上がりで部屋に戻ろうとしたら日宮がいたから話しかけたって所か？」

四季「先生ひよつとしてエスパー？」

先生「手に持つてるものから状況判断しただけだ。速く部屋に戻れ？　お前らが一緒にいるところをクラスの連中が見たらまた騒ぎになる」

「はい…………」

そして俺たち3人は部屋に戻り、渚は教師の入浴時間に風呂に入り、その日は就寝した。

1 2日目 1

今日はこれから富良野のラベンダー園に行くことになっている。ただ、話によると「地元の中学も校外学習で来ているから揉め事だけは起こさない様に！」と、注意があった。

生徒たちはもう既に朝ご飯は食べており、部屋に戻って自分の荷物を持ってバスに乗り、全員が揃った所で富良野のラベンダー園に向かつて出発した。

渚と四季とメイはまた隣に座り、3人で話していた。

四季「ナギサ、昨日は災難だったね？」

「……………おう」

楽しい筈の修学旅行が…………。

メイ「まったく…あつ、もう着くみたいだぞ？」

「速いな？」

メイ「さつき道の脇に看板があった。後300メートルって」

そして富良野のラベンダー園に到着。バスから降りたあと、先生たちから話を聞き、いよいよ見て回る事になった。

メイ「うわ〜凄えな…………」

四季「うん。香りが良い…………」

「だなあ…………ん？」

渚が見た方向には、座り込んだお婆さんと地元の中学生らしい女の子がいた。

女の子「お婆あちゃん、大丈夫ですか？」

お婆あちゃん「ああ、ありがとね？ あつ！」

お婆さんは立とうとしたが足を捻ってしまったのか転んでしまった。

お婆あちゃん「「お婆あちゃん!」「済まないねえ…………。歳かねえ…、

悪いけどあそこの管理室まで頼めるかい？」

女の子「分かったつす！ つ!? お、重いつす…「大丈夫か？」？」

渚は女の子からお婆さんを剥がして自分が背負う。

「管理室に連れていけば良いんですね？」

お婆あちゃん「え？ あ、ああ…………」

四季「ナギサ？ 何を…………」

女の子「えつ？ あの…………」

「四季、悪いけどお婆あさんの荷物を持ってきてくれるか？」

四季「分かった」

おばあちゃん「あつ、ありがとうね…」

四季「いいえ、これくらい」

メイ「なあ？」

女の子「はっ、はい!!」

メイ「管理室つてどこだ？」

女の子「あそこに見える建物っす!」

「じゃあ行くぞ」

そしておばあさんを連れて管理室まで向かった渚と地元の女の子。

おばあさんから別れ際に何度もお礼を言われ、女の子と分かれる前、

女の子「助かりました…いざおんぶしたら重くて……」

「見てすぐに分かったよ。来てよかったな」

女の子「本当にありがとうございました! 皆さんはどこから来たんすか?」

「東京。修学旅行で」

女の子「東京!? 都会っすね……」

四季「ナギサ、もう時間」

すると、女の子と同じ制服を来た子がこの娘を呼ぶ。

女の子「きな子ちゃん! 集合だつて!!」あつ、分かったっす!

「じゃあね」

女の子「さよならっす!!」

こうして、後に仲間になる4人は別れたのだった。

女の子「親切な人たちだつたっすね……。都会の人は冷たいって聞いてたっすけど……。やっぱいろいろな人がいるんすね! きな子の受験する高校、東京も考えてみるっすかね?」

― 続く ―

番外編：中学時代 修学旅行④

修学旅行の2日目、ラベンダー園を後にした俺たち外苑西中3年生はバスに揺られながら次の目的地、函館に向かった。個人個人で函館の街を見て回るようになっており、渚と四季はメイに頼まれてあるお店に行くことになっていた。

そのお店とは……、

四季「確かメイが行きたいお店って”茶房菊泉”だっけ？」

メイ「そう!! 今も語られる数々のレジェンドスクールアイドル。その中の一つ、”Aquours”の最強のライバルとして知られる、”Saint Snow”の鹿角姉妹の家がやってるんだ!! アタシは生Saint Snowに会いたい!!」

ふむ。本当にメイはスクールアイドルが好きだな……まあ俺はどうしても行きたい所とかは無いからオツケーだし。

「良いぞ? 四季はどうだ?」

四季「私も大丈夫」

メイ「サンキュ!! この日のために色紙を買つといてよかったあ!!」

おお……用意周到だな。これ、修学旅行が北海道になった時から狙ってたんじゃないか?

そして、バスは函館の五稜郭の近くにあるパーキングに到着した。



先生「それでは函館の街を各自で見回れ。昼飯は飲食店で食べて構わん。レストランでも寿司屋でもラーメン屋でも好きにしろ。あつ、財布とは相談しろよ? 明日の札幌観光の昼食も残ってるんだからな? では、解散!!」

そして先生の一声でゾロゾロと散らばっていく同級生たち。渚と四季とメイも3人で行くこうとすると、

先生「あつ、お前らちよつと待て。お前らは私が引率する」

メイ「は？ 何で？」

先生「昨日の夜の騒ぎを忘れたのか……」

あく……ご苦労さまです。

渚は悟った様な顔をしていたがメイと四季は内心……、

四季・メイ（チツ、邪魔……）

先生「ん？ 何か背筋が……」

メイ「気のせいでしょ？」

先生「ん？ そうか……」

四季「そうですよ」ニコニコ

先生「お、おう……（何か笑顔が黒い気が……）」

そしてオマケの先生……「オマケってなんだ!!」と、共にメイの案内で茶房菊泉を目指す俺たち。

というか先生まで地の文詠まないでくれます？ 女子と同じであ

なたもエスパ―ですか？ あなた男性ですよね？

そして歩く事約10分。茶房菊泉に到着した。

メイ「ここだ!!」

先生「ん？ なんかあるのかこの店？」

「まあ、そうですね。メイにとってはとても大事なことが」

メイ「よ、よし……行くぞ!! スミマセ〜ン」ガラッ!

店の扉を開けて中に入る俺たち。するとすぐに店員さんが来てくれた。

因みに来てくれた店員さんは濃い紫色の髪をサイドテールに纏めたとても綺麗な方だった。

美しい……／／／

渚までそう思ってしまう程の美貌を持っていた。

？「4名様でしょうか？」

メイ「は、はい!! あ、あの……アナタはもしかして鹿角聖良さんでしようか!」

？「えっ？ はい。そうですけど……どこかで会ったことありますか？」

メイ「いえ、私たち北海道に修学旅行に来てるんですけど、Saint Snowのお二人に会いたくて!!」

聖良「ああ……かなり前の事なのに良く知ってましたね。こんにちは。姉の鹿角聖良です」

メイ「よ、宜しければコチラにサインを頂けないでしょうか?!!」
メイが色紙とペンを差し出す。すると聖良さんは笑顔でサインを書いてくれた。メイに名前を聞いて”米女メイさんへ”と入れてもらってメイのテンションはMAXだ。

メイ「あ、ありがとうございます!!」

聖良「いいえ、こちらこそありがとうございます」姉様? どうしたの?」あつ、理亞、丁度いいところに」

理亞「何?」

聖良「この子たち修学旅行で来てるらしいんだけどスクールアイドルやってた頃の私達を見てファンなんだって。良ければサインしてあげなさい」

メイ「!?!」

メイの顔が物凄く赤く染まる。幸せの絶頂だろうなあ……。

理亞「へえ? 私達を見てくれてるんだ。もちろんオツケー。色紙ある? あつたら貸して」

メイ「は、はいっ!!」

メイは慌てて色紙を渡す。

理亞「名前は?」よ、米女メイです!!」米女……メイと……:はいっ!」

メイ「あ、ありがとうございます!! 大切にします!!」

理亞「もちろん。あく久しぶりにルビィに電話でもしようかな……」

メイ「っ!?! (ルビィって……もしかしてAqoursの黒澤ルビィさん!?)」

聖良「では、立ち話も長くさせてしまいましたし、席にご案内しますね?」

メイ「あつ! スミマセンでした!! お願いします!!」

そして席に通された渚たちと先生。クリームぜんざいやあんみつ等を注文し舌鼓をうった。いや、美味しいな!!

そしてメイはまだ居たそうだったが、お勘定をお願いしそろそろお暇にする。別れ際に、

聖良「またいつでも来てくださいね!!」

聖良さんの笑顔。先生は……

先生「……彼氏いるんだろうか？」ボソツ

と言っていたのを渚たちは聞き逃さなかった。

((アンタじゃムリだよ……))

と、渚たちは内心思っていた。

そしてその後は普通に市街地を散策し、途中ワックでハンバーガーを食べた。先生からは「ハンバーガーって……」と言われたが無視する。そして良い時間になったのでパーキングに戻った。

時刻は午後4時。俺たちを乗せたバスは札幌に向かう。今日は夕食をサッポロビール園で食べることになっている。因みにメニューはジンギスカンらしい。

あつ、もちろんビールなんか出ないし飲まないぞ？俺たちは未成年だし先生たちも職務中だし。

そしてバスに揺られる事2時間。サッポロビール園に到着した。

全生徒が席に座り、先生の号令で“いただきます!”。ラム肉を焼いて白飯とともに食べ始める。

「美味え!! おかわり!!」

渚は肉と野菜と一緒にご飯をバクバクと食い始める。もうご飯はおかわり3杯目だ。

四季「ナギサ……ちよつと食べ過ぎ」

「いやだって美味えし!!」

メイ「美味しいのは分かるけど食べ過ぎだって。後で吐くなよ?」

「へーきへーき!!」

そしてガツガツ食い続ける渚。8時になり、食事の時間は終了。バ

スに乗ってホテルに向かう。そのバスの中で……

「ウツプ……、喰い過ぎた……」

メイ「だから言っただろ？」

四季「渚はこういうところ来ると興奮してアドレナリンのせいで感覚が麻痺するんだから気をつけないと……」

ぐうの音も出ない。迷惑かけてスンマセン……。

そしてホテルに到着し、各生徒は自身の部屋へと入っていった。

(うっぶ……、まだ寝ないけどどうすっつかない……)

ー 続く ー

番外編：中学時代 修学旅行⑤

修学旅行の2日目の夜、現在札幌にいる外苑西中3年生は夕食を食べた後ホテルに移動し、今はもう各自の部屋の中でゆっくりしていた。

ただ、渚はというと……、

「ウツプ…、マジで喰い過ぎた……。吐きそう……」

先程、ビール園で夕食として食べたジンギスカンを食べ過ぎてしまい、気持ち悪さと戦っていた。

（メイと四季の忠告をちゃんと聞いておくんだった……）

後悔先に立たずというが、今更後悔していると……

ピロン♪

「ん？」

渚のスマホに着信が。画面を開くと、

（えつと……LINE。差出人は……メイか）

~~~~~

差出人：メイ

宛先：ナギ

件名：遊びに行つていいか？

本文：今から遊びに行くから部屋の鍵を開けておいてくれ。

~~~~~

と、書かれていた。

（あゝ、気は紛れるか……）

そして渚は扉の元へとヨロヨロと歩いて行き鍵を開ける。するとものの数秒後、

ガチャッ！

メイ「ナギ……大丈夫か？」

四季「大丈夫？」

「メイ、四季……何とか………………。ウツ…」

すると二人はため息を付き、

四季「嘘つかないでよ……………すごい顔してるよ?」

メイ「ああ。青い顔してるぞ?」

「マジ? そんな酷い顔してる……………」

二人がコクリと頷く渚は「マジか……………」と呟くと、ベッドの方へとフラフラと覚束ない足取りで歩く。

メイ「ああもう無茶すんなって……………」ガッ

四季「少しは頼って欲しい」ガシッ

渚は二人に方を支えられながら歩き、ベッドにダイブする。

「悪い……………」

四季「良いって……………渚、ちよつと頭を上げるよ?」

「へ? うん……………」

すると四季がやったのは男の夢、女の子の膝枕。渚は気持ち悪さを少し忘れて顔を真っ赤にする。

「し、四季!」

四季「よしよし……………」

動揺する渚の頭を優しく撫でる四季。は、恥ずかしい……………。

四季「子供の頃とか私が泣くとお母さんがこうしてくれたら落ち着いてたらしいから。どう?」

「い、いや……………あの頃とはもう色々成長してるし逆に落ち着かな……………ハ
フウ」

メイ「いや思いつきり落ち着いてるじゃねえか変態!」

「い、いやそんな事は……………ハフウ……………」

四季「ナギサ、カワイイ……………」

メイ「は!?! アタシは少し引いたぞ!」

「四季さん? 男にカワイイは褒め言葉じゃ無いからね……………? メイも引いたの……………」

男なのにカワイイって言われてオマケに幼馴染にも引かれて渚のライフは限りなく0に近くなってしまった。
すると、

四季「この程度で引くなんて、メイの幼馴染への愛が足りないんじゃないの？」

”愛が足りない” その言葉は、渚のことが大好きなメイの闘志に火を着けた。

メイ「はあ!! 愛が足りないだ?!? なら私もやってやる!!」

するとメイは渚を四季からぶん取ると、自分の膝に渚の頭を乗せて優しく撫でた。

メイ「はあ／＼／ だ、大丈夫か？」

「なんか気持ち悪さが吹き飛んだよ……／＼／」

メイ「そ、そうか……なら良かったな」スクツ

するとメイは膝枕を解除して立ち上がり、横になる渚の上に四つん這いになって覆いかぶさる。

「っ?!? め、メイさん?? 何して……」

メイ「ナギ……／＼／ ガシツ ムニユツ

「っ?!?／＼／／」

するとメイは渚の手を取り、自分の胸に押し付けた。柔らかい……。メイの方が大きさは小さいけど……弾力が……／＼／／

メイ「なんだよ……小さくて満足出来ないのか……?」

「い、いや……そんな事は、無いです／＼／」

渚はもう頭に血が登って何が何やら分からなくなっている。

メイ「私だって……お前に愛はあるんだから……?」

あ、四季の言葉に対抗してるのか。なら、

「メイ!!」ガシツ!!

渚は覆いかぶさるメイの腰回りに腕を回して引き寄せて抱きしめた。

メイ「わっ?!?」

「メイ、メイと四季、二人共俺の大切な友達だし……それはいつまで経っても変わらないよ? 二人から伝わってくるものに不満を感じたことなんか一切無いしな……?」

メイ「あっ……／＼／ ナギ……」

四季「……良かったねメイ?」

メイ「四季が焚き付けたんだろ？」

「四季も」ギョツ

四季「っ!!」

渚は、四季とメイをギョツと抱きしめる。二人共顔を赤くしてされるがままになっている。渚に身を委ねていると言うべきか。すると、

四季「ねえ、ナギサ……メイの胸を触ったよね？」

「えっ!? いやアレは……」「私も触って欲しい」はっ?!

見ると真剣な表情の四季。コレは本気の眼だ。

「わ、分かったよ。じゃあ……」フニョツ!

四季「んっ／＼／」

弾力のあるメイとはまた違いマシユマロのような柔らかさ……っ
て何をまじまじと感想を述べてるんだ!これじゃあマジモンの変態
じゃねえか!!

「ご、ゴメン……強かったか?」

四季「ん……少し……」

メイ「ナギ〜?」

「うっ、ゴメンナサイ……」

すると、

コンコン

扉をノックする音が鳴った。

「っ!? ヤバい隠れる!!」

そして二人が隠れたのを確認した渚は扉を開けた。

「は〜い……あっ、先生……どうしました?」

先生「いや、体調は大丈夫かと思っただけ」

「はい……時間が経って少し楽になってきました……」

先生「そうか。それは良かったなじゃあ早く寝ろよ?」ボタン

そして先生は去っていった。

「ふう〜」ガチャ

渚は扉の鍵を掛け直す。

「良〜い?」

メイ「つたく…良いところで邪魔しやがって……………」

四季「空気読んでほしい」

「いや、先生は立場上しようがないだろ…………そろそろ部屋もどれよ。巡回来たときに居ないと色々面倒だぞ？」

四季「むう、分かった……………」

メイ「家に帰ったらまたお泊りしような!!」

「もちろん!」

そしてメイと四季は渚の部屋を後にし、自分たちの部屋に戻って行った。

「ふう…………寝るか……………」

そして、部屋に備え付けのシャワーを浴びて今日は就寝した渚だった。

― 続く ―

番外編：中学時代 修学旅行⑥

修学旅行2日目夜の渚の夕食の食べ過ぎによる体調不良から一夜明け最終日の朝、渚の体調はスッキリ回復し着替えて朝食会場に向かっていた。

(今日は食べすぎない様にしないとな……)

朝食会場に入った渚。するとすでに他の生徒たちはそれぞれ食べており、渚はトレーを取って好きな物を取っていく。

「これで良いかな?」

そして空いてる席を探す渚。すると端の方に見慣れた赤髪と青髪の二人が。

「四季、メイ、ここ良いかな?」

四季「あつ、ナギサおはよう」

メイ「遅いぞ?」

「悪い悪い……」

そして3人で食べ始める渚たち。3日目にもなると他の男子たちも気にも止めなくなっていた。

メイ「今日はこれから羊ヶ丘展望台に行くんだよな?」

「おう。それから札幌の大通公園に行って時間まで自由行動だ」

四季「Boys 少年 be よ Ambitious 大志を抱けだっけ? 女の子のは無いのかな?」

「少女とかは聞いたことないな……まあその時代は男尊女卑の風習が凄かった時代だからしようがないんじゃないか?」

四季は「確かに」と言っているが、メイも四季も女が虐げられるのは嫌だろう。ぶっちゃけ女性は皆そうだと思う。しかし昔はそれが普通だったのだから時代の流れを感じるな……。

メイ「ナギはその時代についても私達を虐げないよな?」

「当たり前前だろ? 例え周りからなんと言われようどんな事しねえよ……」

四季「ナギサ……」

「ほら、食べてしまおうぜ?」

そして朝食を食べ終わり部屋に戻る。そして荷物をすべて持ち、集合場所である一階のエントランスホールに向かう。

ポツポツと一人、また一人と生徒たちが降りてくる。そして四季とメイも降りてきて、時間になり先生がそれぞれのクラス委員に点呼を取らせて確認を取る。

先生「よし、全員いるようなのでこれからバスに乗って羊ヶ丘展望台に向かう。その後札幌市街地で自由行動、その後新千歳空港に戻り今日の夕方の飛行機で東京に帰るのでお土産買うやつは忘れずにな？ それではバスに乗り込め」

各クラスごとのバスに乗り込む生徒たち。修学旅行もいよいよ今日で終わり。楽しかったけど……、殺されかけたからな……。

そしてバスがしばらく走ると、眼前に小高い丘が見えてくる。おっ！ 羊もいるじゃん！！

バスが丘を登っていく。道路の直ぐ側の柵の向こう側には羊が放し飼いにされておりそれを見たクラスの女子連中は「うわ〜！」と感嘆の息を漏らす。

そしてバスは展望台の駐車場に止まり、生徒たちが降りてくる。

……やっぱり獣臭いな。

動物特有の匂いに渚が顔を顰めていると、メイは：「臭いかもしんじゃないけどそんな顔すんなって」とたしなめ、四季からは：

「まあ臭いが苦手な人はキツイかもね。でも羊かわいいよ？」

と、言われる。まあ確かに臭いを除けばカワイイか……

そして案内員さんの話を聞き、各自で見回る。渚とメイはクラーク博士の銅像前で一緒に写真を撮り、

メイ「四季は良いのか？」

四季「ナギサ、一緒に撮ってほしいんだけど良い？」

「良〜い〜」

そして銅像前に行くが、四季は少し待ってと言いかバンをあさりあるものを取り出す。それは……

四季「テツテレー！ 実験で使う白衣」

「お前自前のんなもん持ってきたのか!? 徹底してんなア……」

四季「さあ撮って撮って!!」

メイ「お、おう……撮るぞく?」

そして二人してクラーク博士のポーズを取り写真に収める。

四季「〜♪」

四季は満足そうだ。

そして1時間ほど見て回りお土産に北海道のブランドのチョコレートを買い、バスに乗って札幌の市街地に入る。

そしてバスは大通公園のテレビ塔前に到着し、ここで記念の集合写真を撮った。

先生「じゃあ2時まで自由行動だ。この辺は飲食店は結構色々あるらしいから好きなどころで食べる。後はテレビ塔とか入るのも自由だし……まあ好きに街を見学してろ。では、解散!!」

そしてそれぞれバラバラになって見て回る生徒たち。

渚たちはいつものように3人で見て回ることにした。

渚がこの辺りだと良さそうな店があまり無いとスマホの地図アプリを見ながら言うので、3人は地下鉄に乗って札幌駅まで行くことにした。幸いここから駅までは歩いて30分くらいの距離。歩いても充分戻ってこれる距離だ。

渚「じゃあ行こうぜ?」

そして3人は地下鉄に乗り、札幌駅へと向かった。

― 続く ―

番外編：中学時代 修学旅行・終

修学旅行最終日の自由行動で渚とメイと四季の3人は地下鉄に乗って札幌駅へとやって来た。まずはお昼ごはんをどこで食べるかだが……、

「二人は何が食べたい？ 因みに俺はラーメン」

メイ「アタシも札幌に来たら味噌ラーメンかな」

四季「じゃあ私もラーメンで良い」

一致で昼飯はラーメンに決まった。グルメ地図アプリを見て調べた渚は、

「駅の構内にあるデパートの上の方の階にラーメン店が集まっているところがあるらしいからそこにしようぜ？」

メイ「分かった」

四季「OK」

そしてデパートの中に入った渚たちはエスカレーターで上の階を目指す。

「あつ、看板出てる。次の階だつてさ？」

四季「分かった」

メイ「了解！」

そして目的の階に着いた渚たち。色々なラーメンの店が集まっていた。

「どこにする？」

メイ「アタシはこの店かな？ 味噌ラーメン有名らしいし」

四季「じゃあ私もそこにする」

「俺もー」

そして3人で店に入った渚たち。カウンター席に座り味噌ラーメンを注文する。

しばらく話しながら時間を潰しているとラーメンが出てきたので食べ始める3人。野菜もたっぷり入っており、渚は好みだった。

だが、

メイ「量多かったな。アタシまだ残ってるけどもうムリ……」

四季「me too……」

ハア?! しょうがないな……

「俺は食べ終わったから器貸せ。食うから」

メイ「えっ!? でも……／＼／」

「いいからー!」

渚はメイから器を取ると残ったラーメンを食べる。残りの量は殆ど無かったのでペロリと平らげた。

「ふ〜…次四季の」

四季「えっ……／＼／」

今度は四季の器を回収し食べ始める渚。コチラもほとんど量は残っておらず比較的ラクに完食した。

「ごちそうさん……。ん? どうした?」

メイ・四季（間接キス……／＼／／）

四季とメイの顔は真っ赤になっていた。

「お〜い?」

メイ「っ! う、うつさい!!」

四季「鈍感……」

「何か悪口言われた!?!」

そしてお会計を済ませ（何故か怒られて奢らされた渚）、デパートを出る3人。そこから歩いて先程の大通公園に戻る。途中時計台もあった。想像していたよりも小さかったが……。

そして時間内に集合場所に到着。3人でベンチに座ってノンビリしていた。

「にしても…今更だけど晴れて良かったな……」

メイ「本当に今更だな。まあ確かにな……」

四季「うん……」

すると両サイドからメイと四季は渚の肩にコテンと頭を乗つけてくる。

「二人共?」

メイ「肩…借りるな?」

四季「me too……」

フツ「良いよ。ゆっくりしてな……」

そしてしばらく時間が経ち、そろそろ集合時間だ。

「メイ、四季、そろそろ時間だぞ？」

メイ「ん……………、もう？」

四季「分かった……………」

そして集合場所に向かう渚たち。続々と生徒たちが戻ってきており、3人はクラスのバスに乗る。

「今度は四季が隣か……………」

四季「嫌なの？」プクツ

四季がプクくツと頬を膨らませて拗ねる。カワイイな……………／／／
「別に嫌だなんて言っていないよ。宜しく」

四季「……………」ギユツ ムニユツ

四季は渚の腕に抱きついて来た。渚の腕に四季の胸が当たり、渚の顔は赤くなる。

「……………／／／」

四季「どうしたの？」

「い、いや……………」

メイ「変態」

「メイさん?!」

生徒・先生（（最後までイチヤイチャしやがって……………））

そして生徒たちを乗せたバスは、新千歳空港に向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

― 空港 ―

空港に着いた生徒たちはお土産を買う時間を貰い、思い思い家族へのお土産を買っていた。

3人も例に漏れずお土産を買い、

そしていよいよ飛行機へ乗る。金属探知ゲートを潜る前に出発前の教訓に習いベルトまで外したお陰で引っ掛かる事なく抜けることができた。

そして今は飛行機の中で離陸を待っている。

メイ「北海道旅行楽しかったなあ……………」

四季「同意」

「俺は男子共に殺されかけたけどな。まあお前らと一緒に楽しかったよ」

メイ「大きくなったら今度は3人で行こうな！」

四季「of course」

「ああ!!」

そして飛行機は離陸。東京の羽田空港に向けて飛び立ち数時間後、羽田空港に到着した。

メイ「疲れたく……………」

四季「me too……………」

「俺も……………」

見るとクラス全員旅行の疲れが顔に出ていた。

先生「よし、全員いるな? それではバスに乗って学校に戻ったら解散だ。家にすぐに帰る様に」

そして最後、バスに乗り学校へと戻る。数十分後、学校に到着したバスから生徒たちが降り、降りた者から帰っていった。

渚たちは家がすぐ隣同士なので、帰りも最後まで一緒にいた。

メイ「明日金曜だけどアタシたち3年生は休みだろ? ナギの家でお泊まり会やろうぜ?」

四季「賛成」

「分かった。母さんに聞いてくよ」

そして修学旅行を終えて家に帰った3人はその日、疲れからすぐにくつすと眠ったとき……………」

Ⅰ 中学時代：修学旅行編・END Ⅰ

番外編：冬休み明け初日の朝

Lie lla! がラブライブ! 東京大会を勝ち抜き、全国大会に向けて練習する中、今日は冬休みが明けて初めての登校日。

また今日から授業を受けて部活の日々が待っている。

だが、

ゝ 1年生のクラス ゝ

四季「ゝ♪」ギユツ

四季が渚の椅子に自身の椅子をくつつけて隣に座り、渚の腕に抱きついてご満悦状態だった。

「若菜さん……、なんで日宮くんにそんなべったりなの?」

「ね〜? 休み中に何かあったの?」

正直に言うべきなのかなあ………?

渚が迷っている、隣の席に座るメイが説明する。

メイ「あ〜……四季とナギさ、付き合い始めたんだよな……。アタシは忘れちゃって……」

それを聞いた女子はビックリ。口々に質問攻めにしてきた。

「日宮ちゃんと若菜さん付き合ってるの!」

「若菜さんアイドルなのに大丈夫なの!」

「どっちから告白したの!!」

「メイちゃんをフツたってどういう事!」

女子の迫力に気圧される渚。

女子、怖い……。すると、

四季「落ち着いて……まず告白したのは私とメイから。林間学校の時に2人同時にね。それでナギサが”考える時間をくれ”って言って、この間の東京大会が終わった後に返事をしてくれたの」

四季がそう答えると、渚がメイをフツた事について非難が飛ぶ。すると……、

四季「どっちみち2人と同時に付き合うなんてできないでしょ?」

絶対に勝負になる。結果私が勝っただけの話。それとも二股しろって言いたいの?」

そう言われたその女子は正論過ぎて何も言い返せなかった。するとここでメイが口を開く。

メイ「結果的にはフラレたけど、ナギはちゃんとアタシたちに向き合って答えを出してくれた。だからナギを好きになったことに後悔何かしてない。だからさ、そんなに怒らないでくれよな……」

「メイちゃん……」

達観したようなメイの表情を読み取ったクラスメイト達は、この恋を経て3人とも内面的に成長したのだと感じた。”ならば、部外者の自分たちが文句を言うのは野暮というものだろう。”と思考するのにそう時間は掛からなかった。

「そっか……負けちゃったけど、メイちゃんは良い恋ができたんだね」

メイ「ああ……!!」

「でも、アイドルが恋愛って大丈夫なの？」

メイ「あく……、確かにあまり大っぴらにしたら不味いな。けど、」

四季「私達はあくまでも”スクールアイドル”であって”アイドル”じゃない。芸能人じゃなくてどこにでもいるただの女子高生。文句は言わせない」

普段無表情な四季の顔から、見て分かるほどに断固たる意志が感じられた。

それを見たクラスメイトたちは、2人の行く末を暖かく見守ろうと心のなかで決意した。

そして、もしも2人が非難されたら……同じ学校の仲間として……クラスメイトとして……友として、支えてあげようと思うのだった。

「でも、メイちゃんと2人は別に余所余所しくはなっていない感じだよね?」

その問いには、渚が答えた。

「そりゃあな……。産まれてからずっと一緒にいるんだぞ? そんなことで関係が途切れるような浅い付き合いはしてねえよ……」

四季「同感……」

メイ「ああ……。本当に2人はアタシの自慢の幼馴染だよ……。だからこそ、アタシも2人を応援できるんだよ。アタシたち3人の関係

は、恋愛を抜きにしても3人でこれからもずっと続いていくんだからさ……なっ?」

「ああ!!」

四季「もちろん。ナギサもメイも私も……ずっと一緒」

3人の何よりも強固な固い絆。クラスメイトたちは想う。「自分たちが彼らの立場でも、ここまでの友情が作れるだろうか?」と。

そして一同、みんな同様に「無理だ」と感じ、それを可能にしている3人を心から尊敬した。

きな子「3人とも凄いつすよね〜」

夏美「夏美たちは3人を見守るって決めましたの!!」

渚たちのクラスが笑顔に包まれる。

そして、

先生「席について〜? 朝のホームルームを始めるわよ〜?」

時間になり、先生が入ってきたのを見て全員が急いで自分の席に着席する。

四季「ナギサ……っ」チュツ

渚「っ!?! ……: / / / /」

去り際の……四季からの不意打ちの頬へのキスに、顔を赤面させる渚だった。

今日も、日常が始まる!!

ー 続く ー

番外編：風邪を引いた渚

2月のある日、今はもうじきライブ全国大会が開催される大事な時期。

大事な時期なのだが……

ピピピツ　ピピピツ！

「うゝ、38.8℃……」

何と渚はこの大事な時期に風邪を引いてしまった。一応医者に行ったらインフルエンザやノロウイルスは陰性だったので一安心だが……、

「くそっ、この大事な時期に……。やっぱり昨日雨に濡れて帰ってきたのが不味かったかなあ……」

そう、昨日は練習休みで渚は一人で街の本屋に買い物に行っていたのだが、本屋から出るときに突然のゲリラ豪雨。

当然傘を持っていなくて走って帰ったのだが、それが不味かったらしい……。

渚は家でベッドに横になっていた。

「メンバーには絶対にウチに来るなってLINEしたから大丈夫……だと思いたい。四季とメイは来る可能性高いからなあ……」

渚は喉が渇き、スポーツドリンクを入れようとするが……

「空っぽじゃねえか……。冷蔵庫に入ってるかな？」

ヨロヨロとした足取りで下りる渚。今日は家に親もいないから夕イミング最悪だ。

「Lielia!もう練習は終わってるよな……。頼むから来ないでくれよ……」

そして渚がリビングの扉を開けると、

かのん「四季ちゃん、スポーツドリンク渚さんの部屋に持っていきたいんだけどどの部屋かな？」

メイ「あつ、アタシが案内しますよ」

すみれ「お粥できたわよ？」

きな子「薬あつたつす！」

可可「じゃあ持つて行きま……っ!!？」

そこで全員渚の存在に気づいた。

恋「な、渚さん!？」

夏美「いつから……」

慌てる皆。しかし……、

「何やっとなんじゃお前らくっ!!？」

渚の怒鳴り声がこだました。

「もうすぐ全国大会が近いっていうのに、風邪引いたヤツの所に来るなんてバカなのか!? 感染したらどうすんだ!!」

千砂都「な、渚くん落ち着いて!!」

「一緒にステージに立つメンバーならまだしも、俺はマネージャーでステージには立たないんだから、自分ら優先してほっとけよ!! 全部台無しになったらどうすんだ!! ツ！ ゴホッ！ゴホッ！」

俺が思っていることを怒鳴りつけると、その大声の影響で咳き込む。するとかのん先輩が、

かのん「渚くん……たどえ一緒にステージに立たないメンバーでも、大会前でも、メンバーが苦しんでたら私達は止められても来るよ?」

「何でっ!!」

可可「心配だからデスよ」

きな子「それに、渚くんには普段いっぱい助けてもらってるっす……」

恋「それなのに、その渚さんが風邪で苦しんでるのに来ないなんて選択肢は、私達の中には始めから無いんです」

夏美「四季さんとメイさんから聞きましたの。今日親もいないって。タイミングも最悪なのになんで夏美たちに頼ってくれないんですの?」

「だから、それで大会で欠員が出たなんて言ったら!!」

メイ「ああ…確かに、ラブライブは、大会は大事だ。けど、」

四季「私達にとって、仲間をもっと大事」

すみれ「私は一応みんなには言ったわよ? 「可可のためにも絶対

に負けられないんだから全員で行く必要は無いんじゃない?」って。そしたら…この子たち、可も行くって。本人が言うんじゃないよ?」

そう言っつて笑顔を浮かべるみんな。

「みんな……………」

四季「それに、マスクもちゃんとしてるから大丈夫だと思っ」

「はあ、分かったよ。ただし、部屋に入るのは許さないからな!! 何か持ってきたら声をかけて扉の前に置いておく事!!」

かのん「うん、分かった。私達も感染りたい訳じゃないからね」

そして両者が納得できる落とし所を見つけ、俺は部屋に戻り、言った方法で受け渡しをしてもらった。

因みに連絡はスマホでやった。

そして翌日、渚の風邪はスッキリ治り翌日の練習でメンバーにお礼を言った。千砂都先輩からは注意を受けたがまあ自業自得なので甘んじて受けよう。

にしても、皆が感染らなくて良かったあ…………。

番外編：学校の新設備

ウィーンと冬毬ちゃんがL i e i l a !に入ってからすぐの部活
終わり、きつかけは恋の一言だった。

恋「渚さん付き合ってください」

……………は？

今の恋先輩の一言で部員全員大慌て。夏美と冬毬ちゃんは略奪愛
スキャンダルだと騒ぎ立てる。

だが今一番危険なのは……俺^渚だ。

四季「ナギサ……？」ポンツ

メイ「ナギ？ どういうことだ？」ガシッ

二人の手が、渚の左右の肩にそれぞれ置かれる。

「お、俺は何もしらな……!!」「問答無用!!」「いやあああああああ
ああっ?!?!」

きな子やウィーンも「浮気なんかしたのか…」と、助けはしてくれな
い。

ホントに身に覚えが無いんだけど!?
すると、

千砂都「もう、恋ちゃん…主語が抜けてるよ? 何に付き合ってほ
しいの?」

恋「あっ!! そうでした!! 皆さん誤解です!!」

1・2年生『誤解……?』

その一言で、ようやく俺を殴る手を止めた四季とメイ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

きな子「学校の設備購入で男子の意見が欲しいから買い物に付いて
きて欲しい?」

恋「はい。今年の結ヶ丘には奏さんを初め在る程度の男子生徒が入
学しました。なのでこれから運動系の部活や男子の部活も増えるこ
とが予想されるのでトレーニングルームを作りたいと理事長が……。
なので明日私と理事長と3人でそういう器具を売ってるお店に行っ
ていただけないかと。できれば奏さんにも」

奏「俺もですか？ 分かりました」

誤解は解けたようだ。やれやれ……

メイ「なくんだ、ビックリした」

四季「私とメイも驚いてついナギサに折檻を……」

「うん、取り敢えず二人は俺に謝ろうか？」

はっ倒すぞこの幼馴染どもめ……

恋「それで大丈夫でしょうか？」

ふむ、それぐらいなら問題ないか。

「四季、明日って予定あったっけ？」

四季「大丈夫。明日はなにもない」

ならオツケーだな。

「分かりました。行かせてもらいます」

恋「ありがとうございます!!」

そして、男子二人と恋先輩、理事長の4人でトレーニング器具を見に行く事になった。

ー 翌日・放課後 ー

理事長「ふたりとも今日はありがとう。悪いわね」

「いえ、大丈夫です」

奏「でも大丈夫なんですか？ そういう器具ってけっこう高いんですよ?」

理事長「ええ。それについては問題ないわ」

恋「実は、ラブライブに優勝したことで地元の皆さんから寄付が大量に集まったんです！ 「結ヶ丘をみんなの最高の思い出になる学校にしてください」って!!」

恋先輩、嬉しそうだな……。そりやそうか。亡くなったお母さんが遺した学校なものな。

「それなら、俺もバンバン意見言わせてもらいますね?」

奏「俺も!!」

恋「はい！ お願いします!!」

そして、俺たち4人はスポーツジム等に器具を卸している専門店に

到着した。

店員「いらつしやいませ！」

理事長「案内を予約してた結ヶ丘高校です。宜しくお願いします」
俺たちも挨拶をし、早速店員に案内されて店内を見て回る。

恋「た、高い……」

理事長「大きめのを買おうとすると8万はするのね……」

「まあ腕とか足とか鍛える部位によっては「これ1つでオツケー」とかありますから。全部を買う必要はないですよ？ まあダンベルは一通りの重量が欲しいところですけど」

奏「そうですね。最低7.5キロ〜最大25くらいは欲しいですね。それを両手で持つから2つ一組で」

店員「それでしたらこちらなんか良いかと……」

店員が見せてくれたのは、握りに重りを好きに追加して重さを変えられる可変荷重タイプだった。これなら複数組買う必要ないな。

「俺はこれ良いと思うんですけど」

奏「俺もですね値段は3セットで7,500円ちよいでこれなら安い方かと」

恋「そうなんですな……」

理事長「ではまずはこれを」

店員「はい。かしこまりました」

次に店内を見て回る俺たち。すると奏が、

奏「サンドボールとかバランスボールって学校にあります?」

理事長「はい、その2つはあるはずです。確か音楽科の校舎に」

「そっか……あつ、このベンチとバーベルいるかも」

奏「ああ…ベンチプレスですね。これだったら二セット買って……、後このラットプルダウンのも二組……」

「後は有酸素運動にランニングマシンかな? それを三組くらい。レッグカールのマシンも欲しい所だけどそこまで行くところっちの手持ちが心許ないし」

奏「そうですね……。スミマセン、さっきのダンベル含めたこの12点でいくらですか?」

店員「そうですね……そちら12点ですと300、500円ほどになりませんが」

「だそうですけど理事長予算は……?」

理事長「えっ、ええ……一応40万ほどなので大丈夫です」

「じゃあレックカールのも1つ買えるかな? それでちよいどいいか」

奏「そうですね。大丈夫かと」

恋「き、決まりました?」

俺と奏の話が終わった雰囲気を感じ、話について行けなかった恋先輩が声をかける。

奏「はい、この13点で大丈夫だと思います。後は専用の部屋があれば」

理事長「分かりました。ではこれらをお願いします」

店員「お買い上げありがとうございます!!」

そして理事長が契約書にサインして配達の日時を決めている間、俺たちと恋先輩は理事長からもらったお金で飲み物を飲んでいました。と言っても自販機だが。今日付き合って貰ったお礼だそう。

恋「それにしてもお二人がいて助かりました……私と理事長だけだったらどうなっていたか……」

「いえ、大丈夫ですよ」

奏「器具が届いたらたまに俺も使って大丈夫ですか?」

恋「もちろんですよ♪」

そう話していたら、話を終えた理事長が戻ってきた。

「あつ、話終わりました?」

理事長「ええ。ふたりとも今日はありがとう。家まで送って行くわ」

渚・奏「「お願いしま〜す!!」」

そしてその数日後、結ヶ丘にトレーニングルームが設置され、運動系の各部活、そして密かに渚と奏もはしゃいでいた。

ー 続く ー

番外編：紗夜との誕生日プレゼント選び

新しい1年生が入り、月日も6月に入った最初の休日、渚は真田姉妹の姉、紗夜と一緒に買い物に行く約束をしており、駅前で待っていた。

「メイはもう四季の誕生日プレゼント選んじまったって言うからなあ……。いつ選んだのやら」

そう。今日は今月誕生日を迎えるメンバーであり渚の彼女。四季の誕生日プレゼントを紗夜と選びに行く約束をしていた。

紗夜は四季の好みをまだよく分かっておらず、渚は女の子の好みをまだ完全に理解している訳では無いため二人で補い合い協力して選びに行く。

いつもならメイと来ているのだが、メイはもう陽菜と共に選んじまっていた。

渚が待っていると、向こうから走ってくる女の子が。

紗夜「渚くん!! お待たせっ!!」

「いや、たいして待ってないから大丈夫。じゃあ行こうか?」

そして渚は歩き始める。

紗夜「あつ……、うん（お洒落してきたんだけどなあ……）」

紗夜が少し気落ちしていると渚が振り向き、

「紗夜さん、その服似合ってるな。いつものボーイッシュも似合うけどそういうガーリーなのも似合うね?」

紗夜「っ!!／＼」

見てくれないと思ったのも一瞬。次の瞬間にはこの言葉である。

紗夜は嬉しきで渚の腕に抱きついた。

「ちよっ?! 紗夜さん!?!」

紗夜「くく♡」

しかし紗夜はガツチリ掴んで離さない。女の子と男ではあるのだが、紗夜と渚では紗夜の方が断然力があるため渚の力では無駄な抵抗にしかならない。なので渚は諦めて好きにさせとく事にした。



渚は紗夜に、前まで自分は四季には発明に使う工具などをプレゼントしていたが、もうだいたい品が揃ってきたためもう要らないだろうと助言をする。紗夜はそっち関連で考えていたため「危ない……」と、胸を撫で下ろしていた。

紗夜も、タイプにもよるけど女の子はカッコイイ物よりは可愛いものが好きだから”四季ちゃんだったらどんな物が可愛いと思うか?”また、女の子の身支度に必要な物を渡すと喜びそうと教えた。

紗夜「ん〜……、工具以外で四季が喜びそうな物……可愛いデザインの写真立てみたいなのにしようかな? これからLieila!の皆での写真や渚くんたち幼馴染での写真も増えるだろうし」

「あ〜……いいね。じゃあ俺はどうしようかな……せつかくだから恋人として何かお揃いでアクセサリーみたいなのが買おうかな?」

紗夜「良いんじゃないかな? じゃあ、雑貨屋ね。行こう?」

そして紗夜と渚は雑貨屋へ。数軒の店を周り、紗夜はお眼鏡に叶った商品をそれぞれで購入した。これを纏めてプレゼントする気だそうだ。

対して俺は……、

「アクセサリー……、ん?」

渚はある物を見つけて「コレだ!!」と感じ、レジに向かった。

そして買い物を終えて昼飯にワックに入る。ハンバーガーを食べながら、二人はさつき買ったプレゼントについて話していた。

紗夜「いや〜良いデザインのもあって良かったよ!!」

紗夜は大・中・小それぞれの大ききでそれぞれ2つずつ。全部デザイン違いで合計6つの写真立てを購入。四季は周りからどう見えるかは知らんが友達と友達との思い出を何よりも大事にする娘だ。その性格的にピツタリと言えるだろう。

「うん。たぶん喜ぶと思うよ」

紗夜「渚くんはなに買ったの〜?」

「俺? コレだよ」

そして紗夜に買ったものを見せる。

紗夜「青い……星型のペンダント？」

「ああ。これさ？ 2つに分かれるんだよ」パチッ

そして渚はペンダントを2つに分離して見せる。

紗夜「あつ！ もしかして!!」

紗夜は気付いたみたいだ。

「うん。2つに分けて片方は俺が、もう片方を四季に渡す。このペンダントは2つで1つ。同じ様に俺と四季も2人で1つ……なんてな？ 因みに青色にしたのは四季の髪の色からとった」

それを聞いた紗夜は目を見開き渚の両肩を掴んだ。

紗夜「これ良いよ!! 四季が喜ばないはず無い!!」

「そ、そうか……」

それは良かった。

紗夜「でも、1つ注意ね？」

ん？

紗夜「これを渡すんだつたら、四季と結婚して一生一緒にいるつもりでいなきゃダメだよ？ こんなの渡して離れていったらとんでもないことになりかねないから。私もキレルよ？」

なんだ、そんな事か……。

「分かってる。俺は四季から離れる気も、離す気も無いよ……」

渚の瞳には、確かに覚悟が揺れていた。

紗夜「……うん。ならよし!!」

そして紗夜も笑う。だが紗夜は、心の奥底で渚が四季と恋仲になる前に……、もつと速く出会えなかった事を悔やんでいた。

紗夜（四季は幸せ者だね。こんな人なかなかないよ？）

そして四季の誕生日、四季の家でLielia!の皆で誕生日パーティー。そして全員プレゼントを渡したら紗夜のプレゼントも凄く喜んでおり、最後に渚のを渡したら四季は涙を流しながら渚の胸に飛

び込み押し倒し、皆の見てる前で唇同士のキスをこれでもかと愛情を伝えてきた。

可可先輩は止めようとしたが、他の皆に抑えられた。

可可「何でデスカあゝっ!!」

そして、

四季「ナギサ……／＼／＼ ずっと一緒にいてね？」グスツ

「もちろん!!」

その後皆から茶化されて四季がカチンと来て皆を新発明品の実験台にしてお仕置きした。

ー 続く ー

番外編：四季ちゃんと陽菜の共同開発品

とある練習日、Lielia!の1・2・3年生…メンバー全員が部室に集まりとある人物を待っていた。

その人物とは、

奏「四季先輩急にどうしたんでしようね？」

「さあ？ でも…なんか嫌な予感がする……」

メイ「アタシもなんだよな……」

かのん「実は私も……」

ライカ「先輩たちも渚たちも顔が青いけどどうしたんですか？」

俺達が説明しようかと迷っていると……

バアンっ!!

勢い良く扉が開いて四季と陽菜ちゃんが入って来た。

四季「実験の……」

陽菜「時間だよ!!」

2人が満面の笑みで恐ろしことを言う。

紗夜「四季となにか作ったの!？」

ライカ（渚たちはそれを察知してたのね……）

ウィーン「何でそんな事しなくちゃならない訳？ パスよ……っつて

離してよ!!」

四季がウィーンを逃すまいとしがみつく。観念したウィーンは諦めて付き合うことにしたようだ。

ウィーン「で？ 結局何する気？」

四季「この実を食べて欲しい。ここだと危ないからグラウンドで」

は？ 危ない……？」

メイ「毒とかじゃないだろうな？」

四季「大丈夫。毒は入ってないし健康面も心配ない。効果も1時間で切れる」

きな子「どうするっすか？」

冬毬「なんかやらないと先に進まなそうですよ？」

夏美「仕方ないですね……」

陽菜「それじゃあ校庭にレッツ・ゴー!!」

そして場所を校庭の、しかも校舎から離れた場所に移した俺たち。いったいこの実何なんだ? 変な模様がいっぱい入ってるけど……? ?

四季「じゃあまずはナギサ。コレ食べて?」

「……………」パクッ

気は進まなかったが俺は実を食べた。マツず!!

四季「ちよつと右腕に力を込めてみて?」

「右腕?」

俺は四季の指示通り力を込めた。すると、

ボオアアアアツ!!

右手から勢い良く炎が上がった。というより腕が炎になった!?

渚「なんだコレ?!」

恋「学校が!! 母が遺した学校が燃えます!!」

四季「大丈夫。校舎からは離れてる」

かのん「これなんなの!?!」

四季「私と陽菜ちゃんが共同開発した。名付けてへメラメラの実」

……」

「ワン〇ースじゃねえか!! どこの火拳の〇ース?! 悪魔の実なんか作ってんじゃねえ!!」

コイツラなんてもの作ってんだ!!

可可「凄いデス!! クク、ワン〇ース好きなんデス!! ひよつとし

てへスベスベの実」あります?!」

陽菜「さすがクウクウ先輩お目が高い!! 勿論ありますよ?」

可可「クダサイ!!」

かのん「ちよつとクウクウちゃん?!」

メイ「確かスベスベの実って……」

奏「飛んできた銃弾すら滑ってしまっうほどの美肌になる上に美人になつてスタイルまで良くなる効果がある、女性が誰もが欲しがりそうな実ですね……」

L i e l l a ! 『!!』

それを聞いたメンバーは可可ばかりズルいところぞつてスベスベ

の実を求めた。

おくい…、それどころじゃ無いと思うんだけどな……。

奏「女性は大変ですね……」モグモグ

「ん？ 何食ってんだ？」

奏「さつき陽菜さんが渡してきたやつです。ちよつと左手に力入れてみよ……」

すると奏の左手が音を立てて凍っていく。

奏「へヒエヒエの実」!? 渚先輩あのシーンやりませんか？」

すると奏は右腕から絶対零度の氷の鳥を撃ち出して来た。

奏「フエザントベック暴雉嘴!!」

「つ!!」きょうかえん鏡火炎!!」ボオアアアアッ!!

ナギサは左腕から炎の障壁を作り防ぐ。氷は溶けて跡形もなく消えた。

「あぶねーだろ奏?!」

奏「マリンフォード頂上戦争編のエース対青雉やってみたくなくなっちゃって……」
つたく、

「おい、お前らもそろそろやめろ!! 学校が無茶苦茶になるぞ!!」

L i e l l a ? 『え?』

すると目の前にはかのん先輩たちに似た、しかしそれよりも更に美女な女性が14人。これって…、

「お前ら全員食ったのか?!」

すみれ「これで私もショービジネス界に……」
「それ、1時間で効き目切れるってさつき言っていましたよ?」
「そうだったあ!!」ガクツ!

千砂都「おお! 私の胸が!! 確かな膨らみを!!」

千砂都先輩はなんか感激してる。

きな子「千砂都先輩、絶壁だったすからね「何おお!」ヒツ!!」

きな子、それは言ってはならないことだぞ……。

「っーか……」

奏「元から美人ではあるんですけど、皆さん更に綺麗になりましたね……スタイルも抜群に良くなってるし……」

紗夜「そういうわけだから渚くん? ん〜!!」

「ちよっ!? 紗夜さん!! 勝手にチューしようとししないで!!」

四季「紗夜!?!」

ライカ「ずるいわよ紗夜!!」

「ライカまで!!こうなったら!!」

渚は掴まれている身体を炎化して脱出して全速力で逃げた。

紗夜「逃さないぞく!!」

ライカ「待ちなさい!!」

メイ「そういうことなら!! ナギ待てー!!」

四季「ちよつと!! ナギサは私の!!」

そして5人の追いかけっ子が始まったが、恋先輩に一括され正座。お説教を貰っているうちに効果が切れた。

うちの幼馴染は何でこんなの作れるんだろう?

ー 続く ー

番外編：真田陽菜

渚たちが2年生になってしばらくしたある休日、渚は陽菜に誘われて街に遊びに行く約束をしていた。

因みに陽菜は誘ったときに側にいた四季にちゃんと許可を貰っており、渚が今度ちゃんと四季を甘やかす事で四季も許してくれた。

俺の意見は……？

だが別に陽菜と遊びに行くのは渚としては嫌ではないため、彼女である四季が許していれば問題ないと待ち合わせ場所で待っていた。

(もうすぐ時間だな……)

すると、突然後ろから目隠しされた。

(っ!?)

驚く渚。すると、

? 「だくれだ?」

……今日の予定とこの声色を考えれば一人しかいない。ちよつと声のトーンを変えているが間違いないな。

「陽菜さんだろ?」

手が退けられ渚が振り向くと、しっかりとおめかしした陽菜が。

(っ!?)

いつものポニーテールはおろされストレートになっており、艶のある黒髪が一層美しく映る。

服はフリルのある白いレース生地の上に、赤と黒系統のチェックのスカート。

(……陽菜さんって、こんな服も着るんだ……)／／／

いつものギャップに、渚は軽く赤面してしまった。

陽菜「あれあれ? ドキッとしちゃった?」

陽菜がからかうような発言をするが、ニコリと微笑む。

(ヤベエ……、可愛い……)／／／

渚はボウツと惚けるが、直ぐに正気に戻り咳払いを1つする。

「で、今日はどこ行くの?」

陽菜「んくそうだね……実はさ、この間商店街の福引きで水族館の

ペアチケットが当たったんだけど男女のペア専用なんだよね。無駄にするのも勿体ないしさ？」

「ああ……、それで俺を誘ったのか。でもそれなら奏でも良かったよね？」

渚がそう言うと陽菜はクスツと笑い、

陽菜「まあ理屈ではそうなんだけど……私と紗夜がより信頼してるのは渚くんの方だから……」ニコツ

(っ!!／／)

なんだろう……今日の陽菜さん凄く可愛く見える。あんまり踏み込むと不味い気がするな。四季に殺されるかも。

渚は心のなかで一線を引こうと決める。すると、陽菜が渚の手を取り歩き出す。

陽菜「じゃあ行こうか？」

「お、おう……／／」

理性を保つの大変そう……。っていうか何でこんな色っぽい服装してるのこの娘？



そして電車とバスを乗り継ぎ水族館に到着。入り口で陽菜さんが福引きで当たったチケットを見せる。

受付「はい、確かに。ではこちら当水族館のパンフレットになります。それでは行ってらっしゃいませ」

そして2人で水族館に入る。中は薄暗かったが、奥へ進むと最初の方の水槽には熱帯魚や温暖な地域の淡水魚が展示されていた。

陽菜「あつ、ピラルクだ！」

「でっかいな……。確か世界最大の淡水魚だっけ？」

陽菜「そうそう。よく知ってるね？」

「まあ、有名な方だし……」

そして進んでいくと、大きな水槽に一匹だけデカイウナギが。これ

は……

「デンキウナギだな……」

陽菜「アマゾンで遭遇したくない生き物の1つだねえ……」

確か牛とかでも一撃で殺す電流出すんだっけか？

陽菜さんは興味津々。すると、

陽菜「デンキウナギの電気をエネルギーに使えないのかな？」

「できたら良いけど、話を聞かないしできないんじゃないか……？」

陽菜「そっか……」

陽菜さんは残念そうな表情を浮かべたが直ぐに気を取り直すと、

陽菜「じゃあもうちよつと進んでみよう？」ギユツ!!

ムニユッ!

(っ?!?!?!?!)

陽菜が渚の腕に抱きつくとき陽菜の大きめのお胸が渚の腕に当たる。渚は心のなかで必死に堪えていた。

(耐えろ俺!! 変なことしたら四季に幻滅されるぞ!! 下手すりゃ破局もあり得る!!)

っていうか陽菜さん何で今日こんなに積極的な訳? 紗夜さんならなんか聞いた話だと俺に気があるらしいからまだ分かる。

でも陽菜さんはそんなの聞いたこと無い。

陽菜「くく♪」

(ホントにどうしたんだろうな?)

そしてしばらく2人で魚を見ていると、館内にアナウンスが流れた。

『お知らせします。この後、11:30より、屋外プールにてイルカショーを行います。観覧希望のお客様は是非屋外プールにお越しください』

「イルカショーだって、行く?」

陽菜「行く!!」

そして2人で屋外プールに向かった。



イルカショーの会場に到着した俺たち。陽菜さんは前の方に座ろうするが俺は止めた。

何故ならさつき言った様に陽菜さんの上の服はフリルの部分もその他の部分も厚さの違いはあれレースのような生地できている為、万が一水が掛かれば確実に何がとは言わんが…透ける。

俺が必死に説得し、やっと陽菜さんが折れてくれて上段の席に移動。そしたら時間になりショーが始まった。

ショーが始まると、イルカたちのパフォーマンスの数々に陽菜さんはテンションアップ。だが、

バツシヤアアアアアアアンツ!!

水がプールの外にまで飛び出し、さつき陽菜さんが座ろうとしていた席を直撃する。

(……席移動して良かった)

陽菜「アハハ……、危なかったね……」

「だから言っただろ……」

陽菜「だねえ。この服だとブラが透けてたか……も……っ!!／／／／」

ようやく気づき赤面する陽菜さん。だから上の方に来たんだよ。

陽菜「渚くん、ひよつとして…気付いてたから上の方に来たの?」

「…それ以外にある?」

陽菜「……プルプル／／」

顔を赤面させてプルプル震えながら俺を睨む陽菜さん。睨まれるのに全然怖くないの不思議。

陽菜「バカあゝっ!!」ポカポカ!!

「痛い!…痛いって!!」

半ベソをかきながらポカポカ俺を殴る陽菜さん。加減はしてくれてるのかちよつと痛いだけだ。

……この娘に本気で殴られてたら骨の1本や2本折れます。

そしてイルカショーも終了し売店でスナックフードを買って食べ

る俺たち。

その後ペンギンの水槽を見に行つた。

陽菜「うわあ〜」

ヨチヨチと歩くペンギンたち。カワイイな。

陽菜「私、鳥の中ではペンギンが1番好きなんだよねえ……」

「そうなんだ？」

陽菜「うん！ ヨチヨチと歩く所が目が離せないと言うか、守ってあげたくなっちゃうの！」

「なんか分かる気がする……」

2人でペンギンの水槽を見ていると、

陽菜「渚くん、今日の私に何か違和感なかった？」

「すげえあつた。けど、一体何で……？」

陽菜「それはね〜？」

「それは？」

陽菜が勿体ぶって焦らす。だが、

陽菜「教えなくいい!!」

ズコツ!!

コケる俺。

「何で〜!?!」

陽菜「自分で気づいてくださ〜い!!」

渚が陽菜の後ろでブツブツ言っている時、

陽菜（私の大好きなお姉ちゃん^{紗夜}を救ってくれて、オマケにキミの幼馴染からキミの話を聞けば聞くほど興味が湧いてきた。知れば知るほど、惹かれていっちゃうタイプの人間なんだよ、キミは。紗夜が惹かれたように、私だって例外じゃないんだからね？）

すると陽菜は振り向き、

陽菜「さっ、まだ時間はあるからまだ見て回ろう!!」

陽菜は、また渚の手を取り歩き出した。

番外編：メイの気持ち

Lie lla! にウィーンと冬毬ちゃんという新たな1年生が入り数週間後、渚は久しぶりにメイと2人で出かける約束をしていた。「うっし、準備オツケー!! ……にしても、四季のやついきなりなんだもんな」

そう。このお出かけは四季が俺とメイに言ってきた事だ。なんでも、

四季『確かに私がナギサの彼女だけど、最近ナギサはメイと一緒にいる時間ないでしょ？ ナギサは久しぶりにメイと出かけてメイを甘やかしてきなさい』

とのこと。んゝ確かに最近あんま関わってなかったな。メイのことを蔑ろにはしないって言ってたのに。

反省しないとな……。

「行ってきま〜す」

そして渚は家を出て隣のメイの家へ。チャイムを押すとおばさんが出てきた。

メイ母「あら、渚くんいらっしやい。メイに用事？」

「はい。えつと……「あつ、ナギ！ 今行く!!」おう」

そしてメイが出てくる。メイのお母さんは「2人で出かけるの？」

四季ちゃんに怒られない?」と心配そうだが、そもそもこのお出かけは四季の発案なので大丈夫です。

メイ「大丈夫だよ。行ってきます」

「行ってきます」

そして渚とメイは2人で遊びに向かった。



都心の中心区画に来た2人。メイが観たい映画があるというので

映画館に向かう。

映画館に着いた二人はチケットを買って上映される劇場に入っていく。

因みにメイが見たいと言っていたのはとある獣医師のドキュメンタリー映画らしい。まあメイは猫を始めとして動物は好きだからな。画面越しに様々な動物たちが観られてご機嫌なようだ。

俺はと言うと、

(……………つまんね)

俺はあまり面白くなかったが、メイが隣で嬉しそうに観てるので後で感想を言い合えるくらいには真面目に観ることにする。

渚がふと隣を見ると、

(メイのこんな笑顔、久しぶりに見たな…)

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

お昼時になり映画が終わり2人で近くのファミレスに入る。

渚はマグロ丼、メイはタラコスパゲティを注文し、待っている間に先程の映画の感想を言い合う。

メイ「…でさ、あの猫の赤ちゃんが」

「未熟児で産まれたからな。死ぬかもしれないよな？」

メイ「そうそう。でも助かって良かった…」

感想をある程度には言えるように観て良かった。これで寝てたらキレられてたかも。すると、

メイ「ナギ、ありがとな？」

「何が？」

メイ「さっきの映画、ナギにとってはつまらなかったら？」

へ!?

「いや、ちゃんと観てたし……分かるよ。だってナギの好みじゃねえもん」うっ……」

やっぱり分かるか……まあ俺もメイの好みはある程度は分かると思うが。

メイ「でもさ、アタシのためにちゃんと観ててくれたんだろ? こうやって感想言い合えるくらいにはさ?」

「……お見通しですか」

メイ「ありがとうっ!!」ニカッ

っ／／／ はい、カワイイ!!」

メイ「へっ!!?／／／」

「ん、どうした?」

メイ「カワイイって……／／／」

あつ、

「声に出てた?」

メイがコクリと頷く。マジかあ……、

メイ「四季に怒られても知らねえぞ?」

「は〜い……」

すると料理が運ばれてきたので揃っていたくことにする。

うん。美味しい。……ん?

クスツ「メイ、ほっぺ付いてるぞ?」

メイ「えっ?」「ほら」あ、ありがと……」

渚が指でメイの頬に付いてたたらこクリームを拭う。

「まったく」パクッ

そしてそれを……喰った。

メイ「?!?／／／／」ボシユッ

メイの顔は茹でダコのように真っ赤に染まる。

「ん、どうした?」

メイ「う、うっせえ!!／／／」

「ええ?!」

渚はまるで気づいていないようだが、

(彼女いる身で何やってんだこの天然ジゴロが!! 四季に報告してやる!!)

そして食事を済ませて次はカラオケにやって来た。現役スクールアイドルのお手並拝見させてもらおう。

まずはメイが歌い始める。名を残した過去のスクールアイドルの

曲やドラマの主題歌など、メイの歌は聞いてて心休まる。あつ、もちろん四季もな？

渚もアニメ主題歌やドラマの主題歌、ゲームのテーマソングなどを歌う。お互いになかなかの得点でいつの間にか始まった勝負も決着がつかない。

メイ「やるなナギ!!」

「メイこそ!!」

そして二人してニヤリと笑う。

メイ・渚「「ここで一回デュエットだ!!」」

示し合わせた訳でもないのに同じタイミングで見事なハモリ。デュエット曲を2人で歌う。すると、

「得点・100点」

なんと100点が出た。2人で歌った途端に出るなんて!!
すると、

メイ「……ハハ。やっぱり、ナギと一緒にだと気持ち良いなあ」

メイ……。

メイ「ごめん、吹っ切ったつもりだったんだけど……」

「メイは悪くないよ……どちらかがこうなるのは仕方なかったんだ」

メイ「分かってる……もしかしたら、四季には見抜かれてたのかもな。アタシが吹っ切れて無いこと」

「……かもな」

「……………」

二人して無言になる。

メイ「なあ？」

「ん？」

メイ「ナギは最近アタシのことどう思ってた？」

「ああ、紗夜やライカたちが来てからアイツラの相手をすることも増えたからメイとの時間が減って申し訳ないなど……。ちゃんとそばにいるって言ったのに……ゴメン」

するとメイの瞳から涙が。

「お、おい?」

メイ「バカ、優しすぎだよナギは……。彼女のいる身でんな事考えたら、普通なら嫉妬されて浮気扱いされんだからな?」

「……そうだな。けど、自覚があるが俺たち3人は世間から見たら普通じゃない!! だったら合わせなくて構わんだろ」ニヤツ

挑戦的な笑みを浮かべる渚。メイは涙腺が崩壊したように泣き、

メイ「う、うう……ナギ……ありがとう」

「結婚まで行けるのは一人って決まってるけどさ? 友達も駄目なんて言われる筋合い無いんだから。俺と四季にとって、米女メイは大切な親友だ!!」

メイ「ああ……っ!!」

「ほら、湿っぽい話は終わりにして今日はまだ遊ぼうぜ?」

そしてその日、メイの気持ちに少しだけ整理が着いた事は言うまでもない。

ー 続く ー

番外編：渚の原点

その日、渚は近所の公園で小学生にバスケットを軽く教えながら自分も一緒にやって遊んでいた。

その様子を、ベンチに座ったメイ、四季、紗夜、陽菜、ライカが見ていた。

「ほらパスだ!!」 シュツッ!

渚がフェイクを一回入れてボールを背面に回して後ろ手にサイドにパスを出す。

小学生2 「うおっ! スゴい!」

「シュート!!」

小学生1 「それっ!!」

その子の放ったシュートは放物線を描きゴールネットに吸い込まれた。

「よしっ、ナイシュ!」

小学生1 「うん!」

小学生3 「渚兄ちゃん! 次は俺にもパスちょうだい!」

「おう! しっかり動けよ!!」

紗夜 「渚くん、凄く生き生きしてるわね……」

メイ 「ナギのバスケットの実力は近所でも有名だからな。こうやって時々小学生に教えてくれて言われる事あるんだよな」

四季 「ナギサも満更じやなさそうだし、楽しそうだから」
すると、ライカが2人にあることを聞く。

ライカ 「でも、ホントに上手いわね渚。あれはたくさん努力し続けてきた人の動きよ?」

陽菜 「分かる! オマケに1年やそこらの努力じゃないよね?」

四季とメイは顔を見合わせ、

四季 「やっぱり皆なら分かるね」

メイ 「ナギは昔、本当に何もできなかったんだ。だから小学1年の頃から今までずっと、スポーツも勉強も必死に頑張ってきたんだ」

紗夜「ええ!? 渚くんあんなにスゴいのに!」

メイ「昔のナギを見たらあまりにもできなさすぎて多分「誰?」ってなると思うぞ?」

四季「それでも、ナギサはバスケットは好きで毎日練習してたんだけど……」

メイ「そのバスケットにしたって、ナギに才能なんてものは欠片も無かったんだ。でも、10年の間必死に努力し続けた。その結果が今のナギだ」

ライカ「スゴいわね……渚。結果もすぐには出なかっただろうに、それでも腐らず努力し続けられた事がスゴいわ」

四季とメイは昔を思い出し優しい笑みを浮かべ、

メイ「ああ。ナギは本当にスゴイよ!」

四季「私達もナギサに頼まれて勉強とかスポーツとか教えてあげたしね。知ってる? ナギサ、小学1年生の時にクラスの皆の目の前で私達に頭下げて教えてくれたって」

それを聞いて3人は驚いた顔をする。

紗夜「そんな歳で皆の目の前で女の子に頭を下げたの!」

陽菜「凄い覚悟だね……。アタシが渚くんの立場でもそんな事できないと思うよ……。プライドが邪魔して」

ライカ「小1じゃあ変にカッコつけたい年頃だしねえ……。周りはどうんな反応だったの?」

四季「それがね? それを見て周りはナギサを笑ったの。お前には無理だった」

メイ「プライド無いのか? とか言う奴もいたな……」

紗夜「なんかムカつくわね。でも、小1じゃあ渚くんの取った行動の意味は分からないか……」

四季「だと思っ」

陽菜「でも、最後には渚くんは成功を掴み取ったんだね!!」

四季「うん。本当に報われて良かった!」

5人が笑顔になると、そこへボールが転がってきた。

小学生2「お姉ちゃんたち! ボール取って!!」

「悪い頼むー！」

5人は顔を見合わせると、

四季「私達も入れて！」

メイ「ナギ！ 勝負しようぜ！！」

陽菜「負けないよ渚くん！」

「っ！ よし、一緒にやるか！！」

小学生1・2・3 「うん！！」

そして、渚は四季たちと近所の小学生とバスケットで遊んだ。

最近の小学生って上手いんだな……。

番外編：対面①

新年度になり、休日もLielia!は練習がある。屋上でいつも通り練習を始めようとすると、

可可「あれ？ サヨさんとヒナさんはどうしました？ ソウさんとあとトマリさんとウィーンも」

クウクウ先輩は5人がいないことに気づく。

かのん「どうしたんだろう……」

「ああ、今日真田姉妹と奏は先生と面談なんですよ。確か新潟と岐阜からそれぞれのお父さんとお母さんも来るって連絡ありましたし」

ライカ「ああ、そうなのね」

きな子「紗夜ちゃんと陽菜ちゃんの両親……ブルツ。怖そうつす……」

千砂都「まあ、あの二人めちやくちや強いからね。その両親って言われると筋骨隆々の大柄な大人を想像するかも……」

ライカ「そうとは限らないでしょ？あたしのお父さんとお母さんは見た目は普通の人たちよ？」

すみれ「そうね。叔父さんと叔母さんはどこにでも居る普通の人たちよね。わたしが保証するわ」

夏美「冬鞠は今日は家の用事で先に帰りましたの。皆さんにすみませんって言っていましたの」

メイ「家の用事じゃ仕方ないか……」

「あと、ウィーンは前いた国際学校の方に転入の完了報告に行くって。海外留学生だから色々あるんですと」

「そうなんだ……」と、みんなが話しているとクウクウ先輩が手を叩き、

可可「じゃあ、練習を始めまショウ!!」

そして、練習が始まった。しばらくすると屋上の扉が開き、奏と奏の両親と思われる男女が現れた。

奏「こんにちは。スミマセン渚先輩！面談長引いちやって……」

「いや、大丈夫。着替えて用意してくれな？」

奏「はい!!」

そして奏が部室の中に入っていくと、

奏父「キミが日宮渚くんだね?」

渚「あつ、はい。はじめまして……」

奏母「奏がお世話になってます……」ペコリ

渚「あついえ、こちらこそ」ペコリ

お辞儀にお辞儀を返し、お互いに何を話そうかと思案していると

……

奏「渚先輩、用意できました!」

渚「おう。じゃあ奏はタイマー係頼むわ」

奏「はい!」

俺の指示で動く奏。すると、

奏母「バスケット一筋でやってきたあの子が他にやりたいことができ
たって言ったときには心配だったけど、どうやら心配なさそうね」

奏父「ああ」

「奏はよく周りを見てますし、頼りになりますよ」

奏父「そうですか……」

すると、

奏「親父、母さん!! あんまり渚先輩に変なことは言うなよな?」

恥ずかしいから!!」

奏父「分かってるよ!」

奏は「ホントに分かってんのかな?」とブツクサ言いながらタイ
マーに目を戻す。

「ハハッ、照れてるのかな……」

すると、屋上の扉が開き、

紗夜「ごめんお待たせ!!」

陽菜「お待たせ〜!」

真田姉妹が面談を終えてやって来た。すると、

?「紗夜、陽菜。校舎の中は走らない!!」

?「あらら。紗夜、すっかり元気になったわね」

あれ、もしかして……

紗夜「あつ、渚くん。私たちも準備してくるね！」

陽菜「急ぐね〜！」

「急ぎすぎてトラブル起こすなよ〜？」

「渚」娘たちが俺をそう呼んだの聞いた二人は、

？「キミが日宮渚くんかい？」

「あつ、はい。そうです。紗夜さんと陽菜さんのご両親でしょうか？」

？「はい。私が二人の父です」

？「母です」

「はじめまして。日宮渚です」

俺達がお互いに初対面の挨拶をすると、二人は俺を見てくる。

えっ、何？

真田父「なるほど。二人が気に入るわけだ……」

「えっ？」

真田母「ごめんなさいね？この人は娘たちほど強くはないんだけど、代わりに人を見る目は物凄いのよ？」

「そうなんですか……？」「そうだよ？」あつ、紗夜さん

紗夜「渚くんお待たせ。それより、お父さんもお母さんも変なことだけは言わないでね？」

陽菜「そうだよ〜？」

真田母「ふふっ、ごめんなさいね。気をつけるわ」

「じゃあ紗夜さんと陽菜ちゃんは奏の手伝い頼む。後誰か人数分ボトルに水入れてきて？」

陽菜「あつ、じゃあ私が行くよ」

そして陽菜ちゃんはボトルの入ったケースを持って屋上を出ていった。

真田父「警戒心の強い陽菜があんなに喜んで言うことを聞くなんて……」

「えっ？初めて会った時から普通に話してましたよ？」

真田母「話すのは普通にやるのよ。けどね、初対面のときは心のなかで大丈夫な人かを見定めるのよ。陽菜はね」

そうなんだ……。

真田父「それと、二人から聞いたが……君は紗夜を救ってくれた」
「そんな！俺は何も……」

真田母「いいえ？してくれたわ。あの子が苦しんでいたのは知っていたのに、私たちには何もできなかったから……」

真田父「だから言わせてくれ。ありがとう！」

「はぁ……。どういたしまして」
すると、

紗夜「お父さんもお母さんも恥ずかしいよ!!」

奏父「えっと、真田さんでしたっけ？」

真田父「ええっと……」

奏「ご挨拶が遅れました。月城です」

真田父「月城さん。奏くんの？」

奏「そうです。今日面談で……」

両親子と俺の間で話していると、

四季「ナギサ、ダンス練習やるって」

「分かった。振りは頭に入れてきたからバッチリ見てるよ」

メイ「頼むぞ?」

そして音楽が流れると、みんなは踊り始める。息を合わせようとするが、まだ新しい曲のために練度が足りない。

「かのん先輩気持ち急いで！すみれ先輩はその速さで！クウクウ先輩少し早いです!!」

かのん「わ、分かった!!」

可可「ぐぬぬグソクムシに負けてなるものかデス〜!!」

すみれ「いい加減グソクムシっていうのやめなさいよ!!」

「きな子、今のところ振りが逆になってる！気をつけて!!」

きな子「は、ハイっす!!」

そしてダンスが終わり奏に撮影させていた映像を見せる。

かのん「あく……本当だ」

きな子「やってしまったっす……」

「本番までに来れるようになれば問題ないから。少しずつやっていこう！」

L i e l l a 『はい(うん)!!』

それを見ていた真田両親と奏の両親は……、

奏父(奏が惚れ込んだ理由がわかった気がするな)

奏母(奏、楽しそう……)

真田父(しっかりしてる上によく見てる子だな……)

真田母(紗夜と陽菜のこと、心配いらないわね)

その日はそれぞれの両親は子どもたちが借りている家に一泊し、朝にそれぞれの地元へと帰っていったという。

番外編：対面②

保護者面談のために結ヶ丘に来た真田姉妹と奏の両親と対面した渚とLielia!の面々。

翌日、今日はライカと……そして渚の面談が入っていた。

ー 結ヶ丘・廊下 ー

面談会場の教室前には待つ人のための椅子が置かれており、ライカとライカの両親。そして渚と渚の母親が座って順番を待っていた。

ライカ父「君が渚くんだね？　ライカから話は聞いているよ？」

「は、はあ……」

ライカ、何か変なこと話してないよな……？

ライカ母「渚くん、ライカを助けてくれてありがとね？」

ライカ「ちよつとママ！　恥ずかしいわよ!!」

顔を真っ赤にするライカ。俺は「どういたしまして」と、取り敢えず言っておいた。

渚母「宮本さんでしたっけ？　渚から話は聞いていました。うちの息子と娘さんが仲良くしていただいているようで、ありがとうございませ……」ペコツ

うちの母さんが頭を下げる。すると、

ライカ父「そんな！　頭を上げてください！　こちらこそ、いくら平安名さんが居るとはいえライカが地元を離れて暮らすことに少なからず不安はありました。それでもライカがこうして笑顔で過ごせているのは渚くんや若菜さん、米女さんといった友達のおかげだとライカは嬉しそうに話してくれたんです」

「へえ〜？」ニヤニヤ

お父さんの言葉に俺がニヤつくと、

ライカ「……切るわよ？」

「ごめんなさい」

怖っ!!

ライカ母「ライカそういうこと言わない！」

そうして話していると、ライカとライカの両親が呼ばれて教室に入

る。

すると、母さんが俺に話しかけて来た。

渚母「あれ、アンタのこと好きなんじゃないの？ まったくアンタはまた……」

「煩いなあ……。俺だって狙ってる訳じゃないよ」

渚母（だからタチが悪いんだよ……）

そして20分後、ライカの面談が終わり俺と母さんが部屋に入る。

渚「失礼します」

渚母「失礼します……」

先生「はい。どうぞ、おかけ下さい」

そして席に座ると、俺が学校生活で困っていることや、親が俺にどういうふうになつてもらいたいとか色々聞き取りをして、まだ確定ではないが進路の話もした。

俺はスポーツも好きだし、L i e i l a の練習を見る中でフォームチェックなど、相手を見ることができていることに気づき、スポーツトレーナーという進路を考えていることを伝えた。

先生「ふーむ、スポーツトレーナーですか。確かに、日宮くんにはぴったりかもしれませんね。お母さんはどう思いますか？」

渚母「取り敢えずウチの子がちゃんと考えてたことに安堵してます。そうですね……確かに向いてるかもしれないので、まずは卒業まで何事もなくてくれればと」

先生「ですね。では、面談は以上です。お気をつけてお帰りください」

そして俺と母さんが教室を出ると、ライカとライカの両親が待つており、一緒に練習に行こうと言われた。母さんも普段の俺が気になつたのか、少し見ていくと一緒に屋上に向かった。

― 屋上 ―

「遅くなりましたー」

ライカ「面談終わったわ」

紗夜「あつ、渚くんお疲れ様。……で、その後ろの女性はもしかし

て!!」

四季「うん。ナギサのお母さん」

渚母「はじめまして。渚の母です。ウチのバカ息子がお世話になってます」

「バカ息子って何だよ!!」

こいつう!!

すると、

紗夜「はじめまして! 真田紗夜って言います!」

陽菜「真田陽菜です!」

渚母「ああ、真田さん! 渚から聞いてます」

紗夜「あつ、初対面で失礼かもしれませんが……渚くんはバカじゃないです」

陽菜「うん。ワタシたちが初めて心の底から信頼できると感じた、頼りになる人ですよ?」

すると、母さんはクスツと笑い、

渚母「それなら良かったです。これからもどうぞこき使ってください」

……一発殴って良い?ダメか。

そしてそのまま練習を再開し、途中で母さんは先に帰ったが、部活が終わって俺達が帰るときに「「あれがお義母さん」」と言った人が3人。

……四季から発せられる黒いオーラが怖かった。

俺が家に帰ると、母さんが

「奏くんや、四季ちゃんメイちゃんだけじゃなくて、部活のみんなを大切にするのよ?」と、念を押すように言ってきた。

分かっているっつーの!!

ー つづく ー

バレンタインデー特別編2年目

「ふああ〜……」

その日も、俺はいつも通り変わらず目覚めた。

俺は制服に着替えて一回のリビングに降りると、母さんがいつも通り朝食の準備をしていた。

渚母「おはよう渚」

「おはようさん。父さんは？」

渚母「今日から出張でもう出たわ」

「そっか……」

そして俺は朝食を食べる。すると、

渚母「今年はチョコの量どうなるかしらね〜？」

「うっさいよ……ちそうさま」

俺は身支度をして家を出る。すると、

陽菜「あつ、渚くん……」

渚「陽菜？ どうした……？」

家の前で、陽菜が待っていた。あつ、この1年で俺は真田姉妹のことも呼び捨てで呼ぶようになったんだ。

茶色のコートを着ると水色のマフラーを首に巻いた陽菜は、少し頬を赤らめていて少しドキツとした。

陽菜「はい、これ……バレンタインだから」

「俺に……？」

陽菜「うん。友チョコつてやつ。本当は本命って言いたいけど、渚くんはもう彼女居るからね」

「……………」

俺は、少しの間言葉が出なかった。だが、

「ありがとう。いただくよ」

陽菜「良かった。じゃあ学校でね！」

そして、陽菜は走って学校へと向かっていった。

「……………／／／」

俺が暫く立ち尽くしていると、

?・? 「ジーーーーー……………」

「はっ!! メイ!? 四季!」

メイと四季がジト目で俺を見ていた。

メイ「……………浮気すんなよ?」

「しねえよ!」

四季「……………ナギサ?」

「は、はい。何でしょう?」

ガクブル……………

四季「はい、これ私から」

そう言うと四季は俺にチョコを渡してきた。

「えっ、あ……………ありがとう……………」

四季「ん……………」

すると、四季は俺の左腕をガツチリとホールド。腕を絡める。

四季「学校行こう?」

「あ、ああ……………」

メイ「待てよ……………ほらナギ、あたしのも」

メイは俺にもチョコを渡してきた。

”俺にも”というのもメイは現在、奏と付き合っているからだ。

「良いのか? 奏に何か言われないか?」

メイ「アイツはアタシたちの関係の深さもちゃんと理解してくれてる。心配しなくてもアタシは奏に渡すのが本命だからな。それはアイツも分かっているさ」

そうか。仲良くやっってるなら良かった。

「なら良いんだ……………」

メイ「ほら、学校行こうぜ?」

四季・渚「うん(おう)」

そして学校に付いた俺達。すると校門を抜けた所に人集りが出来ていた。

1年生「紗夜先輩、ライカ先輩!! あたしのチョコ受け取って下さい!!」

い!!」

1年生「ずるい! 私のを受け取って下さい!」

1年生「紗夜先輩、ライカ先輩く!!」

二人は、1年生の女の子たちを困った顔で対応していた。

渚・四季・メイ「……………」

俺達それを見て苦笑していた。

「すげえ人気だな……………」

四季「紗夜は強いからね。それにしつかりもしてて成績もいいし、モテるよね」

メイ「ライカも…………同じ理由だな」

俺達がその人集りを見てみると二人が俺達に気づいた。

紗夜「あつ、渚くん!」

ライカ「渚!」

二人が俺に近寄ってくる、

紗夜・ライカ「はい! ハッピーバレンタイン!」

ふたりとも凄い笑顔で俺にチョコを渡してきた。

「えっと…………義…………本命!!」そ、そう」

すると、四季が黒い空気を放つ。しかし二人はどこ吹く風。

っておい、1年生たちが凄い俺のこと睨んでるんだけど…………

「あ、ありがとう…………それじゃあ…………シツレイシヤース!!」

俺はいたたまれなくなり走って教室に向かった。というより逃げた。

メイ「逃げたなアイツ…………」

四季「まったく二人は…………一度ナギサに振られたハズ。いい加減諦

めて」

紗夜「ごめんごめん」

ライカ「からかって憂さばらししようかな?」って」

メイ「憂さ晴らして…………」

紗夜「まあ、既に彼女がいる人間をあとから好きになった私達が悪いのは分かってるんだけどね…………」

ライカ「やっぱ振られるのは悔しいじゃない」

四季「そうだけど…………」

紗夜「それに、そうは言っても、好意があることに変わりはないし

ね」

ライカ「そうそう」

笑う2人。まったくもう……

四季「ふたりとも、本当にナギサのこと好きなんだね」

紗夜「ええ」

ライカ「本当に……なんでもっと早く出会えなかったのかと思うわ……」

そして、1年生たちに言葉をかけてから私達も教室に向かった。
教室では、

きな子「渚くん、どうぞっす」

夏美「いつもありがとうございます」

渚「お礼のチョコ？」

きな子「そうっす渚くんには去年からお世話になりっぱなしっすから……」

夏美「ですのですの〜」

「そういうことならありがとう……」ナギサ?」えっ、あつ、四季……」

四季「そんな怯えないですよ。ちゃんと日頃のお礼のチョコって聞いてたから」

「あつ、ならいいんだけどさ……」

そして、時間になりホームルームが始まり、それから午前中の授業を終えて昼休み、俺達は奏と一緒に部室に向かった。

「失礼します……」

奏「失礼します……」

かのん「あつ、渚くん! 奏くん!」

かのん・千砂都・可可・すみれ・恋「!!!ハッピーバレンタイン
!!!」

先輩たちがチョコの包を1つ渡してきた。

かのん「私達皆で作ったんだ!」

千砂都「日頃の感謝を込めてね!」

可可「いつもありがとうございます!」

奏「あ、ありがとうございます……」

「ありがとうございます…」

俺達はチョコを受け取る。

すると、

冬毬「あっ、日宮先輩、月城くん」

マルガレーテ「どこに居たかと思えば……」

ん？

「どうした？」

マルガレーテ「これ……。この私が作ってあげたんだから、感謝して食べなさいよね！」

冬毬「私も初めて作りましたが、どうぞ」

!! 2人からも？ なんつーか……意外。

かのん「へえ、マルガレーテちゃんも作ったんだ？」

マルガレーテ「た、ただの気まぐれよ！ でもまあ、一応感謝はしてるから……その」

俺達はニヤニヤと微笑ましいものを見る目でマルガレーテを見る。

マルガレーテ「ちよつと！ なによそのムカツク目は!!」

紗夜「いや、ねえ……？」

陽菜「あのマルガレーテちゃんがねえ？」

ライカ「意外すぎるわよね？」

マルガレーテ「くく!! 言いたい放題ねあなたたち!! 要らないなら返しなさい!!」

「要らないなんて言っていないだろ？ ありがとうございます。感謝しながらいただきます」

マルガレーテ「は、はじめからそう言っていれば良いのよ……」

四季「チョロい」

マルガレーテ「うっさい!!」

部室に笑いが生まれる。

すると、

「あっ、もう午後の授業始まりますね」

かのん「ほんとだ」

冬毬「急ぎましょう」

紗夜 「行こう」

陽菜 「渚くん行こう！」

メイ 「ほら！」

四季 「ナギサ？」

俺は皆の顔を見つめると、

「よし、午後も頑張るかあ！」

俺も、自分の教室に向かっていった。

） Happy Valentine!!
）